

荒城神社遺跡

1993

岐阜県土木部

財団法人 岐阜県文化財保護センター



上 第3号住居址 下 玉類とほと石

序

原始・古代の遺跡が多く、歴史のロマンを感じさせる国府町は、文化財の豊富な地でもあります。その北東に位置する荒城神社は、延喜式にその名が知られ、今からおよそ600年前に建てられた本殿は国の重要文化財に指定されています。

この荒城神社の境内からは、古くから縄文時代の遺物が見つかり、その周辺を含めて、大遺跡が広がっていたことが予想されていました。

このたび、県単道路改良工事（鼠ヶ古川線）に伴い記録保存をはかるため、荒城神社遺跡の発掘調査を実施しました。発掘調査は、岐阜県土木部古川土木事務所から岐阜県教育委員会に委託され、財團法人岐阜県文化財保護センターが担当しました。

当遺跡は、縄文時代中期から後期にかけての集落跡と推定される遺跡でした。今回の発掘調査では、それを裏付けるように、堅穴住居址や土坑（土壙）群が検出され、縄文土器や石器が予想以上に大量に出土しました。その中には、非常に堅固な床を有する住居址や、類例の乏しい石器、糸魚川産のヒスイで作られた装身具など、非常に珍しい遺構や遺物に遇り合うことができました。

今回の発掘調査の成果が、埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、縄文時代の研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成にあたってご協力いただいた関係諸機関並びに地元の関係各位の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

財團法人 岐阜県文化財保護センター

理事長 吉田 豊

例　　言

1. 本書は、吉城郡国府町宮地字宮垣内に所在する荒城神社遺跡（G07K00243）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、県単道路改良工事（鼠鱗古川線）に伴うもので、岐阜県土木部古川土木事務所から岐阜県教育委員会を通じて委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 本調査にあたっては、指導調査員として渡辺誠名古屋大学文学部教授の指導を得た。
4. 発掘調査は平成5年度に実施し、野村宗作・上嶋善治が担当した。
5. 本書に記載した遺物の実測については、土器の拓影実測は、野村宗作、土器・土製品は、谷口和人、石器・陶磁器は上嶋善治が中心となり、次の者が作業に従事した。

政井美子　坊田洋子　田邊直子　屋上満智子　辻千恵子　中屋寿賀子　松葉弘子
辻垣内ひとみ　田中春美　古川恵利子　新田香代子
6. 実測図等のトレースは次の者が主に行った。

政井美子　坊田洋子　田邊直子　屋上満智子　辻千恵子　中屋寿賀子　松葉弘子
辻垣内ひとみ　田中春美　古川恵利子　新田香代子
7. 遺物写真の撮影は野村宗作が行った。
8. 本書の執筆は、木永義博、上嶋善治、谷口和人、野村宗作が担当分担し、執筆者名は文末に示した。なお、名古屋大学文学部教授渡辺誠、京都大学原子炉実験所藤田哲男、東村武信、京都大学靈長類研究所毛利俊雄、下呂小学校教頭岩田修、鶴バレオ・ラボ東海支店藤根久の各氏に玉稿を頒いた。編集は、野村宗作と上嶋善治が行った。
9. 事前地形測量は株式会社イビックに委託して行った。
10. 住居床面の赤色粘土の分析は株式会社パレオ・ラボに委託し、石製装身具および未加工石材の产地分析は、京都大学原子炉実験所藤田哲男、東村武信に委託して行った。
11. 発掘調査および報告書作成にあたって、次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。（敬称略）

石原哲彌　大江　命　小島俊彰　増子康眞　宇野隆夫　垣水富郎　吉朝則富　藤本健三
松本　優　岐阜県土木部古川土木事務所　国府町　飛騨県事務所　飛騨教育事務所
宮地区長駒屋長陽　荒城神社総代都竹泰藏　地主　菅沼　賛　都竹作助　その他地元の方々
12. 発掘調査作業ならびに調査記録および出土品の整理等には次の方々の参加・協力を得た。

稻本　嗣　田中靖久　袖原末三　野村新三　古田奈緒子　白石信之　白石和代　古田辰三
加藤清左衛門　西谷富安　豊倉一男　青山時造　今垣道春　宮下四十二　伊藤世志光
坊田洋子　田邊直子　屋上満智子　辻千恵子　中屋寿賀子　松葉弘子　辻垣内ひとみ
田中春美　古川恵利子　新田香代子
13. 遺構記号は次のとおりである。

S B　住居址　S K　土坑（土壤）　P　ピット
14. 調査記録および出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例 言

第1章 遺跡の歴史的環境と立地	1
第1節 歴史的環境	1
第2節 地形・地質	4
第3節 荒城神社遺跡の研究史	11
第2章 発掘調査の経過	13
第1節 発掘調査の方法	13
第2節 発掘調査の経過	13
第3章 遺構	23
第1節 基本的層序	23
第2節 遺構	24
第4章 遺物	46
第1節 繩文土器	46
第2節 土製品	125
第3節 底部	128
第4節 石器	135
第5節 中近世の遺物	168
第6節 植物遺体	168
第7節 骨	170
第5章 自然科学的分析	171
第1節 住居床面の赤色粘土について	171
第2節 荒城神社遺跡出土の垂玉、未加工玉材の産地分析	172
第6章 結語	184

挿図目次

第1図 岐阜県地図	1
第2図 荒城地区及びその周辺の遺跡	2
第3図 遺跡周辺の地形	5
第4図 河川縦断面図	6
第5図 遺跡付近の地質図	6
第6図 第5図におけるA-B間の地質断面図	7
第7図 段丘崖の断面のようす	7
第8図 遺跡付近の地質のようす(大庭見山層群を中心)に	8
第9図 遺跡付近の地質図(笠原1979)	9
第10図 造構図(1)	15
第11図 造構図(2)	17
第12図 地層図(1)	19
第13図 地層図(2)	21
第14図 第1号住居址	24
第15図 第1号炉址	25
第16図 第2号住居址	26
第17図 第3号住居址	27
第18図 第3号炉址	28
第19図 第4号住居址・C-17SK1	29
第20図 焼土塊	30
第21図 B-3SK1	31
第22図 B-4SK2・3・4・5	31
第23図 B-5SK6・7・8	33
第24図 B-6SK9・10・11	34
第25図 B-6SK11の上の配石	34
第26図 B-7SK12・13	35
第27図 B-8SK14・15・16	36
第28図 B-9SK17・18	37
第29図 B-10ピット群	38
第30図 B-14SK19・20・P25	39
第31図 C-7SK1・2・3	40

第32図	C-8 SK 1	41
第33図	C-10 SK 1	41
第34図	C-15 SK 1・2	42
第35図	C-15 SK 3	42
第36図	C-15~C-19土坑(土壤)・ピット群	43
第37図	C-15 SK 4	45
第38図	D-22石皿配石遺構とSK 1	45
第39図	第1号住居址炉址内出土土器	47
第40図	第1号住居址の柱穴と考えられるピット内出土土器	47
第41図	第1号住居址の推定範囲内出土土器(1)1群	47
第42図	第1号住居址の推定範囲内出土土器(2)1群	49
第43図	第1号住居址の推定範囲内出土土器(3)1群	51
第44図	第1号住居址の推定範囲内出土土器(4)1群・2群	53
第45図	第1号住居址の推定範囲内出土土器(5)2群~8群	55
第46図	第2号住居址出土土器	58
第47図	第3号住居址出土土器	59
第48図	第4号住居址出土土器	60
第49図	土坑(土壤)・ピット内出土土器(1)	63
第50図	土坑(土壤)・ピット内出土土器(2)	65
第51図	土坑(土壤)・ピット内出土土器(3)	67
第52図	土坑(土壤)・ピット内出土土器(4)	70
第53図	土坑(土壤)・ピット内出土土器(5)	72
第54図	土坑(土壤)・ピット内出土土器(6)	74
第55図	土坑(土壤)・ピット内出土土器(7)	77
第56図	土坑(土壤)・ピット内出土土器(8)	78
第57図	土坑(土壤)・ピット内出土土器(9)	81
第58図	包含層出土土器(1)1群	84
第59図	包含層出土土器(2)1群	85
第60図	包含層出土土器(3)1群	86
第61図	包含層出土土器(4)1群	87
第62図	包含層出土土器(5)1群	89
第63図	包含層出土土器(6)1群	91
第64図	包含層出土土器(7)1群	92

第65図	包含層出土土器(8) 2群	95
第66図	包含層出土土器(9) 2群	97
第67図	包含層出土土器(10) 2群	99
第68図	包含層出土土器(11) 2群	100
第69図	包含層出土土器(12) 2群・3群	102
第70図	包含層出土土器(13) 3群	105
第71図	包含層出土土器(14) 3群	106
第72図	包含層出土土器(15) 3群	109
第73図	包含層出土土器(16) 3群	112
第74図	包含層出土土器(17) 3群・4群	114
第75図	包含層出土土器(18) 4群～7群	117
第76図	包含層出土土器(19) 7群～9群	120
第77図	包含層出土土器(20) 10群	121
第78図	包含層出土土器(21) 11群・12群	123
第79図	包含層出土土器(22) 土偶・土製品	127
第80図	底部の断面形態	128
第81図	底部圧痕の模式図	130
第82図	網代圧痕の比率	133
第83図	土器底部	134
第84図	遺構出土の石器(1)	136
第85図	遺構出土の石器(2)	137
第86図	遺構出土の石器(3)	139
第87図	遺構出土の石器(4)	140
第88図	遺構出土の石器(5)	141
第89図	遺構出土の石器(6)	142
第90図	遺構出土の石器(7)	143
第91図	包含層出土の石器(1)	145
第92図	包含層出土の石器(2)	146
第93図	包含層出土の石器(3)	148
第94図	包含層出土の石器(4)	149
第95図	包含層出土の石器(5)	151
第96図	包含層出土の石器(6)	152
第97図	包含層出土の石器(7)	153

第98図	包含層出土の石器(8)	155
第99図	包含層出土の石器(9)	156
第100図	包含層出土の石器(10)	157
第101図	包含層出土の石器(11)	158
第102図	包含層出土の石器(12)	159
第103図	包含層出土の石器(13)	161
第104図	包含層出土の石器(14)	162
第105図	包含層出土の石器(15)	163
第106図	包含層出土の石器(16)	164
第107図	包含層出土の石器(17)	165
第108図	石製装身具	166
第109図	ほと石	167
第110図	中近世の遺物	168
第111図	ヒスイとヒスイ類似岩の原産地	174
第112図	ヒスイ原石の元素比値 Zr/Sr 対 Sr/Fe の分布および分布範囲	178
第113図	ヒスイ原石の元素比値 Ca/Si 対 Sr/Fe の分布および分布範囲	178
第114図	ヒスイ原石の元素比値 Na/Si 対 Mg/Si の分布および分布範囲	179
第115図	荒城神社遺跡出土の丸玉の Zr/Sr 対 Sr/Fe の分布	180
第116図	荒城神社遺跡出土の丸玉の Ca/Si 対 Sr/Fe の分布	180
第117図	荒城神社遺跡出土の丸玉の Na/Si 対 Mg/Si の分布	181
第118図	未加工軟玉原石(34728)の蛍光X線スペクトル	182
第119図	未加工軟玉原石(34729)の蛍光X線スペクトル	182
第120図	未加工軟玉原石(34730)の蛍光X線スペクトル	182
第121図	未加工軟玉原石(34731)の蛍光X線スペクトル	183

付表目次

第1表	荒城地区及びその周辺の遺跡	3
第2表	底部残存状況	128
第3表	底部器形分類	128
第4表	底部器形別直径	129
第5表	底部圧痕一覧	131
第6表	石籠の石材と形態	144

第7表 石錐の石材と形態	147
第8表 ヒスイ製造物の原石産地の判定基準(1)	177
第9表 ヒスイ製造物の原石産地の判定基準(2)	177
第10表 荒城神社遺跡出土の丸玉、未加工原石の元素分析値の比量と比重	183
第11表 荒城神社遺跡出土の丸玉、未加工原石の原材産地分析結果	183
第12表 遺構別石器類	188
第13表 石器一覧表	191

図版目次

- 図絵カラー図版 上 第3号住居址 下 玉類とほと石
- 図版1 上 遺跡遠景 下 遺跡近景
- 図版2 上 発掘風景 下 第1号住居址
- 図版3 上 第2号住居址 下 第4号住居址
- 図版4 第3号住居址
- 図版5 第3号住居址
- 図版6 上左 第3号住居址埋甕 上右 第4号住居址埋甕
下 石皿配石遺構
- 図版7 土坑(土壤)・ビット群
- 図版8 遺物出土状況
- 図版9 上・下 第1号住居址炉址内出土土器
- 図版10 上・下 第1号住居址の推定範囲内出土土器
- 図版11 上・下 第1号住居址の推定範囲内出土土器
- 図版12 上・下 第1号住居址の推定範囲内出土土器
- 図版13 上・下 第1号住居址の推定範囲内出土土器
- 図版14 上・下 第1号住居址の推定範囲内出土土器
- 図版15 上・下 第1号住居址の推定範囲内出土土器
- 図版16 上 第1号住居址の推定範囲内出土土器 下 第2号住居址出土土器
- 図版17 上・下 第3号住居址出土土器
- 図版18 上・下 第4号住居址出土土器
- 図版19 上・下 土坑(土壤)・ビット内出土土器
- 図版20 上 包含層の埋甕 下 土坑(土壤)・ビット内出土土器
- 図版21 上・下 土坑(土壤)・ビット内出土土器

- 図版22 上・下 土坑(土壤)・ピット内出土土器
- 図版23 上・下 土坑(土壤)・ピット内出土土器
- 図版24 上・下 土坑(土壤)・ピット内出土土器
- 図版25 上・下 包含層出土土器(1群)
- 図版26 上・下 包含層出土土器(1群)
- 図版27 上・下 包含層出土土器(1群)
- 図版28 上・下 包含層出土土器(1群)
- 図版29 上・下 包含層出土土器(1群)
- 図版30 上・下 包含層出土土器(1群)
- 図版31 上・下 包含層出土土器(1群)
- 図版32 上・下 包含層出土土器(1群)
- 図版33 上・下 包含層出土土器(1群)
- 図版34 上・下 包含層出土土器(1群)
- 図版35 上・下 包含層出土土器(1群)
- 図版36 上・下 包含層出土土器(2群)
- 図版37 上・下 包含層出土土器(2群)
- 図版38 上・下 包含層出土土器(2群)
- 図版39 上・下 包含層出土土器(2群)
- 図版40 上・下 包含層出土土器(2群)
- 図版41 上・下 包含層出土土器(2群)
- 図版42 上・下 包含層出土土器(2群)
- 図版43 上・下 包含層出土土器(2群)
- 図版44 上・下 包含層出土土器(3群)
- 図版45 上・下 包含層出土土器(3群)
- 図版46 上・下 包含層出土土器(3群)
- 図版47 上・下 包含層出土土器(3群)
- 図版48 上・下 包含層出土土器(3群)
- 図版49 上・下 包含層出土土器(3群)
- 図版50 包含層出土土器(上 3群・4群)(下 4群)
- 図版51 上・下 包含層出土土器(4群)
- 図版52 上・下 包含層出土土器(4群)
- 図版53 包含層出土土器(上 4群～6群)(下 7群)
- 図版54 包含層出土土器(上 7群～9群)(下 7群・8群)

- 図版55 上・下 包含層出土土器(10群)
- 図版56 包含層出土土器(上 11群・12群)(下 11群)
- 図版57 上 土偶 下 土製品
- 図版58 上・下 土器底部
- 図版59 上・下 土器底部
- 図版60 上・下 土器底部
- 図版61 上・下 土器底部
- 図版62 上・下 土器底部
- 図版63 土器底部
- 図版64 上 第1号住居址の石器 下左 B-3SK1上部の石棒
下右 D-22SK1上部の石皿(石皿配石遺構)
- 図版65 上・下 石礫
- 図版66 上 石錐・石匙
下 ピエス・エスキュー・ヘラ形石器・削器・搔器・抉りのある石器
- 図版67 上・下 打製石斧
- 図版68 上・下 磨製石斧
- 図版69 上 石錐 下 磨石・凹石類
- 図版70 上左 砥石 上右 石皿 下 石棒・石刀・石剣
- 図版71 上 石製装身具 下左 独結石・磨製石器 右下 ほと石
- 図版72 植物遺体(実大)
- 図版73 上・下 荒城神社出土縄文土器(荒城神社蔵)
- 図版74 上 荒城神社出土土製耳飾(荒城神社蔵)
中・下 荒城神社出土御物石器(荒城神社蔵)
- 図版75 上左 荒城神社出土石剣・石棒(荒城神社蔵)
上右 荒城神社出土有孔磨製石製品(荒城神社蔵)
下 荒城神社出土石冠(荒城神社蔵)
- 図版76 上 荒城神社出土磨製石斧(荒城神社蔵)
下 荒城神社出土打製石斧(荒城神社蔵)
- 図版77 上左 荒城神社出土石皿(荒城神社蔵)
上右 荒城神社付近出土勾玉(菅沼賢氏蔵)
下 荒城神社付近出土縄文土器(菅沼賢氏蔵)
- 図版78 上 荒城神社付近出土石錐・石錐(菅沼賢氏蔵)
下 荒城神社付近出土磨製石斧(菅沼賢氏蔵)

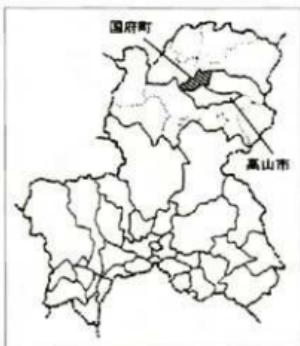
第1章 遺跡の歴史的環境と立地

第1節 歴史的環境

荒城神社遺跡は岐阜県吉城郡国府町宮地に存在し、国府町東部の荒城地区に位置する。「宮地」とは荒城神社の土地を指し、神社北側一帯を宮垣内と称するのも、この神社の大きな影響を受けていると言える。荒城神社は式内社の一つであり、本殿は国の重要文化財に指定されている。遺跡はこの境内を中心に北側の宮垣内一帯に広がり、相当広範囲の面積に及ぶと推定される。遺跡は地形・地質のところで述べる通り荒城川の河岸段丘と宮谷川によって形成された扇状地上にある。東には北アルプスの乗鞍岳が眺望でき、北東にはジョーグ山を望むことができる。境内の南側には比高約6mの荒城川が北流し、神社を境に急に南北に広がる後背低地を形成して国府・古川盆地へとつながる。そのほとんどが水田地帯で、飛騨一帯の穀倉地帯となっている。また、日照時間も長く山川の自然に恵まれ、動植物も多く縄文人の生活の場として実に不足のないところであったと思われる。

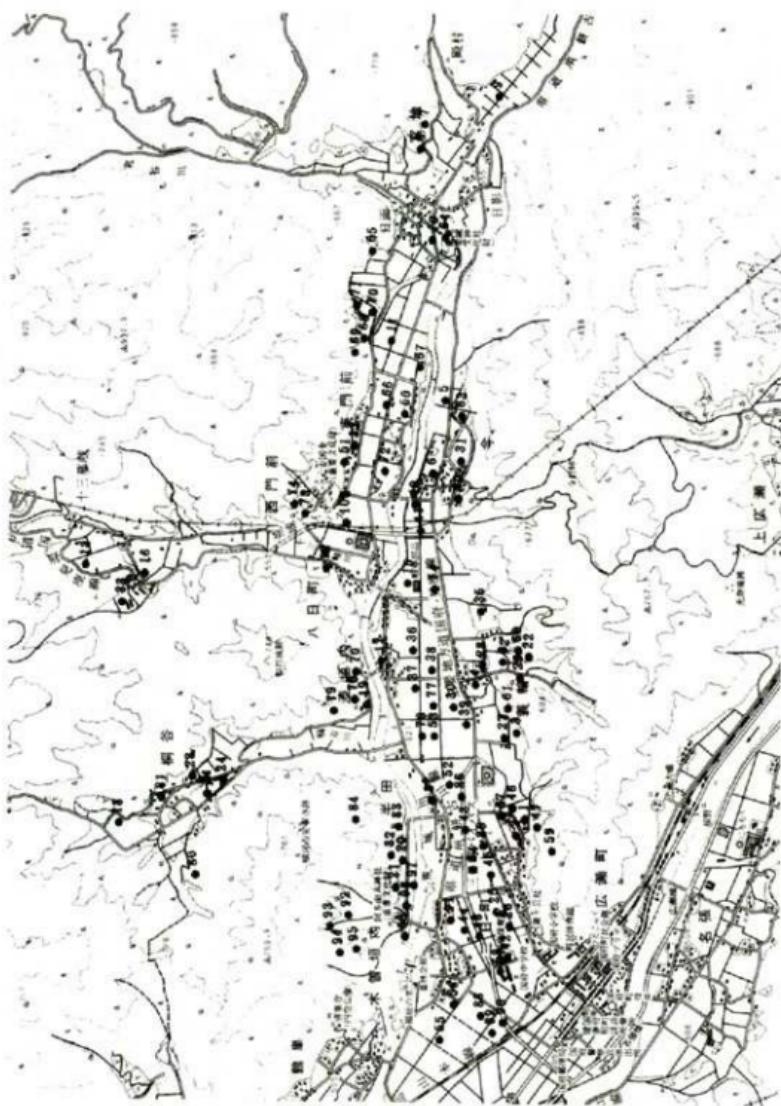
荒城神社境内は古くから縄文遺跡として知られ、昭和10年発行の「飛騨石器時代遺跡地名表」(飛騨考古土俗学会編輯)にも出土遺物が記載されているが、内容については研究史の中で記することにする。遺物はその後更に増加し、縄文時代の完形土器や石器等が神社の宝物殿や国府町郷土館に保管もしくは展示されている。また、地元の数軒の家にも土器片や石器は保存されており、遺物包含の濃密さを知ることができる。

荒城地区は、自然環境が良いためか縄文時代の遺跡をはじめとして、それ以後の弥生期・古墳期・古代の遺跡も多い。荒城神社の西約600mにある東門前の森ノ木遺跡は圃場整備に伴い昭和62年にその一部が発掘調査された。その結果、縄文中期後葉を中心とする堅穴住居址が約20軒確認された。この遺跡は東門前一帯から荒城神社まで続く大遺跡であると想定される。寺ノ下遺跡(安國寺の下)では刻文入りの石冠が出土している。西門前の深沼遺跡は当センターが平成4年度に発掘調査を行い、古代の小区画水田を検出した。また、国府町教育委員会の発掘調査では、三日町の半田垣内遺跡で5世紀の須恵器・土師器が数多く出土している。その他、遺跡毎の遺物をあげれば枚挙にいとまがないが、荒城地区及びその周辺の遺跡を地図及び表に示しておく。



第1図 岐阜県地図

(野村 宗作)



第2図 荒城地区及びその周辺の遺跡

第1表 荒城地区及びその周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	小坂遺跡	繩	51	流田遺跡	古
2	塚ノ前遺跡	繩	52	半田塚田遺跡	古
3	小洞遺跡	繩	53	塚越古墳	古
4	西ノ宮遺跡	繩	54	砂田遺跡	古
5	セノ上遺跡	繩	55	やながせ遺跡	古
6	神ノ木遺跡	繩	56	堂前遺跡	古
7	荒神洞遺跡	繩	57	三日町大塚	古
8	野中遺跡	繩	58	荒田古墳	古
9	殿村遺跡	繩	59	瑞香庵1・2号古墳	古
10	荒城神社遺跡	繩	60	東大洞古墳	古
11	東門前森ノ木遺跡	繩	61	小洞1・2号古墳	古
12	梨打山跡	繩	62	山ノ下古墳	古
13	行田ヶ洞遺跡	繩	63	橋本古墳	古
14	桑原田遺跡	繩	64	宮垣内古墳	古
15	桧ヶ坪遺跡	繩	65	西ヶ洞古墳	古
16	観音堂遺跡	繩	66	東門前田古墳群1~3	古
17	中島遺跡	繩	67	森ノ木古墳群1~8	古
18	丸山遺跡	繩	68	東門前前平1・2号古墳	古
19	河合遺跡	繩	69	東門前大洞古墳	古
20	向畠遺跡	繩	70	浅ヶ平古墳	古
21	瀬ノ垣内遺跡	繩	71	浅ヶ平山古墳	古
22	東大洞遺跡	繩→弥	72	寺ノ下古墳	古
23	井ノ口遺跡	繩→弥	73	林黒古墳群1~3	古
24	下り谷遺跡	繩→古	74	深沼古墳	古
25	石丸遺跡	繩→古	75	漆垣内伴洞1・2号古墳	古
26	一本杉遺跡	繩→古	76	漆垣内前平古墳	古
27	蓑輪石橋遺跡	繩→古	77	桜本古墳	古
28	宮ノ前遺跡	繩→古	78	塚越古墳	古
29	山ノ下遺跡	繩→古	79	河合古墳	古
30	琵琶首遺跡	繩→古	80	工匠塚古墳	古
31	南垣内遺跡	繩→古	81	官舗古墳	古
32	寺ノ下遺跡	繩→古	82	半田向畠古墳群1~3	古
33	八日町桜ヶ洞遺跡	繩→古	83	半田桜洞古墳群1~5	古
34	谷中遺跡	繩→古	84	横川洞古墳	古
35	八日町森ノ木遺跡	繩→奈	85	安道古墳	古
36	立石遺跡	繩→平	86	半田塚田古墳	古
37	桜本遺跡	弥→平	87	川原古墳	古
38	清水遺跡	弥→中	88	木曾垣内大塚	古
39	大沼遺跡	弥→中	89	木曾垣内比丘尼塚	古
40	岩田遺跡	弥	90	木曾垣内塚田古墳	古
41	はげの下遺跡	弥→古	91	藤ノ木古墳	古
42	直道遺跡	弥→古	92	隱レ洞古墳群1~5	古
43	安道遺跡	弥→古	93	堂ヶ洞古墳	古
44	藤ノ木遺跡	弥→古	94	梅ノ木洞古墳群1~5	古
45	女夫岩遺跡	古	95	木曾垣内向畠古墳群1~6	古
46	大谷遺跡	古	96	牧戸1・2号古墳	古
47	細洞口遺跡	古	97	瀬ノ垣内古墳	古
48	半田垣内遺跡	古	98	木曾垣内向畠古墳	古
49	木舟遺跡	古	99	芦洞古墳	古
50	向田遺跡	古	100	深沼遺跡	白

凡例：繩=繩文 弥=弥生 古=古墳 白=白鳳 奈=奈良 平=平安 中=中世

第2節 地形・地質

本遺跡は国府町宮地地内において、後背の宮谷川が荒城川に合流する地域に発達する扇状地上に位置する。国の重要文化財に指定されている荒城神社本殿のすぐ北側にある。

宮谷川の流域には、主に流紋岩質の凝灰岩からなる約6千万年前（白亜紀末）に形成された大雨見山層群の岩石が分布し、これらの岩石が堆積した扇状地上を生活の場とした縄文人にとつて、地形・地質がもつ意味について記述したい。

〈地形〉

・宮谷川 第3図は本遺跡周辺の地形図である。宮谷川流域を太線で示した。宮谷川の最下流域には扇状地が発達している。宮谷川には、三休の滝のような急崖もあるが、中・下流域には緩斜面が広く分布し、そこには巨礫を含む核角礫状の堆積物が風化土壤とともに見られる。最下流部では、周辺の扇状地を含む緩斜面を深く浸食している。

・荒城川 荒城川は丹生川村と上宝村の村界である1720mピークを源流として西流し、古川町市街地にて宮川に合流している。第4図に荒城川の河川縦断面図を示した。この図では比較のため宮川の縦断面図も記入したが、荒城川は宮川と比べてもかなり急流であることがわかる。荒城川の海拔1430～1200m間の傾斜が急になっている部分は、上宝火砕流堆積物からなる八本原平坦面を浸食し続けているのを表している。

荒城川流域では河岸段丘の発達はよくない。ほとんど比高2m～10mの低位面が見られ、後氷期以降の新しい堆積物からなると思われる。荒城神社のすぐ上流では河床に岩盤が露出していることから、浸食作用が優勢で堆積物はあまり厚くないことが認められる。また、荒城神社付近より下流域では河川堆積物が厚くなり、平坦部（低位段丘面）が広がってきているのに対し、上流域では段丘面の発達が悪くなっている。荒城神社付近は河川の平衡点であろう。

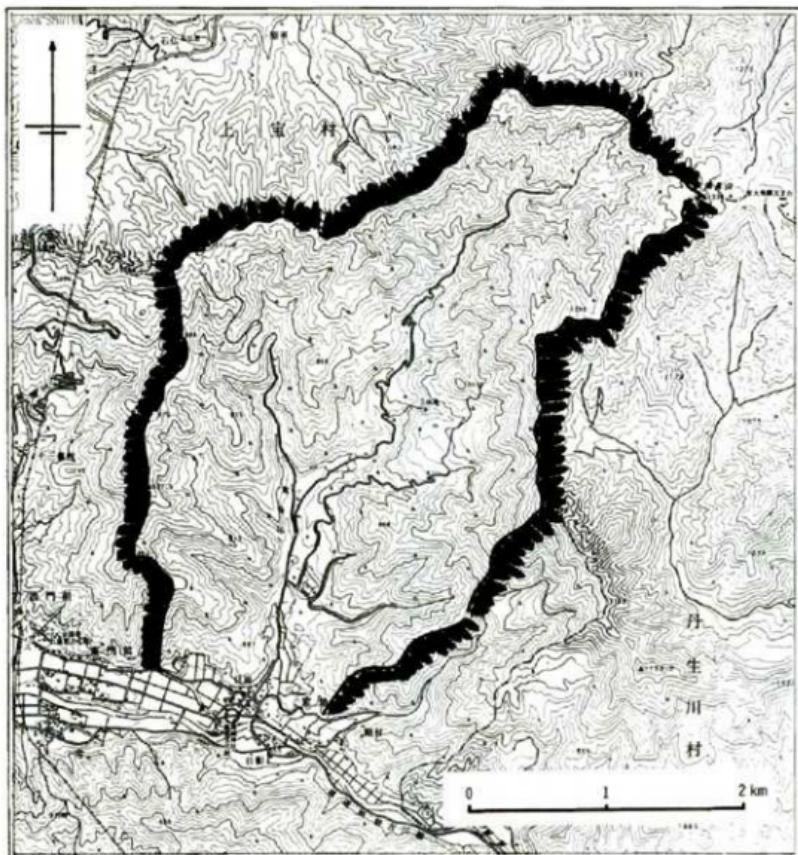
・宮地扇状地 宮谷川最下流部に扇状地が発達する。第5図に扇状地堆積物の分布、第6図にその模式的断面図を示した。第6図のように扇状地堆積物はその周囲を比高3～5mの段丘崖で切られている。その段丘崖の露頭では、大きさ5～50cmの淘汰の悪い亜円礫と土壤が見られ、礫種も後背地に分布する大雨見山火山岩類に限られる（第7図）ことから、荒城川からもたらされたものではなく宮谷川などが運んだ扇状地堆積物であると言える。

しかし、現在の宮谷川が扇状地の東方に偏っていること、扇状地を深く浸食していることから、扇状地が形成された時期はかなり古いことが予想される。

〈地質〉

第8図に本遺跡とその上流付近を中心とした地質図を示した¹⁾。

地質学的には多様な地域であり年代的にも岩石種も複雑である。飛騨外縁帯には、緑色片岩などの変成岩、飛騨ヒスイを含み、堆積岩も含めて多様な岩石からなる。美濃帯の中・古生界にはチャート・石灰岩・砂岩・火山岩などが含まれる。この辺りの手取層群は砂岩中心で化石はあまり産しない。



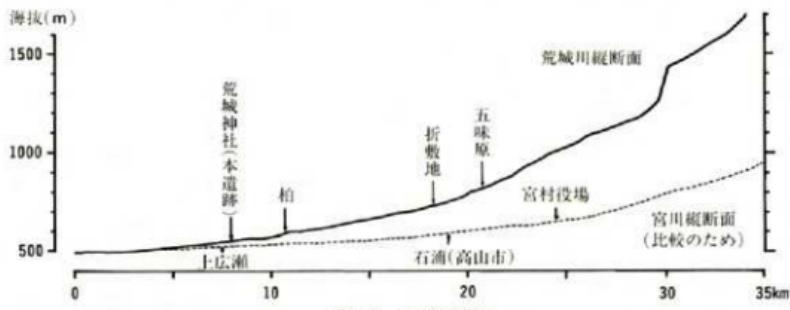
第3図 遺跡周辺の地形

6 第2節 地形・地質

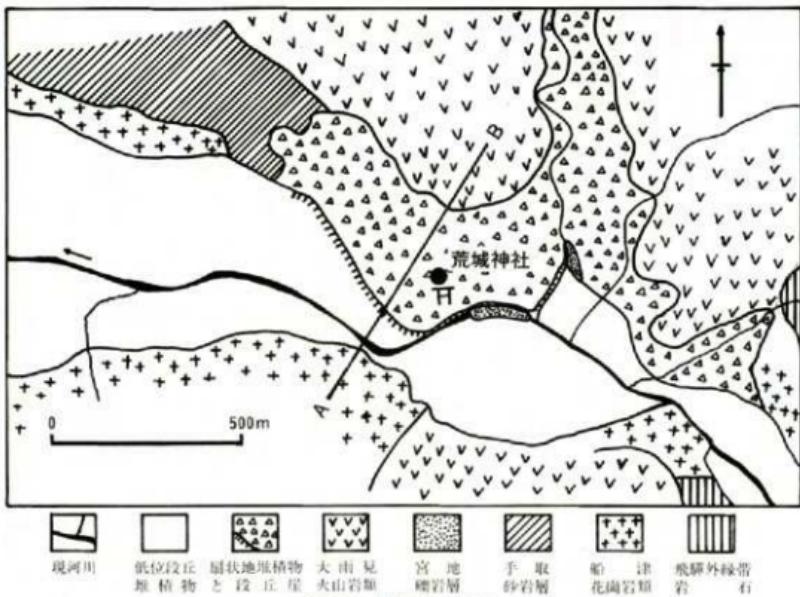
大雨見山層群は、本遺跡付近では宮谷川累層・明ヶ谷溶結凝灰岩からなる。流紋岩質の凝灰岩を主とし、溶岩もみられる。形成は約6千万年前である。

荒城川最上流の八本原付近には60~90万年前に噴出した上宝火砕流堆積物が分布し、それを荒城川が浸食してきている。

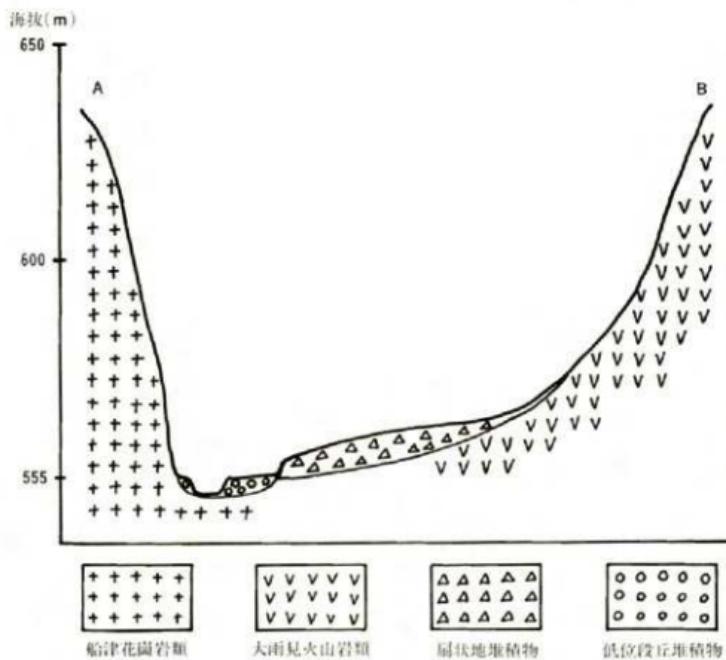
第9図は本遺跡付近の大雨見山層群を中心とした地質図である¹⁾。宮谷川流域はすべて大雨



第4図 河川縦断面図



第5図 遺跡付近の地質図

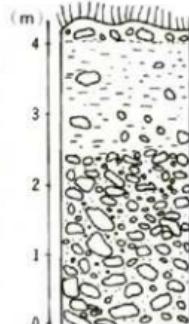


第6図 第5図におけるA-B間の地質断面図

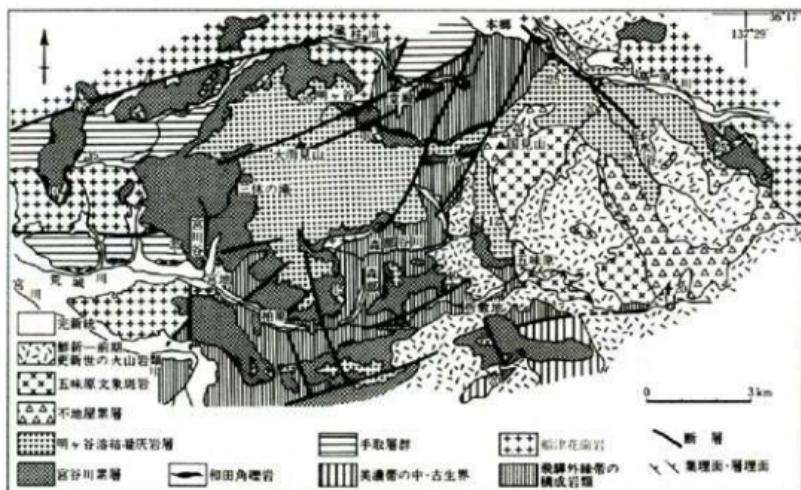
見山層群の岩石からなる。三体の流紋岩層（下部層）には1～5cm大の玉髓を含むことを特徴とする。この三体の流紋岩層は、他の凝灰岩層と比べて硬いため浸食に抗して崖・滝を形成することがある。凝灰岩層は風化されやすく、上流域でも亜円礫状になっていることが多い、扇状地堆植物としても円磨度が高くなっている。本遺跡を発掘すると円磨度の高い礫が見られ、一見荒城川による堆積物のようだが、礫種が大雨見山層群のものに限定されることから、扇状地堆植物と判断される。

本遺跡付近に分布する大雨見山層群の岩相について下位から順に説明する（第9図¹⁹）。

宮地疊岩層は、宮地付近に分布し、薄い石炭層（炭質頁岩）を含



第7図 段丘崖の断面のようす



第8図 遺跡付近の地質のようす（大西見山層群を中心）

む。細文人はこの石炭を利用したのだろうか。

柏原凝灰岩層は、宮谷川流域中・下流の大部分に露出している。色は淡い緑～赤～黄色などで多様であり、グリーンカーフによく似ている。多孔質で風化されやすくもろいものが多い。この層からも質のよくない石炭が知られている。打製石斧の石材としてよく利用されている。

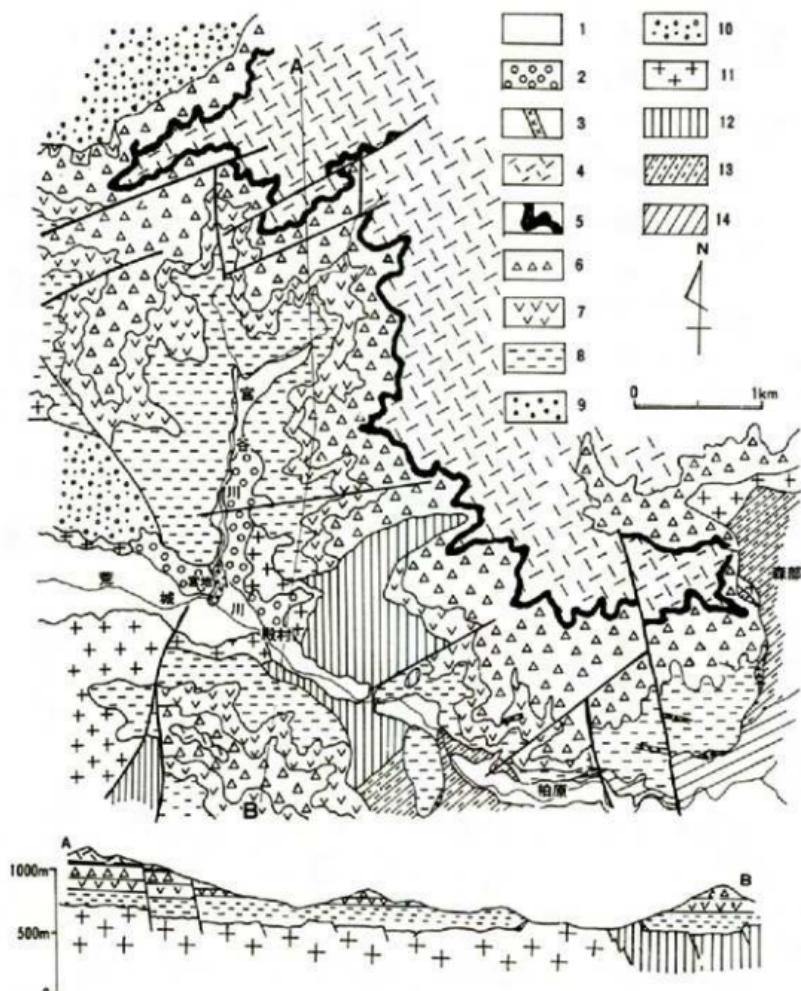
三体の流紋岩(下部層)には前述のように玉髓を産する。この玉髓を鏡下で観察すると微細粒の石英に微斑晶の石英が点在しているのが見られる。この玉髓を含む流紋岩層は第9図のように、大坂峠～宮谷川流域のみならず南方の国府町和田付近まで分布している。国府町内ではかなり広い範囲で採集が可能であつただろう。玉髓が石歯などに利用される例があり多くないのは、その加工の難しさによるのではないか。

殿村溶結凝灰岩層は薄く黒色ガラス質の岩石からなる。

明ヶ谷溶結凝灰岩層は、宮谷川上流域や大雨見山山頂付近に分布する。石英・長石の大きさ（5 mm近く）奥晶に富むこの岩石は、いわゆる濃成波紋岩中のものと類似している。

本遺跡から石器として産する凝灰岩（打製石斧などを中心とする）は以上説明した大久見山層群のものである。玉髓も含め大部分の岩石はこの付近のものを利用したことは、明らかである。

打製石斧などに利用されている砂岩は近くの手取層のものであり、花崗岩もすぐ近くに産する。緑色片岩は国府町三川付近にも産し、直線距離にして2kmにも満たない所にある。



1. 沖積層, 2. 第四紀砂礫層, 3. 安山岩岩脈, 4. 明ヶ谷溶結凝灰岩層, 5. 岩村溶結凝灰岩層,
6. 三体の滝流紋岩層(上部層), 7. 同(下部層), 8. 柏原凝灰岩層, 9. 宮地疊岩層, 10. 手取層
群, 11. 船津花崗岩類, 12. 上庄瀬層, 13. 森部層, 14. 茅城川層. 黒三角印は和田角礫岩を示す。

第9図 遺跡付近の地質図 (笠原1979)

磨製石斧に利用されている蛇紋岩は近くにない。蛇紋岩は、飛騨外縁帯に分布しているが、高山～国府町付近の飛騨外縁帯中には報告の例がない。上宝村蒲田か清見村椿谷に見られるのが最も近くのものであり、かなりの距離を移動してきたことになる。産地については断定できない。

（地形発達史）

前述のように荒城川流域にはほとんど低位段丘面だけがみられ、古い時代の段丘など古い過去を示す証拠を残していない。火山灰の存在がみられないこともそれを裏付けている。その中で、宮地に発達している扁状地は低位段丘面形成よりかなり古いことを物語っている。

現在の宮谷川は扁状地面をかなり深く浸食していることから、扁状地の形成は宮谷川の浸食作用が活発化する以前ということになる。また、この扁状地は、周辺を荒城川によって削られ、段丘崖となっている。荒城川は低位段丘を形成しているので、この時期は側方浸食が盛んになるとともに、堆積作用が卓越してきたことを示す。

荒城川流域での大きな地殻変動を示す痕跡が見られないことから、扁状地発達とその後の浸食、低位段丘の発達は、最終氷期の気候変動によるとするのが妥当であろう。氷期に扁状地は形成され、後氷期の多雨期に浸食・運搬作用が活発になってこのような地形が形成されたのであろう。

この扁状地にはかなりの土壌を含んでいるので、土石流によって堆積したことが考えられる。

前述のように、荒城川は急流であり、洪水もしばしばおそったことだろう。この扁状地上だと安全であったと思われる。

（岩田 修）

（注）

1) 笠原芳雄原図

2) 笠原芳雄 (1979) 「大兩見山層群の地質」『地質学論集』N o 17

3) 笠原芳雄・原山智 (1981) 「岐阜県荒城川流域の殿村溶結凝灰岩層について」

『岐阜県博物館調査研究報告』第2号

第3節 荒城神社遺跡の研究史

荒城神社遺跡は、縄文時代の遺跡として古くから知られている。昭和10年(1935)発行の飛騨考古土俗学会編輯『飛騨石器時代遺蹟地名表』によると、荒城神社境内の出土遺物として、「縄紋式土器、土偶、石鏃、打製石斧、磨製石斧、石棒、石槍、石皿、石冠、枕石¹⁾、凹石、三頭石斧、玉類」をあげている。

神社およびその周辺から遺物の収集はあいついでおり、昭和7年(1932)に、神社本殿の修理基礎工事の時に床下土中より石器類が出土している(澄田1964)。また、昭和23年(1948)、神社東側の道路改修の工事の際に深鉢形土器が出土している(澄田1960)。そして、昭和32年(1957)3月25日付けで、荒城神社縄文式時代遺跡として、県史跡に指定されている。所在地は、吉城郡同府町大字宮地字宮垣内(荒城神社境内)となっている(澄田1960)。

昭和32年(1957)に大江幸が、飛騨における中期後半の埋甕と思われる底部欠失の深鉢形土器の例を紹介しているが、その中で、荒城神社遺跡のものを2点図示し、さらに宮地地内出土の土器1点と合わせて3点を紹介している(大江1957)。

昭和35年(1960)には、『岐阜県指定文化財調査報告書』第四卷で、荒城神社境内のみならず、周辺から採集された遺物についても言及している(澄田1960)。紹介されている主な遺物は、縄文中期後半の大形の深鉢形土器や、後期の注口土器などの土器類と、石鏃・打製石斧・磨製石斧・三頭石斧・石刀・石棒・石鎌・御物石器・石冠・石皿・磨石などの石器類である。同じく昭和35年(1960)に、神社本殿北側の畠地にて、ほぼ完形の香炉形土器(吊手土器)1個が発見されている(澄田1964)。

岐阜県教育委員会(1962)『岐阜県遺跡目録』では、遺跡名が「宮地内」となっている。遺物としては、縄文土器は中期と後期の記述がしてあるが、その他は、『飛騨石器時代遺蹟地名表』の記述とほぼ同様の内容になっている。

昭和39年(1964)に澄田正一が、荒城神社遺跡出土の遺物を分析している。出土している土器は、縄文中期の土器が主体であるが、神社周辺からは、後期の土器もあり、また、早期や晚期の土器片も若干採集されているが、前期の土器が見つかっていない、としている。また、前期の遺跡である村山遺跡との対比を通じて、石皿を中心とした石器類の様相について分析を行っている(澄田1964)。

昭和45年(1970)に八賀晋が、荒城神社境内出土の石冠を紹介し、合わせて岐阜県内の石冠出土の遺跡を列挙している(八賀1970)。紹介された石冠は、いわゆるIV型²⁾に属するものである。なお、遺跡名は、字名の宮垣内遺跡となっている。

昭和47年(1972)の『岐阜県史』通史編原始では、「宮川流域の縄文文化」の中で、荒城神社

遺跡を紹介している。石器に関しては、同町内にある縄文前期の村山遺跡のものと比較して、縄文中期以降に、実用の石器とともに、非実用の石器が数多く生産されたことに注目している（大參1972）。

その後、荒城神社遺跡に関するまとまった記述のある文献は見あたらない。また、今までに発掘調査がなされたことはなく、今回の調査が、実質的に初めての発掘調査となった。

なお、平成2年度から平成4年度にかけて、国府町教育委員会が国府町内の遺跡詳細分布調査を行った。県内でもまだ数少ない調査であり、国府町教育委員会の文化財保護に向けての取り組みは評価に値する。平成5年（1993）3月にその報告書として『岐阜県国府町遺跡地図』が発行された。「凡例」において、「いわゆる散布地（包蔵地）の範囲の表示についていろいろ問題はあるが、……該当範囲を朱線でかこみその周囲に朱点を配した」と記し、荒城神社遺跡については、神社境内部分を朱線で示し、周囲を朱点で示していた。今回の調査地点は、その朱点で示した部分であった。

（注）

- 1) 「地名表」の作成は、東京大学理学部人類学教室『日本石器時代遺物発見地名表』第五版（1928）を基本にしているが、遺物の呼称に関して、御物石器については、「飛驒の呼称に随った」と凡例において記述されている。
- 2) 分類は、文献（中島1983）による。なお、文献（高山考古学研究会1987）によると、この石冠を含めて、荒城神社遺跡出土の石冠として、ⅡA型1点、ⅢA型1点、ⅢB型2点、Ⅳ型1点の計5点が掲載されている。

（上嶋 善治）

（参考文献）

- 大江 命（1957）「飛驒における無底部土器について」『古代学研究』17
- 大參義一（1972）「第3章縄文時代」『岐阜県史』通史編原始
- 岐阜県教育委員会（1962）『岐阜県遺跡目録』
- 澄田正一（1960）「荒城神社縄文式時代遺跡」『岐阜県指定文化財調査報告書』第四卷
- 澄田正一（1964）「濃飛山地に分布する石皿の機能について」
『名古屋大学文学部研究論集32（史学）』
- 高山考古学研究会（1987）『飛驒の考古学遺物集成』II
- 中島栄一（1983）「石冠・土冠」『縄文文化の研究』9
- 八賀 晃（1970）「飛騨国府村宮地内遺跡の石冠のこと」『岐阜史学』57

第2章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の方法

今回の発掘調査で、荒城神社遺跡が対象となった原因は、岐阜県土木部古川土木事務所による県単道路改良工事（鼠餅古川線）による。この遺跡は、前述のように、荒城神社境内を中心と古くから知られていた。

今回の県道の改良工事に伴い、岐阜県土木部古川土木事務所から岐阜県教育委員会文化課を通じて委託を受けて、財團法人岐阜県文化財保護センターが平成5年度に発掘調査を実施した。

県道の改良工事は、約4mの拡幅工事であったため、調査対象地点は、神社とは道路を挟んで反対側の拡幅部のみ600m²を予定していた。しかし、本道部分も工事によって掘削されるという点と、本道部分の方が遺跡の中心に近いという点から本道部分の調査の必要性が高まった。そこで、岐阜県教育委員会文化課と、岐阜県土木部古川土木事務所が協議し、本道部分350m²をさらに追加して調査することになった。当初の道路拡幅部600m²の調査を第1次調査とし、本道部分350m²の調査を第2次調査とする。

発掘調査の対象となった地点は、県道が東西方向にはほぼ直線的に延びて、途中でやや屈曲した状況であった。第1次調査では、幅が4m足らずの狭い地点であったため、地区の設定は、現道に平行する形で4×4mのグリッドで地区を設定した。グリッド記号は、北から南へA・B・C……とし、東から西へ1・2・3……とした。

第1次調査では、第18列以東はすでに表土が除去された状態だったので、手掘りによる掘削を進めた。それに対して、道路を挟んで第21列以西は、重機による表土剥ぎを実施し、一部トレンチ発掘で調査を進めた。

第2節 発掘調査の経過

第1次調査

5月上旬までに現場事務所の設置等の準備や、地形測量・杭打ちを実施し、5月11日に調査始め式を行った。以下、週ごとに調査経過を記述する。

第1・2週(5.11～5.21) 調査始め式を行った後、B18区以東の発掘を開始した。また、5月17日には、岐阜県教育委員会文化課と岐阜県土木部古川土木事務所の関係者を交えて、第2

次調査についての協議を行った。

第3週(5.24～5.28) B18区以東の掘削を進めた。B3・4区では出土遺物が多く、B4区からほとんどの玉が出土した。

第4週(5.31～6.4) 西側調査区の表土剥ぎを行った。東側の土坑・ピット群の発掘と実測を開始した。

第5週(6.7～6.11) B3～B4区にかけて、炉址を中心にSB1の検出をした。勾玉の未製品が出土した。また、B18区以東の実測と写真撮影を継続した。

第6・7週(6.14～6.25) B13区以東の掘削を終了した。23列以西の掘削を開始した。C23区では、縄文中期の土器片が多く出土した。B12区以東の北壁のセクション実測。

第8・9週(6.28～7.11) F30区の発掘を行う。雨天の日が多く、遺物の注記作業等を進めた。7月11日に現地説明会を行った。

第2次調査

8月下旬より、新たに現場事務所を設営し発掘調査を開始した。

第1・2週(8.26～9.3) C3～18区の表土剥ぎを行った。アスファルト部分は重機で除去したが、その下層は硬化していて、掘削が困難であった。

第3・4週(9.6～9.17) C3～9区の掘削を進めた。荒城神社の祭りや雨天のため、作業中止の日が多くなったが、雨天対策用のビニールシートによるテントを張って、一部掘削を続行した。C7区でSB2の炉址を検出した。

第5・6週(9.20～10.1) C7～17区を掘削し、SB2の写真撮影および実測を行った。さらに、ピット・土坑群を検出した。

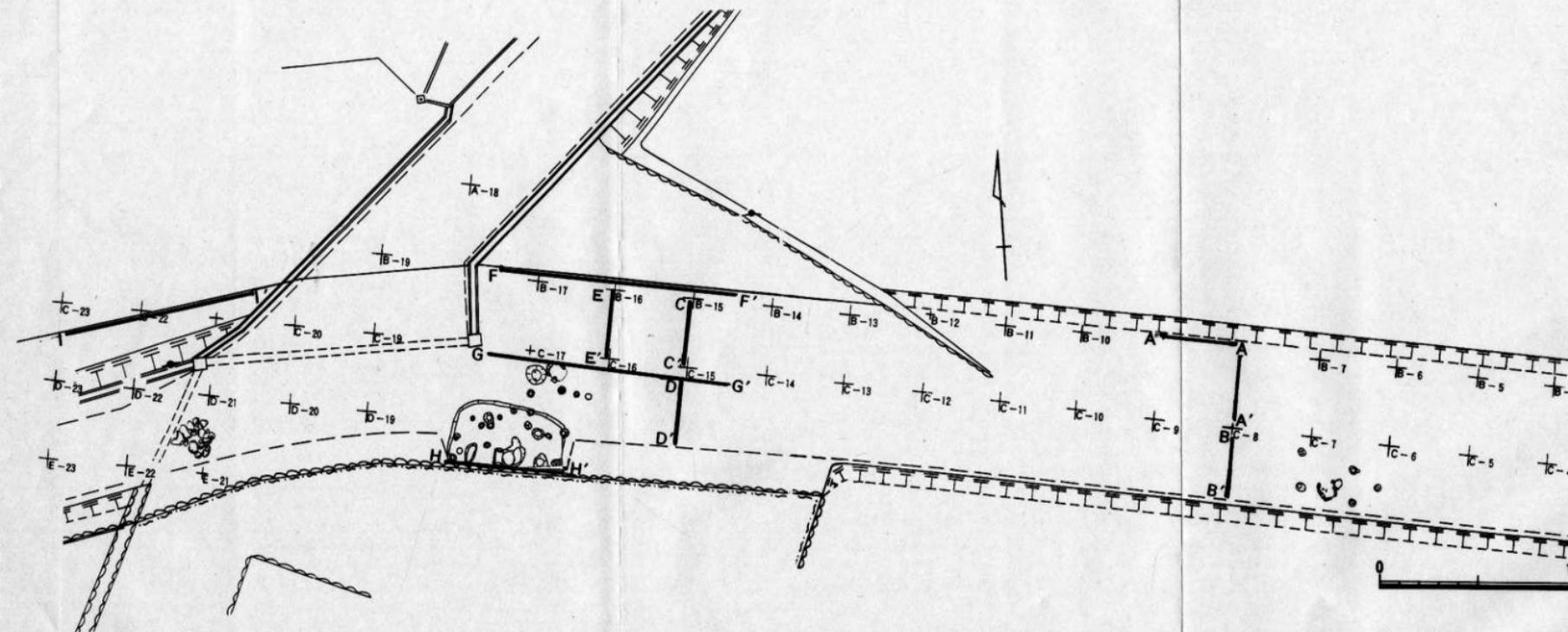
第7・8週(10.4～10.15) 掘削地点を21列まで広げた。A19区とB19区で縄文中期の土器片が多量に出土した。C17の土坑より炭化物が集中して出土した。

第9週(10.18～10.22) C17・18区でピット群を検出した。実測・写真撮影を行って下層の遺構検出手作業に入った。D22区で石皿を含む配石を伴う土坑を検出した。

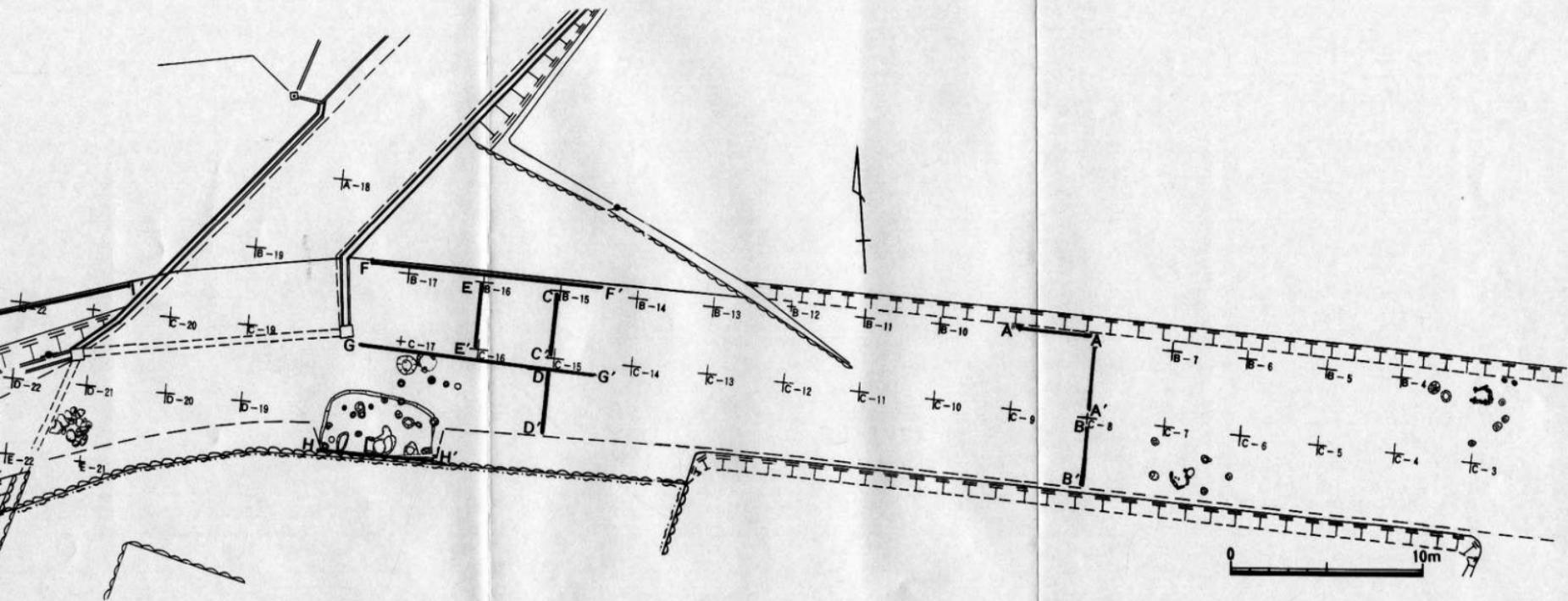
第10・11週(10.25～11.5) SB3とSB4を検出し、精査を行った際に埋甕を検出した。11月5日に、調査の納め式を行った。

現地において第一次整理作業を行い、11月30日には、現場事務所を撤去した。以後は、財団法人岐阜県文化財保護センター飛騨出張所で第二次整理作業および報告書作成作業にかかった。

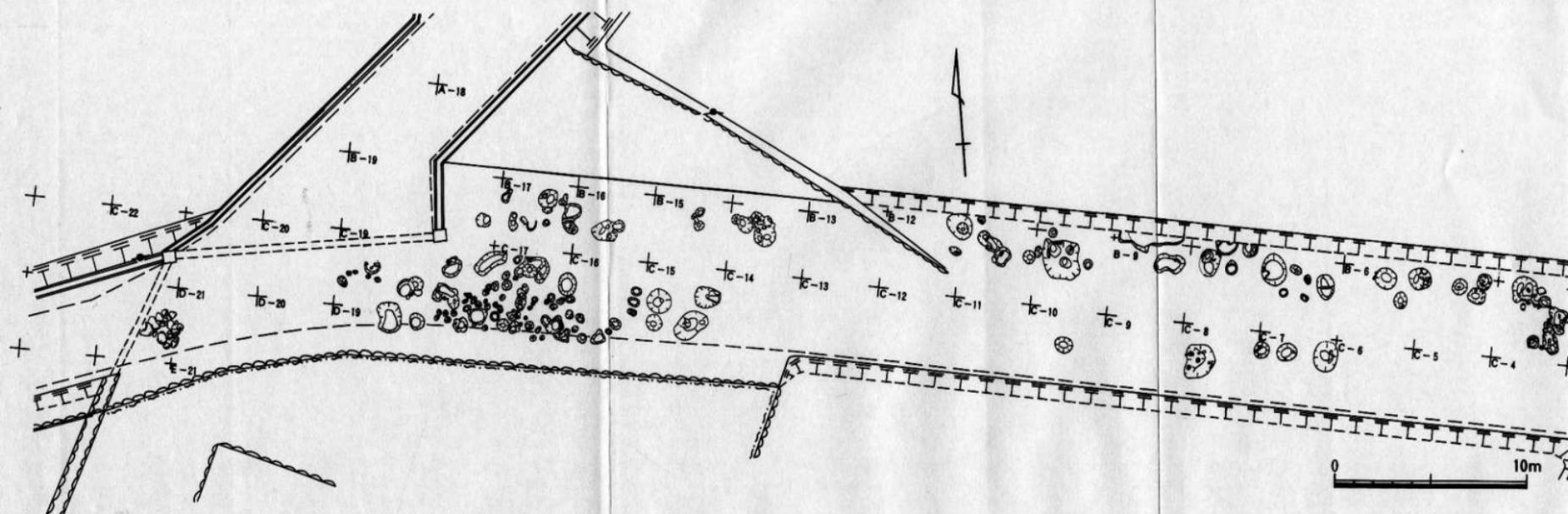
(上嶋善治)



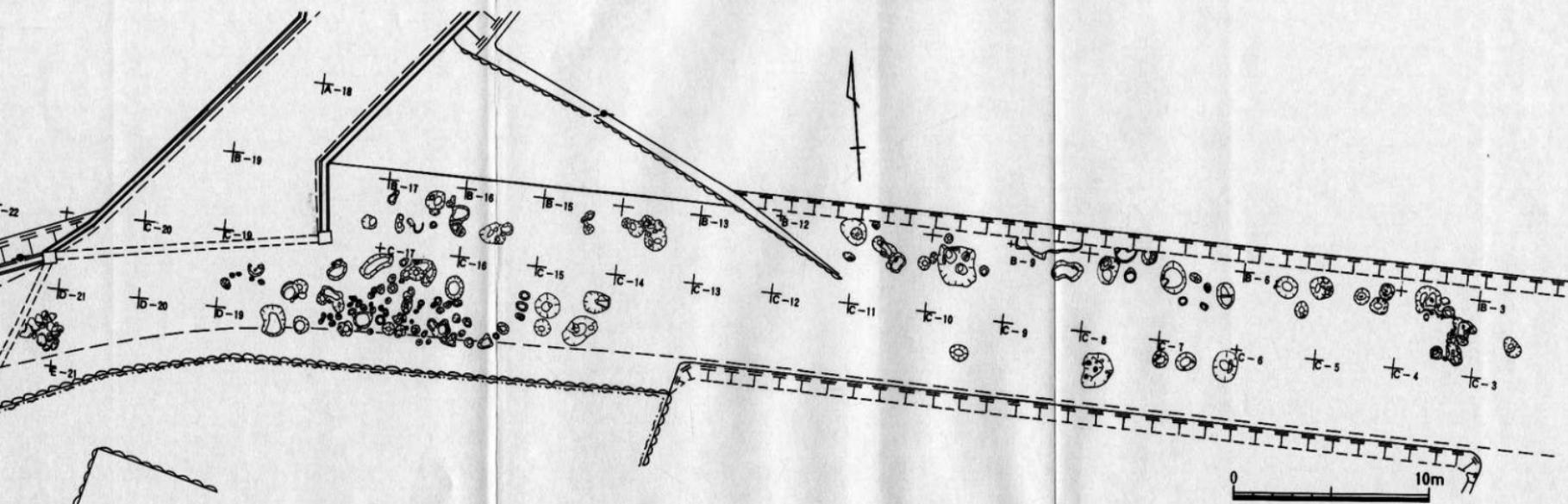
第10図 造構図(1)



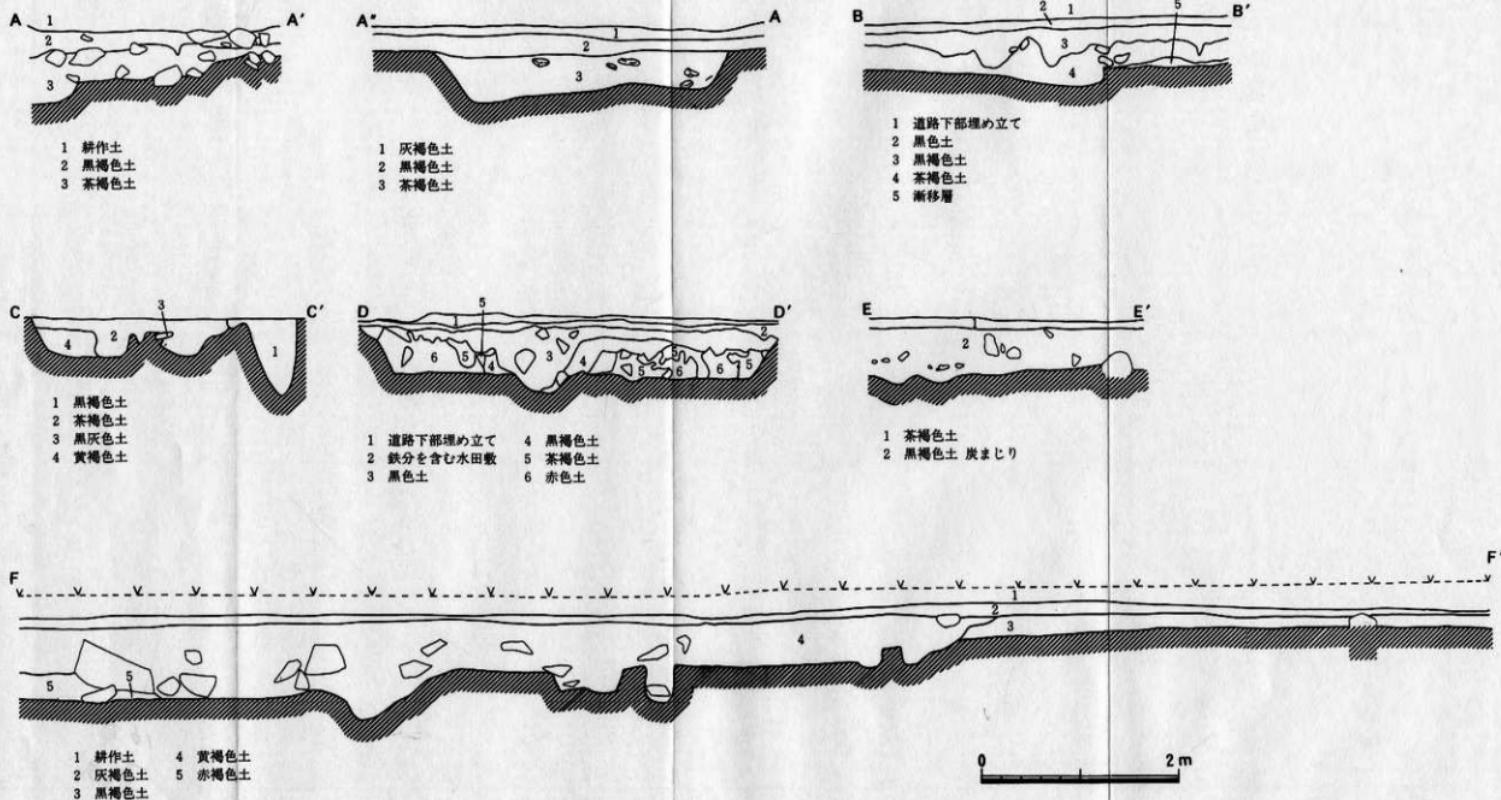
第10図 造構図(1)



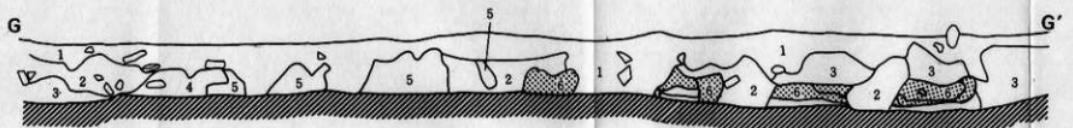
第11図 遺構図(2)



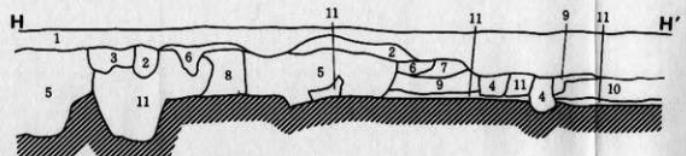
第11圖 遺構圖(2)



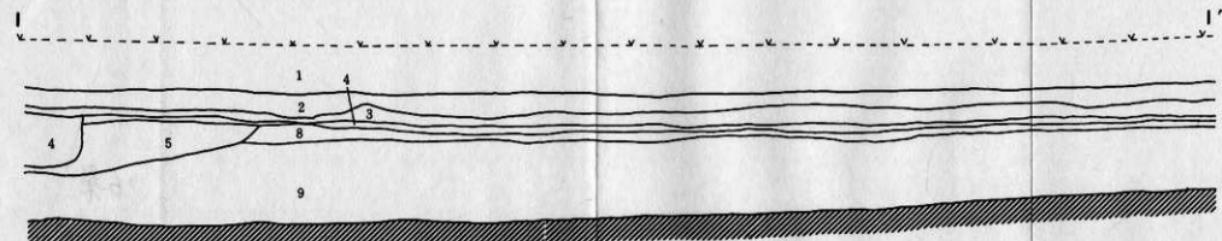
第12図 地層図(1)



- 1 黒色粘質土
- 2 黒褐色土
- 3 明褐色土
- 4 棕色土
- 5 にぶい褐色土
- 6 焙土



- 1 灰黃色土
- 2 にぶい黄褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 黑褐色土
- 5 赤黑色土
- 6 灰褐色土
- 7 明褐色土
- 8 黑色土
- 9 明黄褐色土
- 10 にぶい黄褐色土
- 11 暗褐色土



- 1 表土
- 2 黄褐色砂砾土
- 3 灰褐色土
- 4 掘乱層
- 5 灰黄褐色土
- 6 灰褐色土
- 7 黑褐色土
- 8 茶褐色土
- 9 黄褐色土

第13図 地層図(2)

0 2 m

第3章 遺構

第1節 基本的層序

本遺跡は、前述のように、宮谷川の最下流域に形成された扇状地上に位置する。調査区の中央部は複雑な層序を示し、その東西では、やや異なった状況を示している。

基本的な層序としてはIV層からなる。まず、第I層は耕作土である。調査地点は水田および畠地であり、黒色土の耕作土上およびその下層には、灰褐色土や鉄分の沈着した敷土層がつづく(F-F')。また、調査区は、南側半分は道路下であり、アスファルト舗装をした道路面およびその下層には、パラスを埋めた擾乱層が広がっていた(B-B'、D-D')。

第II層は、黒褐色砂質土である。径1~2cmの小礫を含む。縄文時代後期の遺物を含む層である(A-A')。調査区の東端から続き、中央部では厚く堆積し(E-E'、F-F')、西方ではやや薄くなっている。

第III層は、茶褐色あるいはにぶい赤褐色の砂質土である。径2~3cmの小礫を含む。縄文時代中期の遺物を含む層である(C-C')。調査区の東方では薄く、中央部からやや西よりでは黄褐色化して厚く堆積する(I-I')。さらに、部分的には赤褐色化して第IV層を形成している。

地山は黄褐色から橙色を呈する砂礫土である。

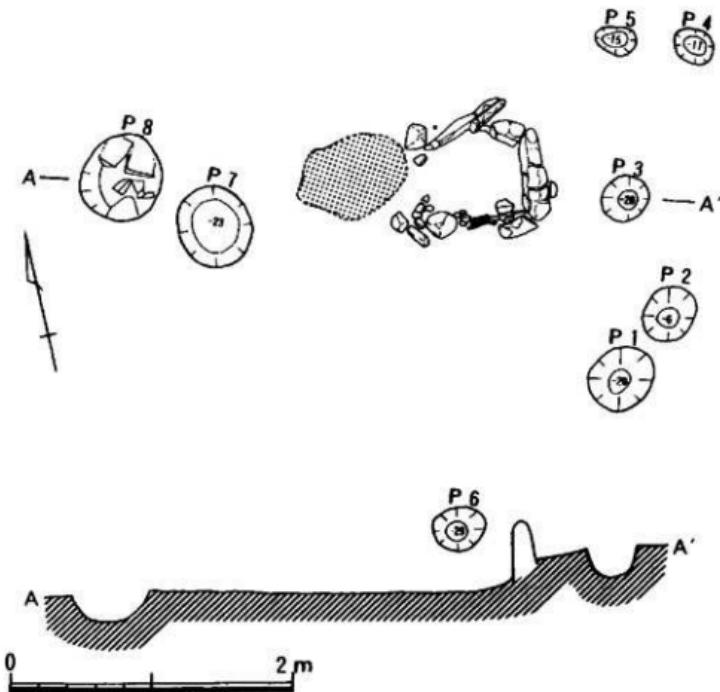
後述するSB3およびSB4を検出した地点は、第II層および第III層が厚く堆積していたが、さらに焼土を含む上層が複雑に絡んでいた(G-G')。19列から23列のあたりは、縄文中期の土器片が多く出土した地点で、第III層が厚く堆積する。現在の地形と異なり、Ⅲ地形は淀んでいた状況が予想される。いわゆる土器捨て場のような地点であったかもしれない。

(上嶋 善治)

第2節 遺構

第1号住居址

第1号住居址は、設定グリットの東端B-3・B-4を中心検出した。発掘地点の表土(耕作土)は30cm位除去されており、一部擾乱もあった。従って発掘は第2層(黒色土)の掘削より始めた。そのため表面より上器片や石器等が多く出土した。また、すでに、石臼炉の一部と思われる焼石が顔を出しておらず、それを中心に竪穴住居のプラン検出を行った。しかし、黒褐色土層であったため、土色の変化は確認できなかった。石臼炉は予想通り検出でき、それを基に床面の検索を行ったが、硬化面の確認は不可能であった。床面は不明瞭であったが、ビッ



第14図 第1号住居址



第15図 第1号炉址

側は側溝や道路となっているなど、限定された範囲で住居に伴う全てのピットを検出することはできず、主柱穴も明瞭にできなかった。これは、柱穴が後世の土坑によって破壊されたとも考えられる。

炉址は80cm×90cmの『コ』の字型で西側には組石を見ることはできなかった。最初からなかったのか、後に抜き取られたのかは不明である。東側の炉石は割れ目は入っているが完全に残り、幅16cm、高さは露出面で40cmであった。南北の組石はやや小さく、特に南側の石の一部は砕けた状態であった。炉址内部からは土器片が出土した。北西角には割れてはいたが、鉢型の底部を伴う土器1/4程度が据えたような状態で埋まっていた。また炉の西側は第14図のスクリーントーンの如く焼上となっていた。伴出土器からみて、後期初頭の住居址である。

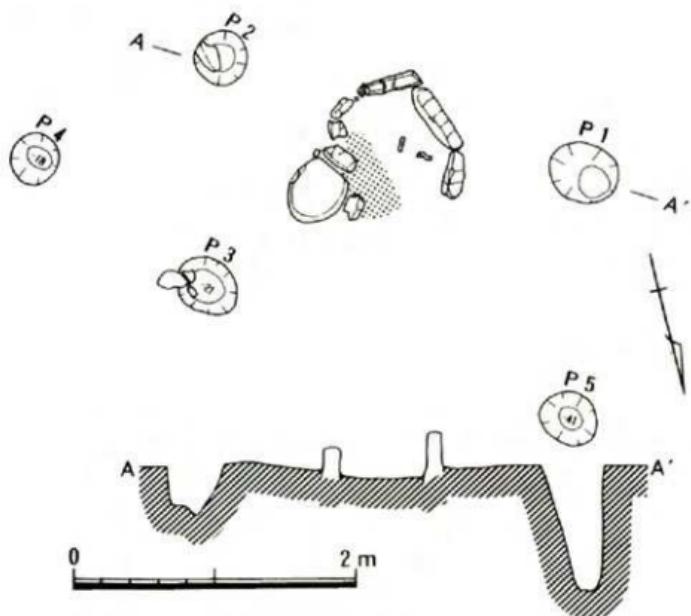
第2号住居址

第2号住居址は設定グリッドC-7・C-8より検出した。道路の舗装面下約40cmの所でかなり攪乱されていた。第1号住居址同様、黒褐色土層内で、先ず炉址を検出した。それに伴ってプランの検出を行ったが、周壁面を検出することはできなかった。また、炉址を中心床面の検索も行ったが、ここでも硬化面を明瞭に検出することは不可能であった。炉址を取り囲むように、P1～P5を検出した（第16図）。柱穴の位置としては不規則であるが、検出できなかったピットが存在していたと考えられる。



写真1 第1号炉址

トと断定できるものが検出でき、P3・P4からは小破片ではあるが土器の出土も認められた。しかし、北側は発掘区域外であり、南

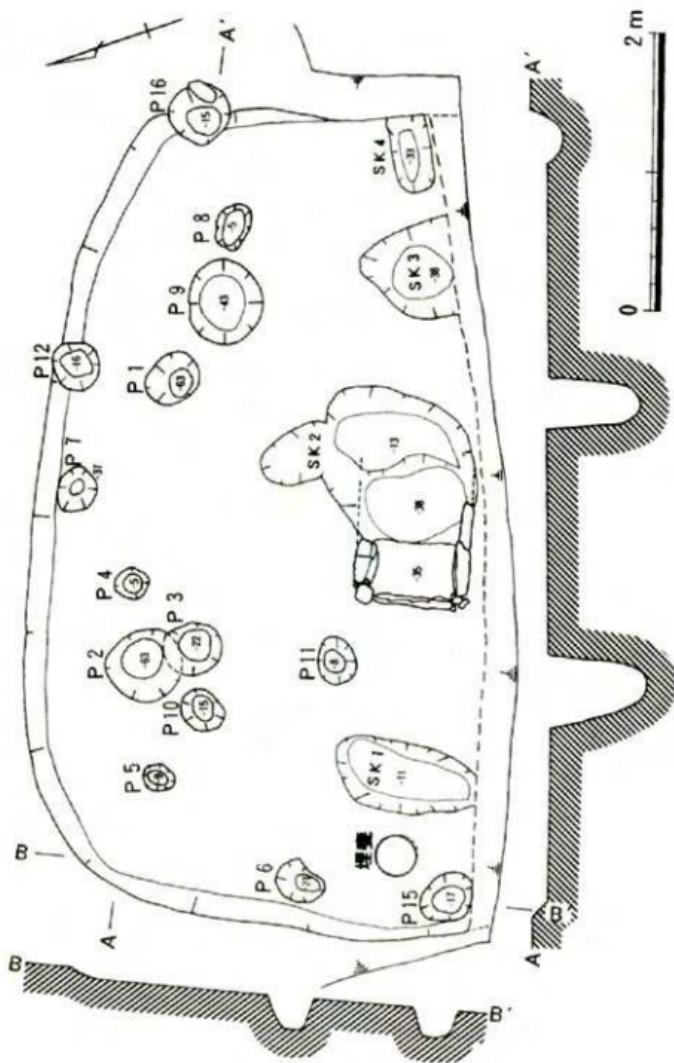


第16図 第2号住居址



写真2 第2号炉址

炉址は『コ』の字型で、北側に粗石は認められなかった。抜き取られたか否かは不明である。炉址内スクリーントーンの部分だけが焼土化していた。南側の円形で平たい石（流紋岩）は俎として利用したと想定した。なお、炉周辺においては土器の伴出は少なかった。時期は後期前葉である。



第17図 第3号住居址

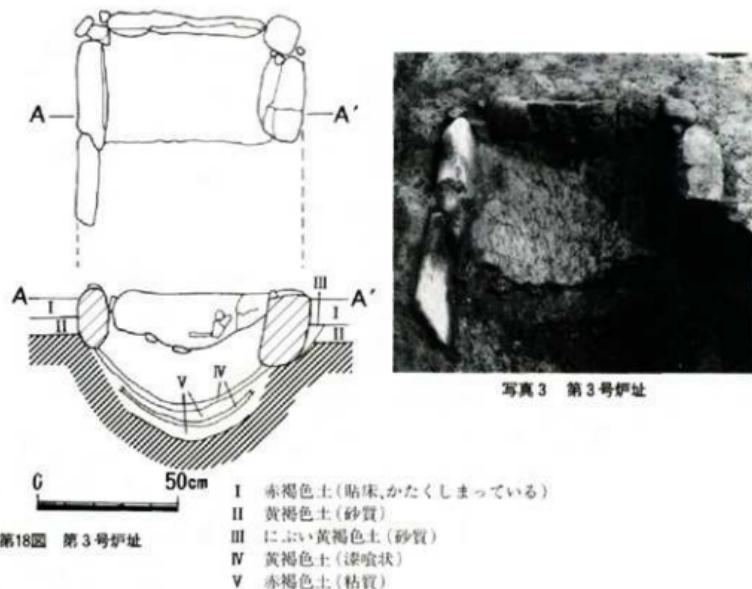


写真3 第3号炉址

第18図 第3号炉址

第3号住居址

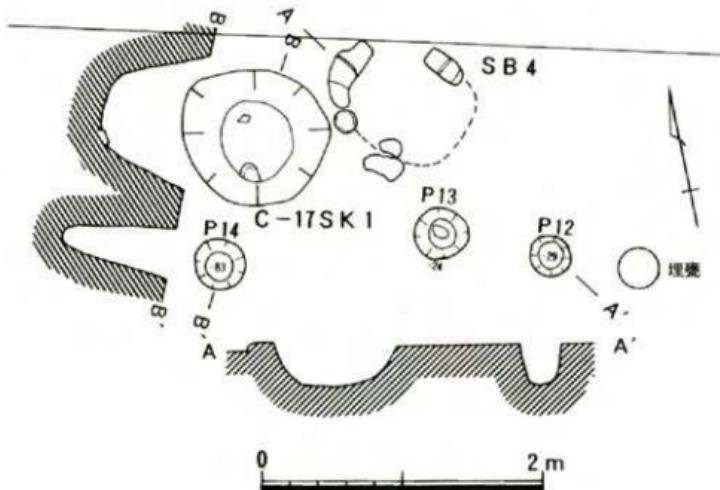
第3号住居址は設定グリットC-17~C-18及びD-17~D-18の荒城神社本殿裏にて検出した。住居址の覆土は主に後期の土坑・ピット群でかなり攪乱されていた。この土坑・ピット群を調査完了後、住居址の検出を行った。土層は第Ⅲ層となり、にぶい赤褐色と変わってきたりが、住居址のプランを示す土色の変化は見られなかった。従って、ピット群を検出している際発見された赤色化した非常に堅い床面と思われる面を追求掘削した結果、比較的容易に堅穴住居址のプランを検出することができた。しかし、石閉炉より南は神社の石垣となり発掘調査区域外であるため、住居址の全容を明らかにすることはできなかった。住居址のプランは東西550cmで、南北はおよそ490cmと推測した。堅穴の掘り込みは約12cmであった。床面は厚さ7cm~13cmで、ビンボールも立てることができないほど堅い貼床で全面赤色化していた。なお、床面は一部後期の土坑によって破壊されていた。住居址内のSK1・2・3・4がそれであり、特に残念であったのは石閉炉も同様に半分以上が破壊されていたことであった。

ピットは14ヶ所検出されたが、主柱穴はP1・P2であり、P6・P15は入口の柱穴である。P9は貯蔵穴と言えよう。また後期のピットも一部床面まで達しており、浅い不明のピットもあった。

埋甕は、西側入口の貼床5cm下で検出した。無文の深鉢で、口縁部はやや肥厚し外反する。口縁部をやや破損するもほとんど完形で、割れてはいたが底部も遺存していた。内部にはにぶい赤褐色の土が堅くつまっていた。

石窯は後期土坑により破壊されていたが、約1/2が残存していた。が石は、床面より高い所で6cm程と露出は少なかった。しかし、窯内は41cmと深く、窯内の壁と底部は完全な漆喰状になっていた。また、その漆喰の底は二重に施工されており、非常に珍しい形態を示していた。なお、漆喰の上は黄褐色であった。窯内は黄褐色の土が堅くつまており、炭・灰・土器片等の混在は認められなかった。

住居址の時期は中期後葉であるが、次の第4号住居址の時期よりも少し新しいと言えよう。



第19図 第4号住居址・C-17SK 1

第4号住居址

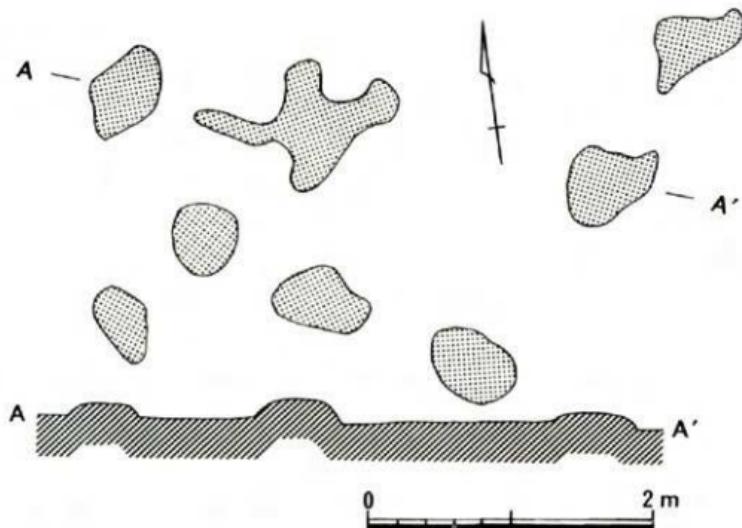
第4号住居址は、設定グリットC-17を中心に検出した。この住居址も第3号住居址同様、後期の土坑・ピット群の下第Ⅲ層より検出した。土坑・ピット群を除去していた時、第20図のスクリーントーンの如く、焼土が数ヶ所残存していた。また、発掘不可能な北側壁面第13図のG~G'の如く焼土が見られたが、この焼土が何を意味するのか不明である。これらの焼土を

精査除去した後、やや円形に5個の石組が見られ、その内部は特に焼けており、石圓炉と認定した。その後床面を求めて精査中、炉址の約140cm南東で埋甕が検出され、埋甕を伴う住居址と断定した。土器片も何点か出土し、床面の検索を行ったが、硬化面は観られず周壁の一部すら確認することができなかった。従って、住居址のプランは不明である。

炉石は抜かれており、第19図の点線内と推定し掘削を試みた。その結果、内部は焼土化していたが、土器片などは混在していなかった。

ピットは3ヶ所検出できたが、その中でP12からは中期の土器片が出土した。炉の西側に直径105cm、深さ60cmの土坑が検出され、多くの中期の土器片や砥石が出土したが、住居址に伴うものか否かは断定しがたい。

埋甕は、口縁部・底部を完全に欠き、胴部も一部欠損しているが、全面に条線文がほどこしてあり、曾利Ⅲ式に併行する土器である。この住居址は、炉石が抜かれていること、焼土面があること、床面がはっきりしていないことなどより考察するに、相当擾乱されていることが理解できた。

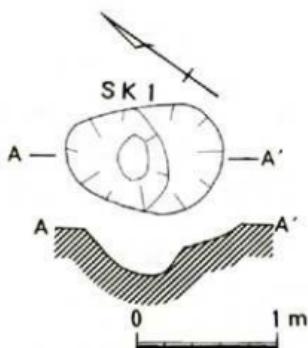


第20図 燃土塊

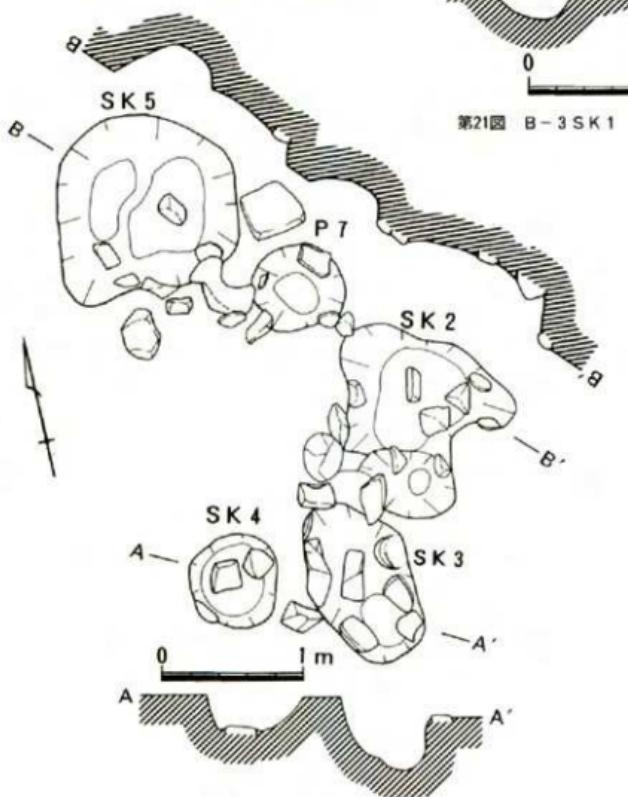
土坑・ピット

B-3 SK 1

設定グリットの東端B-3より検出した。これは第1号住居址のプランの範囲内に位置する。径は110cm×75cm、深さは35cmであった。上部中央に石棒（太さ9.5cm、長さ26.1cm）が立っており（写真4）、第1号住居址廃棄後の遺構と言えよう。また、中期の土器片があったが、混入であろう。従って後期の土器が主体で時期を決定する。また、深さ20cmのところで滑石製



第21図 B-3 SK 1



第22図 B-4 SK 2・3・4・5

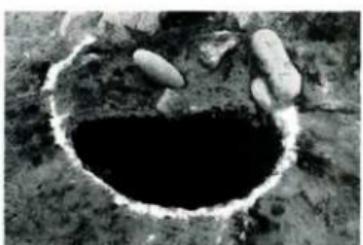


写真4 B-3 SK1

の玉（第108図2）が出土し、「土壤」と認定した。その他、出土遺物としては、土器片33点、フレーク類21点（下呂石9点・玉髓12点）等であった。なお、上部に立ててあった石棒は墓標として使用されていたと考えられる。

B-4 SK2

設定グリットB-4より検出した。これも、第1号住居址のプランの範囲内に位置するが、住居址に伴う土坑とは言えない。径118cm×130cm、深さ28cmの不定形の土坑である。土器片は小片まで入れると51個出土しているが、いずれも後期のものである。その他、石鎚1点、フレーク類13点（下呂石8点、黒曜石1点、玉髓4点）が出土した。

B-4 SK3

B-4 SK2と並んで南側で検出した。比較的石が多く、梢円形で径120cm×75cm、深さ39cm。土器片は13点出土しているが、いずれも後期のものである。その他、フレーク類8点（下呂石2点、玉髓6点）が出土している。

B-4 SK4

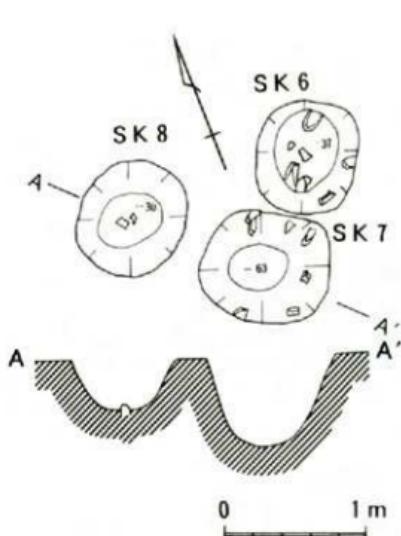
直径65cm、深さ34cmと小型である。土器片が13点出土した。

B-4 SK5

設定グリットB-4北側にて検出した。最初はP8と推定して掘削したが、その後土器片が出土し、それに伴って拡大したところ、東西128cm、南北120cm、深さ41cmの不定形の土坑となつた。遺物は土器片を中心に92点と多かったが、土器片は全て後期のものであった。

B-5 SK6

土坑群は、いずれも第II層を除去したところでそのプランを確認することができた。SK6は径80cm×70cm、深さは37cmで、第III層の中にはっきり掘り込まれていた。出土遺物は、後期土器片4点と少なかったが、しっかりした土坑（土壤）であった。



第23図 B-5 SK 6・7・8

B-5 SK 7

SK 6の南側に並んで検出した。径95cm×85cm、深さ63cmで、出土遺物は後期土器片37点、フレーク類5点（下呂石3点、玉髓2点）等であり、しっかりした土坑（土壙）であった。

B-5 SK 8

SK 8は、一つの群をなすような形でSK 7と並んで西側に検出された。径80cm×75cm、深さ30cmであった。出土遺物は後期土器片21点、フレーク類2点（チャート1点、下呂石1点）で土坑（土壙）としてはしっかりしていた。

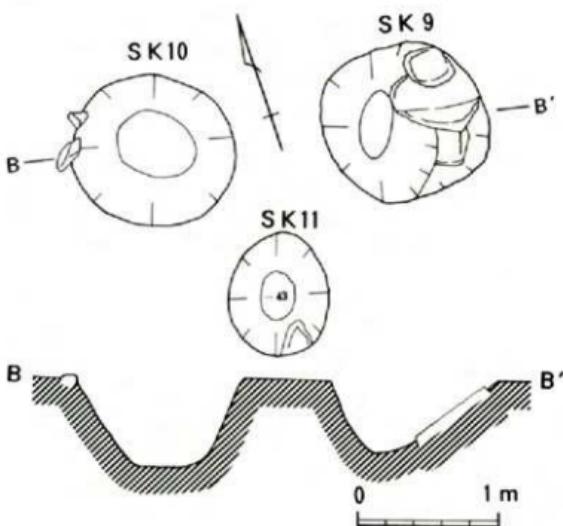
B-6 SK 9

設定グリットB-5の杭を中心にして検出した。径120cm×110cm、深さ51

cmのやや大きめの土坑（土壙）で出土遺物は118点と多かった。内訳は後晩期土器片が102点、フレーク類16点（下呂石9点、玉髓7点）であった。



写真5 B-5 SK 6・7・8



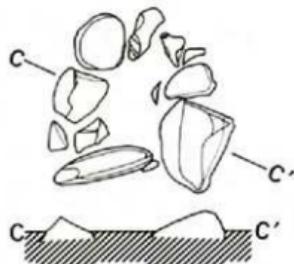
第24図 B-6 SK 9・10・11

B-6 SK 10

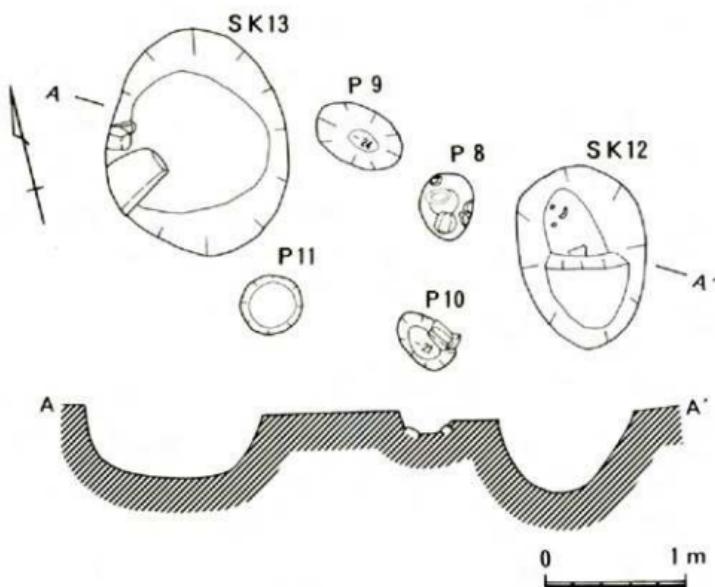
径112cm×116cm、深さ64cmの第Ⅲ層にしっかり掘り込まれた土坑（土壤）であった。出土遺物は土器片91点、フレーク類14点（下呂石6点、玉髓8点）計105点と多かった。

B-6 SK 11

本土坑（土壤）は、第25図の如く配石が見られた道構である。配石は茶褐色土の上にしっかり組みこまれていた。配石を排除し掘削すると径90cm×70cm、深さ43cmのやや椭円形の土坑となった。出土遺物は土器片16点、フレーク類3点（下呂石2点、玉髓1点）であった。配石に使用された石材のはほとんどは凝灰岩で、明らかに人為的であった。しかし、その中に石器は混入していなかった。



第25図 B-6 SK 11の上の配石



第26図 B-7 SK12・13



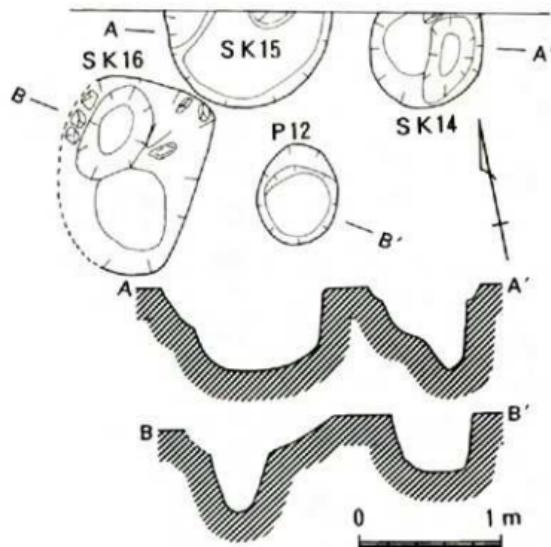
写真6 B-7 SK12

B-7 SK12

径130cm×88cmの南北に楕円形で底は2段になっており、深いところで54cmであった。この土壤からは中程深さ20cmの所で滑石製の玉が出土した。これにより土壤であると認定したが、何故2段の土壤なのは不明である。その他の遺物としては土器片75点、フレーク類14点（下呂石1点、黒曜石1点、玉髓12点）であった。

B-7 SK13

このSK13は、設定グリットのB-7の杭南側で検出した。径162cm×124cmのやや楕円形で、深さ44cmのしっかりした土坑（土壤）であった。出土遺物は土器片62点、石鐵1点、フレーク類7点（下呂石4点、チャート1点、玉髓2点）であった。なお、SK12との間にP8・9・10・11が見られ、P8からは土器片2点、P9からは土器片7点、P10からは土器片6点、フレーク類5点（下呂石4点、チャート1点）が出土した。しかしSK13との関係は不明である。



第27図 B-8 SK14・15・16

B-8 SK14

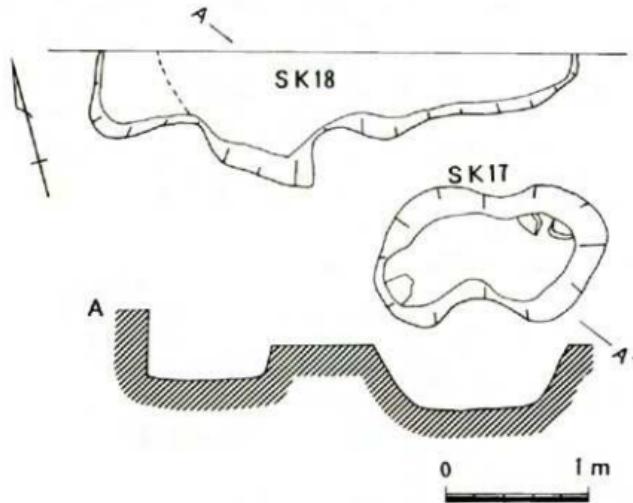
設定グリットB-8の北側に検出したが、発掘区域外に渡っており完掘は許されなかった。径は東西76cmで南北不明、底は2段になっていたが、深いところで60cmであった。出土遺物は土器片51点、フレーク類5点（下呂石2点、玉髓2点、チャート1点）、砥石1点であったが、土器片の中には赤色顔料の塗られた土器もみられた。

B-8 SK15

SK14の西側に検出したが、この土坑も区域外に入り込み北側半分は掘削不可能であった。径は東西118cm、南北は不明、深さは53cmであった。出土遺物は土器片17点、フレーク類2点（下呂石1点、黒曜石1点）であった。

B-8 SK16

設定グリットB-8の杭東側で地層観察のための幅約40cm、深さ60cmのトレンチを入れたため、この土坑は西側一部が破壊された。径は南北144cm、東西110cmで形はやや不定形となっていた。底は2段となっており、深いところで61cmであった。出土遺物は土器片20点、四石2点であった。なお、SK16の東側にP12が検出され、径55cm×70cm、深さ45cmであった。出土遺物は土器片33点、フレーク類3点（チャート）と炭化物1点であった。



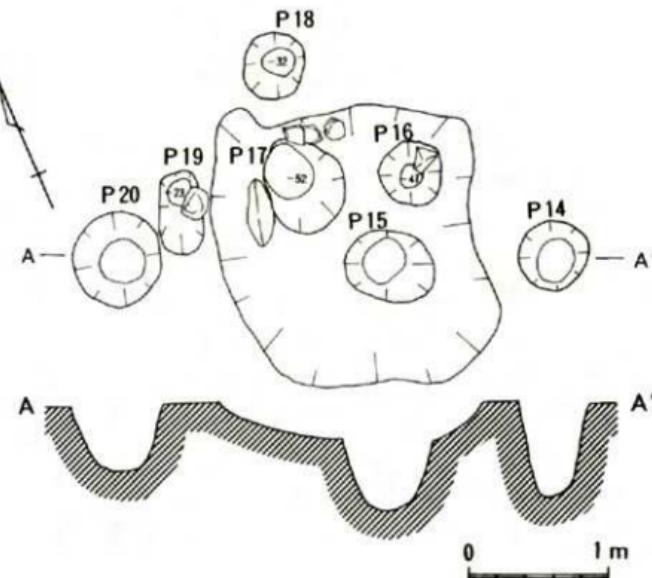
第28図 B-9 SK17・18

B-9 SK17

設定グリットB-9より検出した。東西160cm、南北75cmのややヒョウタン形をした土坑で、深さは45cmであった。出土遺物は土器片50点、石鏃3点、打製石斧1点、フレーク類15点（下呂石6点、黒曜石2点、チャート5点、玉髓2点）等であった。地山をはっきり掘り込んだしつかりした土坑であった。

B-9 SK18

設定グリットB-9の北壁に接して東西3m30cm、深さ25cmの掘り込みが見られ、SKとした。住居址の可能性も考えられたが、区域外に入り、完掘はできなかった。南側はやや不定形であったが、立ち上がりはしっかりしていた。出土遺物は多く、土器片51点、石鏃4点、石錐2点、四石1点、フレーク類21点（下呂石3点、チャート9点、玉髓8点、黒曜石1点）であった。



第29図 B-10ピット群

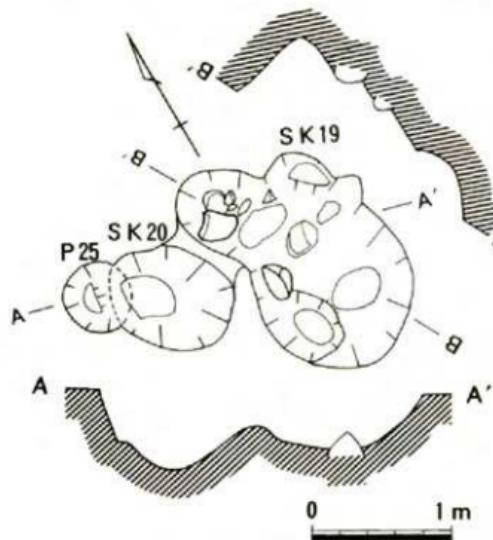
B-10 ピット群

B-10を掘削中、長径約2mの土坑と思われる黒土のプランを検出した。しかし、精査した結果、土坑ではなく、窪地であった。その窪地の中にピット15・16・17があり、さらにその窪地を取りまくように、ピット14・18・19・20を検出した。この窪地を掘削中に土器片や石器が多く出土したが、その中に土偶（第79図1）や勾玉（第108図10）が出土した。

ピット14からは土器片4点、フレーク類3点（チャート1点、玉髓2点）が出土した。また、ピット15からの出土遺物は多く、土器片95点、フレーク類12点（下呂石5点、玉髓7点）であった。しかし、他のピットからは遺物らしいものは何も出土しなかった。この西側にも数カ所のピットがあるが、窪地とピット群との関係は不明である。

B-14 SK19・20・P25

設定グリットB14を掘削中、中期後葉の土器と思われる底部のない埋甕が検出された。遺構を想定し周囲を検索した結果、遺構外の埋甕と判定した。また、埋甕（P25）の東側に不定形な土坑をみることができた。掘削した結果、中期の埋甕を後期の土坑（SK20）が1/2掘り取っていたことがわかった。埋甕は伏せてあり、底部を除き1/2は口縁部まできれいに残され、遺存状態は良好であった。



第30図 B-14 SK19・20・P25

SK19は径190cm×105cm、深さ38cmで不定形である。出土遺物は多く、土器片127点、磨製石斧2点、打製石斧1点、凹石4点、フレーク類67点（下呂石29点、チャート1点、玉髓36点、黒曜石1点）であった。土器片は後期中心であった。また、SK20は径90cm×70cmのやや楕円形であるが、SK19の上部の方で一部重なっていた。出土遺物は土器片28点、フレーク類20点（下呂石5点、チャート3点、玉髓11点、黒曜石1点）であった。

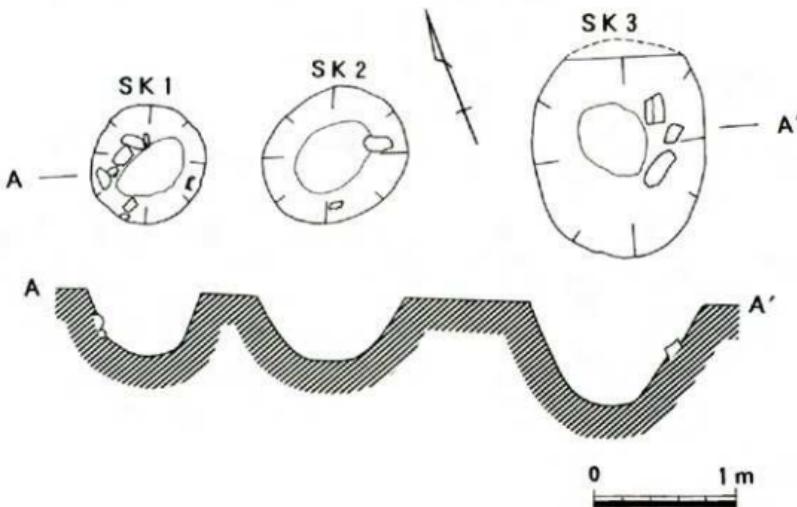
C-7 SK1・2・3

設定グリットC-7では、『コ』の字型の石圓炉（第2号住居址）が検出されたが、床面を求める精査中石圓炉の北側で土坑と思われるプランを3ヶ所検出した。SK1・SK2は第2号住居址内にあると想定したが、SK3は完全に住居址の外に位置すると思われた。第2号住居址のところで記した通り、床面が確認出来なかったことから、このSK1・2は第2号住居址に関するか否か判断に苦しんだが、幸いSK2を掘削中に玉（第108図4）が出土したことから、住居址とは関連のない土壙と認定した。SK1は径80cm×84cmの円形で深さは44cmであった。出土遺物は土器片26点と、凹石1点であった。

SK2は径104cm×94cmの円形に近く、深さは42cmであった。玉1点をはじめ、土器片81点、石鐵1点が出土した。

SK3は径124cm×153cmの楕円形をなし、深さは78cmであった。出土遺物は土器片114点、凹石1点、フレーク類11点（下呂石5点、チャート3点、玉髓3点）と骨片1点が出土した。しかし、骨片は小片であるため何の骨であるかは不明である。

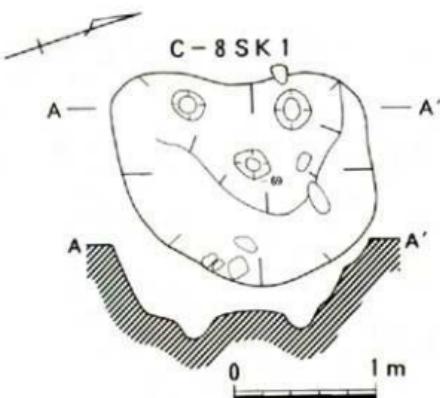
以上の3基の土壙は東西に1列に並び（第31図）、且つ、同レベルから掘り込まれている点から考え、第2号住居址より少し早い時期のものであると判断した。



第31図 C-7 SK1・2・3

C-8 SK 1

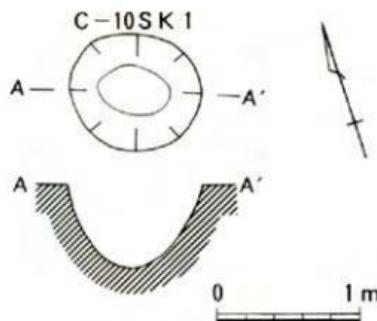
設定グリットC-8より検出した土坑は185cm×150cmの不定形で2段に掘り込まれており、底にはピットが3ヶ所あった（第32図）。深さは一番深いピットで69cmであった。出土遺物は土器片195点、打製石斧1点、凹石2点、切り目石鍤2点、フレーク類10点（下呂石3点、玉髓5点、チャート1点、黒曜石1点）であった。土坑は後期のものである。なお、この土坑の北東にP 6を検出し、土器片5点、石鏃1点が出土したが性格は不明である。



第32図 C-8 SK 1

C-10 SK 1

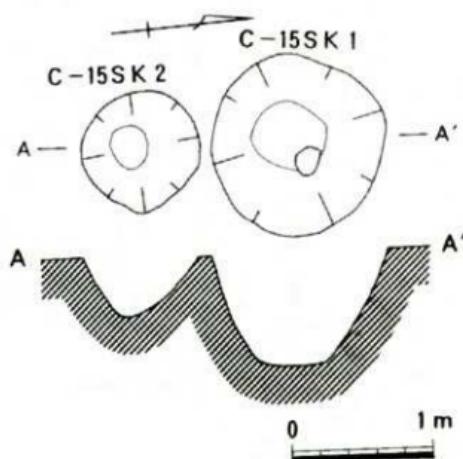
他の土坑と少し離れた所で検出した。径90cm×84cmの円形で深さは58cmのきれいに掘り込まれた土坑であった。出土遺物は土器片40点、石鏃1点、フレーク類9点（下呂石4点、チャート3点、玉髓2点）であった。



第33図 C-10 SK 1

C-15 SK 1・2

5 cm程の間隔でSK 1とSK 2を並んで検出した（第34図）。SK 1は径130cm×125cmで深さは82cmであった。出土遺物は後期土器片139点、石鏃7点、石錐1点、打製石斧1点、凹石2点、フレーク類51点（下呂石34点、玉髓17点）と多かった。SK 2はSK 1に比してやや小形で、径85cm×85cmで深さは60cmであった。出土遺物は土器片14点、打製石斧1点、磨製石斧1点、フレーク類12点（下呂石3点、玉髓9点）であった。二基とも円形でしっかり掘り込まれた土坑（土壙）であった。



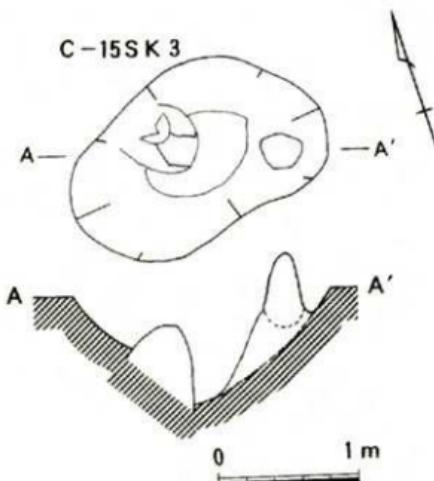
第34図 C-15 SK 1・2



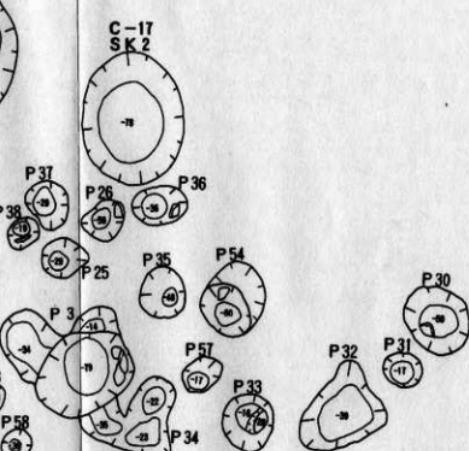
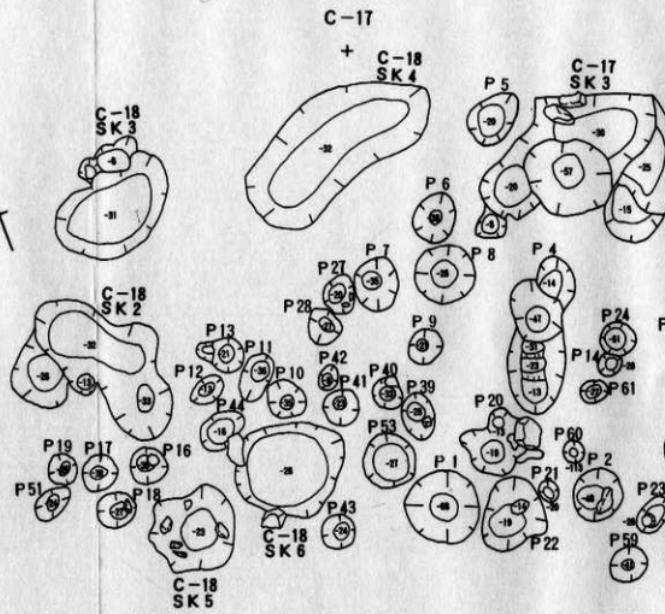
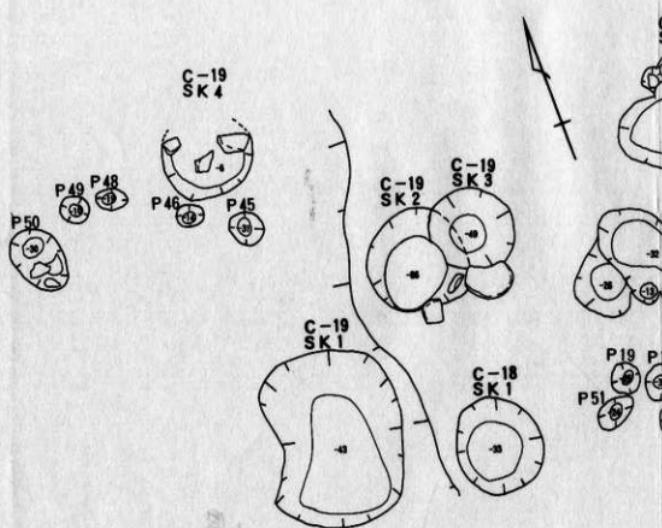
写真7 C-15 SK 3

C-15 SK 3

SK 3は、地上より高さ24cmの石柱（墓標）の立ててある土壇であった。長径185cm、短径115cmのやや楕円形で深さは75cmであった。中に少し大きめの石があったが自然石であろう。出土遺物は土器片172点、石鐵5点、磨製石斧2点、凹石3点、フレーク類86点（下呂石31点、玉髓53点、黒曜石2点）と非常に多かった。なお、石柱は長さ55cm、下部は丸太く、上方程細くなっていた。加工痕は見られなかった。（第35図、写真7）

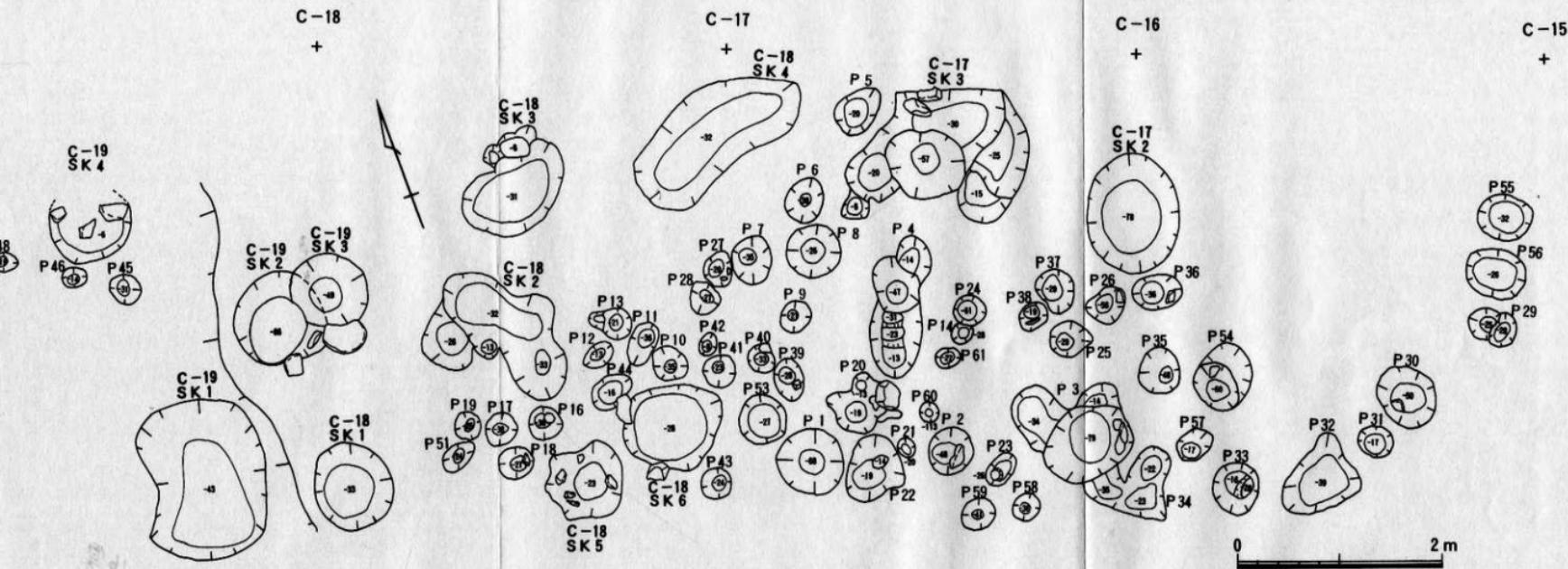


第35図 C-15 SK 3

C-19
+C-18
+C-17
+C-16
+

0 2 m

第36図 C-15～C-19土坑(土壤)・ピット群



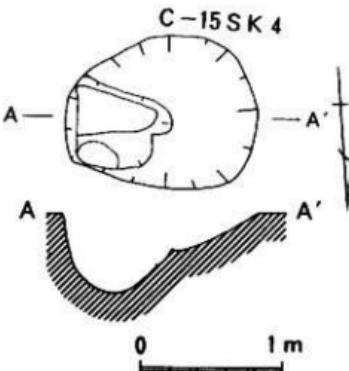
第36図 C-15~C-19土坑(土塙)・ピット群

C-15 SK 4

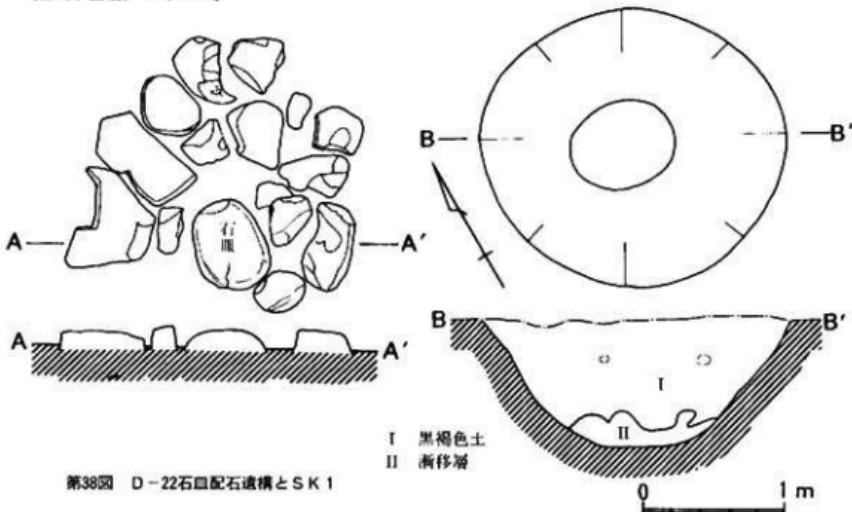
SK 4は、東西135cm、南北108cmの椭円形に近い形であった。底は西の方が2段となっていたが、深い所で60cmであった。出土遺物は土器片28点、フレーク類17点（下呂石13点、チャート1点、玉髓3点）であった。

D-22 SK 1

第38図の如く配石が見られ、人為的な配石遺構とみて精査したところ、配石の中の1個は完形な石皿であった。配石排除後、その下を半剖した。その結果、きれいに掘り込まれた土坑となつた。出土遺物は土器片80点、磨石1点、フレーク類2点（下呂石）であった。



第37図 C-15 SK 4



第38図 D-22石皿配石遺構とSK 1

以上、主なSK（土坑・土壤）について述べてきたが、他のSK、P（ピット）については一部を省略したものもある。集中的な土坑（土壤）・ピットについては第36図で一括紹介し、出土遺物については石器は第13表の通りである。土器については主な遺構の遺物を拓影で示すことにした。

(野村 宗作)

第4章 遺 物

第1節 縄文土器

第1号住居址の縄文土器

第1号住居址の土器群として「炉址内出土の土器」「柱穴と考えられるピット内出土の土器」「住居址の推定範囲内出土の上器」に分けて記述する。遺構編で触れたように、「住居址の推定範囲内出土の上器」については、搅乱による混入と思われる上器も多く含まれているが、まとめて報告することにする。

炉址内出土の土器（第39図、図版9）

1～5は同一個体である。無文の平底をもつ深鉢で、胴部にLRの縄文を施すが、胴部下半から底部にかけては粗雑な調整で縄文を磨り消している。縄文を残す器面には、2～3条を1単位として縱横斜めに浅い沈線文を施すが、全体の文様構成は把握できない。色調は黄緑。底部から胴部にかけてはまっすぐ外に聞く断面形態（第80図A類）で、底面の直径は約8.5cm。圧痕は不明で、ナテ調整されている。後期前葉の土器と思われる。6は、肥厚する口縁部にLRの縄文を施す縁帶文系の土器である。7・8は沈線文。9・10にはRL、11～13には、LRの縄文が施される。

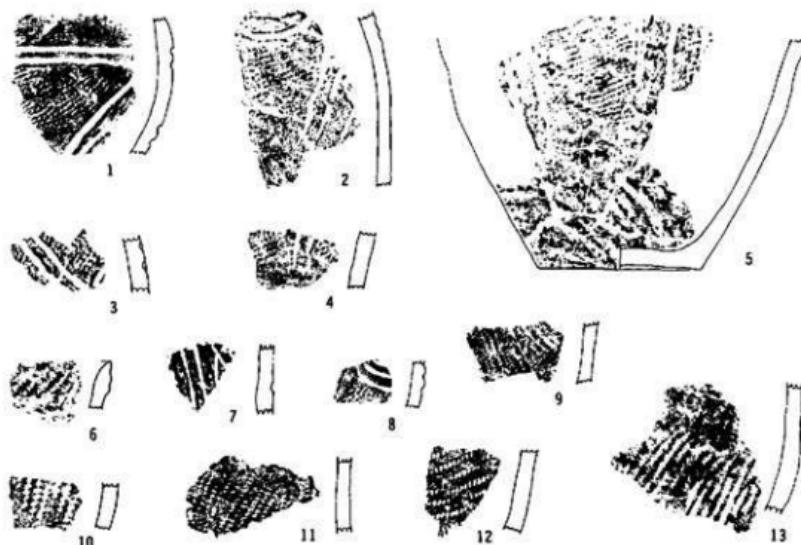
柱穴と考えられるピット内出土の土器（第40図）

2は、波状の口縁部に沿う形で、少なくとも3条の沈線を波頂部に向けて引く。気屋式に関係する上器と思われる。1は、半截竹管によって低い隆起線を表す。その下は縄文である。

住居址の推定範囲内出土の土器（第41～45図、図版10～16の上）

主体は後期前葉であるが、時期を異にする土器も多く含まれているため、以下のように1～8群に分けて記述する。

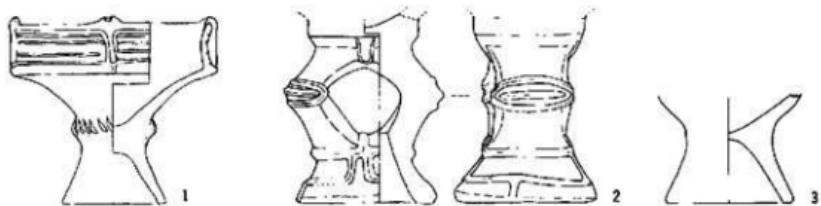
1群 後期前葉の土器	5群 縄文、条線文
2群 後期中葉の土器	6群 底部
3群 後期後葉の上器	7群 上鉢
4群 晩期前半の土器	8群 把手



第39図 第1号住居址炉址内出土土器



第40図 第1号住居址の柱穴と考えられるピット内出土土器



第41図 第1号住居址の推定範囲内出土土器(1) 1群

1群（第41～43図、第44図1～25、図版10～14）

後期前葉の土器群である。口縁部が肥厚する縄帯文系の土器、気屋式や壺之内式に類似する上器、微降起線文をもつ宮田式土器など様々な形式のものが入り混じり、注口土器も含まれる。出土量が多く、形式等も様々なので、I～VI類に分類して記述する。

1類（第42図、第43図1～3、図版10の下～12の上）

口縁部が肥厚する縄帯文系の土器群を一括した。小破片ばかりで全体の器形を把握できるものはないが、口縁部等の文様により、更にa～d類に分類して記述する。

a類（第42図1～5、図版10の下）

口縁部に渦巻文をもつもの。本遺跡の中で、口縁部を肥厚させた土器はかなり出土しているが、口縁部に渦巻文をもつ土器はこのI-a類とB-12P23に1点（第51図24）しか存在しない。その意味では、第1号住居址の性格を考える上で資料的価値は高いと思われる。

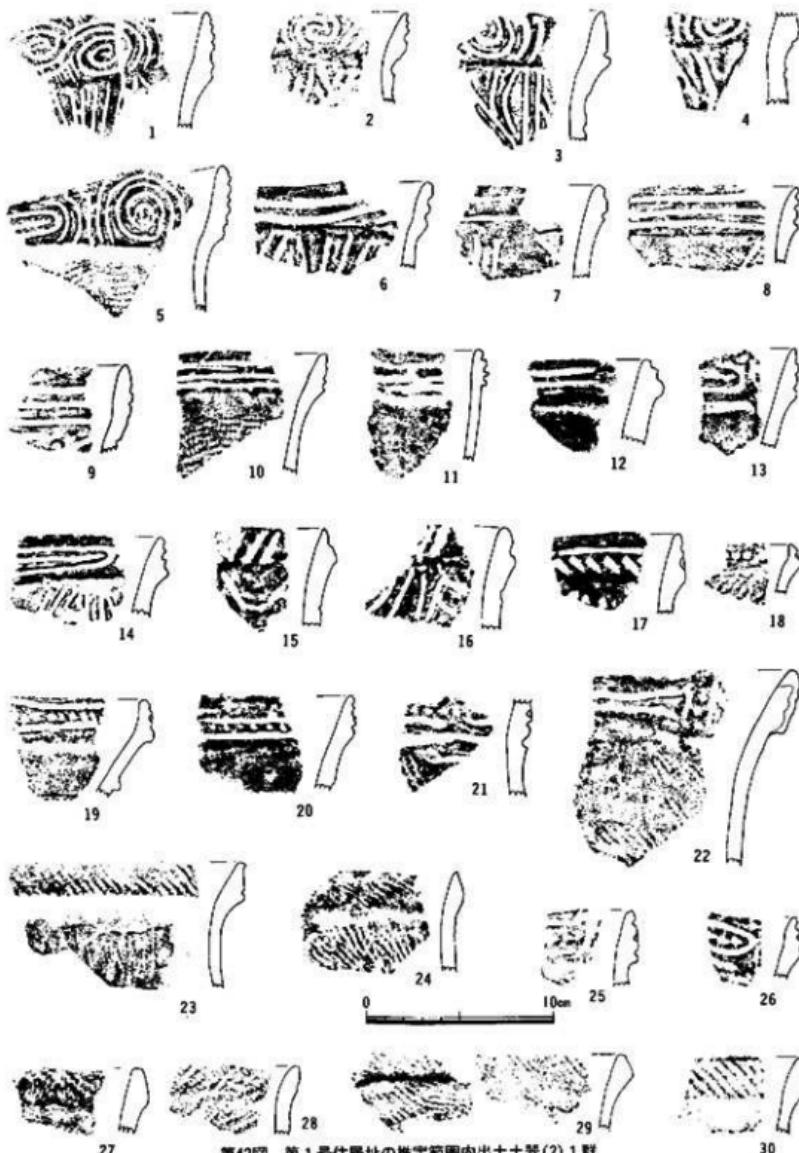
いずれも頸部がくびれ、波状をなす口縁部がわずかに外反する。肥厚した口縁部は頸部との間に段を作るが、2の段はゆるやかである。色調は、黄橙（1）、黒褐色（2）、赤褐色（3・4）、褐色（5）と様々で、2の内面および5の口縁部にはすすの付着が見られる。

渦巻にはそれぞれ特徴がある。1は、左右の渦巻が連続につながっており、渦巻の方向も形も同じである。2は、渦巻の中心が入組状になる。2条の沈線を1単位として渦巻文を施すような形になっている。III類の上器（第43図27）やC-7SK2の土器（第52図6）にもよく似た手法をもつものがある。5では、波頂部の渦巻文に対向する形で左に沈線の横位区画文を施す。頸部には、沈線で幾何学的な文様を施したり（1～4）、纏文を斜位に施したり（5）している。肥厚した口縁部に渦巻文をもつ土器は、古川町の「中野山越遺跡」や高山市の「垣内遺跡」などにも見られる。

b類（第42図6～22・25～26、図版10の下～11）

口縁部に沈線文や刺突文を横走させるもの。6は、口縁部の肥厚が弱く、波状をなす。口縁部に沿って横走する2条の沈線文は、波頂部近くで条数を増やす。「入」字文風になるかも知れない。色調は暗赤褐色。7も肥厚が弱く、口縁部が波状をなす。6・7・14・16の頸部にはa類のように沈線で幾何学的な文様が施されており、時期的共通性をうかがわせる。

横走する沈線文が区画を作るもの（13・14・25・26）や斜位に短沈線を引くもの（15～17）もある。18は、狭い肥厚口縁部に押引文を連続して施す。19・20は、口縁部の2条の沈線間に連続刺突文を施す。共に波状口縁であるが、19は内彎する。22は、頸部がくびれ、口縁部が外反する。肥厚した口縁部の一部を突起状に膨らませ、そこに短沈線と刺突文を縦位に施す。胴



第42図 第1号住居址の推定範囲内出土土器(2) 1群

部は繩文。色調は明褐色で、胎土に小石を含む。すすがかなり付着している。25・26は、波状になる口縁部が肥厚する。肥厚部分に沈線区画をもち、中に刺突文を連続して施文する。

c類（第42図23～24・27～30、第43図1、図版11の下～12の上）

口縁部に繩文を施文するもの。施文方向はすべて斜位で、頸部以下にも施文するもの（第42図23～24・27～29、第43図1）と無文のもの（第42図30）がある。更に、口縁部内面にも施文するもの（第42図29、第43図1）や口縁部に沈線を横走させるもの（第43図1）もある。第43図1のように、口縁部が肥厚し、そこに沈線を横走させるものが、B-3 SK 1に1点（第49図2）ある。

d類（第43図2～3、図版12の上）

口縁部が無文のもの。頸部以下も無文である。

II類（第43図4～7・10・13・14、図版12）

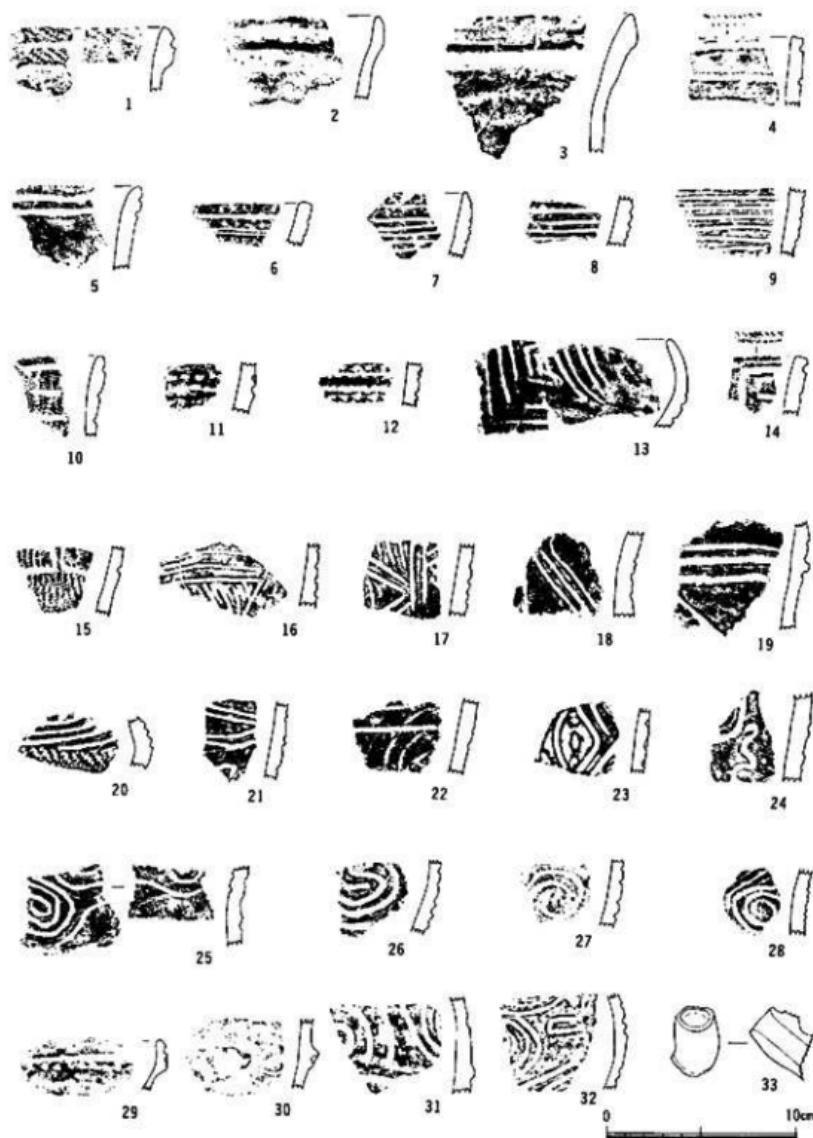
口縁部の肥厚は認められず、主に沈線で施文するもの。口唇部に繩文を施したり（4・14）、沈線を引いたり（1）するものが見られる。10は、3条の横位沈線文の端に刺突文を施す。13は、波状の口縁部が内彎する。口縁部の上端より沈線文が施される。色調は暗褐色。気屋式に関係する土器かと思われる。7と8には、器面に赤彩が認められる。時期が新しくなるかも知れない。

III類（第43図8～9・11～12・15～28、図版12～13の上）

沈線文や刺突文を施すもので、11縁部に近いものや副部の破片を一括した。I類やII類と関係が深く、その胸部文様を構成する可能性の高いものを多く含む。11は、沈線間に押引文、12は、沈線間に小さ目の三角形刺突文を連続施文する。色調は暗赤褐色。気屋式に関係する土器である。三角形刺突文をもつ上器は、C-16 P 32で1点（第57図4）、包含層で6点（第72図1～6）出土している。25～28は渦巻文。25は、内面にも沈線で渦巻状の文様を施す。27は、I-a類の土器（第42図2）と同じように、渦巻の中心が入組状になる。

IV類（第43図29～33、第44図1・2、図版13）

注口上器と思われるものを一括した。第43図の30は磨消繩文。31・32は、渦巻状の文様をもつ。33は注口部。長さ3.9cmで、やや上向きに反る。基部の内径1.3cm、外径2.2cm。先端部の内径1.5cm、外径2.2cmで「寸胴」型である。注口部上面と副部の間もつながっていたと思われる痕跡が認められる。色調はにぶい黄橙。



第43図 第1号住居址の推定範囲内出土土器(3) 1群

第44図1・2は、注口土器の口縁部に付けられた環状の把手。1は、口唇部上の小突起に口縁部から続く沈線文によって渦巻文を施す。口縁部も沈線文である。色調は赤褐色。2も形や文様がほぼ同じ。色調は褐色。共に壺之内式に比定されよう。注口土器の把手は包含層にも10点近く出土している（第78図）が、ほとんどは環状の部分が口唇部の上にあり、この2点とはやや異なる。

V類（第44図3、図版13の下）

ねじり棒状の突起をもつもの。第1号住居址から2点出土しているが、1点は磨滅が激しいため1点のみ報告する。口縁部は無文で、口唇部にはそろえた2本の粘土ヒモの両端を互いに逆方向にねじって1本の棒状にし、それを突起として張り付けた様子がはっきり確認できる。色調は黄褐色。すすが付着している。なお、このねじり棒状の突起をもつものは、包含層からも1点（第73図28）出土している。

後期前葉を中心とした上器に付けられるこの種の突起は、「南垣内技法」¹¹「山並状口縁部突起装飾（山並状装饰）」¹²「ねじり棒的なかざり把手」¹³「ネジリヒモ状突起」¹⁴「網状」¹⁵など様々に表現されている。繩文中期以降飛騨で盛んになる「ねじり棒」と呼ばれる把手もこの突起も2本の粘土ヒモをねじって作っており、手法としては共通性をもつ。そのため、ここではとりあえず、「ねじり棒状の突起」と表現しておくことにする。時期については壺之内式併行とされている。

VI類（第44図6、図版13の下）

口唇部を「T」字状にし、そこに押引沈線文を施すもの。器面は無文で、ていねいなナデ調整がしてある。色調は黄褐色。包含層出土の土器（第72図19・27）に口唇部形態が似る。

VII類（第41図、第44図4～5・7～25、図版10の上、図版13の下～14）

微隆起線文をもつ土器群を一括した。微隆起線文をもつ後期の土器は、飛騨では宮田式土器として知られ、出土する遺跡も多い。宮田式土器は、増子康貞氏によって形式設定された上器で、後期前半称名寺式～壺之内式併行の飛騨特有の上器¹⁶とされている。木遺跡では、第1号住居址を始め、上坑やピット内、包含層からも多く出土している。微隆起線文への刻みの有無等により、a～c類に分けて記述する。

a類（第41図2、第44図4～5・7～10、図版10の上、図版13の下～14の上）

微隆起線文に刻みを伴わない宮田式2類と呼ばれているもの。第41図2は、「O脚」状の脚台をもつ小型の鉢と思われる土器で、台底部の口径は約6cm。脚部と台底部の間は空洞となっ



第44図 第1号住居址の推定範囲内出土土器(4) 1群・2群

ている。色調は黄橙。脚の股や膝、足首にあたるところには微隆起線文が左右前後対称に施されており、宮田式と関係が深い上器と考えられる。

第44図4・5・7は、何条かの微隆起線文を横走させる。7の口唇部には、縄文が施されている。8は、『Z』字状の微隆起線文。9・10は、縦位に微隆起線文を施し、9には、地文として縄文が施されている。

b類（第41図1・3、第44図11～20、図版10の上、図版13の下～14）

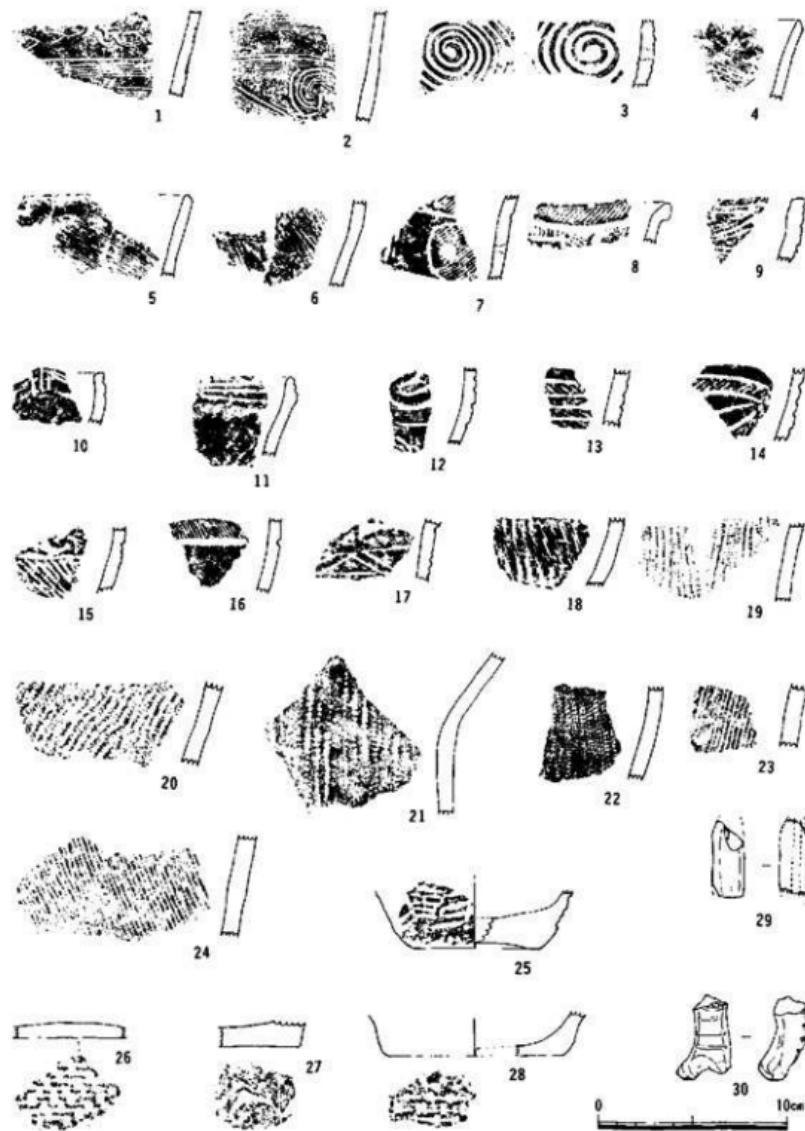
微隆起線文に刻みを伴うもので、宮田式1類と呼ばれているもの。第41図1は、前述のa類の土器（第41図2）と同じ層位すぐ近くから出土した小型の台付鉢である。口径は約11cm。台底部は空洞になっており、底部口径約5.5cmを測る。口唇部には推定4単位の小突起が付けられ、そこから微隆起線が直立に立ち上がる部分を重下する。この微隆起線区画内には、2条1単位の沈線が2段に施される。台の付け根には刻みのある微隆起線が巡ることから、宮田式1類と関係の深い土器といえる。なお、第41図3は無文の小型台付鉢であるが、第41図1や2と同じ層位すぐ近くから出土していることから、1・2と同時期のものと考えられる。第44図11～20は、ほとんどは横位に刻みのある微隆起線文を施すが、縦方向に延びるもの（18、19）もある。11は、口縁部上端にも刻みのある微隆起線文をもつ。刻みには、細いもの（12、17）や太いもの（13）もあり、施文方向も縦位、斜位と様々である。地文として縄文を施しているもの（11、17～19）もある。14は、刻みではなく、刺突を微隆起線文に施す。宮田式1類より新しいかも知れない。

c類（第44図21～25、図版14の下）

微隆起線文に円形刺穴文を伴うもの。宮田式とすることもできるが、堀之内式として分類した方が良いものもある。いずれも微隆起線文が縦横に交わる付近に円形刺穴文を施す。21と25の円形刺穴文は『8』の字状を示しており、堀之内式に比定できるものである。21と24の微隆起線文には、b類と同じく刻みが施され、24には縦位に太めの沈線が引かれる。23～25は、地文に縄文を施す。

2群（第44図26、第45図1～7、図版14の下～15の上）

後期中葉の加曾利B式に類似する土器群である。この時期、飛驒では加曾利B式土器の影響が強くなるようで、河合村「室屋遺跡」や高山市「垣内遺跡」などで良好な資料が出土している。本遺跡では、この第1号住居址の推定範囲内や包含層（第74・75図）で少し出土した。いずれも小破片で、器形まで把握できるものはほとんどないが、文様から見て加曾利B1式のものが多いと思われる。



第45図 第1号住居址の推定範囲内出土土器(5) 2群～8群

第44図26と第45図1～2は、ほぼ5条を1単位とする条線文を横位に巡らせる。この条線文は、少し太い沈線に区画された中にあって、途中に無文帯をはさみながら、何段かに施文されている。第44図26は、口縁部が外反し、波状口縁の波頂部に台形状の小突起をもつ。口唇部には、斜位に刻みを施す。台形状の小突起は内面に張り出し、上から2点の刺突文を施すが、1点ははずれて斜めから施文したよう見える。色調は暗褐色で、無文部はナデ調整。

第45図1は、1～2条の条線によって入組状に沈線文を施す。この文様は、包含層出土の土器（第74図10）とよく似る。器面にはすすが付着している。注口上器と思われる。2も、注口上器であろう。5条の条線により渦巻文を施す。色調は共に褐色。すすが付着している。

3は、表にも内面にも沈線でていねいな渦巻文を施す。渦巻の中心には穿孔が見られる。内面の渦巻は表の渦巻よりやや大きめである。4～6は、赤褐色の器面全体に細かい条線を斜めに引く。同一個体かも知れない。すすも付着している。7は、磨消繩文。縦位に2列の列点文があり、補修孔らしい穿孔も見られる。

3群（第45図8・10・11、図版15）

後期後葉と思われるもの。8は、波状の口縁部が外反し、狭い有段の肥厚部を作り出している。そこに、繩文を斜位に施す。口縁部下にも繩文を施し、太めの沈線を引く。10は、八日市新保式に類似するもので、波状口縁に沿って横走する2条の沈線が、波頂部で3条の縦位短沈線によって切られた形になっている。11も口縁部が肥厚し、そこに3条の沈線引くが、1群1類（第43図）に含まれる可能性もある。

4群（第45図9・12～18、図版15）

晩期前半と思われるもの。9・14・15・17は、御絆塚式に類似する。14は、磨消繩文で、沈線が集まる中央部分は欠損しているが、ここに干を抱いていた可能性がある。15・17は、三叉文らしい文様をもつ。15の沈線文は入組状で、脇部に繩文を施す。17は、沈線で三角形の文様を施す。色調は暗褐色で、器面は研磨されている。

5群（第45図19～24、図版15の下～16の上）

繩文や条線文を施すもの。19～22は繩文。21は、頸部が強くくびれる。23・24は条線文。

6群（第45図25～28、図版16の上）

25～28は底部。25は、底部からまっすぐ外に開く断面形（第80図A類）で、脇部下半は沈線文が施される。底部はナデ調整で、直徑は推定約7cm。26の綱代压痕は第81図A c類にあたる。27は、葉脈压痕。28の底部断面形態は第80図A類。綱代压痕（底部压痕分類のA b 2類）で、

底部の直径は約9cm。

7 舞（第45図29、図版16の上）

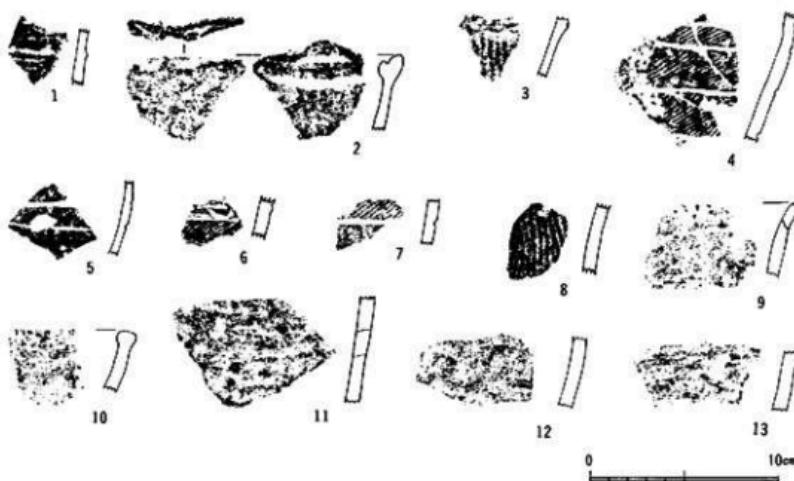
直径1.5~1.7cmの管状の土鏡で、表面を磨って平面状にしたところがある。長軸の中心から少しずれたところに貫通する孔があく。色調は赤褐色である。

8 舞（第45図30、図版16の上）

半面に沈線を引く把手と思われるもので、下部中央に深い指圧痕がある。

〔注〕

- 1) 大江 伸（1965）『飛騨の考古学 I』
- 2) 戸田哲也（1993）『飛騨を中心とした縄文後期前半土器の様相』
『先史考古学研究』第4号
- 3) 増子康眞（1992）『宮田式土器細別（試論）』『どっこいし』第40号
- 4) 高山市教育委員会（1991）『垣内遺跡』
- 5) 同 上（1988）『寺東遺跡、西保木（対岸）遺跡』
- 6) 紅村弘・増子康眞他（1978）『東海先史文化の諸段階（資料編II）』、前述（増子 1992）
但し、戸田哲也氏は「宮田式土器の編年的位置は堀之内2式の範囲を超えない」（前述、戸田 1993）として、増子康眞氏とは異なった見解を示されている。



第46図 第2号住居址出土土器

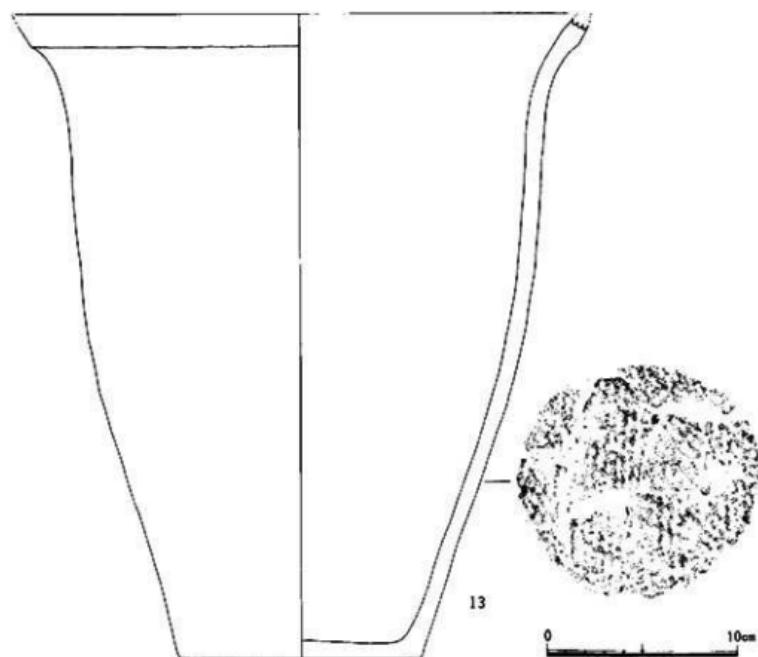
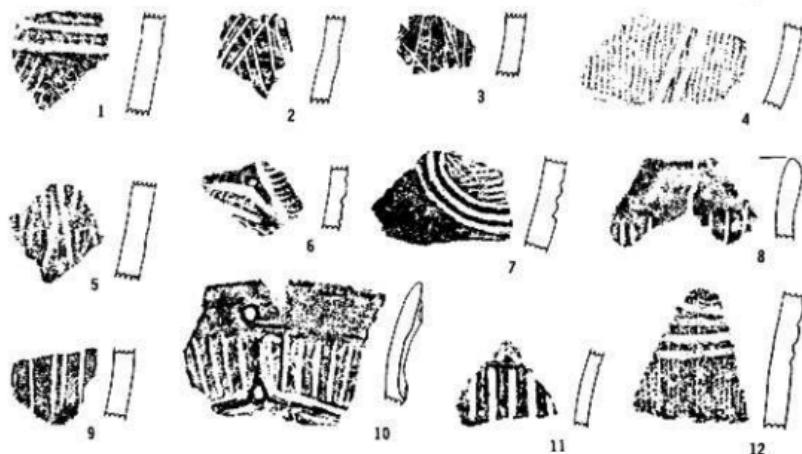
第2号住居址出土の縄文土器（第46図、図版16の下）

床面と思われるところから土に後期前葉の土器が出土したが、混入と思われる土器も含まれていた。1は、微隆起線文をもつ宮田式2類土器。2は、口縁部上端から口唇部へ沈線を互い違いに引く。内面を張り出させ、そこにも短沈線を引く。縄之内式に関係する土器である。3は、頸部に刺突文、胴部に縄文。5～7は磨消縄文。加曾利B式に類似する。9は、口唇部に刻みを施す。無文の11縁部に輪積みの跡が残る。色調は褐灰色。11にも輪積みの跡が残る。

第3号住居址出土の縄文土器（第47図、図版17）

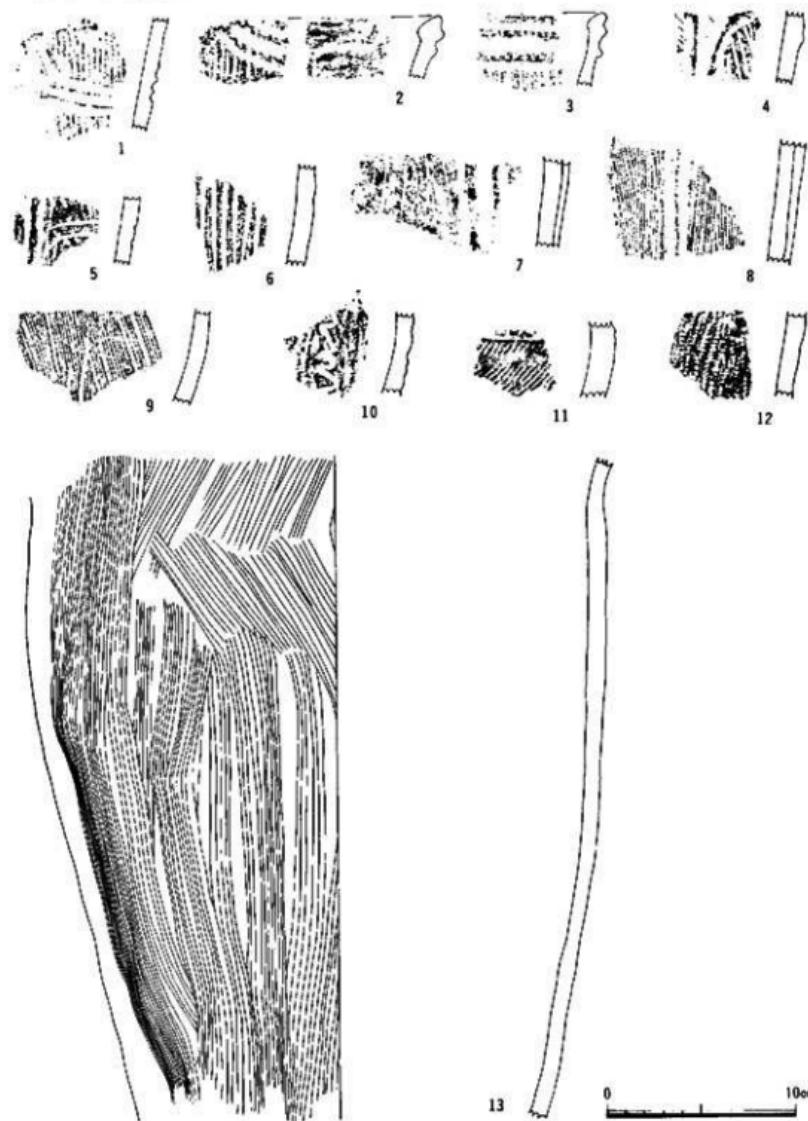
住居址の床面より検出した土器であるが、一部搅乱によって時期の違う土器も混入していた。1は、綾杉文に沈線文を横走させる。4は、縄文に2条の凹線を引く。6は、沈線区画内に貝殻腹縁による押打文を施す。色調は褐灰色。7は、2条の半截竹管文で区画された中に撫糸文を施す。色調は橙色。6・7は、北陸の影響を強く受けている。8・10は、無文の口縁部がやや肥厚し、朝顔形に開く。くびれる頸部に縦位沈線文を引くが、10には両端に円形刺突文を伴う隆起線も施される。色調はにぶい橙色。11も同類の土器である。12は、撫糸文に太い沈線文を横位に引く。色調は褐灰色。8及び10～12は、中期末に比定される土器で、包含層に同類の土器（第65～67図）が多く出土している。

13は、埋甕である。無文の深鉢で、11縁部がやや肥厚して外反する。口径は推定30.5cm。頭



第47図 第3号住居址出土土器

60 第1節 繩文土器



第48図 第4号住居址出土土器

部から胴部にかけては張り気味になり、底部へすぼまる。口唇部は残存しない。意図的に叩いて削ったと思われる。色調は明赤褐色。すすの付着も見られる。底部の断面形態は第80図A類。直径は約12.8cm。底部網代圧痕は第81図A c類になる。

第4号住居址出土の縄文土器（第48図、図版18）

住居址の床面やプランは確認できなかったが、石圓炉の周辺から主に中期後葉と思われる土器が出土した。1は、太めの沈線文による区画の中に撚糸文を施す。色調は赤褐色。2・3は口縁部で、上端を含めて3条の隆起線と縦位平行沈線文を施すが、隆起線には刻みがある。内面は『く』の字状に張り出す。2は、C-17SK3出土の土器（第55図3）に近似する。7・8は、条線文に隆起線。10は、縄文に沈線による波状垂文を施す。沈線の波状垂文を施す土器は、包含層（第68～69図）にもある。11には、交互刺突による波状文も見られる。

13は、埋甕で、条線文を縦位に施すが、一部不規則な施文も見られる。口縁部や底部は欠損、胴部は樽状に張る。色調は褐灰色で、すすの付着も認められる。中期後葉と思われる。



写真8 第3・4号住居址付近の発掘風景

土坑(土壤)・ピット出土の縄文土器

本遺跡では、100を超す土坑(土壤)・ピットが検出されたが、遺物が出土しなかったものも多く、報告は一部だけにとどめる。

B-3 SK 1出土の土器 (第49図1~10、図版19の上)

1は堀之内式に類似する。やや外反する口縁部には、口唇部より2条の隆起線が垂下する。これは、口唇部を跨いで口縁部内面にも延び、袋状につながる。ここから、口縁部に沿って1条の降起線も横走する。色調は暗褐色。2~4は、口縁部が肥厚するもの。2は、器面全体にR Lの繩文を、3は、肥厚部にL Rの繩文を施す。2の肥厚部には1条の沈線文が横走する。よく似た土器が第1号住居址の推定範囲内に1点(第43図1)ある。4は、胴部に宮田式2類に見られる微隆起線文を「T」字状に施す。色調はにぶい黄橙。本遺跡においては、宮田式と思われるものの中に口縁部が肥厚するものはこの上器以外には見当たらない。宮田式上器の標準遺跡となっている萩原町の「宮田遺跡」では、口縁部が肥厚するものは縁帶文土器として宮田式4類に分類されているが、微隆起線文をもつものは見られないようである¹⁰。5も宮田式2類。6は、内側に屈折する狭い口縁部の屈折部に沈線を横走させ、口縁部内面に段を作る。包含層出土の土器(第72図25)に似る。

B-4 SK 2出土の土器 (第49図11~15、図版19の下)

11は、口縁部に沿って横走する沈線の下に幾何学的な沈線文を施す。口唇部は磨滅が激しく、拓本には表現できなかったが、沈線を施した跡がかすかに残っている。堀之内式に関係する土器である。12は、口縁部上端より施される刻みのある降起線区画内に、沈線で渦巻状の文様を施す。13は、内側する波状の口縁部に沿って、刺突を伴う2条の微隆起線文を横走させる。色調は暗褐色。宮田式1類と思われるが、微隆起線文に刻みではなく刺突を施す宮田式土器は、本遺跡ではこの1点だけである。15は、条線文で、胎土に雲母を多く含む。

B-4 SK 3出土の土器 (第49図16)

16は、R Lの繩文を施す。SK 3ではほかに極小破片ばかり12点の上器が出土したが、全体に後期的である。

B-4 SK 4出土の土器 (第49図17~20)

17は、口縁に沿って横走する微隆起線文に刻みを伴う宮田式1類上器。色調はにぶい黄橙。18には、渦巻状の沈線文が施される。



第49図 土坑(土壤)・ビット内出土土器(1)

B-4 SK5出土の土器（第49図21～24、図版19の下）

21・22は、口縁部が肥厚する縁帶文系の上器。21の内縁する口縁部には、2個の円形刺突文をはさんで長梢円文らしい沈線文が施され、中央に押引沈線文が横走する。無文帯をはさんで胴部には縄文が施される。色調は暗褐色。22は、器面全体に縄文を施し、口縁部の太い沈線文の末端に円形刺突文を施す。

B-5 SK9出土の土器（第49図25～29、図版19の下）

25・26は、微隆起線文をもつ宮田式2類土器。27・28は、晩期前葉の御経塚式に類似する。28は、内側に肥厚した口縁部内面に三叉文をもつ。玉は見えないが、玉抱き三叉文に似た文様である。

B-6 SK10出土の土器（第49図30～34）

30は、深い凹線文と細い沈線文をもつ中期と思われる土器。31・33は沈線文。32は微隆起線文。34は、入組状の沈線文を施す晩期の土器である。色調は黒褐色。入組文をもつ晩期中葉の中屋式に類似する土器は、包含層（第75図）にも見られる。

B-7 SK12出土の土器（第50図1～5、図版19の下）

1は、沈線区画内に矢羽状の沈線文を施す。矢羽状沈線の中には施文具の筋が残る。4は、中央の隆起線に向けて右より施文具を押しつけた後、沈線を引いている。

B-7 SK13出土の土器（第50図6～10）

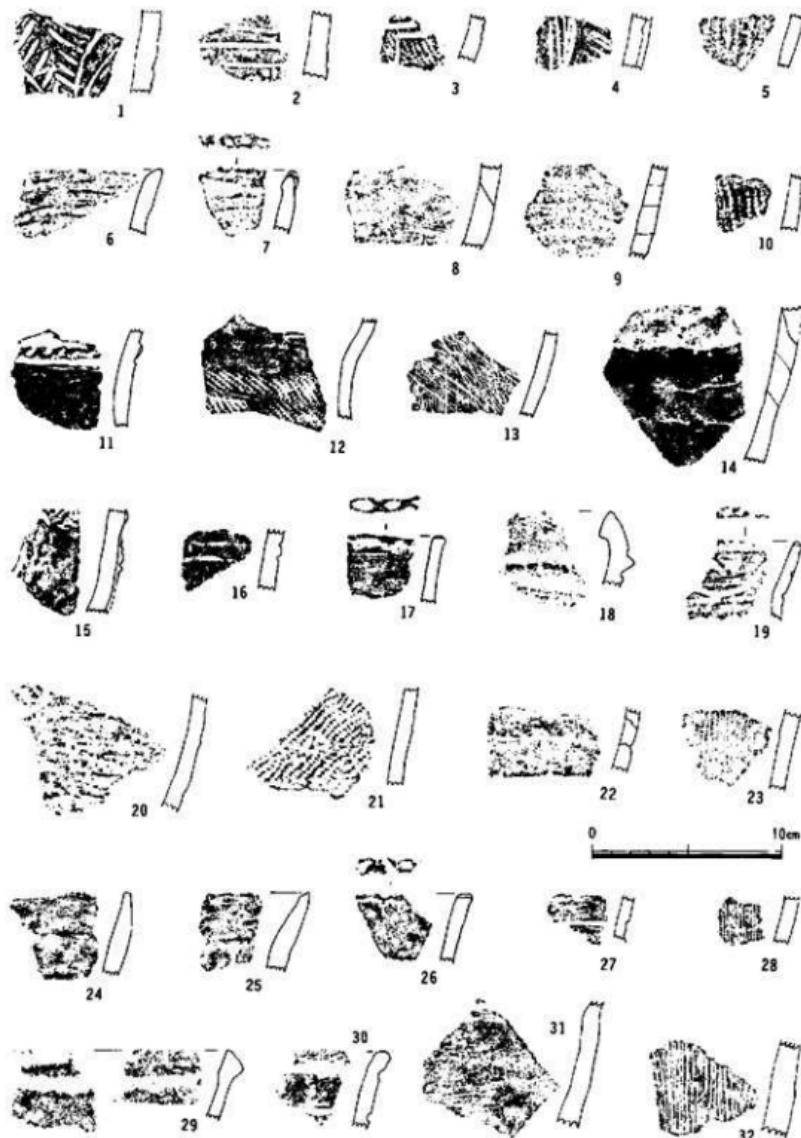
7は、口唇部や小突起上に圧痕を施す。6と共に晩期の土器と思われる。8・9には、土器を製作する際の粘土ひもの輪積みの跡がくっきりと残っている。

B-8 SK14出土の土器（第50図11～14）

11は、微隆起線文に刺突文を施す。微隆起線に接して両側に沈線を引いており、宮田式1類とはやや異なる要素をもつ。13は、条線文が不規則に施文される。色調は赤褐色。胎土に小石を多く含む。14には輪積みの跡だけでなく、粘土ひもの剥離痕も残っている。

B-8 SK15出土の土器（第50図15～17）

15は、刻みを伴う微隆起線文をもつ宮田式1類土器。17の口唇部には指頭圧痕が施されている。晩期の土器と思われる。



第50図 土坑(土壤)・ピット内出土土器(2)

B-8 SK16出土の土器（第50図18～23）

18は、内彎する口縁部内面が肥厚し、段をもつ。口縁部には沈線をはさんで隆起線が横走する。19は、口縁部が屈折外反する器形で、口唇部に刻みを施す。口縁部には入組状の沈線文が見られる。晩期中葉の中屋式に類似する。22には、粘土ひもを輪積みした跡が残る。

B-9 SK17出土の土器（第50図24～28）

24～27は、晩期中葉の中屋式に類似する。24は黒褐色。25・27は、頭部が強くくびれる。26の口唇部には刻みが交互に施される。

B-9 SK18出土の土器（第50図29～32）

29は、口縁部が肥厚し、内面にもゆるやかな段を作る。30は、縄文を施した口縁部が外反し、口縁部直下および胴部に深い沈線を引く。

B-14 SK19出土の土器（第51図1～5）

1は、ねじり棒と呼ばれる把手。2本の粘土ひもをそろえてねじったもので、飛驥では中期から後期の土器によく付けられる。このねじり棒把手は、本遺跡の包含層から出土した2点（第78図15・16）と比べるとねじりが弱いのが特徴である。2は、内彎する口縁部にクランク状の沈線文を施す。色調は明赤褐色。気屋式に類似する上器である。

B-14 SK20出土の土器（第51図6～7）

6・7は、共に微隆起線文をもつ宮田式2類土器。7の微隆起線文は渦巻状を呈する。

B-16 SK21出土の土器（第51図8～16、図版19の下）

8、9は、波状の口縁部が逆『く』の字状に屈折し、『く』の字上半部に文様帶をもつ土器である。これは「南垣内型鉢」¹²⁾とも呼ばれる独特の器形をもつ土器で、堀之内式に比定できるとされている。本遺跡では、この2点のほかにC-7 SK1で1点（第52図3）、包含層で11点（第70図9、第73図29～31、第74図1～7）出土した。8は、『く』の字上半に刺突を伴う隆起線区画をもち、中に4条の沈線を引くが、両端の2条は弧状につながる。『く』の字下半には微隆起線文が横走する。宮田式2類と関係の深い土器といえる。包含層にも2点だけ（第74図1・2）ほぼ同じ文様構成のものがある。9は、『く』の字上半、下半共に同じ原体で縄文を施す。

10は、微隆起線に刻みを伴う宮田式1類土器で、地文に縄文を施す。11は、内彎する口縁部と口唇部に細かな縄文を施す。15・16は同一個体。口縁部から胴部にかけて沈線文を横走させ



第51図 土坑(土壤)・ビット内出土土器(3)

る。沈線文はかなり規則的に引かれており、間隔の広い沈線間には竹管を器面に垂直に押しあてた円形の刺突文をほぼ等間隔に施す。また、口縁部内面には2条の隆起線文を横走させている。14も同じ仲間の土器と思われる。14~16は暗褐色である。

B-11 P15出土の土器（第51図17~20）

17・18は条線文。17の口唇部は内面にやや張り出し、中央に沈線を引く。19は、口縁部に羽状繩文を施す。上半はL R、下半はR Lの繩文で、上下で異なる原体を用いているのが特徴である。羽状繩文をもつ土器は、本遺跡では包含層にも2点出土（第75図4・5）しているが、やはり上下で異なる原体を用いている。後期で羽状繩文をもつ土器は、北陸では酒見式（井口I式）に位置付けられ、加曾利B2式に併行するとされている。

20は、御経塚式に類似する。波状口縁に沿って横走する4~5条の沈線が上下に分かれて三叉文を作り出している。左右が破損していて確認できないが、玉抱き三叉文になると思われる。玉抱き三叉文をもつ土器は、包含層でも3点（第75図22~24）出土している。

B-12 P22出土の土器（第51図21~23）

21は、縦横の微隆起線が交わる付近に円形刺突文を施す。堀之内式に類似する土器で、円形刺突文は2列平行して『8』の字状を呈する。22は、口縁部に3条の微隆起線文を施す宮田式2類土器。口唇部には繩文を施す。

B-12 P23出土の土器（第51図24）

24は、肥厚した口縁部（上端が欠損している）に沈線で渦巻文を施す。色調は黄橙。本遺跡の中で肥厚口縁部に沈線で渦巻文を施す土器は、第1号住居址の推定範囲内出土の土器の中（第42図1~5）にも見られるが、24は次の点で異なる。

- ・口縁部と頸部の間に段をもたない。
- ・口縁部の渦巻文が頸部の文様とつながっている。

B-12 P24出土の土器（第51図25~28）

27は、底部よりほぼ垂直に立ち上がり、その上で外に聞く断面形態（第80図C類）をもつ。底部の網代圧痕は第81図A b類である。28も、底部の断面形態は27と同じ第80図C類で、底部の網代圧痕は第81図A c類となる。

B-14 P25出土の土器（第51図29～30、第52図1、図版20の上）

第51図29は、綾杉文を施す。埋甕（第52図1）と同一個体と思われる。30は沈線文。

第52図1は、伏せた状態で検出された遺構外の埋甕で、底部と後ろ半分を欠く。中期後葉の曾利式に類似する。色調は、椎、褐色、黒褐色が入り混じる。胴部が張り、口縁部が内側する器形で、口縁部内面は断面三角形状に張り出す。口径は推定31cm。文様は規則的でないに施されている。口縁部の上半はほとんど無文だが、下半との境目を巡る沈線文が所々に三角形の山を作る。山は6単位で口縁部を1周するものと推定される。

口縁部下半には3条の隆起線が巡り、1条目と2条目の間には逆『J』字状の渦巻文が施される。この渦巻文の位置は、前述した三角形の山の直下にあたる。また別の見方をすれば、渦巻文は、隆起線による括弧状区画の中央と区画外の中央にも位置するように施されているともいえる。括弧状区画は推定3単位で口縁部を1周する。渦巻文と渦巻文の間は、上下の両端に連続刺突文が、中央には交互刺突による波状文が描かれている。隆起線の2条目と3条目の間には、縦位に短沈線が施される。胴部には、推定6単位で胴部を1周する2条の隆起線が垂下するが、上半部には隆起線による縦の括弧状区画が施される。三角形の山と渦巻文、2条の垂下隆起線は縦に一直線になるように配置されている。

また、口縁部には、割れ目の両側に補修孔が残る。補修孔と補修孔の間の斜め上方向の器面には、何かだったような痕跡がある。補修孔も共に割れ口側が斜め上向きにすり減っている。口縁部内面にも似た様子が見られる。紐のようなものを孔に通し、縛っていたのではないかと思われるが、紐は真横ではなく、口唇部を跨ぐように斜め上方向に縛ってあったのではないかと思われる。また、向かって右側の補修孔の裏側（口縁部の内面）には、すぐ下に未貫通の穴が残る。補修孔が未貫通の穴の一部を壊していることから、この穴を最初にあけようとしたのだが、位置が下すぎることに気づき、改めて新しい穴をあけたと思われる。未貫通の穴は、底面の直径約4mm、高さ約3mmの円錐状になっている。石錐のような工具を用いたのであろうと想像できる。少なくとも、未貫通の穴については、口縁部の内面からあけ始めたことがわかるが、2つの補修孔についてはどちら側からあけ始めたのかを断定するのはむずかしい。ただ、最終的には両側から調整を加えていることは確かで、次の資料が根拠となる。

	外側の直径	中央部の直径	内側の直径
(向かって左の補修孔)	約 7 mm	約 4 mm	約 6 mm
(向かって右の補修孔)	約 7 mm	約 4 mm	約 5 mm

B-17 P44出土の土器（第51図31）

把手と思われる。4面の内、1面には1条、1面には2条の深い沈線を引くが、隣接する他の2面は無文である。注口土器のブリッジの可能性もある。色調は赤褐色。



第52図 土坑(土塚)・ピット内出土土器(4)

C-7 SK 1 出土の土器 (第52図2~4)

2~4は沈線文。3は、口縁部が逆『く』の字状に屈折し、『く』の字上半部に文様帶をもつもの。『く』の字上半部には赤彩が認められ、平線の口縁端部近くには2条の沈線が横走する。『く』の字下半部は欠損していて、文様などはわからない。同様の器形をもつ土器は、このほかに、前述のB-16SK21で2点 (第51図8・9)、包含層で11点 (第70図9、第73図29~31、第74図1~7) 出土している。

C-7 SK 2 出土の土器 (第52図5~11、図版20の下)

5は、半截竹管によると思われる半隆起線の下に、恐らくは同じ原体を用いての連続爪形文を2段に施している。6は中期の上器で、ねじり棒把手を横した太い降起線をもつ。また、沈線で渦巻状の文様を描くが、渦巻の中心は入組状になる。このような手法は、第1号住居址の推定範囲内出土の土器 (第42図2、第43図27) などにも見られる。ただ、6の場合、別の見方をすれば、2条1単位の降起線で渦巻を描いているように見える。7は、微隆起線文を狭い間隔で縦位に施す。右方には、繩文も見える。宮田式とは異なる。

8は、口縁部が『く』の字状に外反し、口縁部に指圧によると思われる压痕を施す。また、器面には輪積みの跡も残る。晩期中葉の中厚式に類似する土器である。9も、胎土や色調から見て8と同時期のものと思われる。10は口縁部が肥厚し、朝顔形に開く中期末の土器。11はゆるくくびれる頸部に回線文を施す。

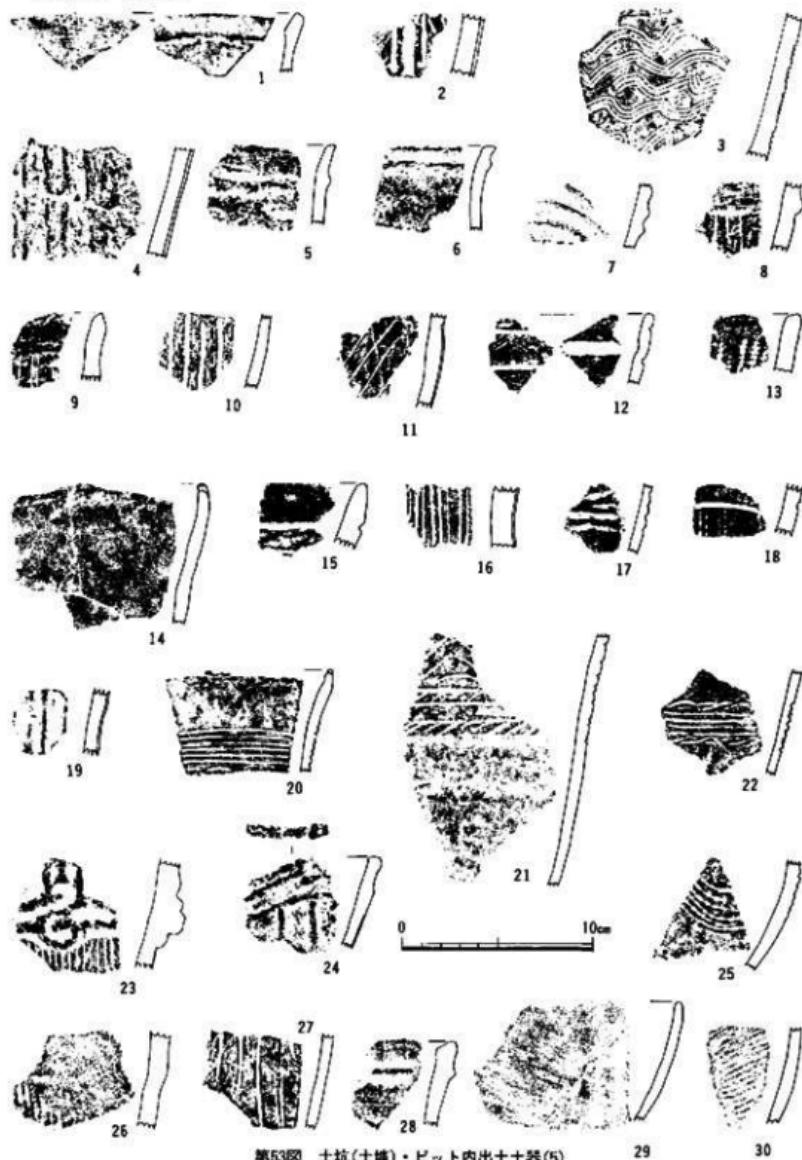
C-7 SK 3 出土の土器 (第52図12~16、第53図1~3、図版20の下)

第52図14は、波状の口縁部の降起線に刻みを施す。すすの付着がひどい。宮田式1類に含まれるが、やや後出的な感じを受ける。15は、竹管文を口縁部に沿って連続して施す。その下には沈線文を横走させるが、2条を端で弧状につないでいる。

第53図1は、口縁部内面が張り出して段をもつ。内面がていねいに磨かれている。晩期の土器と思われる。2は、2条の降起線の両側に綾杉文を施す中期の土器。3は、櫛状の工具によって3条の沈線による波状文が描かれる。色調は褐色。

C-8 SK 1 出土の土器 (第53図4~13、図版20の下)

4~7は、微隆起線文をもつ宮田式2類土器。5・6は、外反する口縁部の上端が外に張り出し、微隆起線状になる。このような土器は、包含層出土の土器にも4点 (第70図6~8・10) ある。10は、縦位にやや太めの平行沈線文を施す。施文間隔は狭いものの、包含層出土の土器 (第67図8) と器厚や沈線の様子が似る。11は、中期後葉の葉脈状文。12は、沈線口内に細かい繩文を施す。内面には凹線を引く。



第53図 土坑(土塚)・ピット内出土土器(5)

C-10S K 1 出土の土器（第53図14～18）

14は、無文の口縁部が内彎し、頸部がくびれる。口唇部には小突起をもつ。器面はよく研磨されている。

C-15SK1出土の土器（第53図19~22、図版21の上）

19は、微隆起線文をもつ宮田式2類土器。20~22は、加曾利B式に類似する。20は、無文の口縁部下に6条の沈線文を横走させ、下に22のように沈線文を入組文風に施しているようである。口唇部には2点の刺突文を施す小突起をもつ。口縁内面には沈線を引く。21は、器面に細かい繩文を施し、沈線で文様を描く。22は、4条の沈線文をはさんで人組状に沈線文を施す。いずれも器厚が薄く、焼成の良い上器である。

C-15SK3出土の土器（第53図23～28、図版21の上）

23は、縦3条、横2条の隆起線の交点付近に隆起線で渦巻文を立体的に描く。24は、微隆起線文をもつ宮田式2類土器。波状U線に沿って横走するU線上端の微隆起線は、U唇部上から垂下する微隆起線につながる。本遺跡で、宮田式として分類した土器の中に、U唇部上から微隆起線を垂下させるものは他に見当たらない。下の微隆起線は「T」字状になる。色調は黄緑。25は、同心円状に押印沈線文を施す。同一個体と思われるものが包含層からも出土(第76図18)しているが、時期はよくわからない。26は、U縁部が肥厚するもの。28は、表面にも内面にも隆起線をもつ。包含層出土の土器(第73図5・6)に似る。

C-15SK4 出土の土器 (第53図29~30)

29は、薄手の無文土器。器面はよく研磨されている。

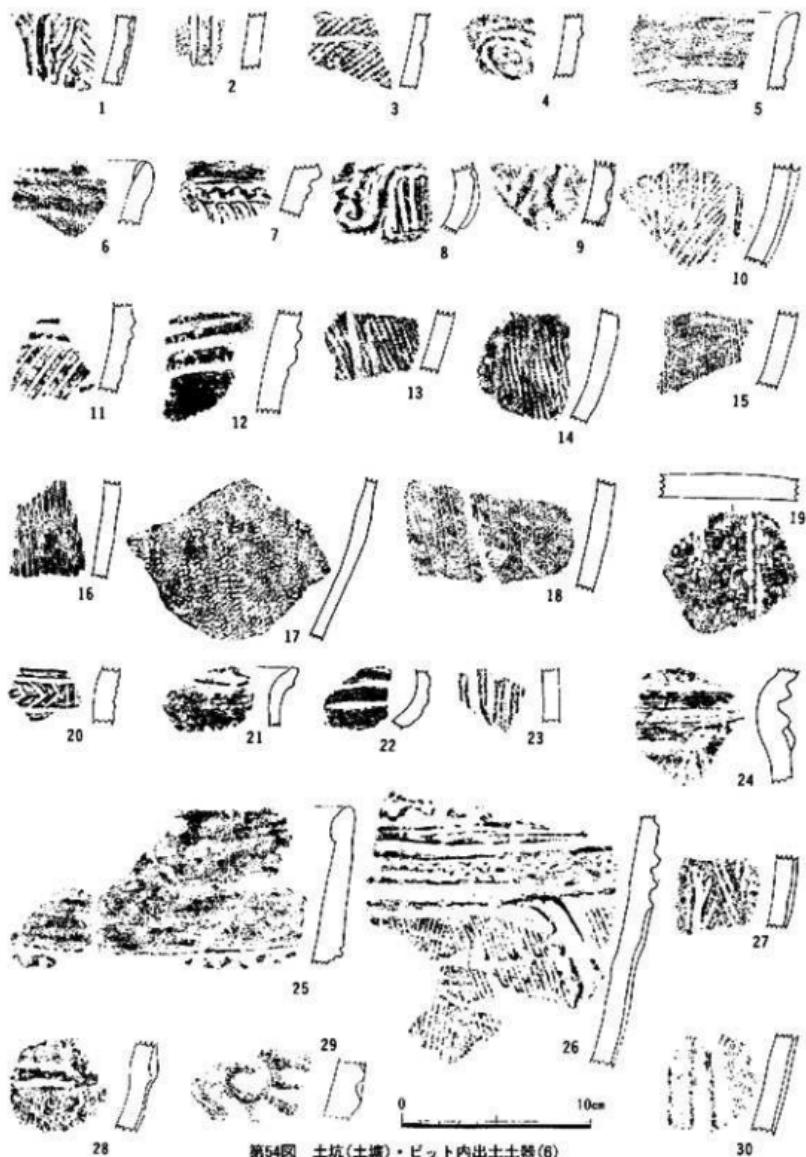
D-22SK1出土の土器（第54図1～5）

石皿を含む配石遺構の下にあった土坑（土壙）から出土した土器である。1は、降起線の両側に矢羽状沈線文をもつ中期後葉の土器。2は、縦位にやや太めの平行沈線文を施す。3は網文に沈線文。5は、無名の口縁部が外反する。器形は、本遺跡の中期末の土器に似る。

C-17SK 1 出土の土器（第54図6～19、図版21の下）

6は、肥厚した口縁部下半より条線文を施し、口縁内面には瘤状の突起をもつ。7～10は、中期後葉の普利式土器。7は、交互刺突による波状文をもつ。8は、内側する口縁部に隆起線で渦巻文を施す。8・9の隆起線は、2条1単位を基本とする。10は絞杉文を施す。13・14は、繩文地に四線文を引く。19の底部は網代土痕（第81図A b 1類）である。

74 第1節 繪文土器



第54図 土坑(土塚)・ピット内出土土器(6)

C-17SK2出土の土器（第54図20～23、図版21の下）

20は、くびれる頸部の平行沈線間に矢羽状沈線文を施すが、この矢羽状沈線文は2条の縦位短沈線で区切られる。21も、頸部が強くくびれる。22は、内側する口縁部に沈線を引く。色調は浅黄色。器面は研磨されている。

C-17SK3出土の土器（第54図24～30、第55図1～5、図版21）

第54図24は、頸部がくびれ、口縁部が外反する器形で、太い隆起線を施す。25は、口縁部内面が張り出して段をもつ。無文の口縁部下には、交互刺突による波状文を施す。26も、隆起線の間に交互刺突による波状文を、胴部下半に2条1単位の隆起線と綾杉文を施す。27・28・30も隆起線に綾杉文。

第54図29と第55図1は、隆起線で渦巻文を施す。2と5は、縄文地に凹線文を引く。3は、口縁部の内面が『く』の字状に張り出す。口縁部には、上端も含めて3条の隆起線を横走させ、割みを施す。第4号住居址出土の土器（第48図2）に近似する。4も同じ仲間と思われる。いずれも中期後葉の土器である。

C-18SK1出土の土器（第55図6～12、図版21の上、図版22の1：）

6・7は、頸部がくびれ、口縁部が外反する器形で、内面が少し張り出して段を作る。口縁部には刺みを伴う隆起線で区画を作り、縦位に平行沈線を引く。7の胴部には、縄文地に凹線で『U』字状の弧文を連続して施文する。9は沈線文。11・12の底部断面形態は第80図C類。網代圧痕は共に第81図A-a1類である。11の底部直径は約8.5cm。胴部には縄文が施される。12の底部直径は約12cm。胴部は無文である。

C-18SK2出土の土器（第55図13～17、図版22の上）

16は、微隆起線文をもつ宮田式2類土器。17は、くびれる頸部に沈線文を施す。包含層出土の土器（第73図13）に似る。

C-18SK3出土の土器（第55図18～20）

18は、外反する波状の口縁部に2条の微隆起線を施す宮田式2類土器。20は、無文で波状になる口縁部の波頂部付近を内面に剥く押し込んでいる。色調は暗褐色。晩期の土器である。

C-18SK4出土の土器（第55図21～22、図版22の上）

21は、2条の隆起線文に条線文。22は綾杉文を施す。中期後葉の土器である。

C-18SK5出土の土器（第55図23～24）

23は、ねじり棒的な粘土ひもを張り付けて太い隆起線としている。斜位沈線文を区画内にもつ隆起線と外側の隆起線の間には押引沈線文が施される。24は、口縁部内面が『く』の字状に張り出す。口縁部には継位に沈線文が引かれる中期後葉の土器である。

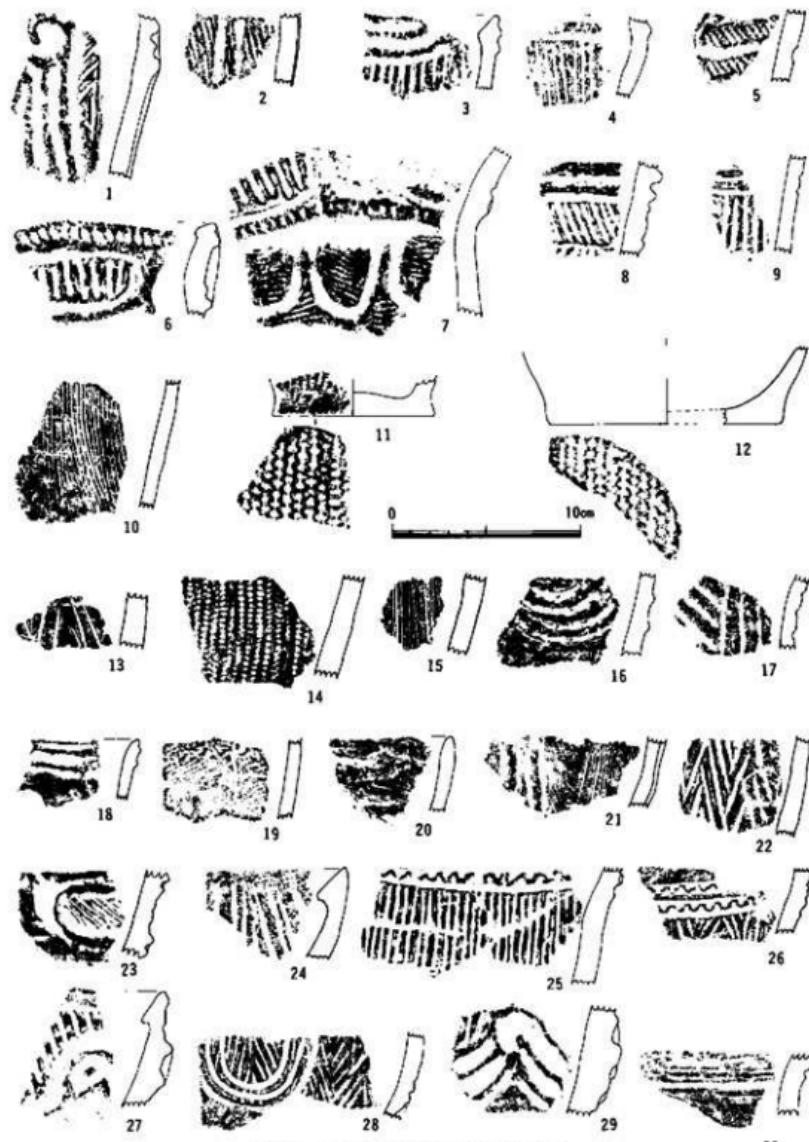
C-19SK1出土の土器（第55図25～30、第56図1～11、図版22、図版23の上）

第55図25・26は、交互刺突による波状文を施す。27は、口縁部が内聳し、内面が張り出して段を作る。2条1単位と思われる隆起線で渦巻状の文様を描き、区画内には平行沈線文が施される。28は、綾杉文に3条の沈線によって『U』字状の弧文が施される。29は、3条1単位の降起線が渦巻状の文様を描く。

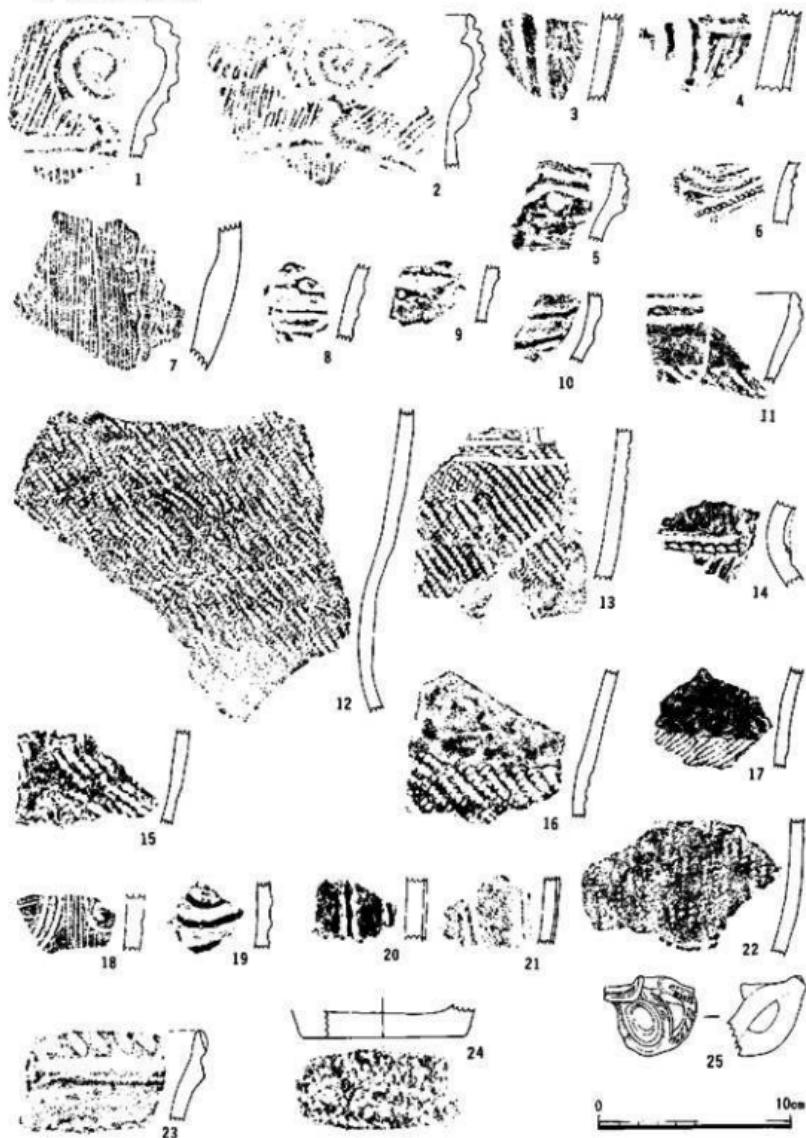
第56図1・2は同一個体。頸部でくびれ、口縁部が内聳する器形で、口縁部内面に隆起線を横走させる。頸部の横走する隆起線によって、口縁部上端から施される斜位沈線文と胸部に向かって施される継位沈線文を区画する。また、口縁部の隆起線による渦巻文は、垂下して頸部の横位降起線につながる。色調は赤褐色。5は、内聳する波状の口縁部を肥厚させている。口縁部には沈線文と大きめの円形刺突文を施す。気屋式の影響が感じられる土器である。6は、降起線に刺突文を細かく施す。7は、一部の条線文を波状に描く。8～10は、微降起線文をもつ宮田式2類。9は、掘之内式とすべきかも知れない。11は、内聳する口縁部に2条の太めの沈線文を施す。いずれも中期後葉から後期前葉にかけての土器である。

C-19SK2出土の土器（第56図12～25、図版23の下～24の上）

12は、R Lの網文を施す粗製の深鉢。全面にすすの付着が見られる。13もR Lの網文。沈線文も施す。色調は赤褐色。14は、強くくびれる頸部に刺突を伴う降起線と斜位沈線文を施す。頸部がこれだけくびれる土器は、本遺跡では他に見当たらない。17の色調は黒色。薄手で焼成も良い。18は、沈線で渦巻文を施す。19～21は、微降起線文をもつ宮田式2類。但し、19の微降起線文は断面三角形ではなく、平面状になっている点でやや異質な感じを受ける。23は、内聳する口縁部を肥厚させる。口縁部上端から口唇部にかけて斜位に太めの刺みを施し、中央部に沈線文を横走させる。沈線文の左端には、第56図5と同じような大きめの円形刺突文がある。気屋式に類似する土器である。24は、底部からまっすぐ外に開く断面形（第80図A類）で、底部の直径は推定8.6cm。網代圧痕は、第81図A b1類である。25は、波状の口縁部に付けられた把手。波頂部と胸部をつなぐ橋状の部分は右方向に押され、沈線で円文が描かれる。口縁部から把手に至る隆起線には刻みが施される。色調は赤褐色。口縁部内面が『く』の字状に張り出す。中期後葉のものと思われる。



第55図 土坑(土塙)・ピット内出土土器(7)



第56図 土坑(土壤)・ビット内出土土器(8)

G-16 P30出土の土器（第57図1）

1は、上部を欠いた小型の深鉢で、底部の直径は約8.5cm。底部より少し上まで垂直に立ち上がりながら、その上で外に開く断面形態(第80図C類)で、網代正痕は第81図A b1類となる。器面には繩文が施され、胴部から底部にかけて2条1単位の沈線を引く。鋸歯状になるこの沈線は、4単位で胴部を1周する。色調は赤褐色。中期後葉の土器と思われる。

C-16P32出土の土器 (3357図2~4)

4は、ややくびれる無文の頸部に三角形刺突文を連続して施す氣屋式土器。左方向への施文で、三角形の形や大きさ、施文間隔などは包含層山土の土器(第72図2)に似る。

C-16 P57出土の土器（第57図5、図版24の下）

5は、横位沈線文の下に細文を施す。

C-16 P.3 出土の土器（第57図6～8、図版21の下）

6は、波状で肥厚した口縁部が内彎し、頸部との間に段を作る。波状口縁の波頭部には3条の上向き弧線を描く。左右には2条の沈線文が横走し、間に円形刺突文を連続させる。頸部には、沈線で幾何学的な文様を施す。7も、波状の口縁部が内彎し、肥厚して頸部との間に段を作る。口縁部には、上端から繩文、沈線文、円形刺突文を順に施す。共に気呂式に類似する土器である。8は、狭い口縁部が肥厚し、そこに3条の沈線文が横走する縁帶文系の土器である。

C-17P 7 出土の土器（第57図9～10、図版24の下）

9・10は、共に微略記綴文をもつ宮田式2類土器。9にはすすぐ付着している。

C-17P 9 出土の土器（第57図11）

11も、微降起報文をもつ専用式 2 類土石。

C-17P12出土の土器（第57図12～13）

12は条線文。13は、細い平行波線文を施す。中期後蔭と思われる。

C-17 P20出土の土器（第57図16～17、図版21の下）

16・17は、共に沈綴文。中期後筆と思われる。

C-17 P 38出土の土器（第57図18、図版24の下）

頸部がくびれ、口縁部が内彎する器形で、口縁部内面は『く』の字状に張り出す。器面には、2条1單位の隆起線と条線文が施される。隆起線の交点に渦巻文をもつかも知れない。色調は黒褐色。中期後葉の上器である。

C-17 P 39出土の土器（第57図14・15・19・20）

14は、口縁部に繩文を施す後期の土器。20の底部は網代圧痕（第81図A b1類）である。

C-18 P 2出土の土器（第57図21）

21は、くびれる頸部に隆起線と沈線文を施す中期後葉の土器。

C-18 P 9出土の土器（第57図22～25、図版24の下）

22は、2条の隆起線に綾杉文を施す中期後葉の土器。23は、肥厚する無文の口縁部下から継位平行沈線文を引く中期末の土器で、同類のものが包含層から多く出土（第65～67図）している。24も同時期と思われる。

C-18 P 43出土の土器（第57図26、図版24の下）

26は、後期前葉の土器で、包含層出土の上器（第73図3）と器形や文様構成が似る。頸部上方に幅広隆起線を張り付け、そこに継位短沈線と『』状に穴の深い刺突文を施す。頸部は強くくびれ、沈線区画内に継位沈線文を施す。色調は褐色。

C-19 P 50出土の土器（第57図27～30）

27は、刺突を伴う太い隆起線と沈線文を施す。中期後葉の土器と思われる。28・30は条線文、29は繩文を施す。

[注]

1) 紅村 弘・増子康眞他（1978）『東海先史文化の諸段階（資料編II）』

2) 戸山哲也（1993）「飛驒を中心とした繩文後期前半土器の様相」『先史考古学研究』第4号



第57図 土坑(土塚)・ピット内出土土器(9)

包含層の縄文土器

設定グリットのいずれからも縄文土器が出土した。中でも、B-3~4の第1号住居址上層や、土坑（土壤）・ピットが集中的に検出されたC-16~18での出土が顕著であった。C-16~18の上坑（上塙）・ピット群は後期のものと思われるが、中期の土器の混入も見られた。また、A-19、B-19、C-19では、層位的な確認はできなかったが、主に上層部で後期、下層部で中期の上器が大量に出土した。いずれも遺構は伴わず、特にA-19、B-19は土器捨て場という感じであったが、窪地との確認はできなかった。数メートル離れたところに第3号・第4号住居址があることから、調査対象区外にも相当数の住居址が存在している可能性がある。

発掘面積の狭い割には大量の土器が出土したが、搅乱が多く、遺構の検出は困難で、層位的に把握することも難しかった。そのため、上器の多くを「遺構出土」ではなく、「包含層出土」として報告しなければならないのは残念である。

出土上器は、中期後葉から晩期中葉にまでわたっている。そこで、ここでは主に時期などによって1~12群に分類し、器形や文様等で更に細分することにした。

1群 中期後葉の土器	7群 晩期中葉の土器
2群 中期末の土器	8群 時期が不明の土器
3群 後期前葉の上器	9群 ミニチュア土器
4群 後期中葉の土器	10群 縄文を施した土器
5群 後期後葉の上器	11群 注口上器
6群 晩期前葉の土器	12群 ねじり棒把手

1群 中期後葉の土器（第58~64図、図版25~35）

曾利II~III式もしくは唐草文系を中心、一部北陸系を含む土器群を一括した。ほとんどは、A-19、B-19、C-17~19のグリットから出土したものである。1~VII類に分けて記述する。

I類（第58~62図、図版25~32の上）

曾利II~III式もしくは唐草文系に比定される土器群を一括した。a~c類に分けて記述する。

a類（第58~62図、図版25~29の上、図版31~32の上）

主に、2条1単位の隆起線で渦巻文や区画文を施すもので、区画内に沈線を引いたり、隆起線間に刺突文を施したりして文様を構成するもの。

第58図1は、突起の上面に降起線で左右連続した渦巻文を施す。表面にも4つの渦巻文を施し、降起線区画内には斜位平行沈線文を一部矢羽状に施文する。なお、渦巻文は1条の隆起線で描かれる。交互刺突による波状文も見られる。突起部側面は外反し、頭部との間に把手を付

けていたと思われる痕跡が残る。色調は褐色。

2・3・6は、1条の隆起線による渦巻文をもつて起。2は、大きめの渦巻文の下に沈線で小さな渦巻文を施す。刺突文も多用されており、交互刺突による波状文も見られる。3は、隆起線間に刺突文を密接に施す。6は、渦巻文を4ヶ所にもつて、左2つは連続した隆起線による渦巻文で、右2つは沈線による渦巻文である。但し、右2つは連続しない。

4と5は同一側体。条線文を地文とする。口縁部が外反し、太い沈線を引いて『Y』字状の口唇部を作る。口縁部から胸部にかけて2~3条1単位の隆起線を縦横に配し、胸部上半に隆起線の渦巻文を突起状に張り出させる。隆起線間に刺突文を施すが、一部は短沈線状を呈す。交互刺突による波状文も見られる。色調は黒褐色。7も条線文を地文とし、1条の隆起線で渦巻文を施す。8は、2~3条を1単位とした隆起線によって渦巻文やX画文を施す。区画内には短沈線を引く。右下には交互刺突による波状文を施すが、それを上下にはさむ沈線が延びて人組状の渦巻文を描く。色調は褐色で、一部にすすぐ付音している。隆起線間に刺突文を施すものは、第58図11~12、第61図20に、また、交互刺突による波状文は、第58図9~14にも見られる。10の波状文だけは鋸歯状である。

第58図15や第59図1~2は、2条を1単位とした隆起線でそのまま渦巻文を描く。2~3条の隆起線を1単位として文様を構成しながら、渦巻文だけは1条の隆起線で描く第58図1~5・8などとは異なる。区画内の沈線も渦巻に向かって巻き込まれるように施されている。第59図4の沈線文も同じ施文方法。第59図の1の沈線文は太く、施文間隔が広い。色調はどれも褐色。沈線の施し方は違うが、13~14も1のような大きな目日の渦巻文をもつかも知れない。

第60図2は、1条の太目の隆起線で渦巻文を描く。1や3も同様の隆起線をもつ。1や2は、口唇部が内外に張り出し内轉するが、3の口唇部は挟い。色調はいずれも暗褐色。

第61図18~22は、2~3条の隆起線を施すが、渦巻文を伴うものとはやや異なる。第61図24には隆起線の波状懸垂文が、第62図5には撫糸文が施される。

b類（第60図15~22、図版29の下）

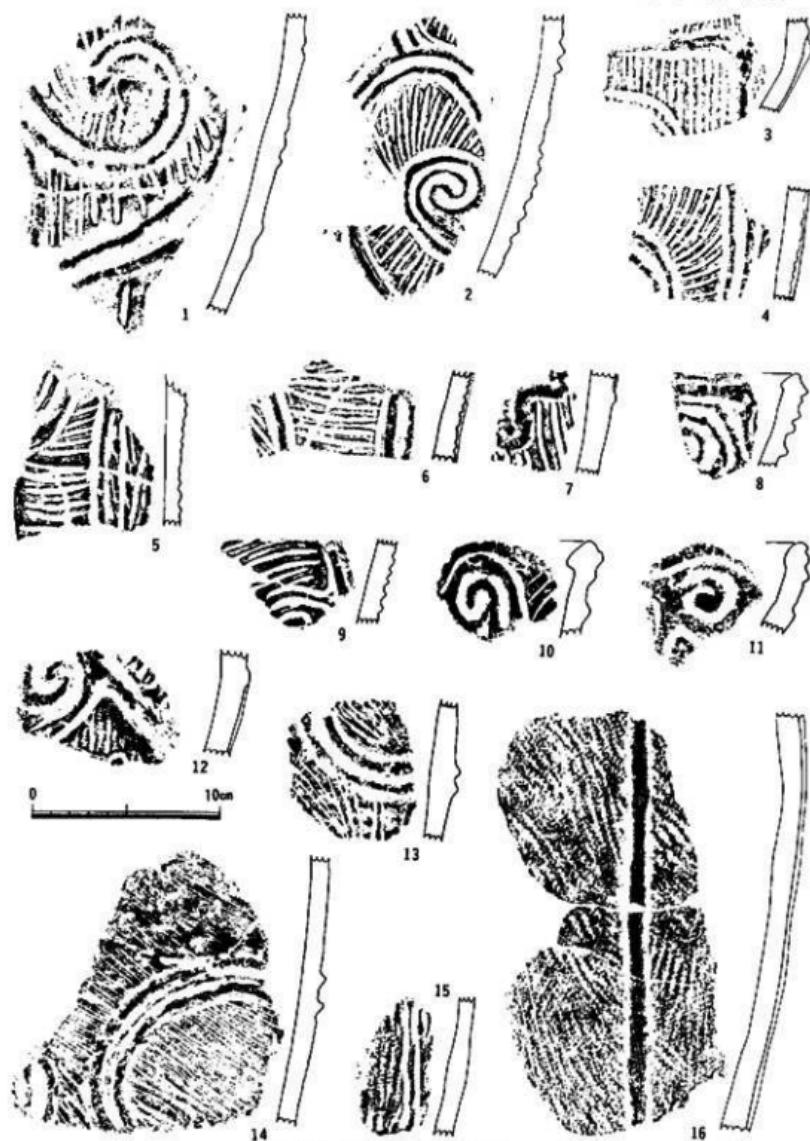
沈線文を矢羽状に施すもの。弧状の隆起線X画内に施すもの（15~17）と、縦位隆起線X画内に施すもの（16~22）、1条の縦位隆起線の両側に施すもの（18~21）がある。19~20も、隆起線を伴うものと思われる。

c類（第61図1~13、図版30）

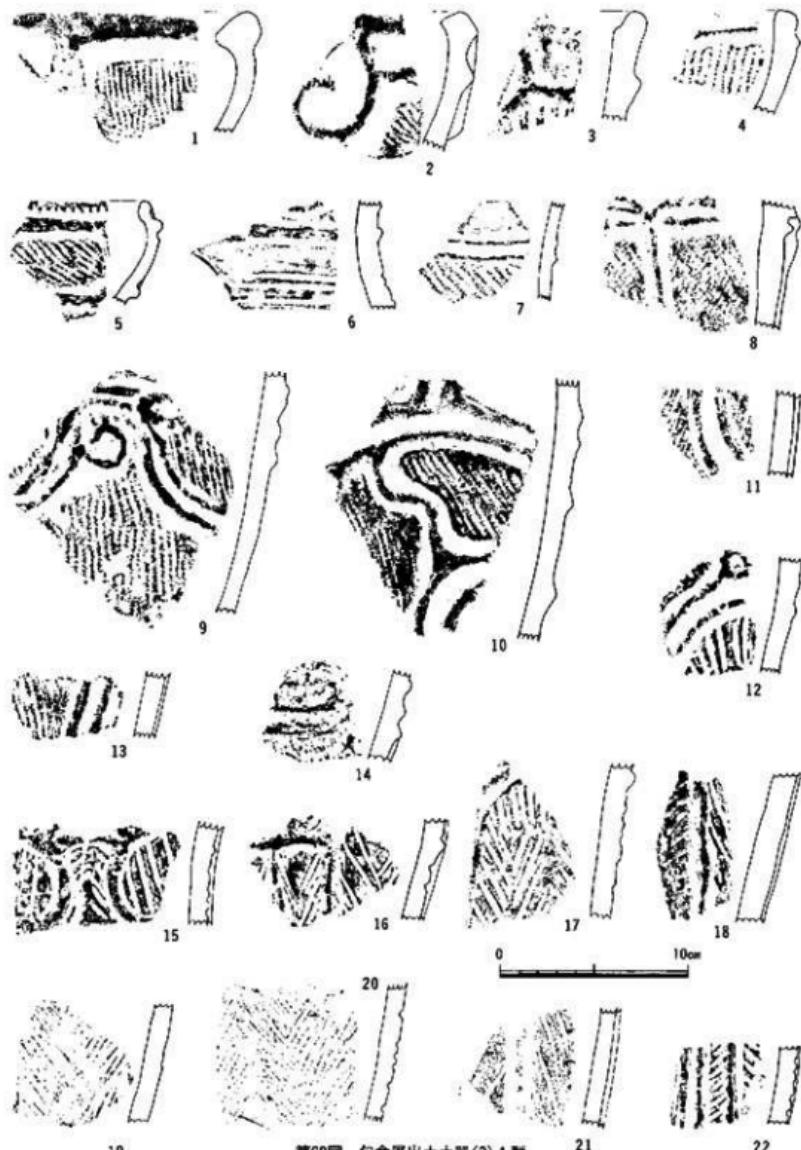
口縁部上端から沈線文を施すもの。沈線文が縦位に施されるもの（2~5~11）、横位に施されるもの（3）、斜位に施されるもの（6~7~12）がある。9は弧状になる。外反する6を除いて、いずれも口縁部が内轉する。口縁部内面は『く』の字状に張り出だが、口縁部上端



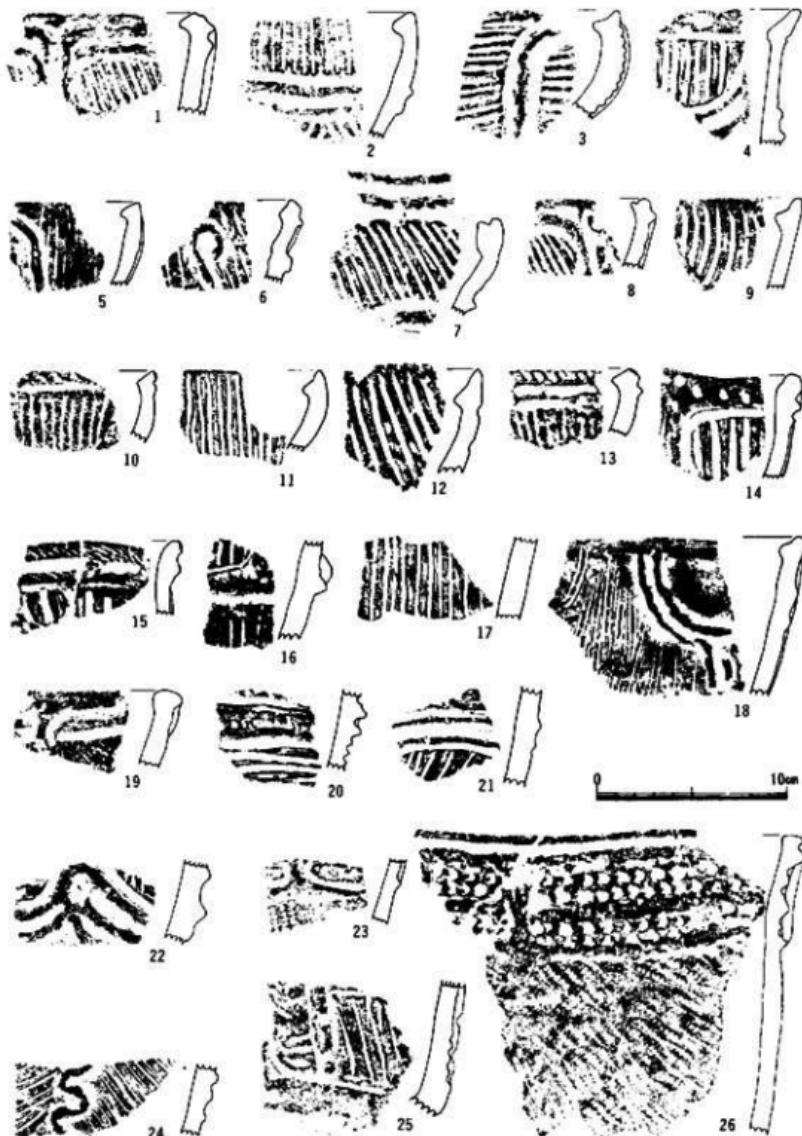
第58圖 包含層出土土器(1) 1群



第59図 包含層出土土器(2) 1群



第60図 包含層出土土器(3) 1群



第61图 包含层出土土器(4) 1群

から張り出すもの（2・3・5）と隆起線を横走させるように途中から張り出すもの（6・9・11・12）、張り出し部上半に深い沈線を引くもの（7）がある。

1・4・8・10・13も、口縁部内面に張り出しをもつ点では似ている。いずれも口縁部上端に近いところから隆起線区画内に沈線を引く。10・13は、口唇部端に刻みが斜めに施される。色調は赤褐色や暗褐色が多い。

II類（第61図26、図版30の下）

ねじり棒把手をもつもの。26は、胴部が張り、口縁部がゆるく外反する。口縁部上半を肥厚させ、中央に太い凹線を引く。頸部にかけて2条の隆起線を横走させ、隆起線間に半月形の刺突文を2段ずつ施す。肥厚部の下と胴部の上の隆起線をねじり棒把手がつなぐ。ねじり棒のねじりはゆるく、器面に張り付いている。胴部には繩文が施される。本遺跡では、このほかにねじり棒だけで3点出土しているが、上器に上から下まで張り付いたものはこの1点だけである。施文部はにぶい褐色で、下部の繩文部は黒褐色である。

III類（第62図1・9、図版31の下～32の上）

リボン状突帯をもつもの。1は、口縁下に1条のリボン状突帯をもつ。口縁部は無文。口縁内面は「く」の字状に張り出す。リボン状突帯の下には繩文が施される。色調は褐色である。V類にも含めたが、9の台付土器の脚部にもリボン状突帯がある。地文は繩文。にぶい褐色を呈する。このリボン状突帯をもつ土器は、飛騨では萩原町の「桜洞遺跡」、小坂町の「南垣内遺跡」、高山市の「寺東遺跡」や「垣内遺跡」などで出土している。

IV類（第62図10～28、図版32の下～33の上）

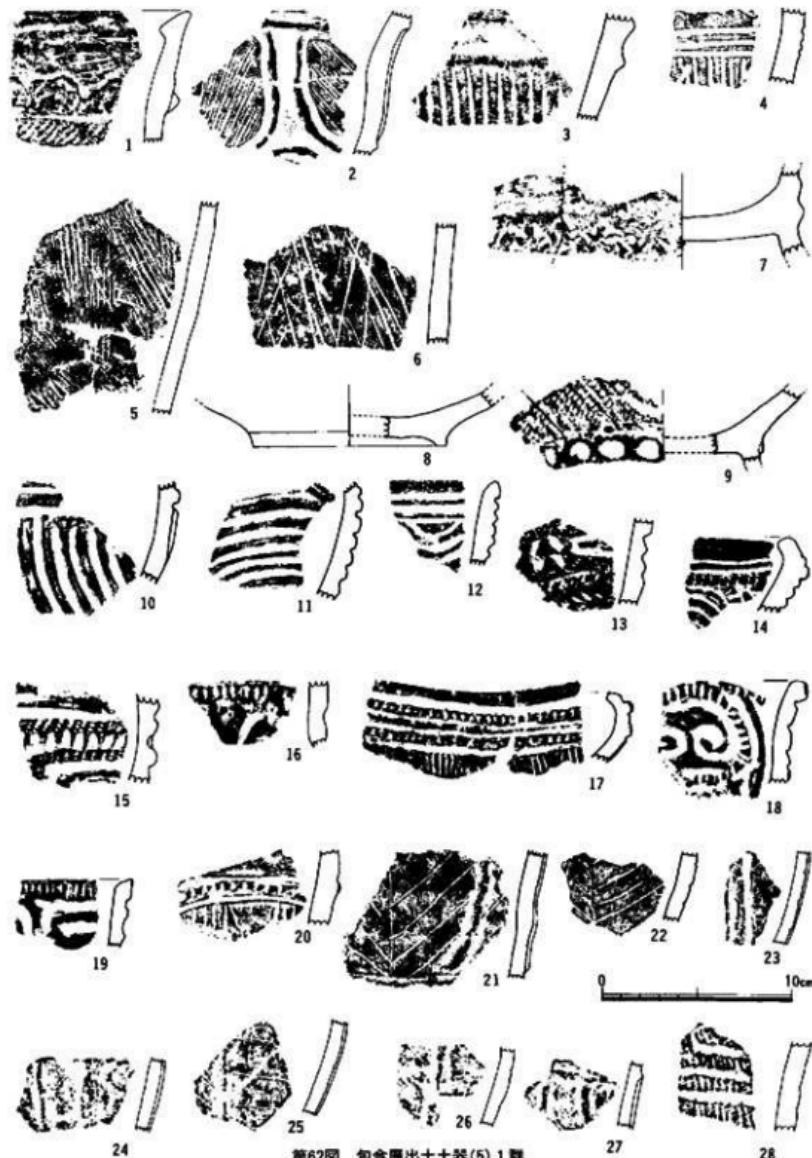
半截竹管文や櫛状具による刺突文、葉脈状文を施すなど北陸の影響を受けていると思われる土器を一括した。中期中葉の可能性のあるものも含まれる。

a類（第62図10～13、図版32の下）

半截竹管文を施すもの。13は、大きめの半截竹管で爪形文を施す。

b類（第62図14～20、図版32の上）

櫛状具による刺突文や篦状具による刻みを施すもの。14は、口縁部が内彎する。隆起線に櫛状具による刺突文を施し、半截竹管文も施す。17も口縁部が内彎する。2条の隆起線に櫛状具による刺突文を施し、胴部は沈線文で施す。18は、外反する口縁部に沈線による渦巻文を施す。渦巻文を取り巻く隆起線には櫛状具による刺突文が施される。15は隆起線に、16は



第62図 包含層出土土器(5) 1群

無文の器面に櫛状具による刺突文が施される。19は、隆起線をもつ口縁部の上端に、莖状具による刻みが縦位に施される。20は、横走する隆起線に箇状具による刻み。

c類（第62図21～27、図版33の上）

葉脈状文をもつもの。23・24・26・27は、21・22と比較して器厚が薄く、葉脈状文も細い。後出的な感じを受ける。

V類（第62図7・9、図版32の上）

台付土器だが、脚部のほとんどは欠損している。7は、脚部上方に「ハ」の字状の沈線文を縦に施す。脚部上部は底面に対して直角に近く、下方で幅が広がるようである。底部内面はナデ調整され、底部から胴部へまっすぐ外に開く断面形態（第80図A類）である。色調は褐灰色。9は、脚部上端にリボン状突帯をもつ。胴部下半には縄文を施す。

VI類（第62図8、図版32の上）

8は、高台付の浅鉢であろう。無文で、色調は黒褐色。

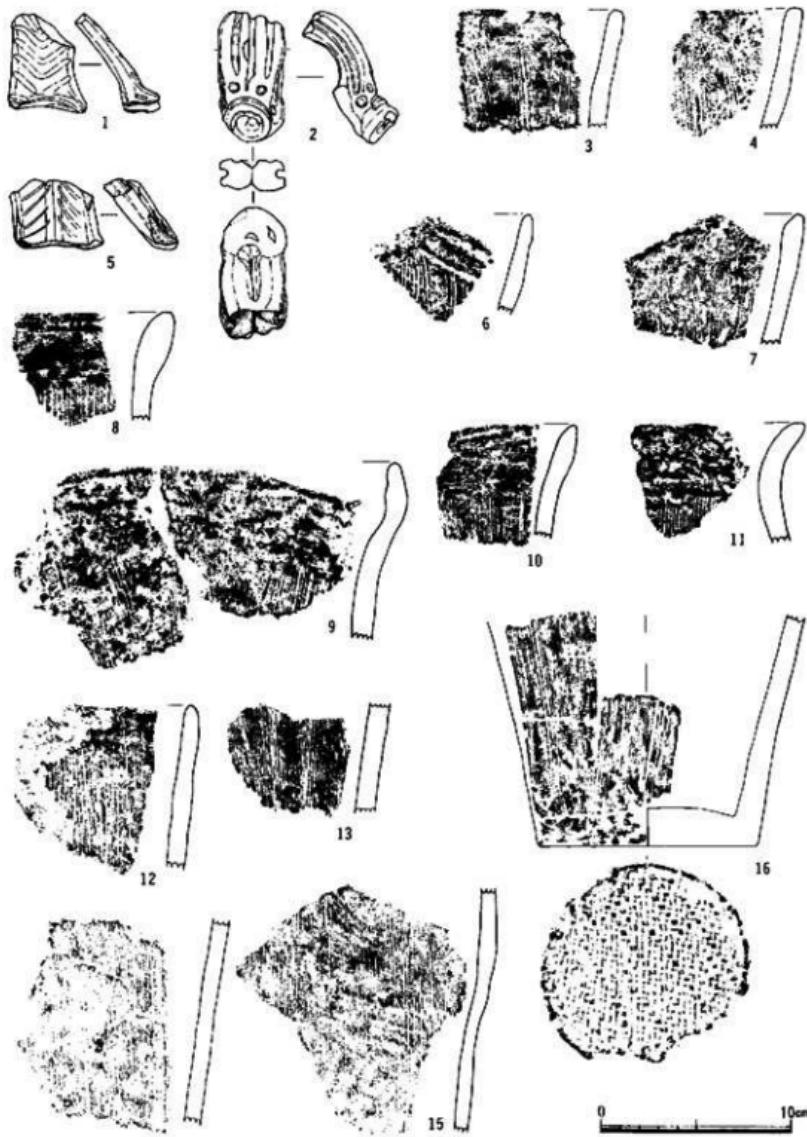
VII類（第63図1・2・5、図版33の下）

釣手土器の釣手部と思われるもの。1・5は、矢羽状の沈線文を施す。1の沈線は太く、5は細い。2も深い沈線文を施し、末端に刺突文を配する。釣手部の付け根部分にも深い刺突文を施す。裏の様子から、2本の粘土ひもをくっつけて釣手部を作っていることがわかる。

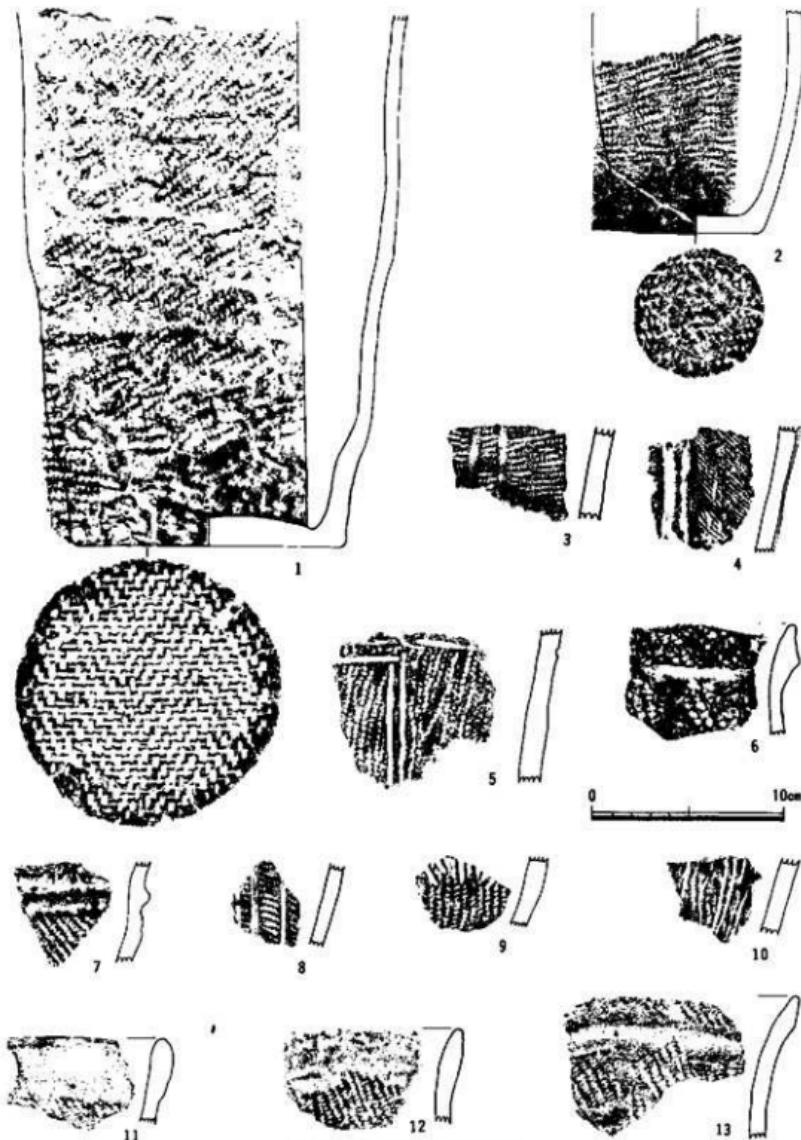
VIII類（第63図3・4・6～16、第64図、図版33の下～35）

中期後葉から中期末と思われる十器で、条線文や縄文を施すものを一括した。第63図の3・4・6～16は条線文。口縁部が内彎するもの（9）もあるが、外反するものがほとんどである。6・7は波状口縁が山形になる。4・12は、口縁部上端から条線文を施すが、3・6～11は口縁部に無文帯をもつ。3・6～10は、口縁部がわずかに肥厚する。16は、胴部から底部にかけて条線文を施し、底部に網代圧痕（第81図A e類）をもつ。第80図10にも掲載した。

第64図1は中期後葉の深鉢。設定グリットC-18のⅢ層の焼上から出土した。全面にL Rの縄文を施す。底部は直径約14cmで、網代圧痕（第81図A c類）をもつ。色調は黄橙。2も中期後葉の小型深鉢。胴部には縄文を施すが、底部付近は無文である。底部の直径は約6.5cm。網代圧痕を施すが、磨滅が激しい。色調は褐色。6・11～13は、口縁部が肥厚する。11・12の口縁部は無文だが、6・13の口縁部は縄文が施され、頸部との間に段をもつ。



第63図 包含層出土土器(6) 1群



第84図 包含層出土土器(7) 1群

2群 中期末の土器（第65～68図、第69図1～11、図版36～43）

本遺跡の分類からすれば中期後葉の一群に含めるべきものだが、共通の要素をもつ中期末の土器が比較的まとまって出土したため、敢えて中期末として分類し、報告することにした。

I類（第65～67図、第68図1～8、図版36～41の上）

北陸の串田新式や前田・岩崎野式の影響を受けつつも在地色の強いものを一括した。I類の主体は、肥厚する口縁部が朝顔形に開く器形をもち、長梢円文や縦位平行沈線文、連弧文を文様構成の主体とする土器群である。器形や文様構成の違いにより、a～c類に分けて記述する。

a類（第65図1～8、図版36の上）

肥厚する口縁部の内面にわずかな段をもち、やや内聾する器形で、口縁部に文様帶があり、胴部に刺突を伴う低い隆起線をもつものを一括した。I類の中で口縁部内面にわずかな段をもち、内聾する器形は他に見られないが、長梢円文や縦位平行沈線文を文様構成の主体にするI類の特徴を備えている。刺突を伴う低い隆起線で区画すること、連弧文をもつものが見当たらぬことなども含め、I類の中ではやや占い要素をもつ。

1・4は、口縁部に1条の長梢円文を横走させ、その下に円形の刺突を伴う低い隆起線で区画されたやや大きめの梢円文を配置する。2は、4のすぐ下につくものと思われる破片で、円形刺突を伴う低い隆起線の下には縦位平行沈線文が施されている。この縦位平行沈線文には、3のようにやや短いものも存在する。円形刺突を伴う低い隆起線で区画された縦位平行沈線文の下には条線文を施すが、5のようにやや大きめの梢円文のすぐ下から条線文を施すと考えられるものもある。6～8は、1・4と同じ口縁部形態をもつが、6では口縁部下にやや大きめの梢円文を配置せず、いきなり縦位平行沈線文を施す。いずれも色調は赤褐色を呈する。

b類（第65図9～18、第66・67図、第68図1～3、図版36の下～41の上）

肥厚する口縁部が朝顔形に開く器形で、口縁部に文様帶をもたないものを一括した。I類の主体となる土器群だが、隆起線をもつものともないものがあり、文様構成にも若干の違いが認められることから、更にb1～b3類に分けて記述する。

b1類（第65図9～12、図版36の下）

頸部のくびれが強く、鏡状具による刻みを伴う低い隆起線をもつことがb1類の特徴である。

9は、口縁部無文帶の下に長梢円文を配し、短沈線を伴う幅広の低い隆起線で区画する。3条の刻みのある低い隆起線を経て縦位平行沈線文が施される。この下には再び刻みのある降起線が施されるが、胴部下半に連弧文をもつかどうかは不明である。長梢円文と縦位平行沈線文

がセットになって施文されることの多い1類の中で、両者がかなり離れて施文されるのは9だけである。なお、9の縦位平行沈線文は1類の中では最も太く、しかも施文具の筋を残す。色調は黄褐色である。10~12は、頸部のくびれ具合が9とほぼ同じなのでb1類に含めたが、縦の隆起線に刻みはなく、10の左下端にわずかに残る横位の隆起線にもやはり刻みは認められない。縦位平行沈線文も細く、後述するb2類につながるものかも知れない。

b 2類（第65図13~18、第66図1・2・8、図版37~38の上）

降起線と沈線で施文するが、降起線に刻みが伴わないもの。第66図1は、後述する第66図の4や7と共に1類を代表する土器である。隆起線を伴うことや施文方法などから、3者の中では一番占い要素をもつ。胴部上半には、縦位平行沈線文と長梢円文が降起線で区画されながら、2段に配置されている。上段と下段では、土に次のような進いが認められる。

- ・上段の縦位平行沈線文は、下段の約半分の長さである。（口縁部無文帯を加えるとほぼ同じ長さになる。）
- ・上段の縦位平行沈線文を区画する縦位の隆起線が下段には見られず、代わりにほぼ同じ位置に矢羽状沈線文が縦位に施される。

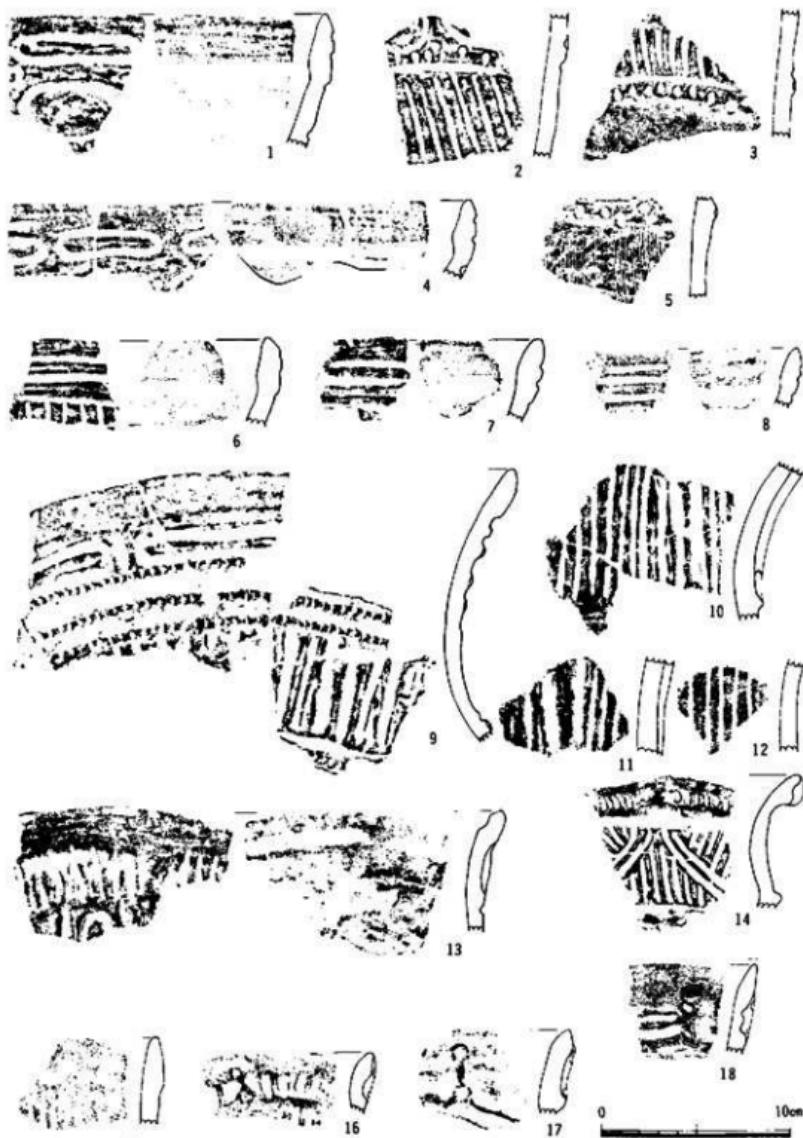
胴部下半は、地文の条線文に3条の連弧文が沈線で施されるが、頂部では内側の1条のみが弧状につながり、他の条は切れている。文様は一つ一つていねいに施され、他の類に比べて力強さが見られる。色調は明赤褐色。胴部にはすすが多く付着している。

第65図13は外反がやや強く、口縁内面に太い1条の沈線を途中で切って横走させている。短い縦位平行沈線文の下に長梢円文は見当たらず、すぐに条線文に連弧文を施す構成になっている。15~18では、短い縦の隆起線の上下端に円形の刺突を施すが、縦位平行沈線文を伴うものと伴わないものとがある。14は外反が強く、肥厚した狭い口縁部に縦位平行沈線文が短く施されている。また、横走する降起線で区画された胴部上半の縦位平行沈線文上に2条の連弧文らしいものが施されるなど、第66図1とはやや異なる要素をもつ。第66図8は、途中で屈折する縦位平行沈線文が施される。

b 3類（第66図3~7、第67図、第68図1~3、図版38~41の上）

隆起線をもたず、沈線文を施文の主体とするもの。第66図4・7は、前述の第66図1と強い関係をもつ1類を代表する土器である。沈線文を施文の主体とすることのほかに、文様に省略や退化が見られるなど、1より後出的である。色調は共に暗褐色。

4は、推定口径27cmの深鉢。1・7に比べて口縁部の肥厚は弱い。無文の口縁部直下の縦位平行沈線文は、縦位矢羽状沈線文と横走する2条の長梢円文によって縱横に区画される。胴部下半は、地文の条線文に3条の連弧文が施される。こうした文様構成は前述の1に近似するが、



第65図 包含層出土土器(8) 2群

隆起線をもたないこのほかに、施文方法に以下のような違いが見られる。

- ・1では2段で構成されていた縦位平行沈線文と長梢円文は、1段目が省略され、1段だけの構成になっている。
- ・長梢円文は更に横長になり、しかも2段重ねになっている。（2段重ね長梢円文）
- ・3条の連弧文は、全部頂部で切れてつながっていない。

7は、推定口徑29cmの深鉢。無文の口縁部直下より斜位に平行沈線を引き、横走する長梢円文と4条の連弧文をもつ。1や4の文様構成を基本的に踏襲しているが、3点の中では最も後出的と思われる。以下の点で4との違いが認められる。

- ・矢羽状沈線文が見られない。
- ・平行沈線文が斜位に施され、やや長くなっている。
- ・長梢円文の中に横位沈線が入り、『日』の字状長梢円文になる。
- ・連弧文は4条になるが、4条とも頂部で切れている。

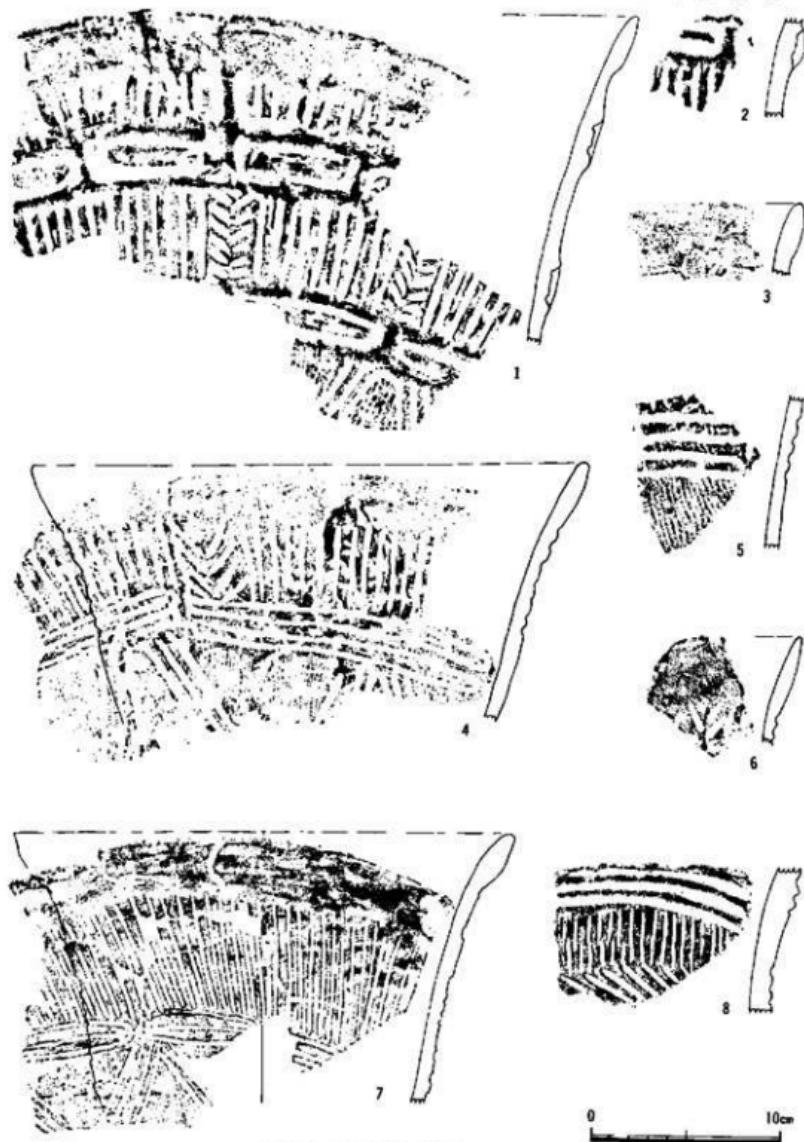
第66図3・5・6は、縦位の矢羽状沈線文を施す。3の下には5の文様帶がつくと思われる。5には2段重ね長梢円文らしい文様が見られ、4との共通性がうかがえる。地文としてR Lの繩文が斜位に施されており、2段重ね長梢円文もこの繩文上に施文されている。矢羽状沈線文内にもR Lの繩文が充填されている。色調は明赤褐色。すすが付着している。

第67図1は、口縁部内面に2条の沈線を横走させる。1類の中で内面に沈線を施すものは、このほかにはb2類の第65図13だけである。1～3は、b2類のような隆起線を伴う可能性もある。狭い無文帯をはさんで縦位平行沈線が2段に施文されるもの（4）、口縁部直下に2～3条の連弧文を施すもの（5～7）など様々な文様構成がある。1類では地文に条線文を施す個体が多いが、第66図3・5や第67図7は繩文を施す。

第67図8は、口縁部の肥厚が認められない。無文の口縁部は狭く、直下より広めの間隔で縦位平行沈線文をわずかに左傾しながら施す。明褐色を呈するが、ほぼ全面にすすが付着する。

第67図9～21及び第68図1～3は、b3類に属すると思われる胴部破片だが、a～b2類に関係するものも含まれているかも知れない。9は、条線文を地文とし、梢円形区画の下に太めの沈線でゆるやかな連弧文を施す。鋸歯状の連弧文がほとんどの1類の中ではやや異質である。色調は赤褐色。10～12は、矢羽状沈線文を施す。11と12は、矢羽状沈線文が2列になるのかも知れない。14は、長梢円文の間に4点の刺突文が並ぶ。この上にも刺突文の痕跡を確認できることから、長梢円文も2段に配置されていると思われる。長梢円文間に刺突文を配する手法は、後述するc類（第68図4～8）にも見られることから、c類に含めるべきかも知れない。

第67図16～21、第68図1～3は連弧文である。3条のものが主流だが、1条のもの（第68図3）や2条のもの（第67図20）も見られる。ゆるやかな弧状をなすもの（第68図2・3）は少數で、連弧文というよりむしろ鋸歯文といった方がよいような鋭角の連弧文が主流である。1



第66図 包含層出土土器(9) 2群

類を代表する第66図1・4・7の連弧文も鋸歯状であった。地文は条線文がほとんどだが、繩文（第67図20）も見られる。

c類（第68図4～8、図版41の上）

口縁部の肥厚がゆるやかで、外反する器形。a類のように口縁部に文様帯をもつが、隆起線を伴わず、沈線は施文の主体とするものを一括した。a類やb類の文様構成を基本的に踏襲するが、刺突文を配するなど新しい要素ももつ。

4は、胴部が張り、口縁部が強く外反する。口縁部には長楕円文が施されるが、中にもう1つの長楕円文を施す2重の長楕円文である。2段重ね長楕円文（第66図4）、『口』の字状長楕円文（第66図7）とは違う手法だが、刺突文をはさんだ右側の文様はもはや長楕円文とはいえない形になっており、長楕円文の中では最も後退的と思われる。刺突文は横位に5点ずつ、2段に施文されている。口縁部直下からは、狭い間隔で継位平行沈線がやや長めに施され、横走する3条の沈線によって胴部下半の繩文帯と区画される。3条の沈線は、右端で上部が丸くつながっており、『口』の字状長楕円文の可能性をもつ。色調はにぶい黄緑。所々に橙色が混じる。5も、基本的にはほぼ同じ口縁部文様をもつ。刺突が4点1列で3段構成になり、文様帯が広くなったためか、長楕円文にもやや違いが認められる。6は口縁部に3条の平行沈線を、7は繩文を施す。7には2段重ね長楕円文も見られる。8は口縁部に1条の長楕円文を横走させ、長楕円文間を緩い短沈線で区切っているように見える。その下には矢羽条沈線文と思われる斜位短沈線を引く。

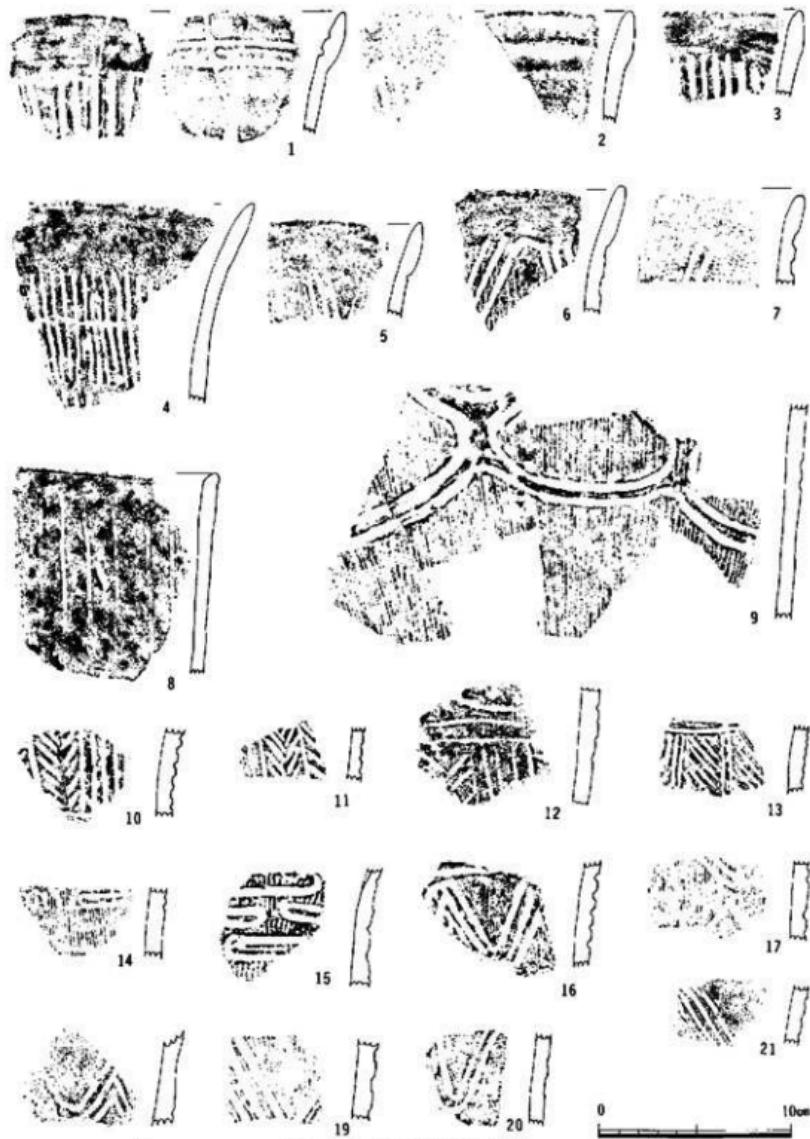
1類は、飛騨における繩文中期末の指標となる可能性をもった土器群と思われる。古川町の「中野山越遺跡」や清見村の「門端遺跡」、小坂町の「水口遺跡」などにもよく似た土器が出土しており、今後、本遺跡のものと比較検討していきたい。

II類（第68図9～12、第69図1～7、図版41の下～43）

胴部に沈線の波状懸垂文を施すものを一括した。信州の影響を強く受けて成立した土器群と思われるが、一方で1類と関係の深い土器も含まれており、在地化された要素をもつ。文様構成等の違いから、a類とb類に分けて記述する。

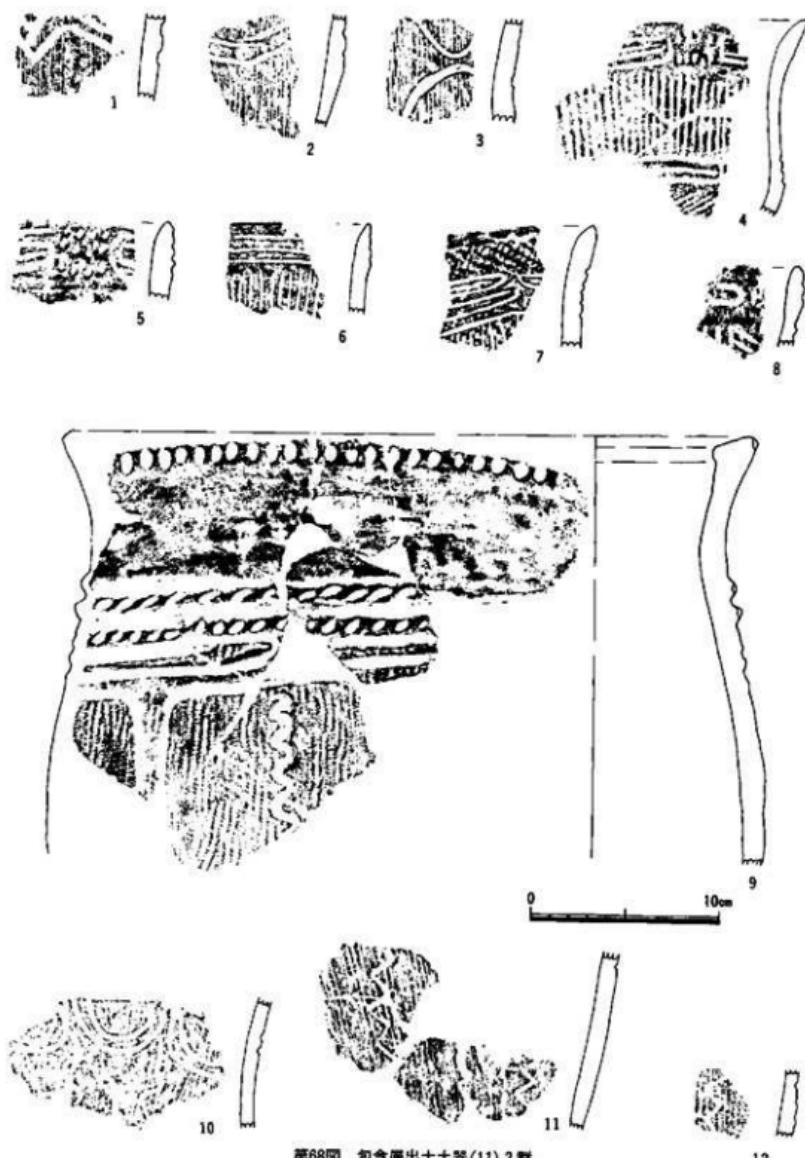
a類（第68図9、図版41の下）

胴部に沈線の波状懸垂文を施す土器群の中で、隆起線をもつものはこの1点だけである。胴部が張り、頸部がくびれて、口縁部がゆるく外反する。口縁部の内面は『く』の字状に張り出す。張り出し部下半には窪みを作つて段状にしている。口唇直下には、丸棒状の工具で太めの刻みを施す。頸部にかけての広い無文帯を経て、2条の太い隆起線が平行に巡るが、この隆起



第67図 包含層出土土器(10) 2群

100 第1節 舞文土器



第68図 包含層出土土器(11) 2群

線上にも太めの刻みが入る。刻みは、口唇直下では縦位に、隆起線上では斜位に、太さを変え施文している。隆起線より下方にはR.I.の縄文が縦方向に施される。太い沈線による縦の『コ』の字状区画の中央上端からは太めの沈線による波状懸垂文が下りる。

b類（第68図10～12、第69図1～7、図版42～43）

隆起線文を伴わず、沈線文だけで施文するもの。1類との関係がうかがえる資料もある。

第69図1は、完形に近い小型の深鉢で、口径は約14cm。平底の底部から胴部にかけてほぼ直立に立ち上がり（第80図B類）、口縁部が朝顔形に開く。口縁部上端は逆『く』の字状に張り出す。口縁部直下からは1類で見られたような縦位平行沈線文が引かれ、横走する太めの浅い沈線文によって胴部文様帯と区画される。胴部では、沈線による縦の『コ』の字状区画中央上端から底部へ波状懸垂文が下りる。波状懸垂文は、5単位で胴部を1周するものと推定される。胴部の文様構成はa類の上器（第68図9）と共通しており、ほぼ同時期に比定できる。縄文は、胴部上半では斜位に、下半では縦位に施されている。底部は網代圧痕（第81図A c類）。色調は暗褐色。全体にゆがんでいて粗雑なつくりの土器である。

第68図10は、条線文を地文とし、6単位で胴部を1周すると推定される2条の連弧文をもつ。半円状を呈するこの連弧文は、鋸齒状を主流とする1類とは異なる。半円状連弧文の間から1条の波状懸垂文が下りる。連弧文同様、6単位で胴部を1周すると推定される。この波状懸垂文は、滑らかな弧を描く第68図9や第69図1と違って角があり、施文にぎこちなさを残す。この傾向は、第68図11・12や第69図2～6の波状懸垂文にも共通する。

3条の鋸齒状連弧文（第69図2）や『日』の字状長梢円文（第69図5）をもつものにも波状懸垂文が認められる。1類との強い関係をうかがうことができる。第69図7のように、構状具で波状に条線文を施すものもある。

III類（第69図8～11、図版43）

北陸の前田・岩崎野式土器の要素をもつものの中で、1類には含めにくいものを括した。

8は、波状の口縁部が台形状を呈し、外反する鉢である。台形の上底にあたる部分は内面に押し込まれ、押した跡がボタン状突起のそばに残る。口唇部には縄文が施文されていたようで、わずかにその痕跡が残る。無文の器面にはボタン状突起が張り付けられている。9も、2条の微隆起線文にボタン状突起を伴う。高市の「垣内遺跡」では、微隆起線文にボタン状突起を伴う土器が2例出土しており、岩崎野式土器比定とされている。

10は、外反する無文の口縁部下方に3条の平行沈線を引き、1条目と2条目の間を弧状に切っている。沈線の中には、意図的に残したと思われる施文具の筋が認められる。11の沈線にも同様の筋がある。



第69図 包含層出土土器(12) 2群・3群

3群 後期前葉の土器（第69図12～17、第70～73図、第74図1～7、図版44～50の上）

本遺跡の主体をなす土器群である。口縁部が肥厚する縁帶文系の土器、気厚式や腹之内式に類似する土器のほかに、微隆起線文をもつ宮田式土器をはじめとした在地色の強い土器群が含まれる。

1類（第69図12～17、第70・71図、図版44～46）

微隆起線文をもつ土器群を一括した。第1号住居址の推定範囲内出土の土器（第44図）などで見えてきた宮田式土器である。包含層出土土器の中で微隆起線文をもつものは、第1号住居址のそれと比較して、次の点で異なる。

- 宮田式1類が少なく、宮田式2類が主流を占める。

- これまで宮田式土器にはあまり見られなかった沈線文を伴うものが含まれている。

この沈線文を伴う微隆起線文土器は、層位的な確認はできなかったが、設定グリットB-19、C-19にまとまって出土している。本遺跡では、「微隆起線文をもつ土器」として分類したが、もし宮田式土器の中に含めるとすれば、一番古い要素をもつのではないかと考えられる。

この沈線文を伴う微隆起線文土器は、単に沈線文を伴うというだけでなく、後述するように同心円や『H』字状などの文様をもち、文様間を短い粘土紐でこまめにつなぐなど宮田式の文様構成とはやや異なる要素ももつ。従って、これを宮田式の中でどのように位置付けるかなど今後の資料の増加を待って検討すべき課題が多いと思われる。

a類（第69図12～17、第70図1～5、図版44）

微隆起線文に沈線文を伴うものを一括した。12は、大きな4重の同心円文が縁部に施される大型の鉢と思われる。その左右には同心円文とはやや雰囲気を異にする円形の文様が配置され、それらの間から縦位に『H』字状の微隆起線文が下りる。この2つの『H』字状の微隆起線文の間に逆『U』字または梢円形になると思われる微隆起線文が位置する。文様と文様の間に短い粘土紐を張り付け、こまめに文様をつないでいる。沈線は、この個体では3ヶ所で確認できる。左の円形の文様の中、左の『H』字状文様の左側、逆『U』字または梢円形になると思われる文様の中である。いずれも縦位に施文されている。色調は黄橙で、一部に赤橙色も含む。本遺跡の宮田式土器に多い色である。

13～15も微隆起線文内に沈線文を施す。16・17は葉脈状文のようでもあるが、共に縦位の微隆起線文の左は無文様である。包含層出土土器1群の葉脈状文（第62図21～27）とは明らかに異なる。色調はいずれも黄橙である。

第70図1は、狭い間隔で縦に微隆起線文を施し、途中で横に区切っている。沈線はその外側に施される。1～3の沈線は細く、文様も第69図のものとは異なる。

微隆起線文に刻みを伴う宮田式1類と考えられる土器（第70図4・5）にも沈線文を伴うものが見られる。4には矢羽状沈線文らしい文様が見られるし、5にも縦沈線が確認できるが、第69図の土器とは様子が違う。

b類（第70図6～36、第71図1～14、図版44の下～46）

宮田式2類と呼ばれている上器群を一括した。第70図6～8は、外反する口縁部に何条かの微隆起線文を横走させる。口縁部上端を外に張り出させ、1条の微隆起線文のようにさせている点も共通する。色調は黒褐色、灰白色、橙色とそれぞれ異なる。外反する口縁部上端を外に張り出させて微隆起線文らしくする手法は10にも見られるし、C 8 SK 1にも2点（第53図5・6）ある。宮田式1類にもこうした手法が残るようで、第1号住居址の推定範囲内出土の土器（第44図11）では、張り出した上端部にも刻みを加えている。

9は、口縁部に3条の微隆起線文を横走させ、連続する2個の渦巻文を施す突起をもつ。この口縁部は、逆「く」の字状に屈折する。こうした器形の土器は、後述の3群B類（第73図29～31、第74図1～7）として分類しており、本来はそちらに含めるべきだったかも知れない。10・11は、ゆるやかな波状を呈し、外反する口縁部で、横走する微隆起線がつながったり屈折したりしながら、縦方向にも文様を展開させている。色調は褐色及び黄褐色。12・13は、縦に微隆起線を施すが、口縁部上端からのもの（12）と途中からのもの（13）がある。13にはすすの付着が見られる。15は、表は無文だが、口縁内面に2条の微隆起線文を施す。

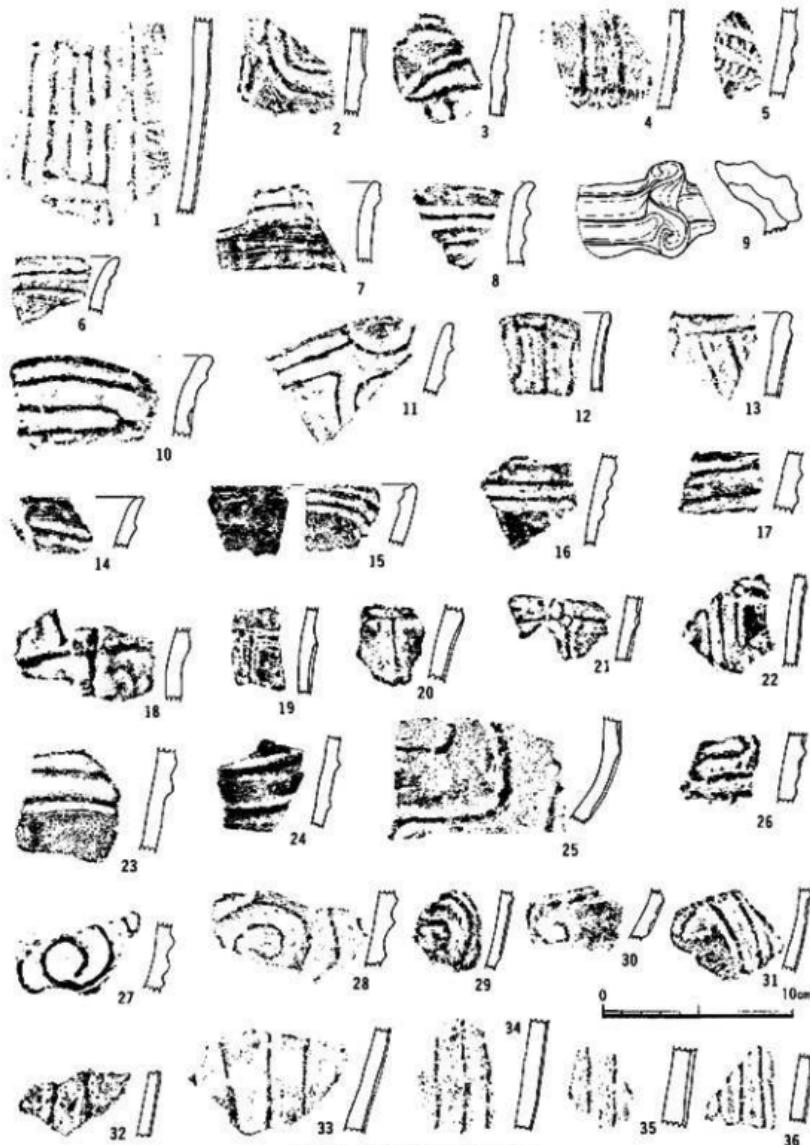
12～14・18～22は、縦横の微隆起線文が『十』字に交わるか、『T』字状を呈するものである。14・21・22には交点に円形刺突文が入る。23～31は曲線文様で、27～31は渦巻文を施す。

第70図32～36、第71図1～9・11～14は、微隆起線文を縦に平行に引く。10の微隆起線文は裾広がりである。微隆起線間の広いもの（第70図32・33、第71図5～7・9・10）と狭いもの（第70図35・36、第71図2～4）がある。第71図1は、広い無文帶をもつ。2は、3条の微隆起線文が1つにつながるが、微隆起線文の断面が半円状で施文間隔も狭いなど他の宮田式土器とはやや異なる要素をもつ。

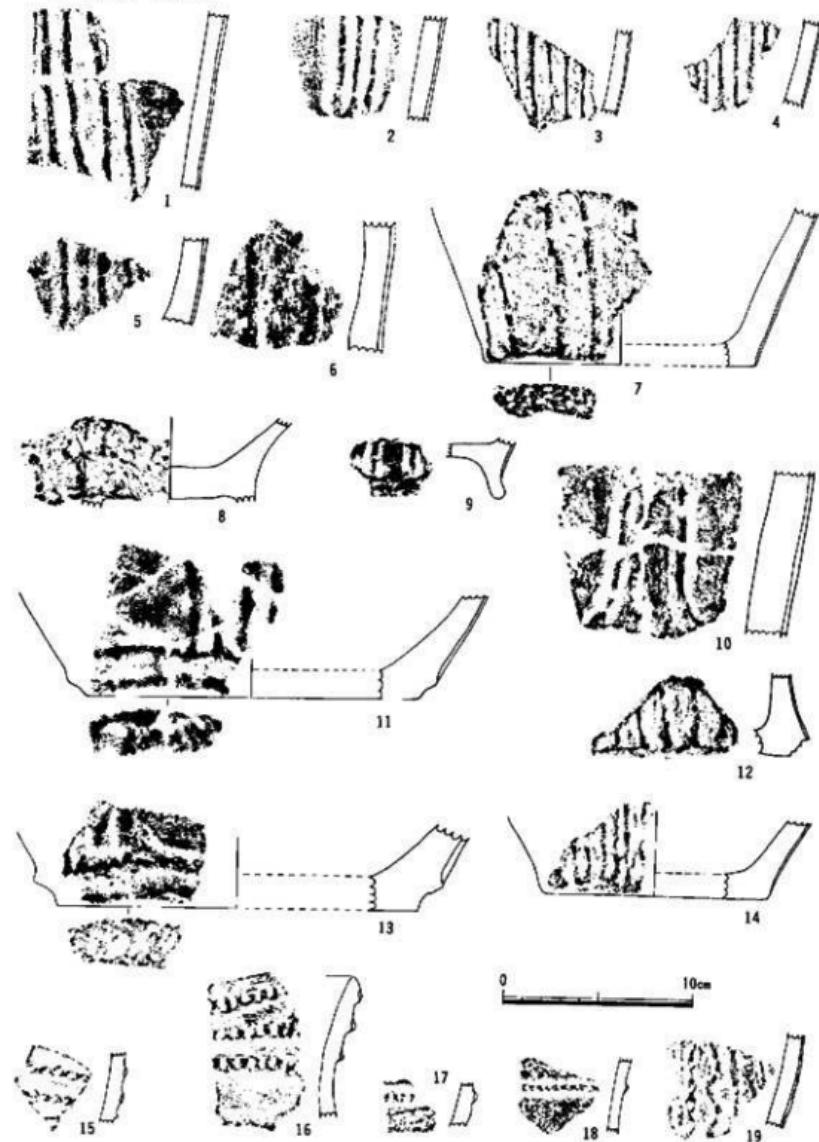
第71図7～9・11～14は底部で、このうち7・11・13・14は底部からまっすぐ外に聞く断面形（第80図A類）。底部圧痕は、網代と思われる7も含め、磨滅によって圧痕が判断できない。色調は灰白色・黄橙・褐色・明褐色と様々だが、黄橙のものには赤橙を含むものが多い。

c類（第71図15～19、図版46の下）

微隆起線に刻みを伴う上器で、宮田式1類と呼ばれているものを一括した。出土数はb類（宮田式2類）に比べて非常に少ない。16は、外反する波状の口縁部に沿って刻みを伴う微隆起線文が横走する。色調は黒褐色。微隆起線文に対して直角に刻みを施すもの（16・17）、斜



第70図 包含層出土土器(13) 3群



第71図 包含層出土土器(14) 3群

位に施すもの（15・18）、押しつぶすように幅広く施すもの（19）など刻みの施し方にも若干の違いがある。19は、摩耗が激しいので確実とはいえないが、刻みを施した微隆起線文と施さない微隆起線文があるように見える。

II類（第72図1～9、図版47の上）

北陸の気屋式土器に類似するものを一括した。気屋式は、関東の堀之内1式に併行するといわれ、三角形刺突文を施文することで知られる。

1～6は、三角形刺突文を連続して施すもの。1・2・4はややくびれる頸部に、3は内脣する口縁部に施される。5・6は、肥厚した狭い口縁部に1条の沈線文を横走させ、その沈線線上に三角形刺突文を連続して施している。頸部には沈線で幾何学的な文様を施す。三角形刺突文を施した土器は、第1号住居址の推定範囲内に1点（第43図12）、C-16P32で1点（第57図4）出土している。飛驒においては、高山市の「寺東遺跡」や小坂町の「南垣内遺跡」で出土しているが、出土例は比較的少ないようである。

1には、三角形刺突文のほかに気屋式土器の特徴がいくつか見られる。口唇部には太めの刻みが斜めに入る。口縁に沿って3条の沈線が横走するが、1条目と3条目の沈線内下半には斜位に刻みが施されている。また、2条目と3条目の沈線間には2本の沈線が鋭角に侵入し、交点の先に円形の末端刺突文を施す。

7は、肥厚した口縁部が波状を呈し、内脣する。波頂部を中心に、3～4条の沈線による上向きの弧文が施され、気屋式によく見られる『入』字文風の文様を構成している。8は、口唇部と沈線内下半に同方向、同間隔で太めの刻みを施す。この施文方法は1と共に通する。9は、口縁に沿ってやや大きめの円形刺突文を連続して施文し、横位沈線文をはさんで同心円状の文様を上向きに描いている。

III類（第72図10～18・22・23、図版47～48の上）

肥厚した口縁部に沈線文や刺突文を施す縁帶文系の土器群を一括した。口縁部が肥厚する土器は第1号住居址の推定範囲内からもまとめて出土しているが、そこを特徴づけた渦巻文はこのIII類には見られない。口縁部に施された文様の違いにより、a～c類に分けて記述する。

a類（第72図10・11、図版47の下）

同心円状の文様をもつもの。10は、波状口縁の波頂部中央がゆるく『U』字状に落ち込む。その形は、串田新式の双頭波状口縁に少し似ている。落ち込んだ部分を中心にして、4条の沈線文を同心円状に上向き施文する。その左右は、5条ほどの沈線文が口縁に沿って横走するような構成になっていて、『入』字文風である。口縁部下からは、3条の縦位沈線文をはさんで

斜位沈線文が密接に施文されている。11は、狭い肥厚口縁部がゆるやかに波状をなし、波頂部付近では下向きに4条の同心円文がやや立体的に施文されている。口縁に沿って波頂部までは、半月形連続刺突文→円形刺突文→同心円文状沈線文という流れを意識した文様構成である。

b類（第72図12・18、図版47）

沈線による区画文をもつもの。12は、弱く肥厚する口縁部に二重の四角形状区画文をもつ。口唇部には、一部に刻みがある。18は、口縁に沿って4条の沈線文が横走するが、2個の円形刺突文に遮られてつながり、2段の長梢円文になる。円形刺突文の横には縦の短沈線も見られる。口唇部や口縁内面には、斜位に綱文が施されている。

c類（第72図13～17・22、図版47～48の上）

横走する沈線文をもつもの。口縁部が内彎するもの（13・14）や肥厚部分の狭いもの（15）もある。16は、肥厚部上半に縄文を斜位に施文。施文具の筋が残る沈線を2条横走させるが、下の1条は肥厚部をはずれている。17は、沈線間に連続刺突文を施す。22は、口縁部が内面に肥厚し、段をもつ。5条の沈線の内、3条目と4条目は破片左端で弧状につながる。補修孔も見られる。

d類（第72図23、図版48の上）

狭い肥厚口縁部の一帯膨らんだ部分に細かい綱文を斜位に施す。この綱文は、脣部の沈線区画内にも羽状に施されている。

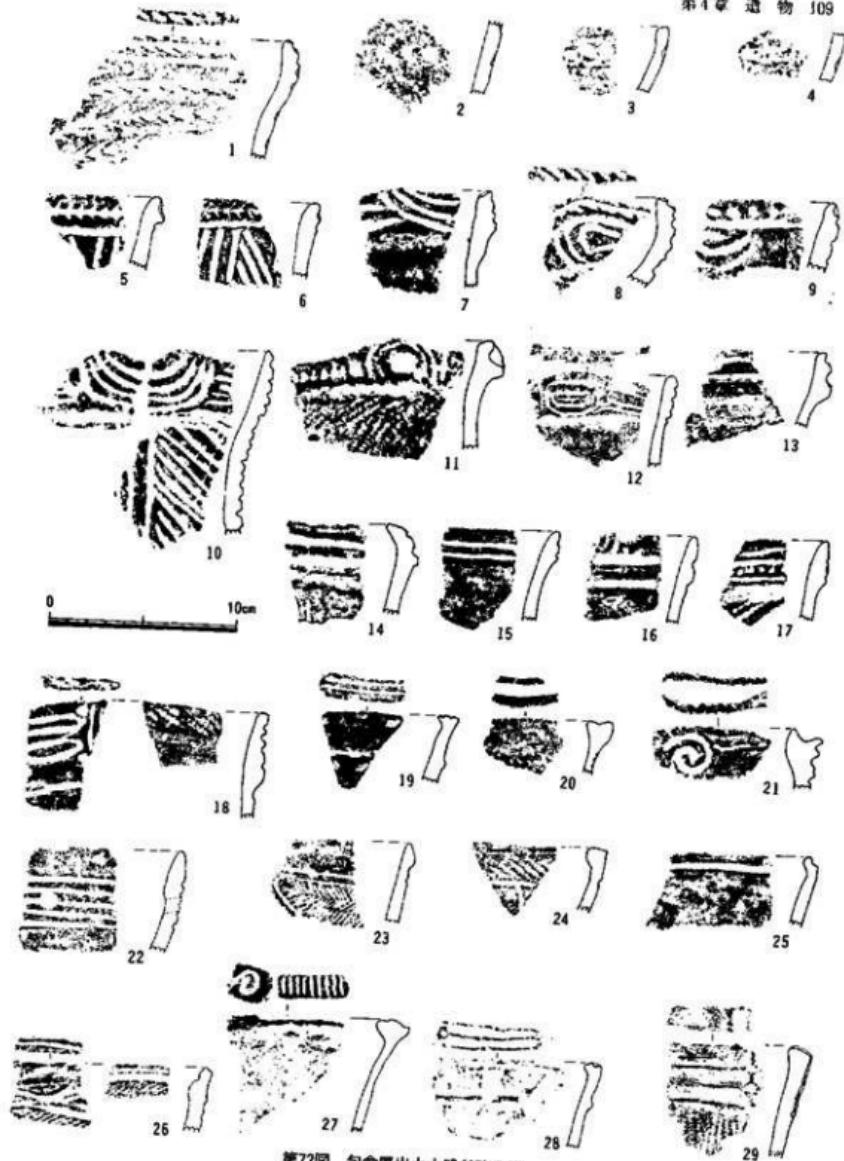
IV類（第72図19～21・24～29、第73図1～6、図版47の下～48）

口唇部や口縁部内面に、沈線文、隆起線文、刺突文などで施文するものを一括した。堀之内式類似のものと思われるが、やや時期のずれる可能性のあるものも含まれる。施文方法や施文位置により、a～d類に分けて記述する。

a類（第72図19～21・24～27、図版47の下～48の上）

口唇部に沈線文で施文するもの。口唇部に沈線を引くもの（19～21、26）と渦巻文や口唇に直交する短沈線を施すもの（27）があるが、いずれも口縁部を『T』字状（19・27）や『Y』字状（20・21）にしたり、内面を肥厚させたり（26）して施文部を幅広くしている。19は、口唇部の沈線は2条で、口縁部には宮田式2類の微隆起線文をもつ。26の口縁部内面の肥厚部には、1条の沈線と斜位綱文が施されている。27の口唇部渦巻文は、小次起伏状になる。

24・25は、口唇部への施文は見られないが、内面に張り出させて口唇部を広くしたり（24）、



第72図 包含層出土土器(15) 3群

屈折させて口唇部直下に沈線を引く(25)などしていることで、このa類に含めた。

b類(第72図28・29、図版48の上)

口唇部を内面に張り出させて広めにし、そこに隆起線文をもつもの。28の口唇部隆起線上には円形刺突文が施される。口唇部に直交して施文される29の短い降起線には、そのまま口縁部へ垂下するものとしないものがある。垂下隆起線は、口縁部を横走する3条の隆起線と交わり、交点に円形刺突文を施す。これらの円形刺突文は、後述するV類の円形刺突文に似る。

c類(第73図1・2、図版48の下)

口唇部に刻みを施すもの。1の刻みは、口唇部と共に背の高い隆起線文にも施される。2は、薄い口唇部に刻みをもつ。口縁部に沿って3条1組の平行沈線が2段横走するが、沈線内には刺突文が連続して施されている。

d類(第73図3・4、図版48の下)

口縁部内面に沈線を引くもの。3は、口縁部下半に2条の沈線を構走させ、その間にかなり幅広の隆起線を張り付けて『匚』状に刺突文を施す。2条の沈線は、この幅広隆起線に遮られて弧状につながる。口縁部内面も構成は同じで、刺突を作う小突起に2条の沈線が遮られ、左側の沈線は弧状につながっている。C-18P43出土の土器(第57図26)と似る。4は、口縁部が逆『く』の字状に屈折し、内面に張り出した小突起をもつ。口縁部には沈線文と刺突文が平行して施文され、それぞれ左端に円形刺突文をもつ。口縁部内面の肥厚した部分にも、ほぼ同じ長さで沈線文が引かれる。

e類(第73図5・6、図版48の下)

口縁部内面に隆起線文をもつもの。5・6は、共に表面にも同じ様な隆起線文をもつ。C-15SK3にも似た土器(第53図28)がある。

V類(第73図7~12、図版48の下)

垂下する隆起線と横走する隆起線の交点付近に円形刺突文を加えるもので、堀之内式土器に類似するものを一括した。7は、口唇部が内側に張り出し、そこに2条の平行沈線を引く。その意味では、前述したIV-a類にも含めることもできる。7の刺突文は、横『8』の字状。9は、交点以外の隆起線上にも刺突文をもつ。10の刺突文は円の真ん中に山を残す。11・12は、堀之内式類似土器とはやや異なる面をもつよう思う。

VI類（第73図13～27、図版49）

II～V類に関係すると思われる頸部破片を一括した。ほとんどは沈線文による施文だが、刺突文や隆起線文をもつものも含まれる。施文の仕方により、a～c類に分けて記述する。

a類（第73図13～16、図版49の上）

無文の器面に沈線文や刺突文で施文するもの。太めの沈線を深く施文するもの（13）や、細い沈線を浅く施文するもの（15）がある。16は、縦の平行沈線間に縦位雨滴状列点文を施す。

b類（第73図17～24、図版49）

条線文や繩文に沈線文を施すもの。18は、条線文に沈線文を横位や斜位に引く。逆「つ」の字状になる横位沈線と斜位沈線の間は、磨り消されて無文となる。17・19～24は、繩文に沈線を施すものだが、繩文を磨り消しているものもある。繩文は斜位に施文されるものがほとんどだが、縦位のもの（21）もある。

c類（第73図25～27、図版49の下）

隆起線文をもつもの。25は、低い隆起線間に3条の平行沈線を引き、下にはやはり3条の平行沈線で三角形区画をつくる。26は、頸部に刺突を伴う隆起線を振り付け、口縁部無文帯と胴部繩文帯とを分ける。この隆起線は頭部を巡るだけではないようである。27の表面にはすすぐひどく付着しているが、内面にはすすもみられず、きれいなナデ調整痕が残る。文様は、細い隆起線による連弧文である。

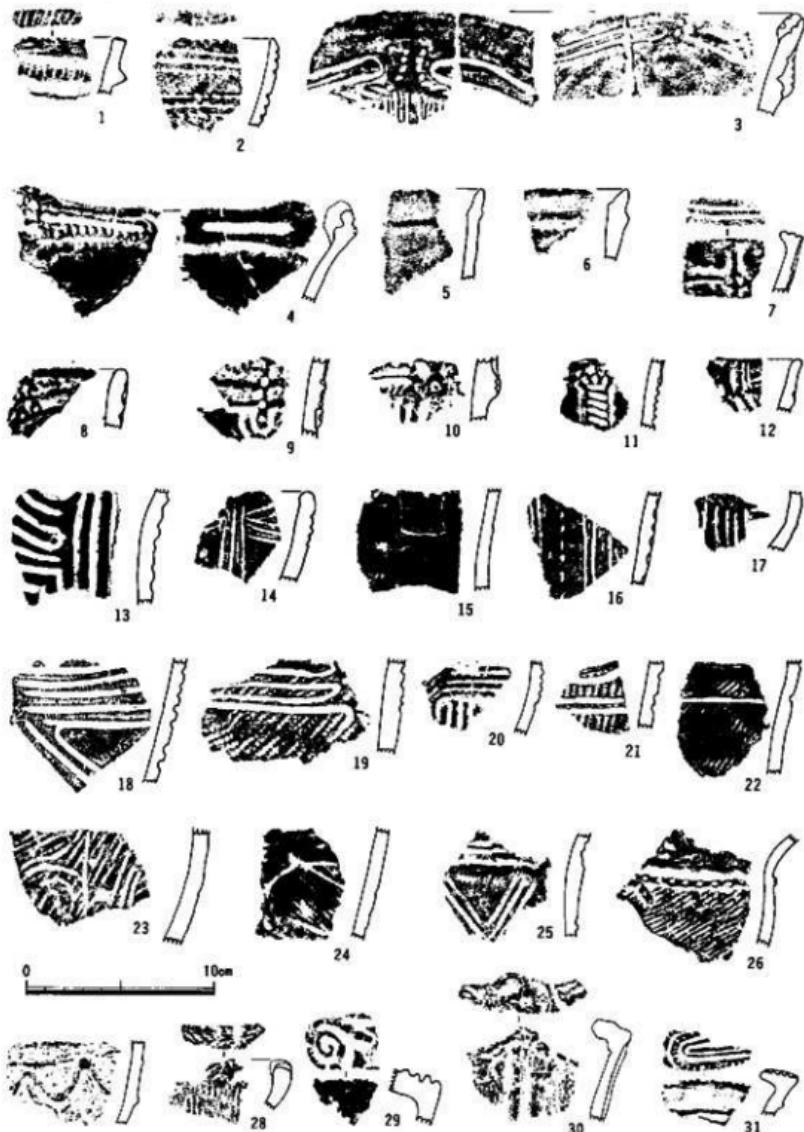
VII類（第73図28、図版49の下）

第1号住居址に見られた（第44図3）ねじり棒状の突起をもつものが1点ある。突起部分はやや内側に屈折する。口唇部には斜位に、口縁部には縦位に繩文が施されるが、連った原体による施文である。時期は壠之内式に併行するとされている。

VIII類（第73図29～31、第74図1～7、図版49の下～50の1：）

口縁部が逆「く」の字状に屈折し、「く」の字上半部に文様帯をもつものを一括した。これは、B-16S K21（第51図8・9）やC-7 S K1（第52図3）で見たような独特な器形をもつ土器で、飛驒では、小坂町「南垣内遺跡」で多く出土しており、萩原町「宮田遺跡」、丹生川村「下坪遺跡」、高山市「垣内遺跡」などにも出土例がある。VII類と同じく壠之内式併行とされる土器である。宮田式との関係がうかがえるものも含まれている。「く」の字上半部の張り出しが大きいものと小さいもの、波状をなすものと半縫のものがある。「く」の字上半部に

112 第1節 繩文土器



第73図 包含層出土土器(16) 3群

施されている文様により、a～c類に分けて記述する。

a類（第73図29・30、図版49の下）

『く』の字上半部に渦巻文をもつもの。29は沈線で、30は降起線で渦巻文を施す。30は剥離が激しく、渦巻文でない可能性も残る。『く』の字下半部は、無文のもの（29）と降起線を垂下させるもの（30）とがある。30は、器形も含めて丹生川村「下坪遺跡」出土の深鉢に近似する。なお、前述の3群Ⅰ類として分類した上器の中に1点だけこのa類にも含めることができるものがある（第70図9）。2個の渦巻文を連続して施しているものである。

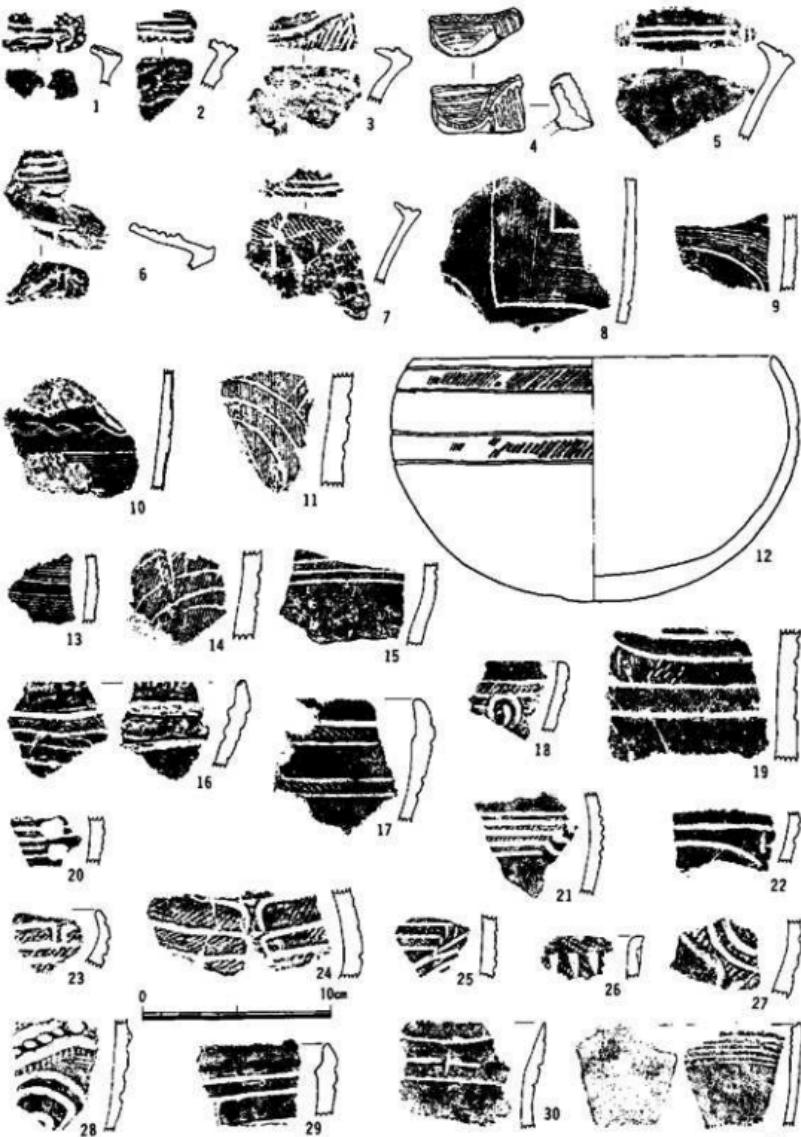
b類（第73図31、第74図1～4、図版49の下～50の上）

『く』の字上半に隆起線区画を持ち、その中に沈線で文様を施すもの。降起線には刻みを伴うもの（第73図31）、刺突を伴うもの（第74図1・2）もある。第73図31、第74図1・2は、『く』の字上半の文様構成がよく似ているだけでなく、『く』の字下半部に宮田式土器（3群Ⅰ類）に見られる微隆起線文をもつ点でも共通する。B-16S K21の土器（第51図8）もほぼ同じ文様構成である。第74図4は、刻みを伴う背の高い隆起線が『く』の字上半部を連弧状に巡るので、高山市「垣内遺跡」46号住居址出土の土器に近似するが、次の点にわずかな違いが認められる。

- ・やや小振りである。（『く』の字上半の幅が狭いため、横位沈線の数も少ない。）
- ・口唇部に斜位縞文を施している。
- ・背の高い隆起線が口唇部と接するところに短沈線を引いている。
- ・背の高い降起線をもつ4は、後述する4群Ⅱ類（後期中葉）につながる要素をもっている。その意味では、Ⅵ類「南垣内型鉢」の中でも後出的と考えられる。

c類（第74図5～7、図版50の上）

『く』の字上半に平行沈線を引くもの。5は、2条の平行沈線の端に刺突をもち、直交する短沈線を引く。6は、『く』の字上半部が大きく張り出し、4条の平行沈線のほかに隆起線をもつ。7は、『く』の字上半部と下半部に同方向で縞文を施す。



第74図 包含層出土土器(17) 3群・4群

4群 後期中葉の土器（第74図8～31、第75図1～16、図版50～52）

加曾利B式土器に類似するものを一括した。第1号住居址の推定範囲内と同じく、文様から見て加曾利B1式のものが多いと思われる。そのほか、後期中葉に属するものとして口縁部に背の高い隆起線で曲線を施すものや羽状繩文をもつものがわずかにある。注口土器と思われるものも含め、全体をI～IV類に分けて記述することにする。

I類（第74図8～31、第75図1～3・6、図版50～52）

加曾利B式土器に類似するもので、主に沈線文で施文するもの。磨消繩文も含む。施文の仕方などにより、a～d類に分けて記述する。

a類（第74図8～11・13・14、図版50）

沈線文と条線文で文様を構成するもの。8～10・13は、沈線文区画内に条線文を施す。8は、沈線区画内に細かな条線を縱横に施す。沈線文は、一部押引文風に引かれている。10は、沈線区画外の無文帯に2条の条線文を入組文風にして横走させるが、1条の部分も見られる。この文様構成は、第1号住居址の推定範囲内出土の土器（第45図1）に近似する。13は、器面が黒く光沢をもつ。11・14は、同一個体と思われる土器で、やや雰囲気を異にする。

b類（第74図12・15～28、図版50の下～51）

平行沈線文に繩文を伴うもの。12は、丸底（第80図F類）の楕形浅鉢で、口径約19cm。口縁部が内彎し、胴部はやや張る。器面は磨消繩文で、口縁部と胴部には2条の平行沈線に挟まれた繩文帯が残る。底部は無文でやや凸凹しており、安定性は悪い。

15～21・25・27・28も磨消繩文で、沈線間に繩文帯を残す。19の繩文は非常に細かい。21は、撥人品であろう。口縁部がゆるやかに内彎するもの（16・17・22・24）があり、16の口唇部には刻みがある。口縁内面に断面三角形の隆起線が2条横走（16）したり、内面の屈折部分にわずかな段（17）を作ったりしている。

平行沈線を区切る手法も見られる。『の』の字状の文様を配したり（18）、指頭圧痕を施したり（20）する一方で、弧線によって屈折させたり（21・25）、『』（I）状に区切ったり（23・24）するのがそれである。26は、繩文の口縁部途中から、縦に太い沈線を押引文風に引く。

c類（第74図29～31、第75図1～3、図版51の下～52の上）

繩文を伴わず、沈線文を主体に施文するもの。第74図29は、口縁部内面に隆起線を1条横走させる。30は、口縁部の3条の沈線の内、2条目を縦の短沈線で切っている。31は、表面は無文だが、口唇部に1条、口縁部内面に5条の平行沈線を引く。色調は褐色。器面は研磨されて

おり、搬入品と思われる。

第75図1は、口縁部上端が内側へ屈折し、口唇部には刻みを施す。口縁部下半には、5条の平行沈線が横走り、所々を弧線で区切っている。頸部には矢羽状沈線文を施す。色調は黄褐色。すすの付着がある。矢羽状沈線文をもつ土器は、久々野町「藤原遺跡」でも出土している。加曾利B2式に比定できるであろう。2も無文だが、口唇部を中心にして矢羽状に刻みが施される。内面には3条の平行沈線が引かれ、口唇部下の刻みに対応して沈線間に短沈線を矢羽状に施す。器面は黒色で、研磨されている。これも搬入品かも知れない。

d類（第75図6、図版52の下）

無文のもの。6は、口縁部が内側に屈折する浅鉢で、口径約16cm。口唇部に粘土を低く『B』字のように張り付け、その中に弧状に沈線を引く。底部には網代圧痕があったと思われるが、磨滅していて判断できない。底部の直径は推定7cm。断面形態は第80図E類である。

II類（第75図7～10、図版52の上）

口縁部に背の高い階起線で曲線文様を施すもの。河合村「室屋遺跡」に多くの出土例があり、『宮田式』につづく飛騨独自の要素であり、加曾利B1式段階に属すると推定¹¹⁾されているものである。7は、背の高い曲線の降起線の中に、低い直線の降起線をもつ。口唇部には繩文も施されている。7・9は、口縁部が逆『く』の字状に屈折する「南垣内型鉢」に器形が似る。8・10は、把手とも考えられる。

III類（第75図4・5、図版52の上）

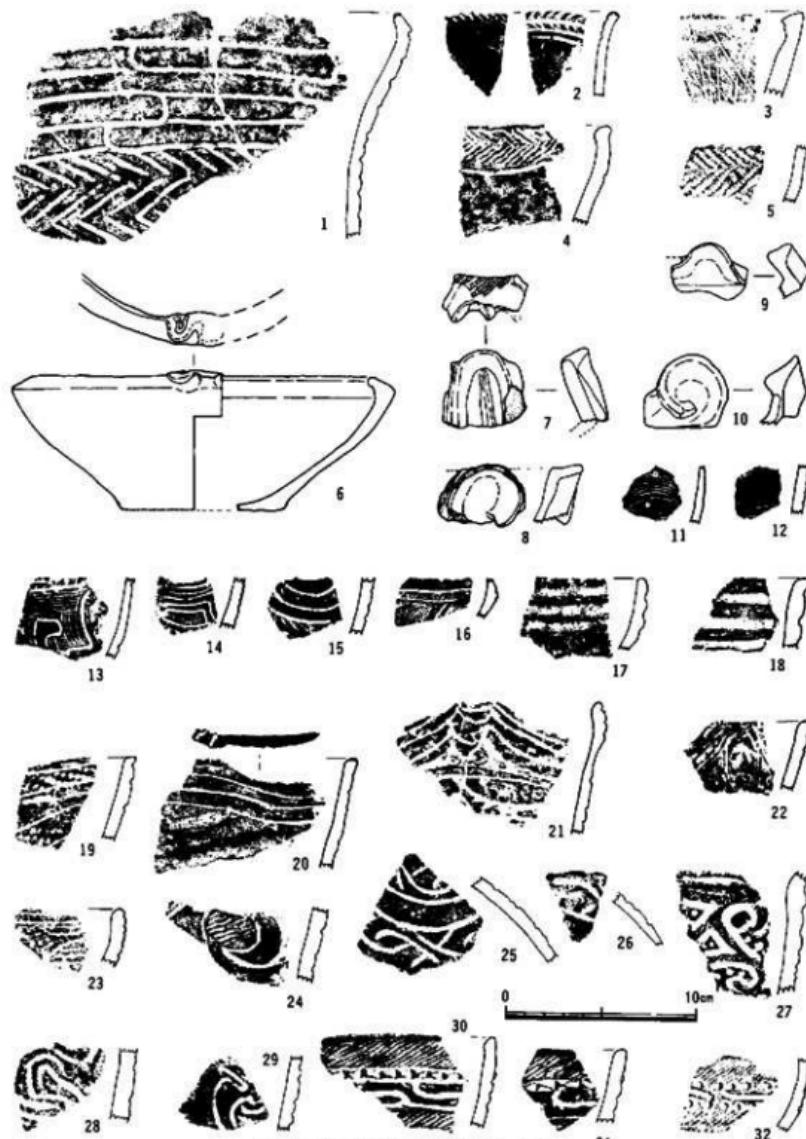
羽状繩文を施したもの。加曾利B2式に併行するものとされ、北陸では酒見式（井口I式）に位置付けられている。4・5は、共にR.I.としRの撫りの反対の繩を縦に転がしたもので、繩文は横位に施されている。この羽状繩文を施した土器は、飛騨では河合村「室屋遺跡」や小坂町「南垣内遺跡」に出土例を見る。

IV類（第75図11～16、図版52の上）

注口土器の胴部破片と思われるものである。11は、色調が黒褐色。研磨されている。Ia類の中（第74図8～10・13）にも注口土器が含まれているかも知れない。

5群 後期後葉の土器（第75図17～21、図版53の上）

本遺跡で後期後葉に位置付けられる土器は非常に少なく、四線文系のものと八口市新保式に関係するものがわずかに見い出せるだけである。I類とII類に分けて記述する。



第75図 包含層出土土器(18) 4群～7群

I類（第75図17・18、図版53の上）

回線文系の土器である。17も18も口縁に沿って3条の凹線を横走させている。17の口縁部は内彌、18は外反する。17には細かな条線文も施されている。

II類（第75図19～21、図版53の下）

八日市新保式との関係が考えられる土器である。いずれも波状の口縁部に沿って細い沈線を何条か巡らせている。20は、波状口縁の波頂部が台形状になり、そこに刻みを施す。21は、内に押し込まれた台形状の波頂部を中心にして上向きに弧線が3条引かれ、口縁部を巡る3条の沈線とつながっている。その下には、三叉文らしい文様もあり、御経塚式との関係も考えられる。

6群 晩期前葉の土器（第75図22～24、図版53）

玉抱き三叉文をもつ御経塚式に類似するものを一括した。後期後葉と同じく、資料が少ない。

第75図23は、多条の横位沈線に背向弧文の手法が用いられ、菱形の空白部を作り出す。そこに円形刺突文を施すが、この文様構成は御経塚1式に見られる成立期の玉抱き三叉文に似る。ただ、円形刺突文を玉とするにはやや小さいという問題は残る。22は、波状口縁の波頂部が台形状となり、細い沈線で括弧状に囲まれた下を配する。24の玉には繩文が充填されている。

7群 晩期中葉の土器（第75図25～32、第76図1～16、図版53の下～54）

中尾式に類似するものを一括した。晩期前葉（6群）に比べると資料が多い。器形のわかるものもあるが、ほとんどは小破片である。文様を中心に、I～V類に分けて記述する。

I類（第75図25～29、図版53の下）

入組文をもつもの。25は、蓋と思われるものである。平行沈線によって区画された繩文帯をはさんで、2段にわたって入組文を施す。26も蓋と思われるもので、やはり端の繩文帯の上部に入組文を施す。胎土に小石を多く含むこと、沈線の施し方、細かな繩文など25と類似する点が多い。本遺跡では、後述する2点（第76図1・2）も含めて4点の蓋と思われる破片を確認したが、飛驒においては、今のところ蓋の出土報告例はあまりない。27～29は、入組文のような複雑な沈線文を施すが、晩期中葉とするにはやや問題の残るものがあるかもしれない。28は、胎土に黒鉛を含む。本遺跡では、搬入品と思われる黒鉛の塊が2個出土しており、28と何らかの関係も考えられる。飛驒における黒鉛入り土器は、早期の『沢式土器（押型文）』がよく知られているが、白川村「木谷遺跡」では晩期の土器に黒鉛を含むものが出土している。

II類（第75図30～32、第76図1～3、図版53のド～54の上）

縫の手文をもつもの。第75図30・31は、口縁内面にわずかな段をもつ。また、斜位繩文をていねいに磨り消した沈線区画内に列点文と縫の手文を施すという施文の特徴も共通する。列点文は、左から右へ斜めに施され、縫の手文は、太めの沈線で曲線的に描かれている。共に、器面全体が赤彩されている。第76図1・2は、蓋と思われる。斜位繩文を施した先端部分の摩耗が激しい。磨り消しの沈線区画内には、列点文が施され、縫の手文の沈線文も認められる。第75図32は、列点文の間に縫の手文をもつが、第75図30・31に比べると直線に近い状態で施文されており、後出的な感じがする。第76図3は、器面の磨滅が激しいが、平行沈線間に細目の縫の手状文様を見る事ができる。第76図13（7群IV類）にも縫の手文が施されているが、他の要素を重視し、分類を異にした。第75図30～32、第76図1・2は、列点文を施すという点では後述のIII類とも共通する。

III類（第76図4～10、図版54の上）

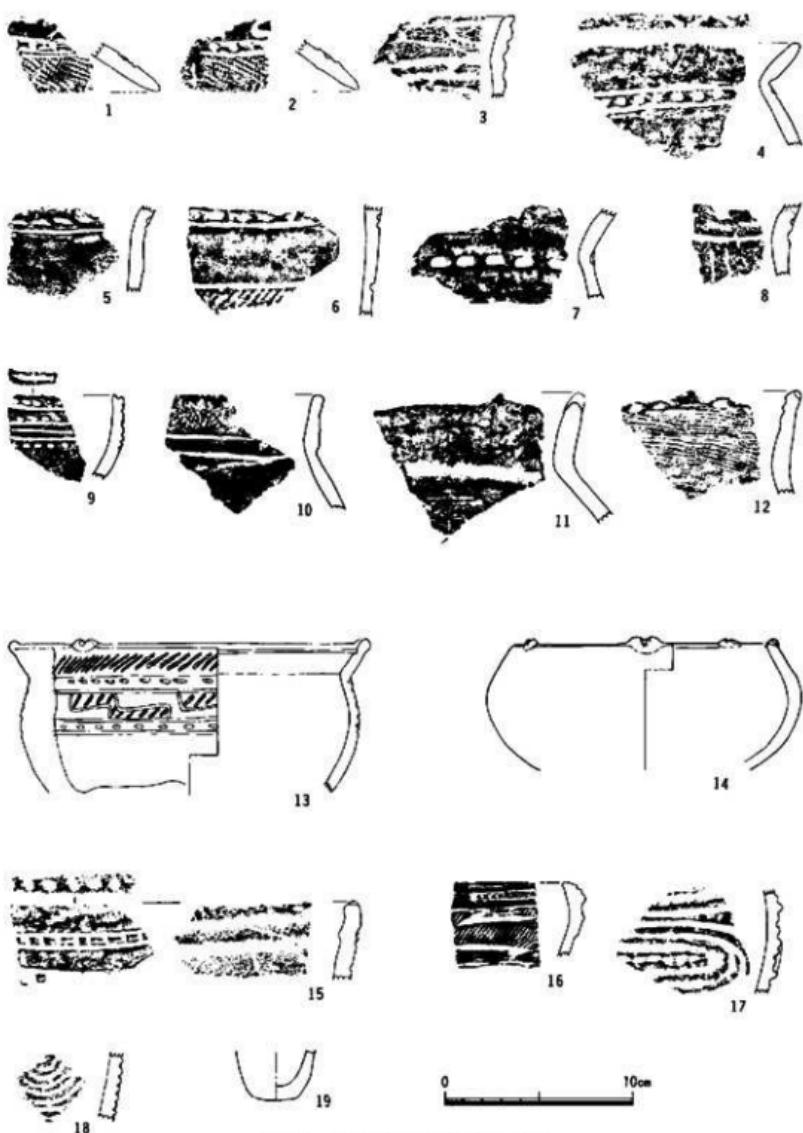
列点文を施すもの。4～7は、『く』の字状に屈折外反する器形で、4の屈折度は特に大きい。いずれも頸部のくびれ付近に列点文を施すが、列点文をはさむように平行沈線を引くものが多い（4～6）。列点文は、左から右方向へ施す。4の口唇部には、刺みが異方向に繰り返し施されているが、沈線文を波状に施しているようにも見える。8は、頸部の細かい繩文帯内に刺穴文を施す。補修孔も見られる。9は、口唇部に沈線を引く小型の鉢で、口縁部には4条の平行沈線と3条の列点文を施す。10は、列点文はもたないが、『く』の字状に屈折外反する器形で、頸部付近に平行沈線を引くので、III類に入れた。口縁部繩文帯は赤彩されている。

IV類（第76図11～15、図版54の下）

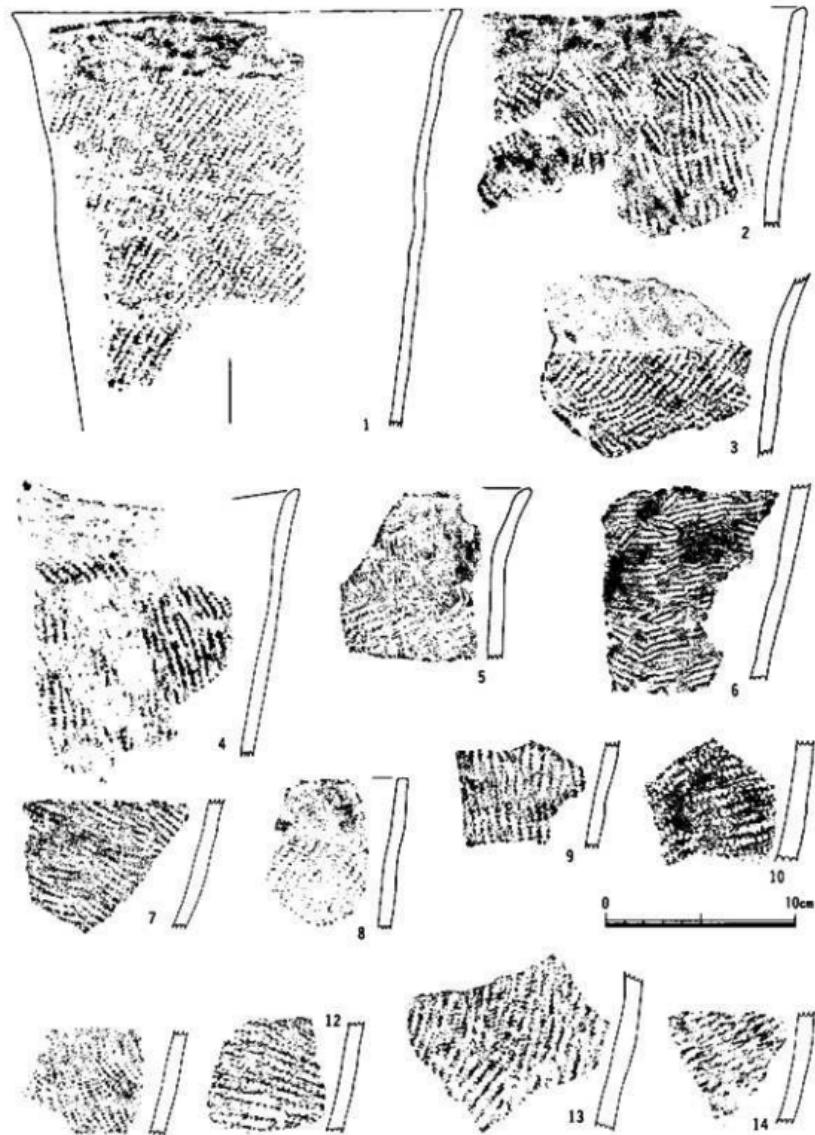
口唇部に小突起をつけたり、指圧による刻みを施したりするもの。13は、口縁部が『く』の字状に外反する小型の深鉢で、口径が推定17cm、口唇部に『B』字状突起をもつ。口縁内面には、1条の沈線が横走する。器面はすすの付着がひどい。狭い口縁部には繩文が施され、頸部の列点文を経て、細い沈線による縫の手文が施される。この土器は、「中屋式」というよりは「佐野式」に類似する。14も、『B』字状突起をもつ浅鉢で、口径は推定13cm。無文である。11は、口唇部に小突起をもつ無文上器で、外反の強い器形である。12の口唇部には、小突起と共に指圧痕も見られる。15も口唇部に指圧痕をもち、内面のわずかに肥厚した部分に凹線を引いて2つの段をつくる。口縁部の平行沈線間には、縫の刻みが連続して施されている。

V類（第76図16、図版54の下）

雲形文のような文様をもつもの。16は、わずかに肥厚した口縁部がゆるく内擣する。口縁部



第76図 包含層出土土器(19) 7群～9群



第77图 包含层出土土器(20)10群

には、刺突文を施す沈線区画帯がある。口縁部下は斜位網文がていねいに磨り消され、雲形文のような文様が表現されている。

8群 時期が不明の土器（第76図17・18、図版54）

時期のよくわからないものが2点ある。17は、隆起線文と深い沈線文で文様を構成する。隆起線と沈線で椭円形状に区画された中には、押引沈線文が施される。18は、同心円状に押引沈線文を施す。同一個体と思われるものが、C-15SK3（第53図25）からも出土している。

9群 ミニチュア土器（第76図19、図版54の上）

本遺跡で、ミニチュア土器と確認できたものはこの1点だけである。底部からまっすぐ外に開く断面形（第80図A類）で、胴部はやや下半部で膨らみをもつ深鉢型上器。底部圧痕は磨滅していて判断できない。胴部は無文である。

10群 繩文を施した土器（第77図、図版55）

繩文を施す上器を一括した。後期のものが多いと思われる。1は、外反する口縁部をもつ深鉢。口径は約24cmを測る。口縁部は無文。以下にR.Lの繩文を施す。色調は、上部が黒褐色で下部が灰白色。すすの付着が見られる。2も口縁部が外反する。1と同じように口縁部無文帯をもつが、以下のR.Lの繩文が右下がりに施文されている。口唇部も斜めに切られて細くなっている点が1と違う。色調は黄褐色。すすの付着が見られる。4は器形も文様構成も2に似るが、口縁部が波状になる。8は1とよく似る。5は波状の口縁部をもつ。外反が強い。3は広い無文帯をもつ繩文土器。色調は灰白色。胴部がややふくらみ、口縁部が外反する器形のようである。

11群 注口土器（第78図1～14・17・18、図版56）

注口土器の胴部と思われる土器片は既に報告した（包含層山土土器4群IV類、第75図11～16）が、ここでは注口土器の口縁部や把手、注口部を一括した。後期前葉から中葉のものが多いと思われる。把手には、鉢に付けられたものが含まれているかも知れない。

1は、口縁部の先端部が内彎する。先端部には、口縁に沿って横走する沈線と継位短沈線が細かく施される。無文の頸部はほぼ直角にくびれて胴部につながる。

2・5・8・10・12は、有段の口唇部上に付く環状の把手。2・5・12の環状把手は、内側に円形の穴をもち、口唇部上段に細かい刻みを施している点で共通している。2の把手上部には耳状のものが付く。この耳状のものはややねじれおり、10の耳状のものとよく似ている。8・10には、貫通、未貫通の穴がある。10の上部に付けられた耳状のものはねじってあり、未



第78図 包含層出土土器(21)11群・12群

貫通の穴が貫通すれば『8』の字状を呈することになる。2・5・10は赤褐色。12は黒色。いずれもよく研磨されている。8は磨滅が激しい。

3・4・6・7・9・11は口縁部に張り付けられた把手。3・6・9の口縁部は内弯する。4は、輪にした細い粘土ひもをねじって『8』の字状にし、環状把手の上部に張り付けている。口縁部の上端には沈線区画内に細かい繩文が施される。色調は赤褐色。『8』の字状文は9や11にもある。6は口縁部に近いところに環状の小さな把手を縦2段に付ける。7は、内側に屈折する口縁部で、半円状の羽根をもつ。この羽根及び屈折部を横走する3条の隆起線には刻みが加えられ、中央の隆起線の末端には円形刺突文が施される。注口土器の把手というよりは、前述の「兩塙内型鉢」の仲間に近いかも知れない。

13・14・17・18は、注口部。いずれも、第1号住居址の推定範囲内出土のもの（第43図33）と比べると大型である。18だけが完形に近い。基部の外径約3.3cm、内径約1.8cmで、先端部は外径約2.6cm、内径約2.0cmを測る。基部から中央部まではほぼ同じ太さで、そこから先端部にかけて少し細くなる形である。長さは約11cm。色調は赤褐色で、よく研磨されている。13は、約45度の角度の先端部が残る。外径約2.8cm、内径約1.8cmを測る。先端部から基部に向かってゆっくりとした弧状になっており、基部は太そうである。14は、基部から先端部にかけてほぼ直線的に細くなる形である。色調はにぶい橙。一部に赤彩が認められる。17は、基部の外径が約6cmの大型注口部。先端部に向かって直線的に細くなる形と思われる。色調は黄褐色。

12群 ねじり棒把手（第78図15・16、図版56の上）

2本の棒状粘土ひもをそろえ、上下端を反対方向にねじって1本の棒にしたもの。飛驒では、繩文中期から後期にかけて、上器の把手としてよく使われる。本遺跡では、包含層出土土器の中に1点だけこのねじり棒把手をつけた上器（第61図26）が出土しているし、B-14SK19では、ねじりのゆるやかなねじり棒把手（第51図1）が出土している。

15・16とも、把手として土器に張り付けられていた跡が両端に残っている。張り付け跡の様子から判断して、15は土器に対して斜めに張り付いていたと考えられるし、16は端から端までほぼ上器の器面に接触していたと思われる。包含層出土の土器（第61図26）に付けられたねじり棒把手は、端から端まで全部器面に接触している。なお、15には両端に深い刺突文が、16には片端に浅い円形刺突文が施されている。共に褐色を呈する。

（野村宗作、本永義博）

（注）

1) 紅村 弘・増子康眞他（1978）『東海先史文化の諸段階（資料編II）』

第2節 上製品

土偶（第79図1～12）

19列から22列を中心に13点出土している。全て破片であり、全容が判明する土偶が出土していない。また同一個体と思われる土偶もない。7・10は全身を立体的に表現する立体土偶、他は板状土偶になると思われる。出土層から、中期後葉から後期中葉にかけての土偶と思われるが、時期の明確な遺構に伴う土偶ではなく、時期の正確な比定はできないため、以下部位毎に特徴を述べる。

頭部（第79図1）

1は右頸部分を欠損しているものの顔面がほぼ残存している。目、口は凹ませて表現し、鼻はわずかに隆起させてやや下方より刺突して表現している。両耳には棒状工具で刺突が施されている。右耳は中央に4点の刺突を施し、その回りに10点の刺突が円形状に施文されている。左耳は中央に4点、その周間に8～10点の刺突を巡らせ、さらに、その周間に何点かの刺突を巡らせている。左耳下部には沈線も若干残る。施文の特徴から、耳栓を装着している様子を表現したものと考えられる。左右相違する刺突文である点は装着した耳栓の大きさの違いを表現した可能性もあるが、磨滅も進んでおり、断定できない。なお、裏面は比較的平坦になっており、かつ、剥離面（斜線で表現）が2か所観察できる。首から下を欠損しているため断定できないが、顔面把手である可能性も残る。

胸・腕部（第79図2～6）

2は板状土偶の右肩から腕にかけての部位である。他の土偶と違い、両腕を下に下げる形態である。乳房部の突起がわずかに残る。肩と手の部分に径2mmほどの竹管による浅い刺突文を巡らせている。表の腕部には同様の刺突文を円形に施文している。磨滅しているため、その他文様の有無は不明である。

3・4はいずれも板状土偶の左腕部であり、乳房部の突起が残る。3は乳頭部が刺突されている。表裏に細い棒状工具で沈線文を施し、文様を描いている。残存している部位から推定できる形は両腕を挙げている土偶である。

5は施文の部位などから左腕としたが、正確な部位は不明で、脚部の可能性も残る。浅い沈線文を腕の表裏面と上面に2本ずつ施文している。

6は正確な部位は不明であるが、3・4と同様の形態をもつ板状土偶と思われ、断面形から左腕であると考えられる。表はU字状に沈線を2重に施文し、さらにその中に2本の平行沈線を施文している。裏面は上段に2本の平行沈線を施文し、下段にU字状の沈線を施文しており、表裏で相違した施文となっている。

その他板状土偶の胴部破片が1点出土している。

脚部（第79図7・9・10）

7は右脚部と思われる。足部で大きく開き安定している。側面に棱を作り、断面五角形を呈する。太い沈線で文様を表している。沈線は斜めに施したあと、縦位の沈線を施文している。内面に向かって粘土をこねてのばしており、指押圧痕も残る。現高で8cmあり、かなり大型の上偶である。中期後葉の土器捨て場と思われる地点からの出土であり、同期の上偶と思われる。

9・10は脚部である。10は板状上偶となる可能性もあり、断面は楕円形を呈する。足部の裏は凹ませてあり、これだけでも立つ。9は6と類似した施文であるが、先は広くなっていることから、脚部とした。類似した施文をもつ土偶は上流の西田遺跡でも出土している。後期前葉の土坑の覆土から出土しているが、土坑との関係は不明である。

その他（第79図8・11・12）

8は残存する形状から十偶の腕部とした。細い沈線の施文が観察される。

11・12は肩部から胸にかけての部位と思われる。11は表でわずかに膨らみが観察され、乳房部につながる可能性がある。裏面は磨滅し、文様の有無は不明である。12は表裏に刺突文が施してある。いずれも上偶以外の土製品の可能性もある。

有孔土製品（第79図14・15）

14は断面形はカマボコ形の有孔土製品である。やや平坦面よりに穿孔されている。焼成は良好であるが、胎土には比較的大きな砂粒を含み破損している部分も多い。そのため、上・下で欠損している部分は使用によるものかは判断できない。黄灰色を呈し、石製品に換してあるかのような色調である。富山県古沢遺跡出土の「笛状土製品」に類似しているが用途等不明である。

15は注口の可能性があるが、基部で剥離した面がみられないため、土製品とした。管状土錐の可能性がある。穿孔は先端部に向かい細くなっており内部には土が詰まっていた。

土製円盤（第79図16・17）

16・17は土製円盤である。16は一部を欠損している。両方とも周囲を細かく破碎して円形に仕上げている。用途等は不明である。

その他（第79図13）

13は皿状のミニチュア上器の可能性もあるが、底部にあたる部分も含め表面全体に細い沈線で施文してあるため土製品とした。



第79図 包含層出土土器(22)土偶・土製品

第3節 底部

本遺跡で出土した底部の総数は536点である。この内胴下半部の器形が判明する個体が353点、底部压痕が判明する個体は327点である。口縁部から底部まで判明する個体は4点と少ないのをはじめ第2表に示すように残存状況はあまり良くない。また、接合できる個体は極力接合したが、これらの破片には同一個体と思われるものも存在することを予め断っておく。また、台付き土器（脚部）はこれらの分類から除外した。

①底部の断面形態

底部の断面形態により器形を以下のように分類した¹⁾。

A類：底部からまっすぐ外に開く断面形で、胴部はやや下半部で膨らみ

をもつ深鉢。

B類：底部から直立に立ち上がる断面形で内部の屈曲も大きい。この場合、胴部にはあまり膨らむ部分をもたず、バケツ型に広がる深鉢。

C類：底部より少し上まで垂直か内彎しながら立ち上がり、その上で外に開く断面形をもつ深鉢。中にも明瞭なくびれをもち、くびれ部分の径が底部最大径より小さい深鉢も本類に含めた。

D類：底部からまっすぐ外に開く浅鉢型土器。もしくは皿型土器。

E類：底部より少し上まで垂直か内彎しながら立ち上がりその上で大きくて外に開く浅鉢か皿型土器。

F類：底部断面形がやや丸底を呈し、椭型土器となる。

以下の表は、以上の器形の割合と、底部より器形が判明する個体の胴部の施文状況を一覧にしたものである。

胴部施文	A	B	C	D	E	F	計	%
繩文	29	32	46	2	1	—	110	31
条線	12	27	4	—	—	—	43	12
無文	30	8	17	13	7	3	78	22
隣帶等	5	1	2	1	—	—	9	3
施文不明	29	24	51	8	1	—	113	32
計	105	92	120	24	9	3	353	—
割合 %	30	26	33	7	3	1	—	100

第3表 底部器形分類

第2表 底部残存状況

残存状況	割合
9/10以上	5%
3/4前後	3%
1/2前後	8%
1/4前後	40%
1/10前後	23%
径不明	21%



A類



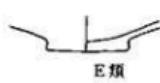
B類



C類



D類



E類



F類

第80図
底部の断面形態

本遺跡出土土器は、縄文中期後葉～後期を中心としており土器底部の大半もこれに属すると思われるが、底部から時期等を推察することは困難な状況にあるので、特に胴部が残存している底部からその特徴に若干の考察を加えておく。

深鉢の底部と思われる個体が89%を占めるが、中でもA類・C類が63%と特に多くなっている。A類とC類は底部より類推しうる器形は基本的には類似している。しかし、底部断面形態に相違が認められ、ここでは別類として扱った。土器製作過程においての相違とも考えられるが、本遺跡ではそれを明確に示す資料は得られなかった。

前記のように上器の全体を明らかにする個体は少ないため、底部断面形態と胴部施文方法との相関関係を述べるには危険が伴う。しかし、次の点は指摘できる。胴部の地文に縄文を用いる深鉢は3割以上あり最も多くなっているが、特にC類での比率は4割近くを占める。また、棒状工具による継位の条線を施文してある例はB類に多く(43例中27例)、反対にC類は4例のみと少ない。また、B類は地文に条線や縄文を施文する例に比べ、無文の土器が少ない。もっとも、深鉢に関しては残存している部分より上(胴上部)での施文が不明である点を考えると無文土器として分類はできない。しかし、A類やC類において胴下半部の無文土器が多いのに比較してB類が少ない事実は指摘でき、底部断面形態と施文方法の相関関係はこの点でも注目できる。

B類の土器は胴部の施文の特徴から、中期後葉の七器群に属すると思われる。

底部より少し上に横位の隆帯を貼り付ける土器は第71図(3群1類)に示される上器と考えられるが、この底部断面形態はA類かC類の聞く器形である。

D・E類の浅鉢は無文のものが大半を占め、中には研磨されている上器も含まれる。

底部直径	A	B	C	D	E	F	計
4cm未満	3		1				4
4~6	5	2	1	4	1	3	16
6~8	22	12	29	16	3		82
8~10	23	21	21	3	3		71
10~12	22	28	14		2		66
12~14	7	4	4				15
14~16	3	1	2				6
16cm以上	1		1				2
計	86	68	73	23	9	3	262

第4表 底部器形別直径

また第4表は、断面形態別にみた底部の直径である。小片で直径が不明のものはこの分類から除外してある。

底部の直径は7~12cmに集中している。A類はこの中で偏りはないが、B類は比較的大きな直径の底部をもつ。反対にC類は小さな直径の底部をもつことに特徴がある。

また、A類に含めた直径6cm未満の土器は大半がミニチュア土器と思われる底部である。

浅鉢D類では径の小さなものが多いが、D類にはその特徴はみられない。

②底部圧痕分類（文章中〔 〕は第83図の遺物番号）

底部圧痕の種類を（不明の個体も含めて）以下のように分類した¹⁾。

A類：網代圧痕と呼ばれるもので、編み方によりA a類からA g類まで7

種類に細分した。編み方については、各条の間隔が密な方を「経」間隔が広い方を「緯」とし、「経」の条に対する「緯」の条の編み方を「超え」「潜り」「送り」で分類した²⁾。

A a類：「1本超え、1本潜り、1本送り」を基本的な編み方とする。

a 1：1本超え、1本潜り、1本送りのみ。〔1・2・3〕

a 2：a 2に1条～3条、縄条を巻いた条がある。〔4〕

A b類：「2本超え、2本潜り、1本送り」を基本とし3類に分類した。

b 1：右へ1本送る。〔5〕 b 2：左へ1本送る。〔6〕

b 3：b 1もしくはb 2を2本組で編む。〔7〕

A c類：「2本超え、1本潜り、1本超え、2本潜り、1本超え、1本

潜り、1本送り」経の条が「2本超え、2本潜りで1本送りと2本送りが交互」になる編み方を基本とし送る向きを変えて編んでいる。本類の破片には、右もしくは左のみに送る例もあり

本末は細分すべきかもしれないが、底部の半分以上残る個体では単独のものが存在しなかったので全てこの類に含めた。〔8・12・13〕

A d類：「2本超え、1本潜り、1本送り」で以下の2類に細分した。

d 1：右へ送る。〔14〕 d 2：左へ送る。〔9〕

A e類：「3本超え、2本潜り、2本送り」〔10〕

A f類：「2本超え、4本潜り、1本送り」〔15〕

A g類：「一続きの網代に2種類の編み方」〔19〕

B類：スダレ状圧痕。〔11・16〕

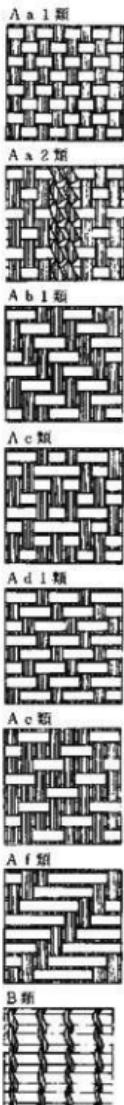
C類：「アンギン」に類似する圧痕がある。ただし組織の火態は不明。〔17・18・21〕

D類：葉脈圧痕。網状脈圧痕をD a類〔23・24〕、平行脈圧痕をD b類〔20〕と細分した。

E類：底部の圧痕が不明なものうち、磨消もしくはナデのあるもの。

F類：底部が磨滅し、判断できない個体。この場合、胸部も磨滅している個体が多く、使用等による磨滅などの判断はできない。

第5表は、圧痕分類別の総数と原体・器形を分類した一覧表である。



第81図
底部圧痕の模式図

第5表 底部形状一覧

分類	個数	割合%	原体分類 形			原体分類 幅			底部断面形態分類						底部直径 の平均cm
			I	II	III	I	II	III	A	B	C	D	E	F	
A a 1	108	30.6	16	26	10	37	16	34	14	27	22	2			11.1
A a 2	4	1.1		2	1		1	3		3					8.1
A b 1	28	7.9	11	7	10	6	4	18	7	3	6	1	3		10.3
A b 2	26	7.4	5	3	13	1	6	16	5	3	7	2			9.1
A b 3	6	1.7			6	1		5	1	1					8.1
A c	76	21.5	9	37	11	28	21	15	10	10	8	1			12.2
A d 1	11	3.1	9		3	2	1	6	3		4	1	1		10.5
A d 2	4	1.1	2			2	2			1	1				
A e	1	0.3	1			1				1					11.0
A f	1	0.3			1			1							
A g	1	0.3	1				1				1				17.0
A 不明	160								42	34	45	5			
B	2	0.6									2				10.0
C	7	2.0							3		1				10.4
D a	7	2.0								1	3	1			9.0
D b	9	2.5							1	1	6				7.4
ナ デ	62	17.6							14	2	12	6	5	3	7.6
不 明	23								5	5	3	4			
合 計	536		54	75	56	78	51	99	105	92	120	24	9	3	

○材料 I 類：やや硬質な感じを呈するもので、圧痕が長方形となる

II 類：やや軟質な感じを呈するもので、圧痕が角丸長方形となる

III 類：双方を組み合わせている場合（経縫はどちらかで統一されている）

○幅 I 類：材料の幅が3mm以下の細いもの

II 類：材料の幅が3mm～5mmのもの（5mm以上のものは確認できなかった）

III 類：双方を組み合わせている場合（経縫はどちらかで統一されている）

○割合は圧痕の判明する個体（353例）に占める割合を示した。

③圧痕別の特徴

A a 類：本類は経条は全て密接に編まれているが、縫条が密接な例は少ない。材料はI類やII類のみのものは少なく、経条にはやや薄い材料を用いて、縫条には断面がやや丸い材料を用いている例が多い。器形としては深溝が主体であるが、特に底部から直角に立ち上がる器形が多いのが特徴である。a 2 類〔4〕は経条を巻いている例で3例あるが、1例は経条を織ぎ足した部分にこの編み方が使われている。また、a 1 類の〔2〕は2方向から編まれ、縫条が順次増えている。

A b 類：経縫との密接に編まれている例が多く、材料がやや硬質な質感のものがa類より多い。縫部には条線をもつと思われる例ではなく、縫文が多い。また、器形の分かれる個体ではB類がなく、底部の直径も全体的に小さい個体が多い。b 3 類は全て材料がII類であり、

幅も1例を除きやや細い材料を用いている。

A c類：比較的底部の直径の大きいものが多く、底部の器厚も厚い個体が多い。器形A・B類が多いことも注目できる。材料はII類は少なくやや偏平な硬質の材料を用いているものが多い。「送り」の向きは5段程度で変えるものや10段程度で変えるものなどあり、一定ではない。

A d類：縫条の間隔が広いのが13例中7例と半数以上を占める。器形的にはA類の中でも特に外へ開く例が多い。材料の幅が全体に広いものを用いている。

A e類：1例。底部はほぼ完形で器形はB類で胸部に縦の条様が施されている。経縫とともに密で細く薄い材料で編んでいるが、縫条の方がやや幅の狭い材料を用いている。

A f類：1例。小片のため全体は不明である。材料はII類を用いている。

A g類：1例。A b類とA d類が編まれている。ただし、破片資料で全体は不明である。

その他：編み方不明の遺物の内、上記の例には属さない例もあるが、全体が不明で新たな類を設けられなかった例もある。「1本潜り、2本超え、1本潜り、4本超え、1本送り」の編み方が見られる例や、縫条が順に「2本潜り、3本潜り、4本潜り」と増える部分がある〔25〕など、ある程度規則性をもって編まれている。〔22〕は経縫の糸に斜めの条が加わって三方編みの如く見受けられるが、重複した圧痕と判断した。同例は4例ある。C類圧痕の〔23〕も重複した圧痕であり、製作途中で上器を移動させている。

B類：2例。〔16〕は縫条に幅2mm程の薄い材料を用いている。経縫には1mm程度の細い糸状のものでモジリ編みしている。縫条は水平ではなく、ヒドに斜めになっている条が多いが、経縫の編み方によるものと思われる。〔11〕例は縫条が3.5mm程の間隔で編み込まれているが、押圧が強く圧痕がつぶれているため全体の様相は明瞭ではない。

C類：〔17・21〕に示すものは6例ある。「アンギン」圧痕と呼ばれるものに類似しているが、縫条の単位が互い違いになっている部分がなく組織の実態は不明である¹⁵⁾。ヨコは約0.8mmの太さの糸が密接に並び、タテは約2.5mmの糸？が約5mm間隔で並ぶ。〔18〕はヨコが約1.5mmの糸が3.5mm間隔で並び、タテは推定3.5mmの糸？が約6.5mm間隔で並ぶ。これは一部で「モジリ編み」と思われる部分も見られ、〔17〕等に示す例とは別類の（B類）可能性もあるが、縫条が密接である点で本類に含めた。

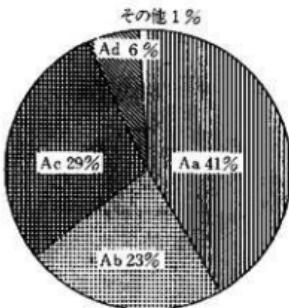
D類：D a類は網状圧痕が残る例で7例ある。底部の径が大きいものは葉も人きいものを使っている傾向が見られる。2例は網代圧痕と重複しているが〔23〕、前後を明確に判断できない。またD b類はササの葉状の平行脈圧痕の残る例で9例ある〔20〕。中心に太い葉脈痕がある他は縦に細い繊維痕が見られる。この例では底部断面形態がC類で特に明確なくびれをもつものが多い。

E類：底部にナデや擦痕が見られる例。一部には網代圧痕の痕跡も残り、磨り消したものと思

われる。底部の直径が他の土器より小さく、浅鉢になるものも多い。また、径6mm以下の土器やミニチュア土器は全てこの類に含まれる。

⑤底部圧痕の特徴

網代圧痕を分類を類別にグラフ化したのが右図である。この図が示す通り、Aa類が4割を占め、最も多い編み方である。Ab類の底部断面形態ではB類が最も多く、また胴部（底部直上）有文土器が48例確認でき、内29例が条線を施文してある。Aa類の胴部有文土器のうち4割近くを条線の土器群が占めていることになる。断面形態で述べたこの条線の施文してある土器42例は、ほとんど網代圧痕をもち、かつAa類圧痕が7割を占めている点は多いに注目できる。



第82図 網代圧痕の比率

次に多いのがAc類で3割を占める。ただしAc類は縦条が「2本超え、2本潜り」を基本とした編み方であり、この点で経緯のとらえ方に問題も残るが、基本的にはAb類「2本超え、2本潜り、1本送り」の1つのバリエーションとしてとらえられる。この視点にたとえ「2本超え、2本潜り」を基本とする編み方は網代圧痕全体で60%ほどを占めることになる。反対に、中村遺跡や境A遺跡などで出土例が多いと報告されている「2本超え、1本潜り」(Ae類)は本遺跡では6%に過ぎない。この数字は桑飼下遺跡の比率に似た状況である。ただし、桑飼下遺跡では1割だったAb類(本遺跡分類Ac類)が本遺跡では3割近くを占める。当地方における報告例が少ないので在地性の強い編み方なのかは不明であるが、本遺跡の特徴であると言えよう。

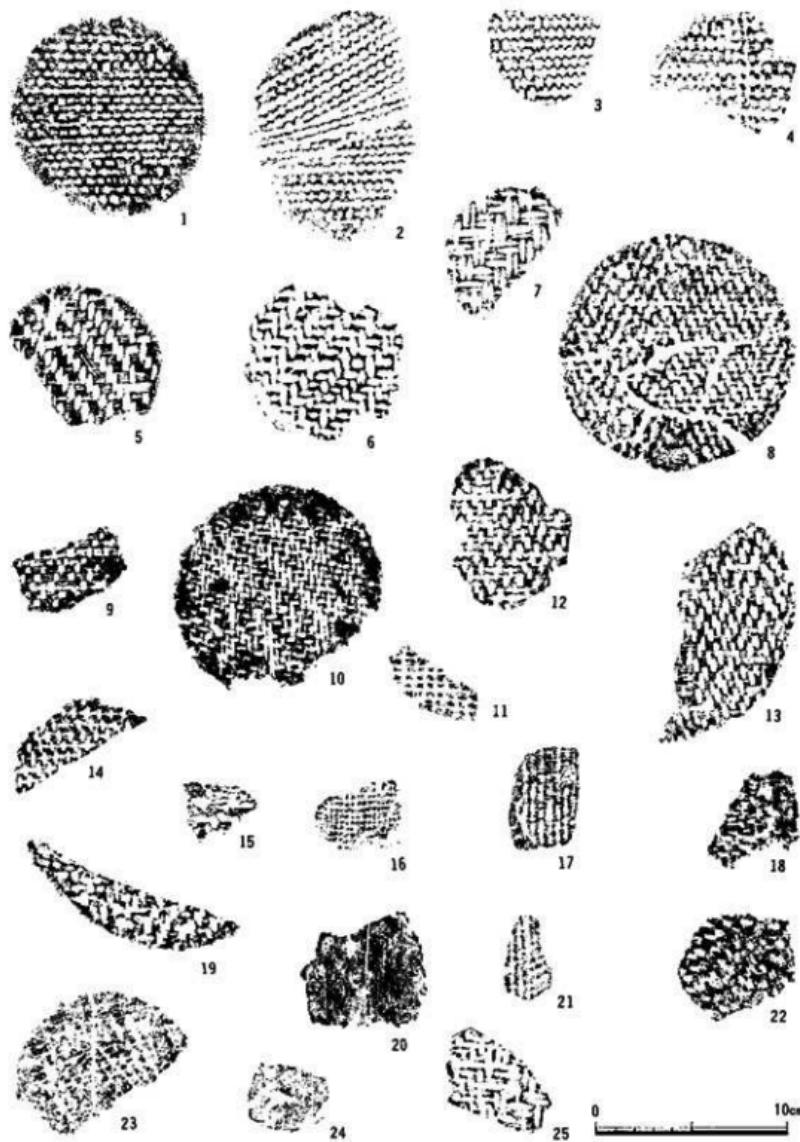
C類圧痕は実態が不明ながらも、荒城神社で6例4個体以上と多くの出土例をみたことは興味深い。この圧痕の出土例は、荒城神社遺跡で先に採集されている(国府町郷上館収蔵)他、丹生川村法力にある³⁾。

注 1) 分類は「桑飼下遺跡」の報告を基にした。

2) 分類は「桑飼下遺跡」の報告を基にした。ただし、桑飼下遺跡の種類は経緯を反対にすると本遺跡のAc類と類似するなど、経緯の見方に相違があると思われる。

3) 「縦条」が密接になるという見方もあるが、通例に従った。渡辺誠氏から、今後の民具等の研究の進展により経緯が逆転する可能性も示唆されている。

4) 5) 渡辺誠氏により研究が進められている点であり、同氏よりご教示頂いた。



第83図 土器底部

第4節 石器

遺構出土の石器

荒城神社遺跡出土の石器について、器種別の説明は後述する。また、石器一覧表とともに、遺構別の石器一覧表（第12表）も掲載した。従って、ここでは、図示した石器類のうち、各遺構ごとで、特徴的な出土状況のものや、特色ある遺物についてのみ説明を加えることとする。

第1号住居址（第84図1～17、図版64上）

第1号住居址は、明確なプランが明らかにできなかったので、炉およびその周辺から出土した遺物を掲載した。石鎚が14個と多く出土している。17は、炉から出土した磨石である。

第2号住居址（第85図19～21）

遺構の残存状態が悪く、出土遺物は少なかった。石鎚は19・21ともにチャート製で、抉り部がわずかに見られるタイプである。20の石錐もチャート製である。

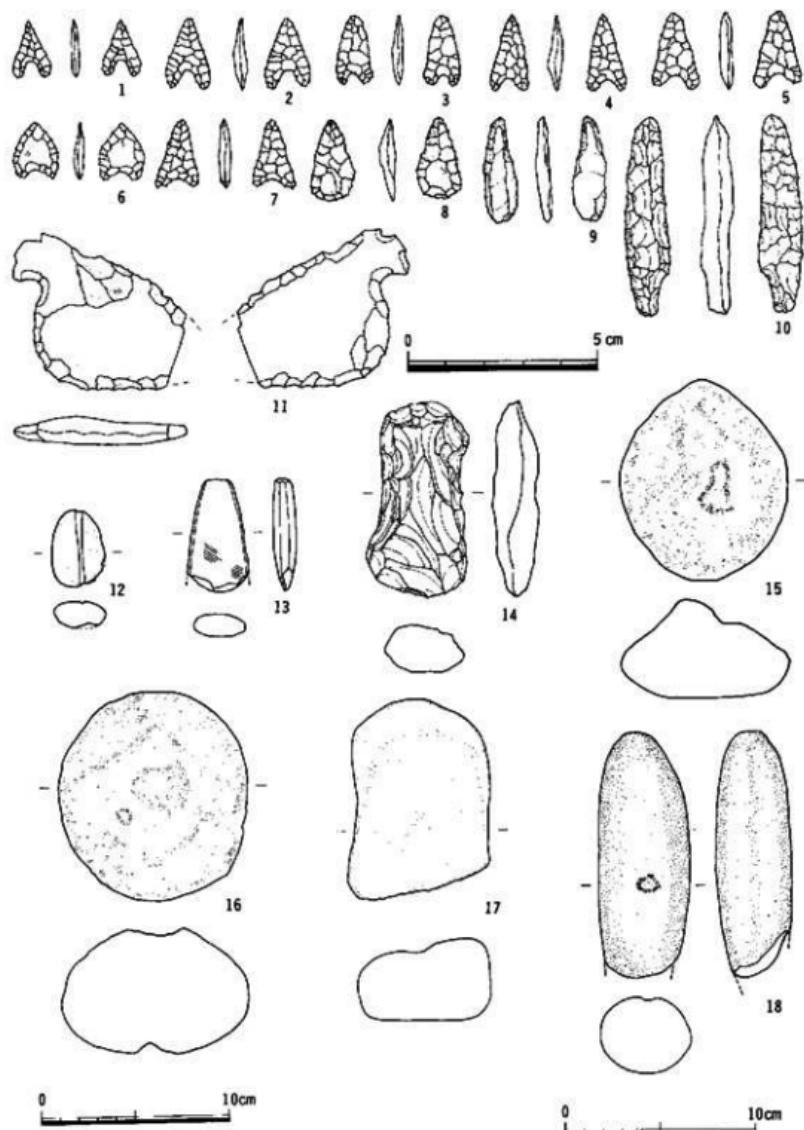
第3号住居址（第85図22～27）

打製石斧・磨製石斧・磨石類が出土している。隣接して検出された第4号住居址は、やはりプランが明確でなく、石器類の確認はできなかった。

B列SK出土の石器（第84図18、第86図、第87図46～53、図版64下左）

図示した石器を出土した遺構は、次の通りである。

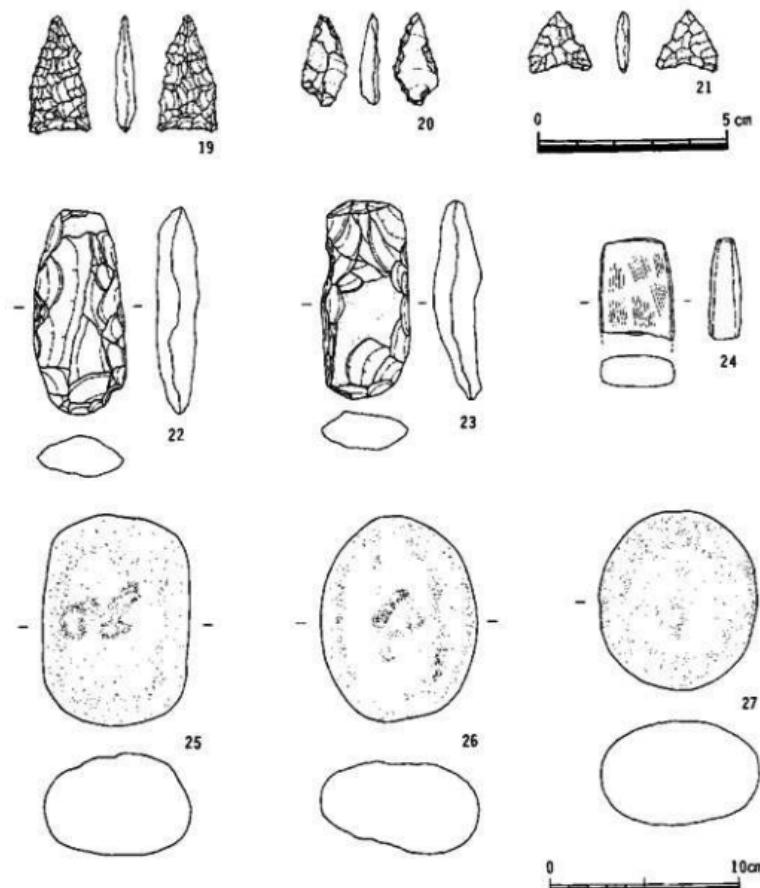
B - 3 SK 1 (18)	B - 8 SK 14 (36)
B - 4 SK 2 (28・29)	B - 8 SK 16 (34・35)
B - 4 SK 3 (30)	B - 9 SK 17 (37～39)
B - 4 SK 5 (31)	B - 9 SK 18 (40～45)
B - 6 SK 10 (32)	B - 14 SK 19 (46～52)
B - 7 SK 13 (33)	B - 14 SK 20 (53)
B - 3 SK 1 では、遺構検出段階で、18の石棒が直立しており、内部から玉（第108図2）が出土した。石棒は長さ26.1cmで径が約9.5cmと大型のものである。	
B - 7 SK 12 では、玉が出土しているが、これに関しては、石製装身具としてまとめて後述する。	



第84図 遺構出土の石器(1)

B-9 SK18では、石鏃4点、石錐2点等比較的多くの遺物を出土している。42の石錐はチャート製で、尖頭部が2か所見られる。

B-14 SK19も、ピエス・エスキュー2点、磨製石斧2点、磨石類4点等多くの遺物を出土している。



第85図 遺構出土の石器(2)

C列SK出土の石器（第87図54～58、第88・89図）

図示した石器を出土した遺構は、次の通りである。

C-7 SK 1 (55)	C-17 SK 2 (77)
C-7 SK 2 (54)	C-17 SK 3 (78)
C-7 SK 3 (56)	C-18 SK 1 (79～82)
C-8 SK 1 (57・58)	C-18 SK 2 (83～85)
C-10 SK 1 (62)	C-18 SK 3 (86)
C-15 SK 1 (59～61・63～66)	C-18 SK 6 (87)
C-15 SK 2 (72)	C-19 SK 1 (88～89)
C-15 SK 3 (67～71)	C-19 SK 2 (90～91)
C-17 SK 1 (73～76)	

C-7 SK 2 では、玉が出土しているが、これについては、後述する。

58は、石皿の破片である。C-15 SK 1 では、石鎌7点、磨石類2点等の遺物を出土している。63は、玉髓製の石錐である。C-15 SK 3 は、石鎌5点、磨製石斧2点、磨石類3点等の遺物を出土している。78は大型の磁石である。

D列SK出土の石器（第90図92・94、図版64下右）

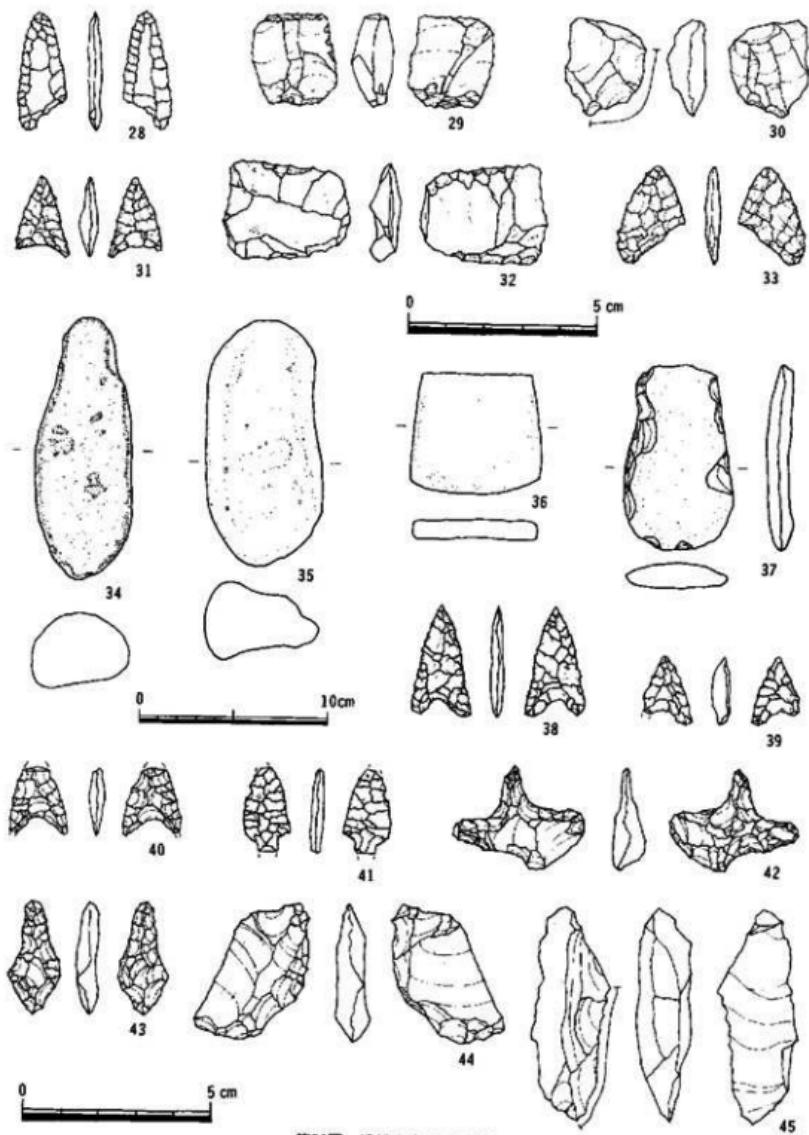
D-18 SK 1 から磨石（92）が出土した。後述するⅢd類の形態である。D-22 SK 1 は配石を伴う土坑であったが、94の石皿が大きく3つに割れて、伏せた状態で出土した。

ピット出土の石器（第90図93・95～112）

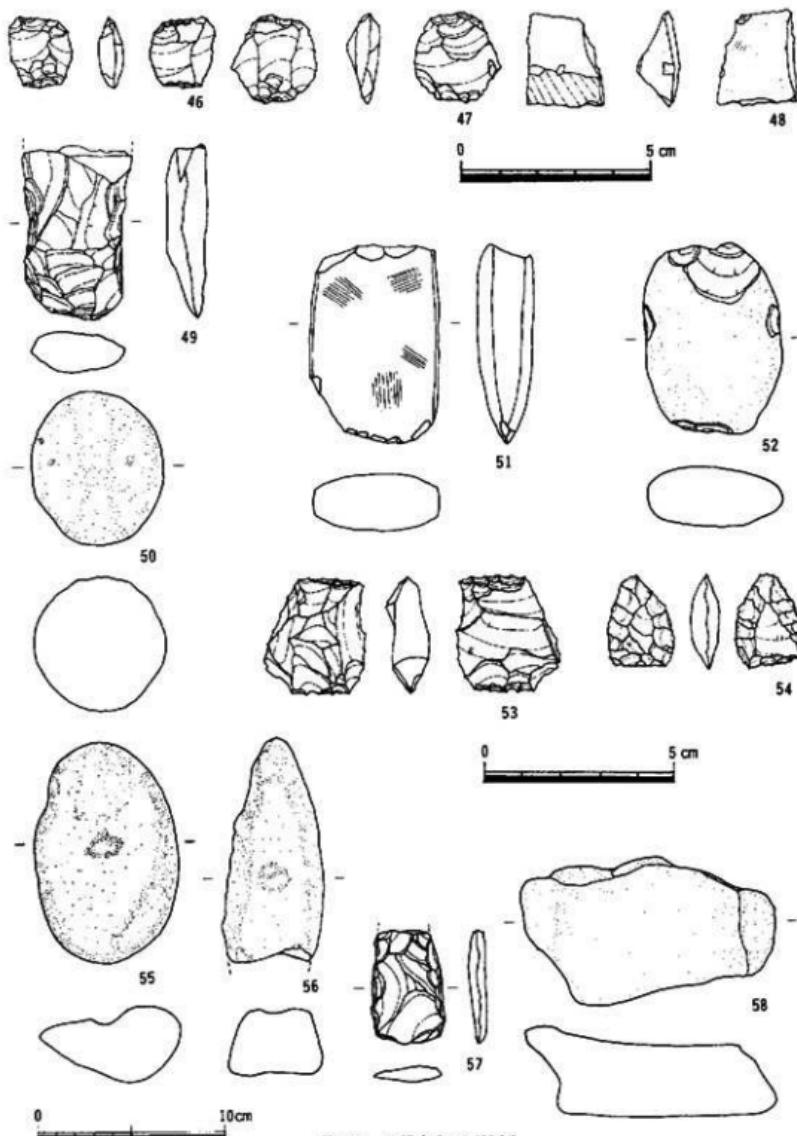
図示した石器を出土した遺構は、次の通りである。

B-12 P 25 (93)	C-16 P 54 (107)
B-15 P 31 (95)	C-17 P 9 (108)
B-16 P 36 (96)	C-17 P 23 (109)
B-16 P 38 (97・98)	C-17 P 61 (110)
B-16 P 40 (99・100)	C-18 P 16 (111)
B-18 P 46 (101～103)	C-18 P 44 (112)
C-16 P 29 (105)	C-19 P 2 (104)
C-16 P 35 (106)	

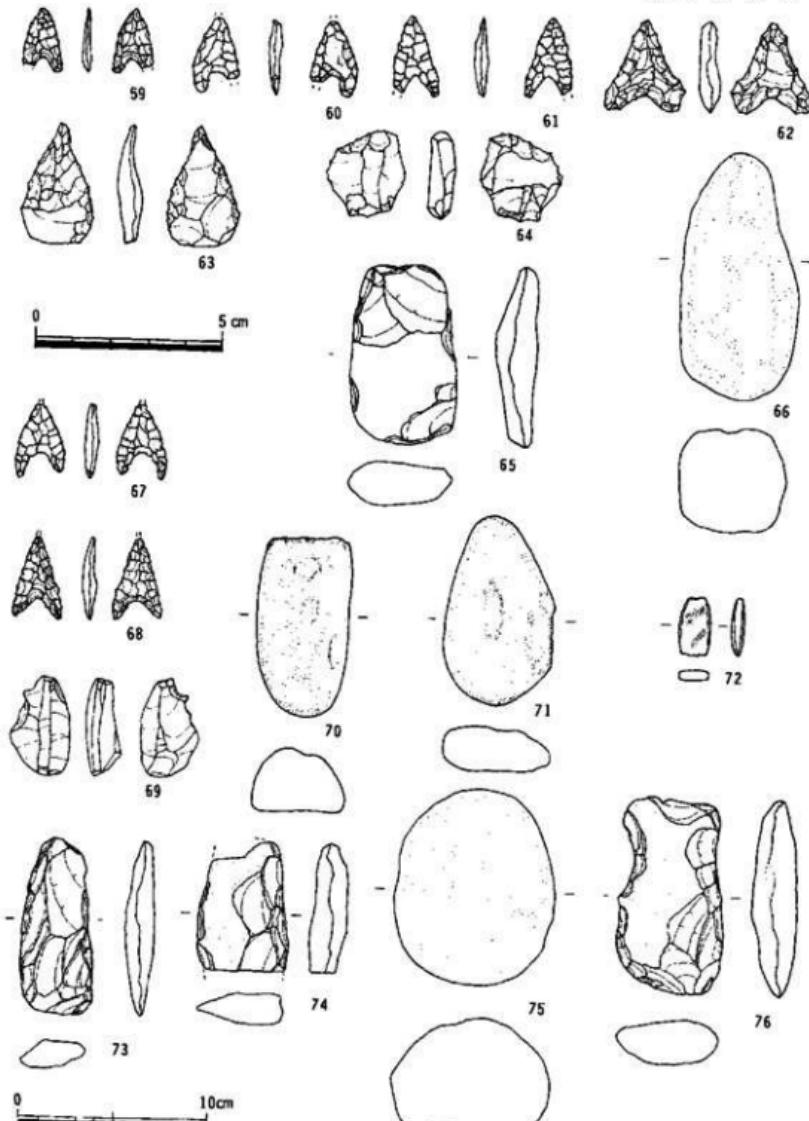
比較的遺物の出土量は少ないが、B-18 P 46では、石鎌が3点出土した。抉り部の深いものから浅いものまで各種のものがある。



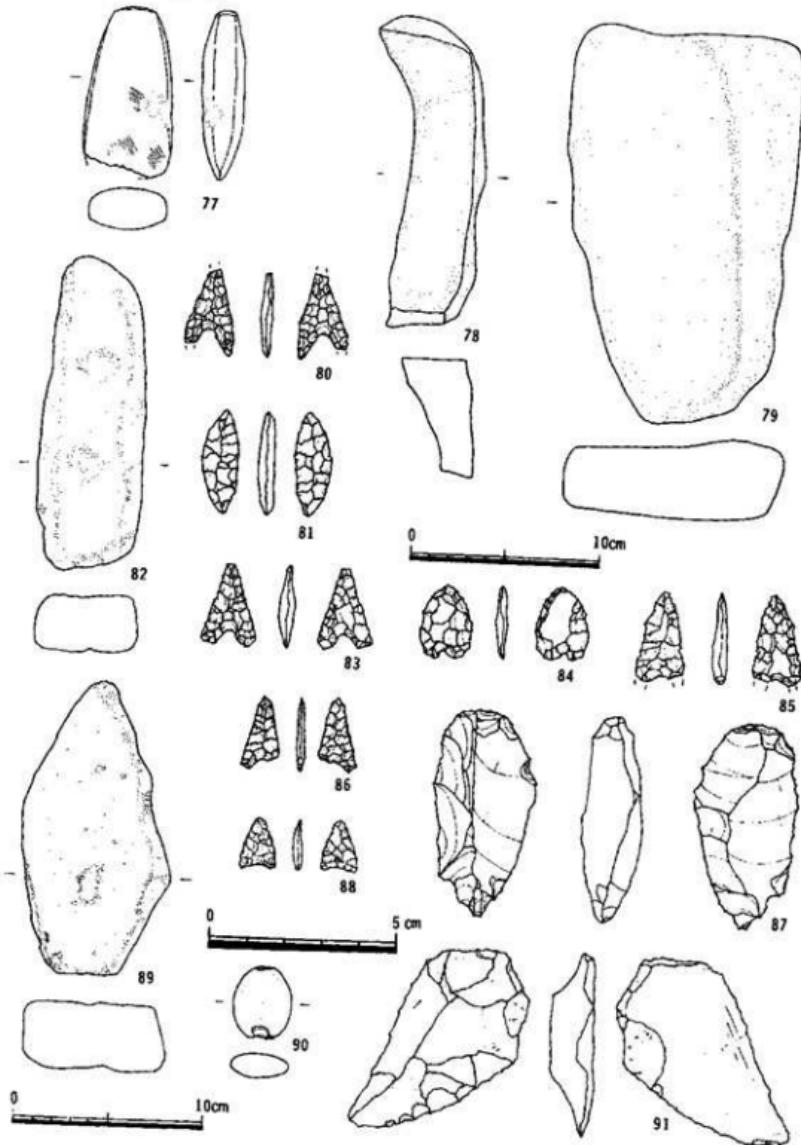
第86図 遺構出土の石器(3)



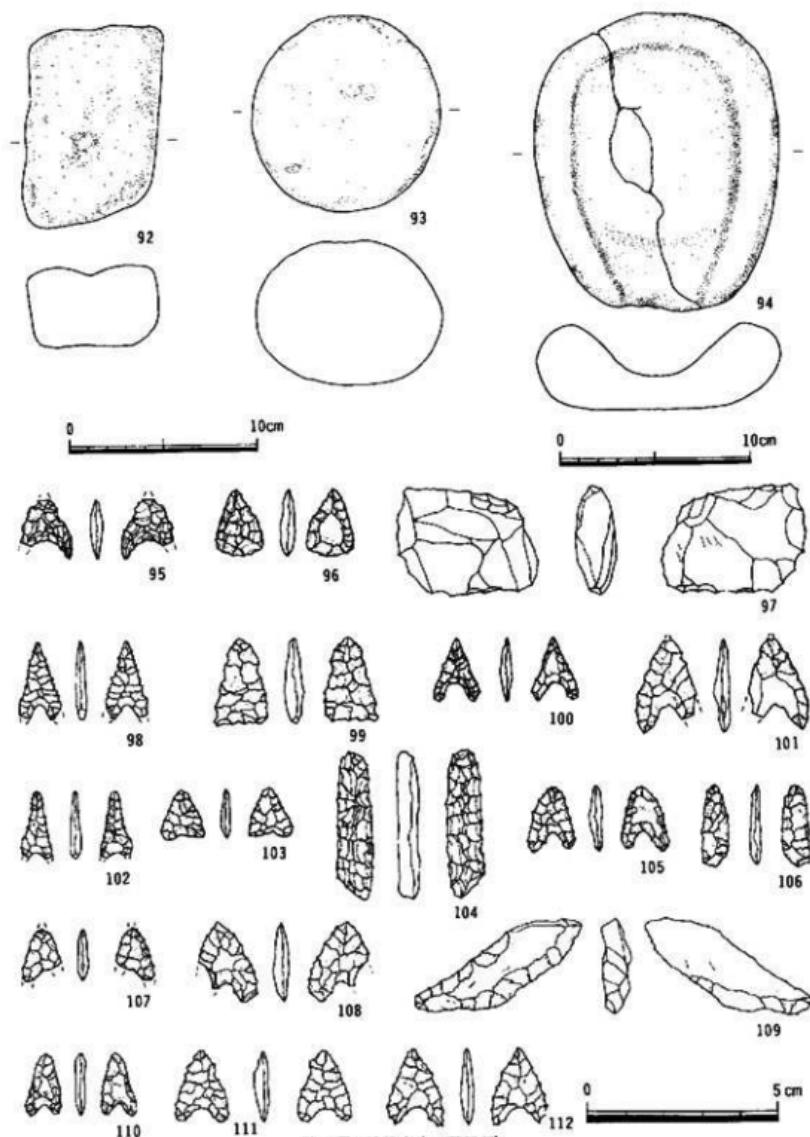
第87図 遺構出土の石器(4)



第38図 遺構出土の石器(5)



第89図 遺構出土の石器(6)



第90図 遺構出土の石器(7)

包含層出土の石器

遺構および包含層から出土した石器類の総数は、約9300点である。遺構出土の石器類については前述したが、ここでは、遺構出土のものも含めて器種別に記述する。

石器（第91・92図、図版65）

総数372点である。石材は、下凹石277点（74.5%）、チャート47点（12.6%）、黒曜石26点（7.0%）、玉髓20点（5.4%）、その他2点（0.5%）である。石材の組成は飛騨地方の他の遺跡の例と比較すると、下凹石・チャートに関しては、同様の割合であるが、黒曜石が比較的少なく、玉髓が多い。後者については、石材供給地が近い点が指摘できる。また、この二者を合計すると、他の遺跡の黒曜石の割合に近似する¹⁾。

形態に関しては基部に着目して、次のように分類する²⁾。

I類（1～33） 基部に抉りの入るもので、次のa～eに細分する。

I a類（1～12） 丸みを帯びた深い抉り込みが入るもの。

I b類（13～15） 「く」の字状の抉り込みが入るもの。

I c類（17～23） 半円形のわずかな抉り込みが入るもの。

I d類（24～30） 凹状のわずかな抉り込みが入るもの。

I e類（31～33） 深く鋭角的な抉り込みが入るもの。

II類（34～37） いわゆる平基盤であり、基部が直線状をなすもの。

III類（38～39） いわゆる円基盤であり、基部側が丸みを帯びて突出するもの。

IV類（40～42） いわゆる有茎盤であり、基部に茎をもつもの。

石材と形態の関係については、第6表で示した。I a類が高い比率を占めているが、チャートと黒曜石では、比較的その比率が低く、IV類が多く見られる。

第6表 石器の石材と形態

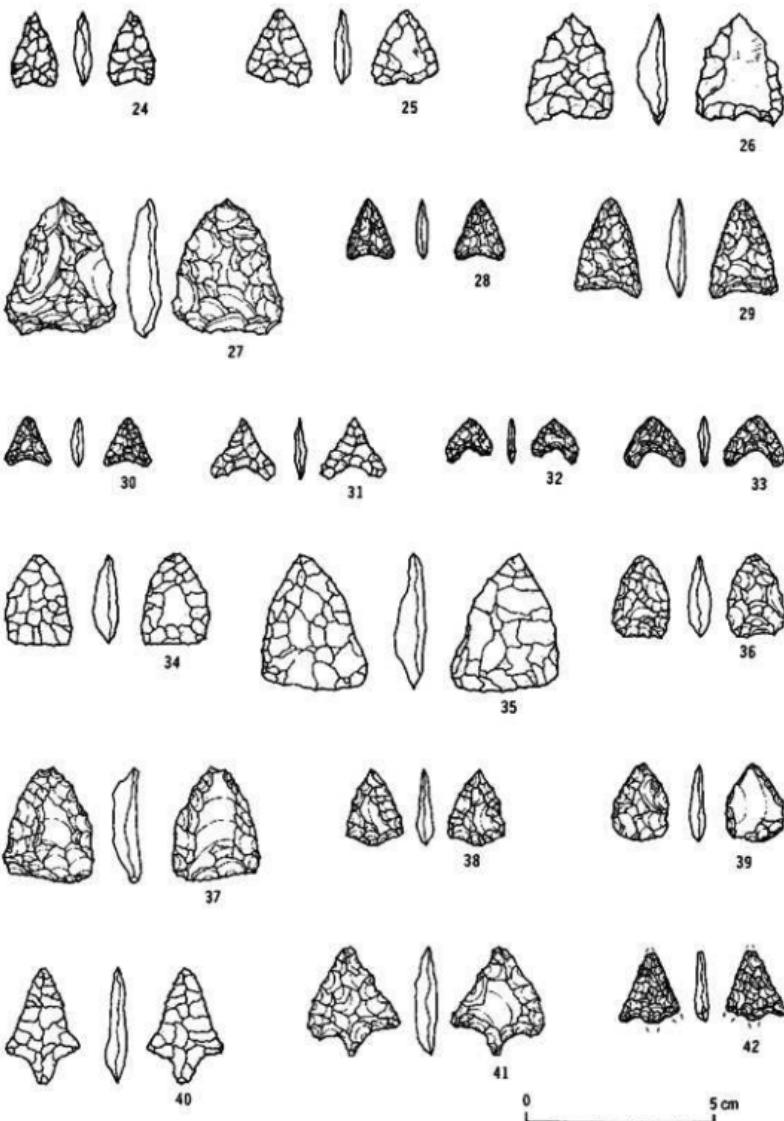
	I a類	I b類	I c類	I d類	I e類	II類	III類	IV類	不明	合計
下凹石	115 (41.7)	12 (4.3)	61 (22.1)	25 (9.1)	2 (0.7)	11 (4.0)	5 (1.8)	26 (9.4)	19 (6.9)	276
チャート	14 (29.8)	0	11 (23.4)	3 (6.4)	1 (2.1)	2 (1.3)	1 (2.1)	14 (29.8)	1 (2.1)	47
玉髓	9 (45.0)	1 (5.0)	2 (10.0)	2 (5.0)	1 (5.0)	0	2 (10.0)	0	3 (15.0)	20
黒曜石	7 (26.9)	3 (11.5)	5 (19.2)	2 (7.7)	1 (3.9)	0	0	4 (15.4)	4 (15.4)	26
その他	0	0	0	1 (50.0)	0	0	0	1 (50.0)	0	2
合計	145 (39.1)	16 (4.3)	79 (21.3)	33 (8.9)	5 (1.3)	13 (3.5)	8 (2.2)	45 (12.1)	27 (7.3)	371

() 内は%。石材ごとおよび合計について、形態別に計算したもの。



第91図 包含層出土の石器(1)

146 第4節 石器



第92図 包含層出土の石器(2)

石錐（第93図43～57、図版66上）

総数96点である。石材は、下呂石43点（44.8%）、チャート38点（39.6%）、玉髓13点（13.5%）、黒曜石1点（1.0%）、その他1点（1.0%）である。石錐に比べて、下呂石・黒曜石の比率が低く、逆に、チャート・玉髓の比率が高い点が指摘できる。形態は、次のように分類する。

I類（43～45） 剥片の一端に長い尖頭部を作り出し尖頭部と基部（つまみ部）の機能の分化が明確なもの。

II a類（46～49） 棒状を呈し、基部と尖頭部の区分が不明瞭なもので、両端に尖頭部をもつもの。

II b類（50～55） 基部と尖頭部の区分が不明瞭なもので、尖頭部が一端にあるもの。

III類（56～57） 剥片の一部に先頭部を作り出したもの。

石材と形態の関係については、第7表で示した。II b類が多いが、I類のチャート、III類の玉髓の個数が比較的多い点を指摘することができる。後者については、加工しにくい石材と思われる点が関係するかもしれない。

第7表 石錐の石材と形態

	I類	II a類	II b類	III類	不明	合計
下呂石	2 (4.7)	14 (32.6)	21 (48.8)	1 (2.3)	5 (11.6)	43
チャート	9 (23.7)	2 (5.3)	19 (50.0)	0	8 (21.1)	38
玉髓	0	0	10 (76.9)	3 (23.1)	0	13
黒曜石	0	0	1 (100.0)	0	0	1
頁岩	0	0	1 (100.0)	0	0	1
合計	11 (11.5)	16 (16.7)	52 (54.2)	4 (4.2)	13 (13.5)	96

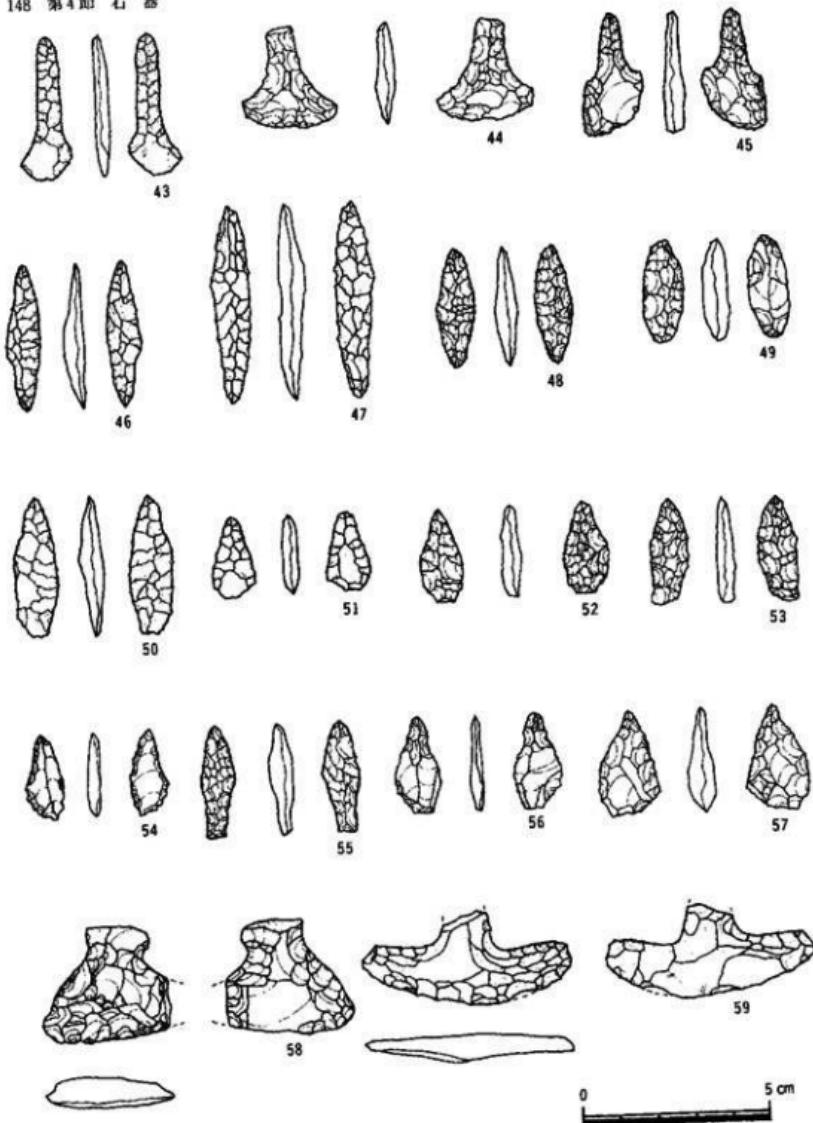
() 内は%。石材ごとおよび合計について、形態別に計算したもの。

石匙（第93図58・59、図版66上）

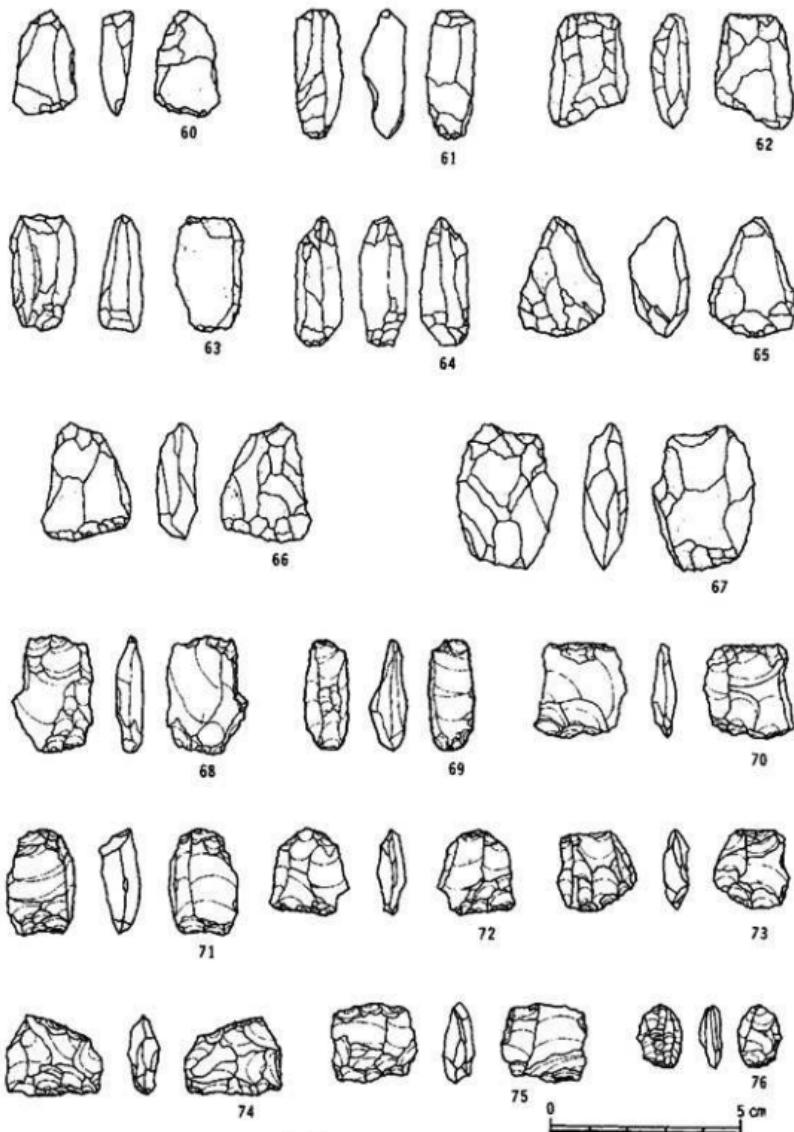
総数4点である。石匙は、一般に縦型と横型に分類されるが、すべて横型であった。石材は、下呂石2点、チャート1点、珪質頁岩1点である。

ピエス・エスキュー（第94図、図版66下）

総数71点である。石材は、下呂石34点（47.9%）、チャート12点（16.9%）、玉髓24点（33.8%）、黒曜石1点（1.4%）である。



第93図 包含層出土の石器(3)



第94図 包含層出土の石器(4)

ヘラ形石器（第95図77～82、図版66下）

やや分厚で寸ずまりの縦長剥片の両端を折り取り、その面をそのまま利用した狭小な側面をもち、長軸方向一端に刃部をもつ石器をヘラ形石器とした。総数は12点である。石材は、下呂石8点、チャート1点、玉髓3点である。

削器（第95図83～85、図版66下）

剥片の縁辺に連続的な調整によって刃部を作り出している石器を削器とした。総数18点である。石材は、下呂石7点、チャート11点である。玉髓製、黒曜石製のものが見られない。チャート製のものが多い点が注目される。

搔器（第95図86・87、図版66下）

急角度に調整された刃部をもつ石器を搔器とした。総数6点である。石材は、下呂石5点、チャート1点である。

抉りのある石器（第95図88、図版66下）

88は両面加工により抉り部が作り出されている。石材はチャートである。同様の石器として他に2点出土した。

R F（第96図89～92）

剥片に二次加工を施すが、刃部を形成していないものをRFとした。総数42点である。石材別では、下呂石が32点（89・90）、チャートが7点（91）、玉髓が3点（92）である。

U F（第96図93～96）

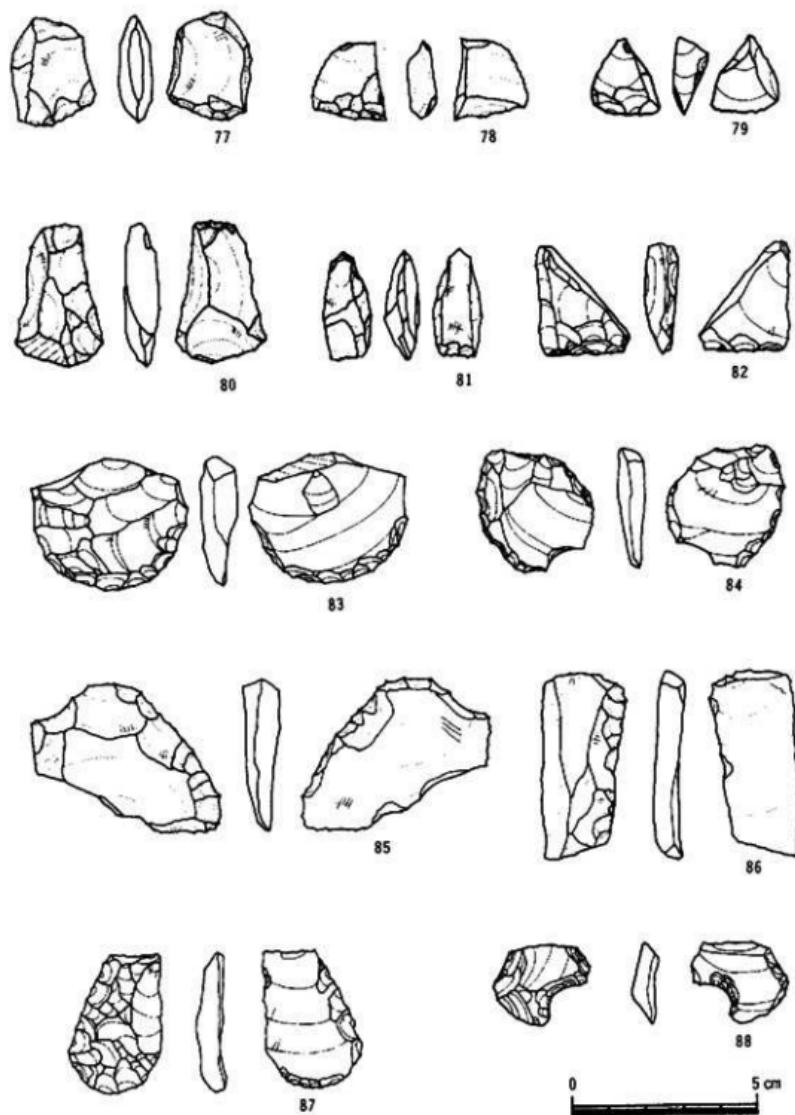
素材の脱い経過に残された剥離痕が「刃こぼれ」状を呈するものをUFとした。総数22点である。石材別では、下呂石が6点（96）、チャートが8点（93）、玉髓が6点（94）、黒曜石が2点（95）である。

石核（第96図97・98、第97図）

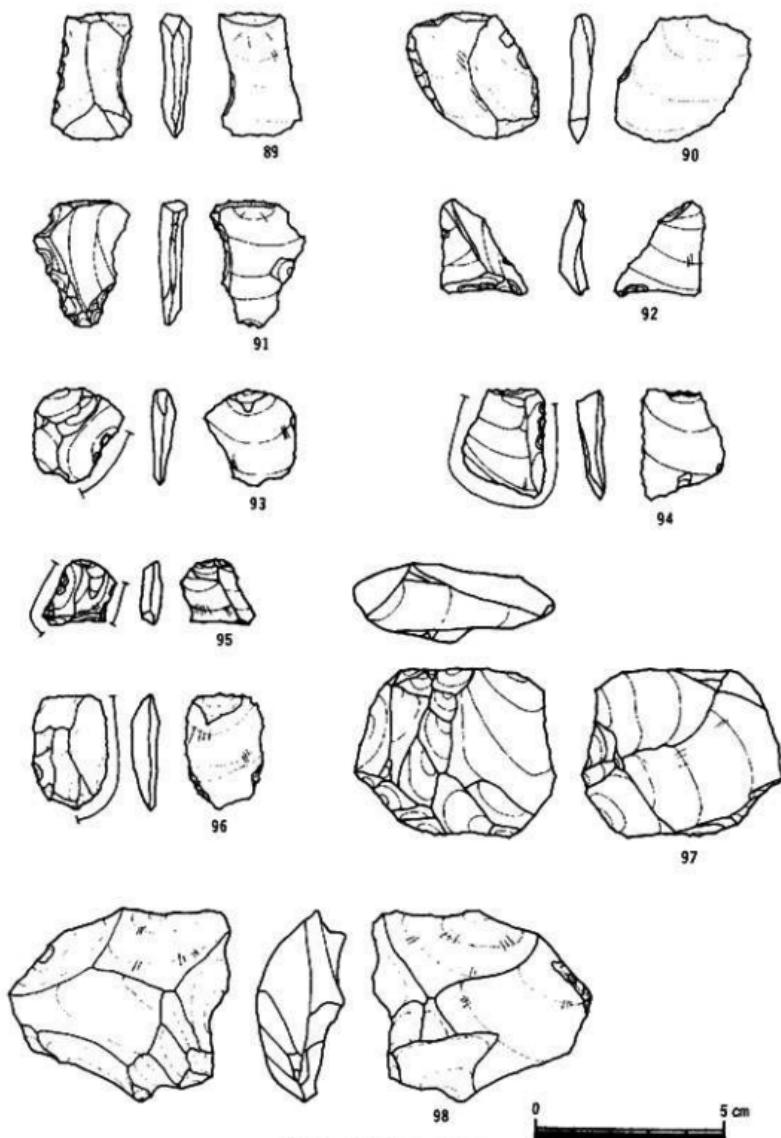
総数43点である。石材別では、下呂石が24点（98・99・101・102）、チャートが8点（100）、玉髓が9点（97）、黒曜石が2点である。

残核の形状から見ていくつかに分類できる。97・98は、厚手の板状剥片を素材とし、打面が転移し残核がレンズ状を呈する。

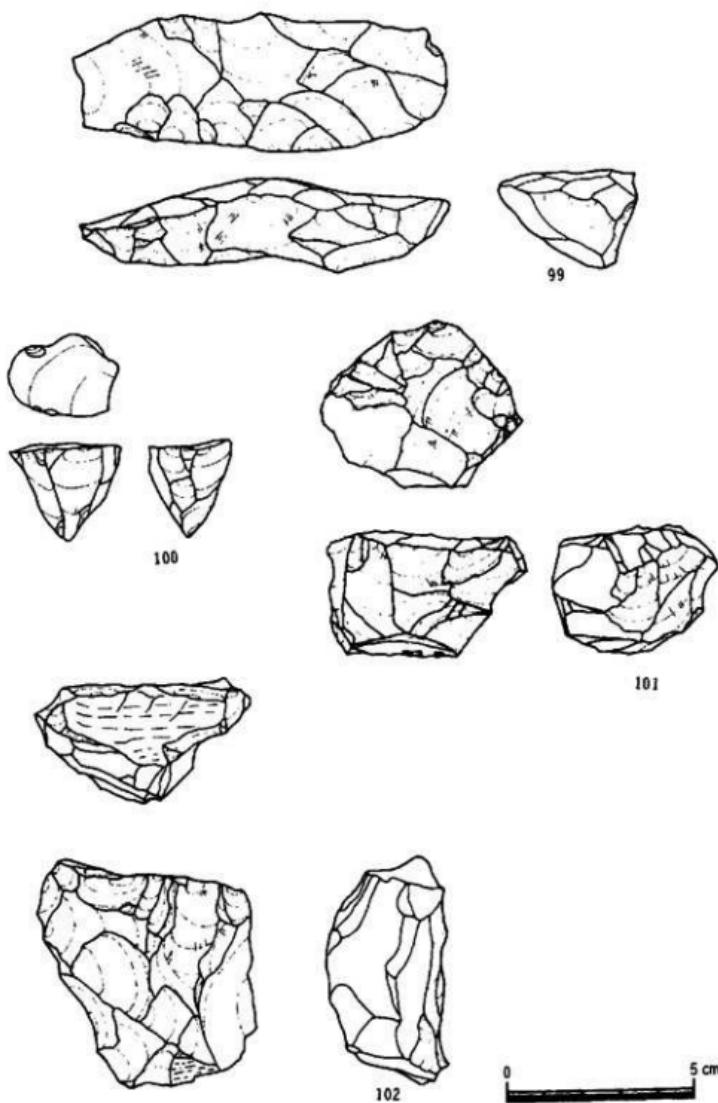
99は、長大な剥片を素材とし、平坦な剥離面を打面として同一方向の打撃によって剥片剥離



第95図 包含層出土の石器(5)



第96図 包含層出土の石器(6)



第97図 包含層出土の石器(?)

作業を行っている。

100は、打面を1か所に設定し、同一方向の打擊によって剥片剥離作業を行っているが、作業面が打面の全周にわたり、残核が円錐状を呈する。101は、円錐を分割したようなサイコロ状の剥片を素材とし、打面転移を行いながら剥片剥離作業を行っている。102は、円錐を分割したような厚みのある剥片を素材とし、打面転移を行いながら剥片剥離作業を行っている。

剥片

剥片類は、総数7,767点である。石材別では、下呂石3,488点(44.9%)、玉髓2,485点(32.0%)、チャート1,599点(20.6%)、黒曜石195点(2.5%)となる。重量の総計を出すと、下呂石10,311.0g(30.2%)、玉髓14,030.4g(41.1%)、チャート9,481.9g(27.7%)、黒曜石35.3g(1.0%)となる。つまり、産地がより遠くにある下呂石や黒曜石は小さな個体が多く、産地がより近い玉髓やチャートは大きな個体が多いといえる。

打製石斧 (第98・99図、図版67)

総数177点である。石材別では、凝灰岩153点(86.4%)、緑色片岩19点(10.7%)、砂岩4点(2.3%)、泥岩1点(0.6%)である。短冊形(A)、撥形(B)、分銅形(C)の3分類が一般的に行われている。形態別では、短冊形160点(90.4%)、撥形15点(8.5%)、分銅形2点(1.1%)となる。ただし、形態分類についてはやや曖昧さを残している。

磨製石斧 (第100・101図、図版68)

総数109点である。石材別では、蛇紋岩74点(67.9%)、凝灰岩33点(30.3%)、珪岩1点(0.9%)、ヒン岩1点(0.9%)である。形態分類としては、一般的に定角式と乳棒状の2種に分けられる。ここでは次のように分類する。ただし欠損品が多いので、I類の細分は推定のものもある。

I a類(128~136) 定角式の大型(6cm以上)のもの。

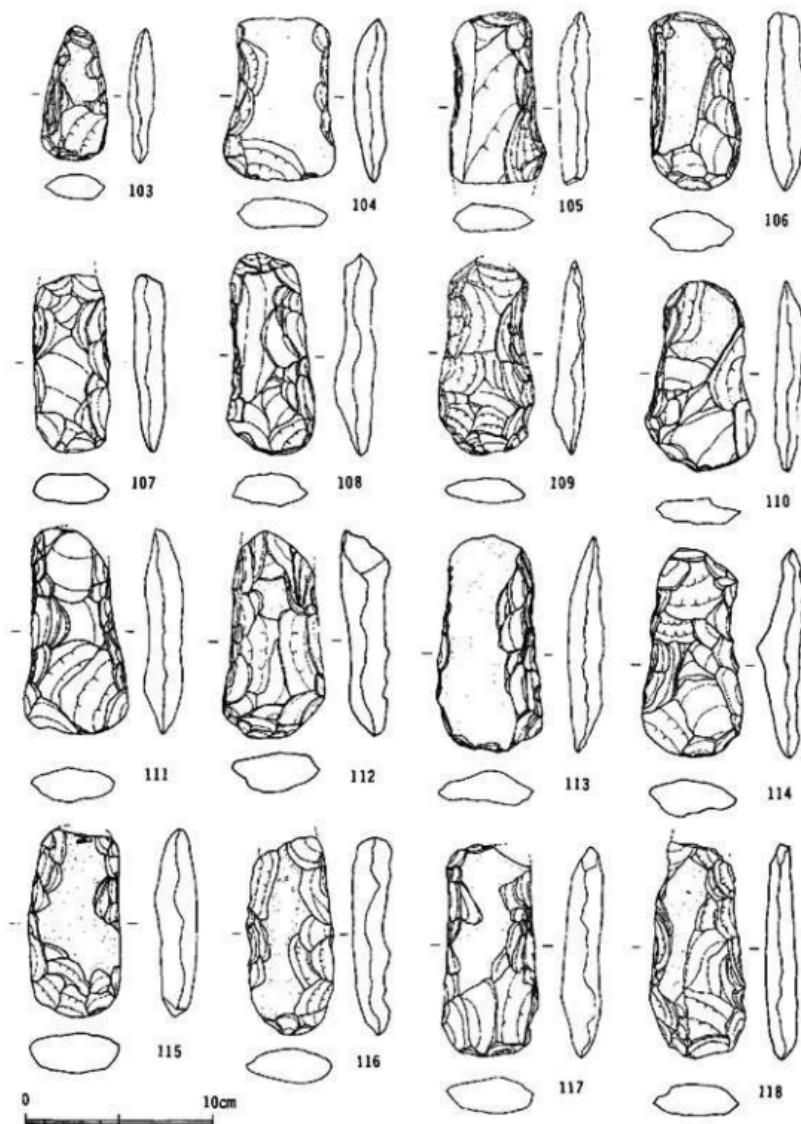
I b類(137~144) 定角式の小型(6cm未満)のもの。

I c類(145) 定角式でノミ形のもの。

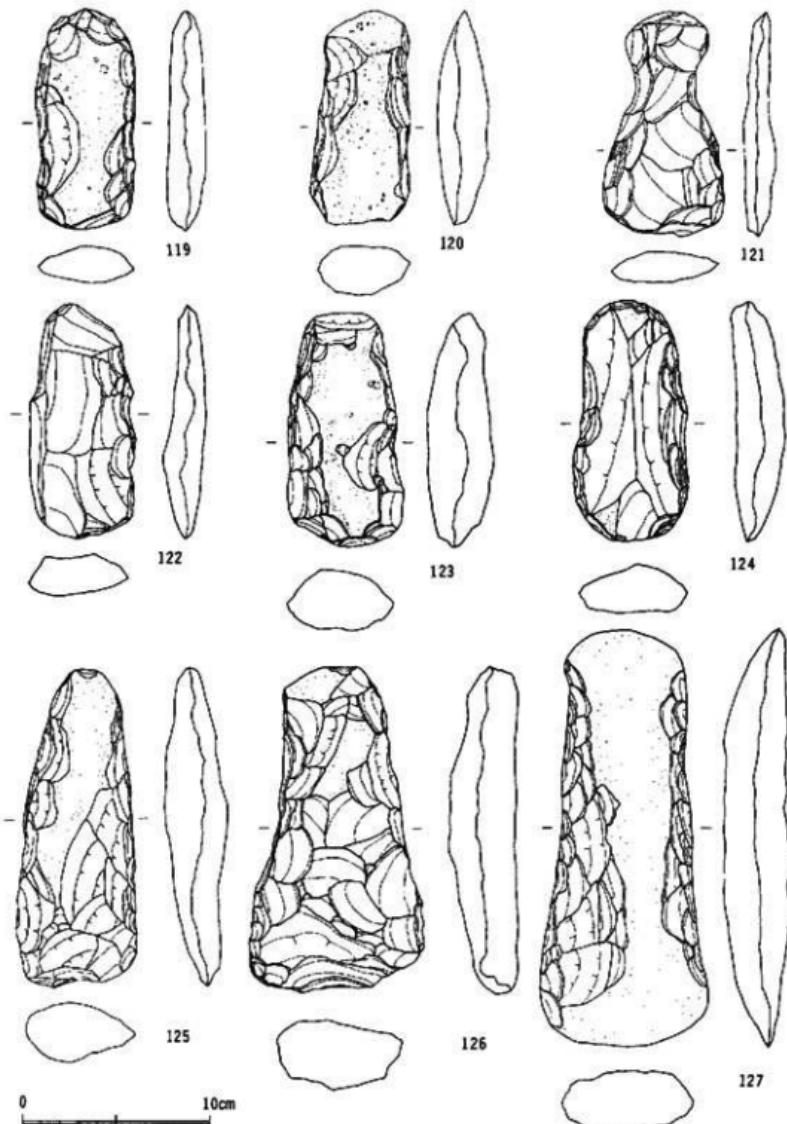
II類(146) 乳棒状のもの。

形態別では、I a類78点(71.6%)、I b類28点(25.7%)、I c類1点(0.9%)、II類2点(1.8%)である。凝灰岩製はI a類が29点と、やや大型品が多いのに対して、蛇紋岩製はI b類が25点と、小型品の比率が高くなっている。

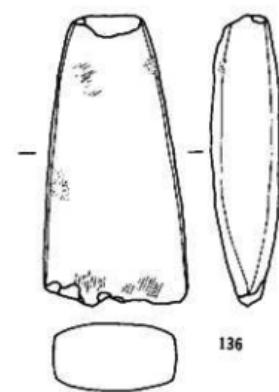
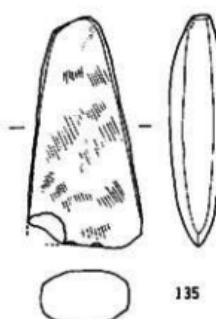
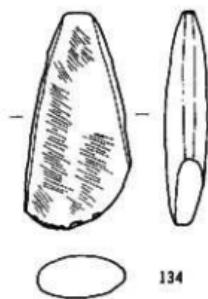
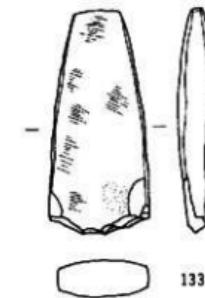
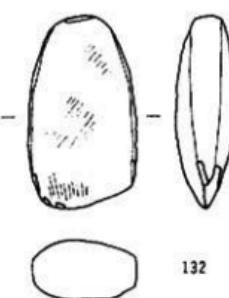
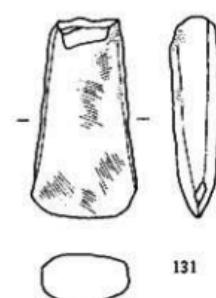
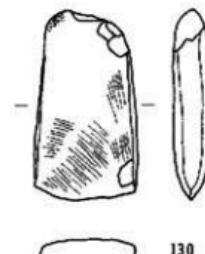
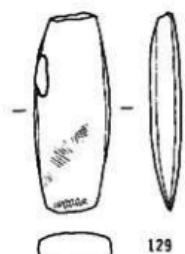
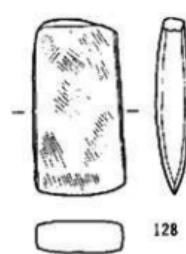
147は、両端に刃部を形成する、いわゆる両頭磨製石斧であり、特殊な用途が考えられる。長さ16.1cmで蛇紋岩製である。



第98図 包含層出土の石器(8)



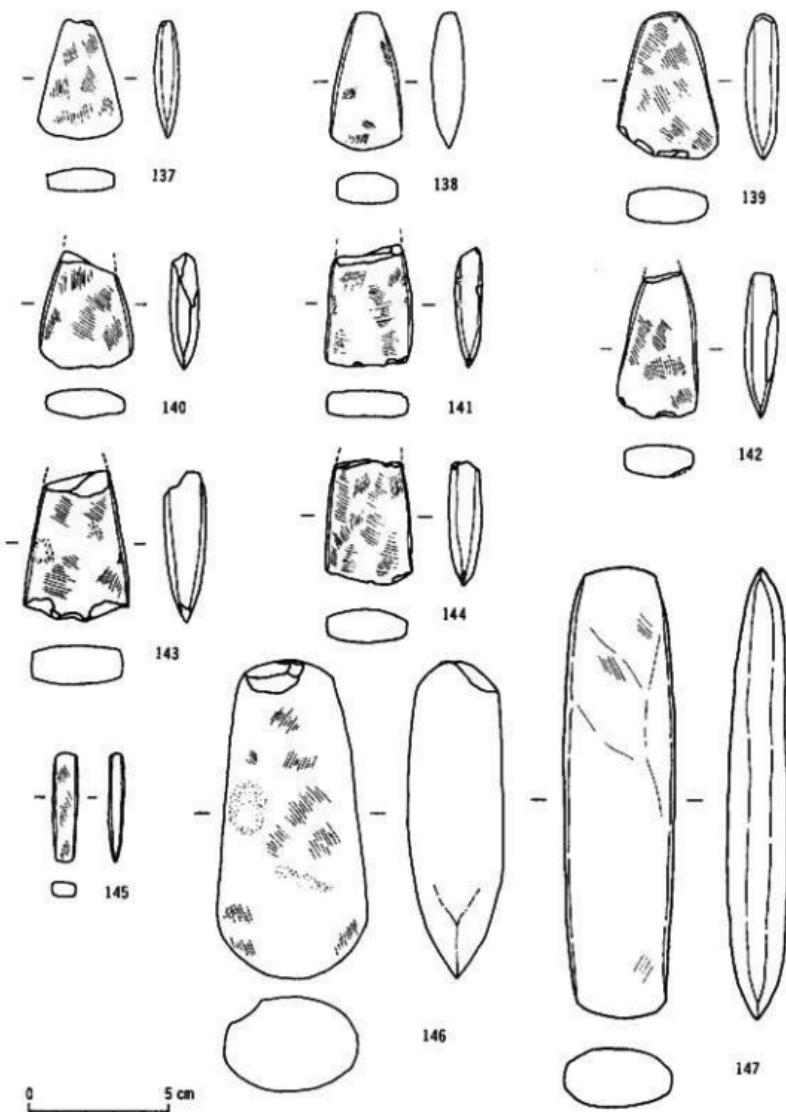
第99図 包含層出土の石器(9)



0 5 cm

第100図 包含層出土の石器(10)

158 第4節 石 器



第101図 包含層出土の石器(1)

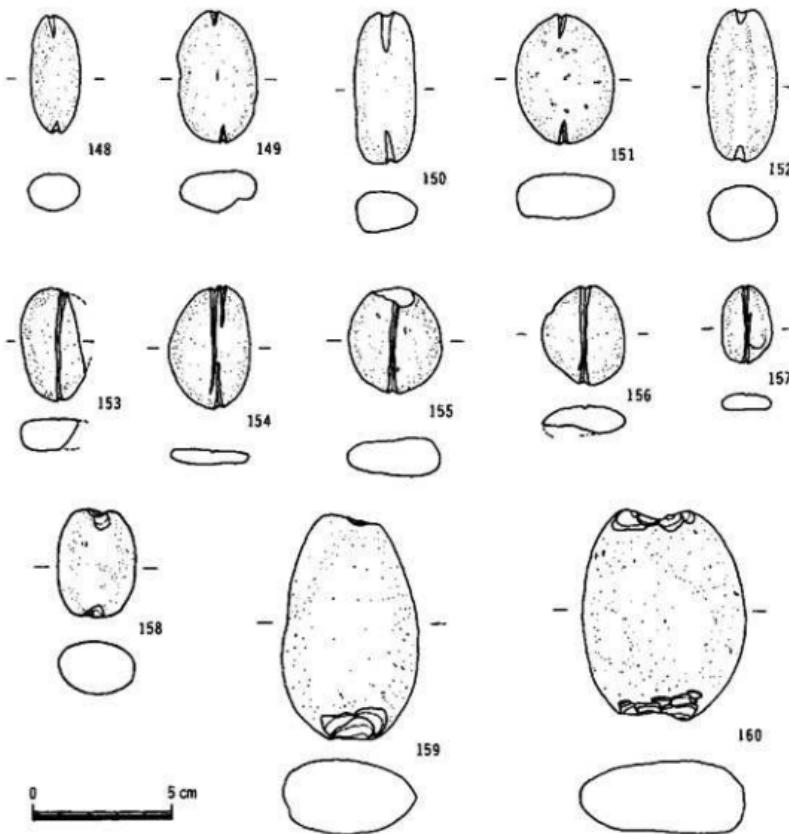
石錘（第102図、図版69上）

石錘には、切目石錘、有溝石錘、蹠石錘の3種類があり、用途の違いも指摘されている²⁾。

切目石錘は14点出土している（148～152）。長軸方向に切り込みがある、いわゆるA種のみである。石材別では、凝灰岩10点、粘板岩3点、砂岩1点である。

有溝石錘は7点出土している（153～157）。長軸方向に溝が一周する、いわゆるA種のみである。石材別では、凝灰岩5点、粘板岩2点である。

蹠石錘は6点出土している（158～160）。石材別では、凝灰岩5点、砂岩1点である。



第102図 包含層出土の石器(12)

磨石・凹石類（第103・104図、図版69下）

磨石や凹石等は分類することが困難であるので一括して扱うこととする。総数は174点である。石材は、凝灰岩、石英安山岩、砂岩等である。形態に関しては、まず、平面形および断面形によって次のように分類する。

I類 平面形が円形のもの。

II類 平面形が楕円のもの。

III類 平面形が長方形のもの。

a 断面形が円形のもの。

b 断面形が楕円のもの。

c 断面形が凸レンズ状のもの。

d 断面形が四角形のもの。

IV類 上記の分類にあてはまらないもの。

形態別では、I a類4点(2.3%)、I b類20点(11.5%)、II a類2点(1.1%)、II b類76点(43.7%)、II c類9点(5.2%)、II d類2点(1.1%)、III b類4点(2.3%)、III c類10点(5.7%)、III d類25点(14.4%)、IV類22点(12.6%)である。

凹みの数については、いわゆる表面・裏面・その他の面の個数を一覧表に示した。また、凹みの形状については、敲打痕がたたまって浅い凹みをつくっているもの(I)、すり鉢状にはつきりと凹みがあるもの(II)、右上がり状に細長い凹みを有するもの(III)、その他のもの(IV)とした。

凹みのないものは34点あるが、II b類が21点と多い。

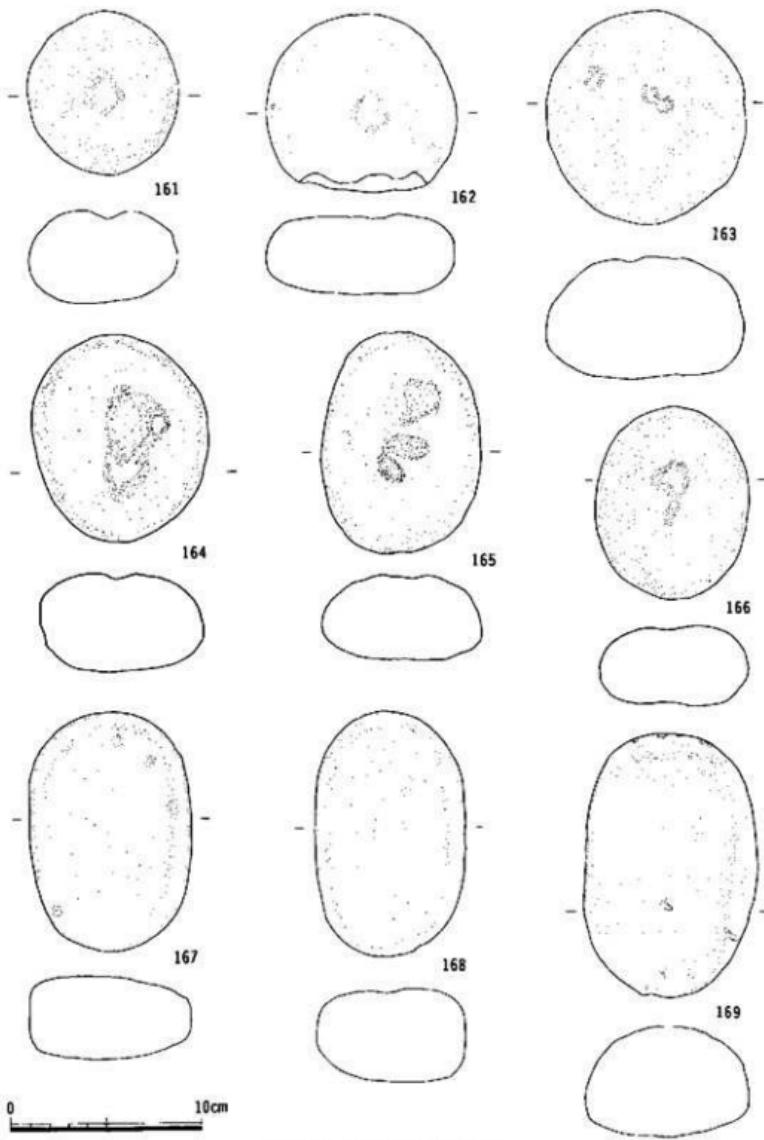
石皿・砥石・石鋸（第105図、第107図194・195、図版70上左・右）

石皿は、11点出土している。石材別では、凝灰岩9点、安山岩1点、砂岩1点である。砥石は、20点出土している。大型のものと小型のものがある。石材別では、凝灰岩18点、砂岩1点、粘板岩1点である。182は、溝が2箇所あり、いわゆる玉磨き用のものと考えられる。195は、偏平で側辺が鋭く研ぎだされており、石器の擦り切りなどに使われた石鋸であろう。

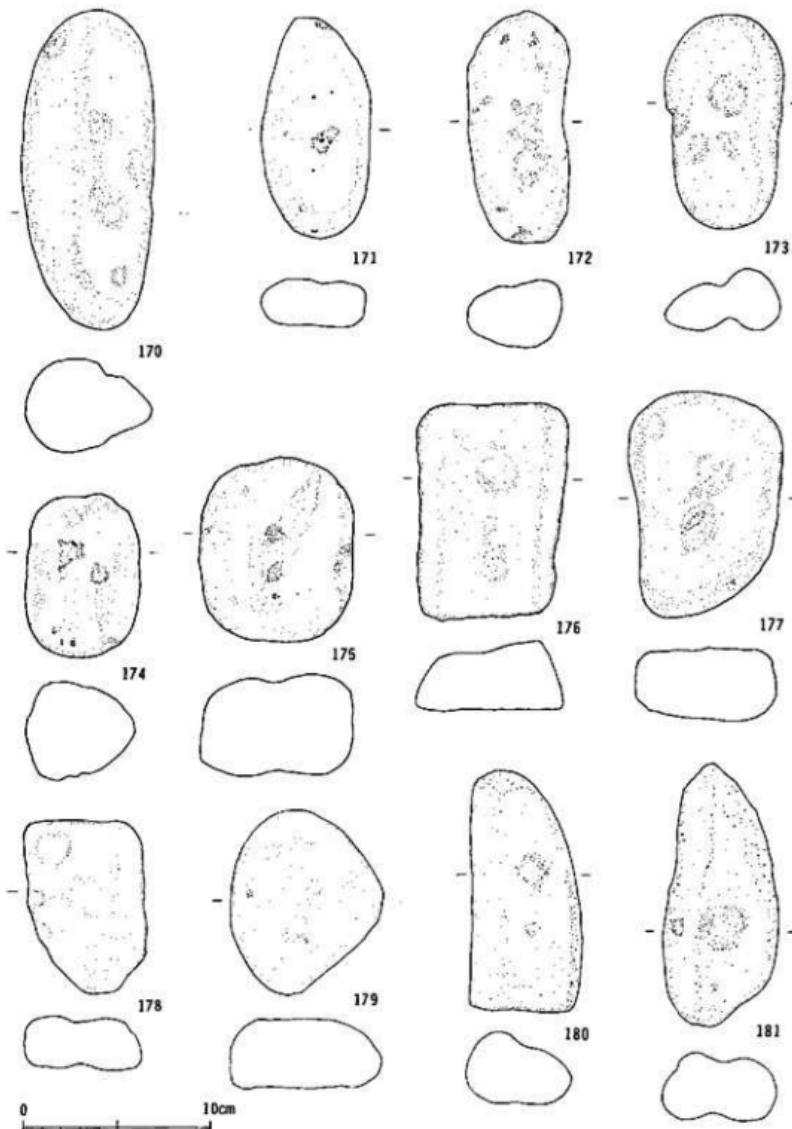
石棒・石刀・石剣（第106図、図版70下）

石棒は8点出土した。凝灰岩製の大型のものや、粘板岩製の小型のものがある。190は沈線が數本巡らされている。191は縦に沈線が1本ある。

石刀は5点出土した。192は、「柄頭」が細長の台形状を呈し、四面に三叉文が沈刻されており、沈線が巡っている。「柄」から「刃」に移るあたりに「刃闊」がある。「身」の部分の途中で折損しているが、端面は調整されているようである。193は緑灰色を呈する凝灰岩製の石刀



第103図 包含層出土の石器(13)



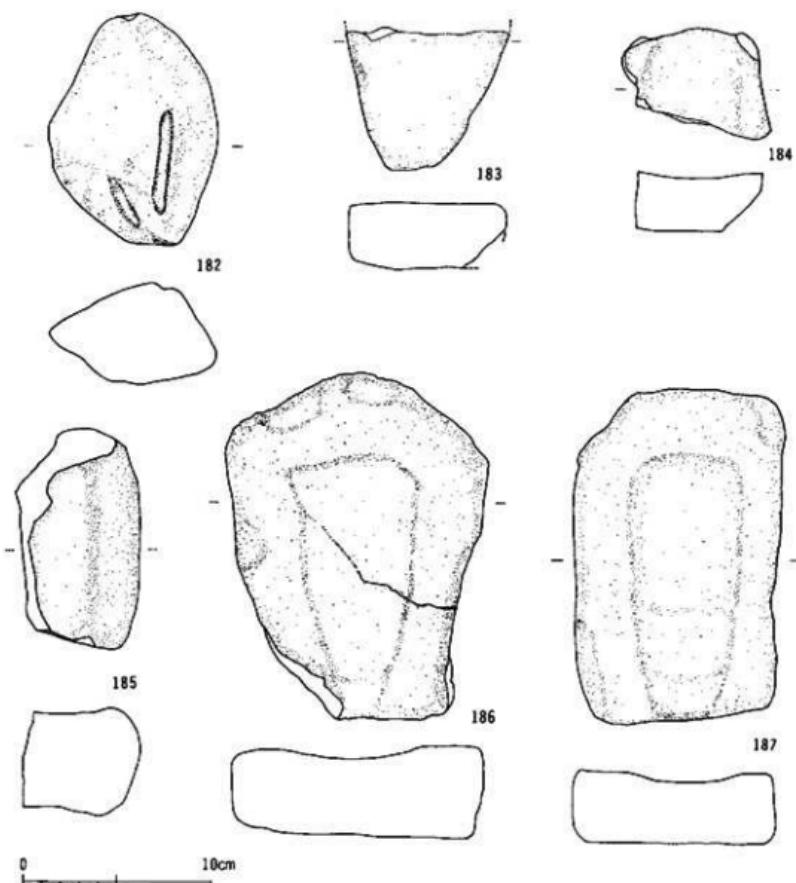
第104図 包含層出土の石器(14)

である。

石劍は2点出土している。粘板岩製のものと凝灰岩製のものがある。

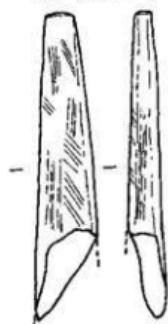
獨鈷石（第107図196、図版71下左）

1点出土した。長さ10.6cmで、最大径5.9cm、最小径4.2cmである。蛇紋岩製である。中央部に隆起がなく、両頭部が半球状を呈する。いわゆるI-3タイプに相当すると思われる¹⁾。

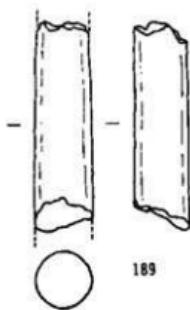


第105図 包含層出土の石器(15)

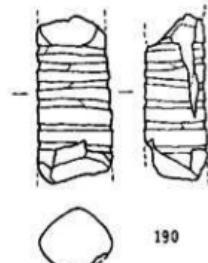
164 第4節 石 器



188



189



190



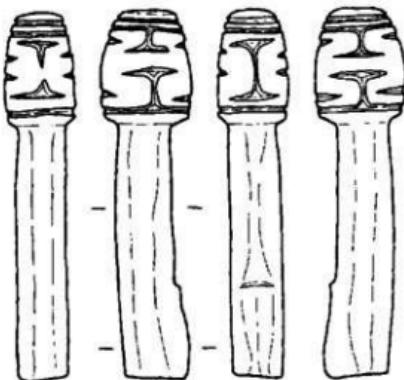
188



191



193



192



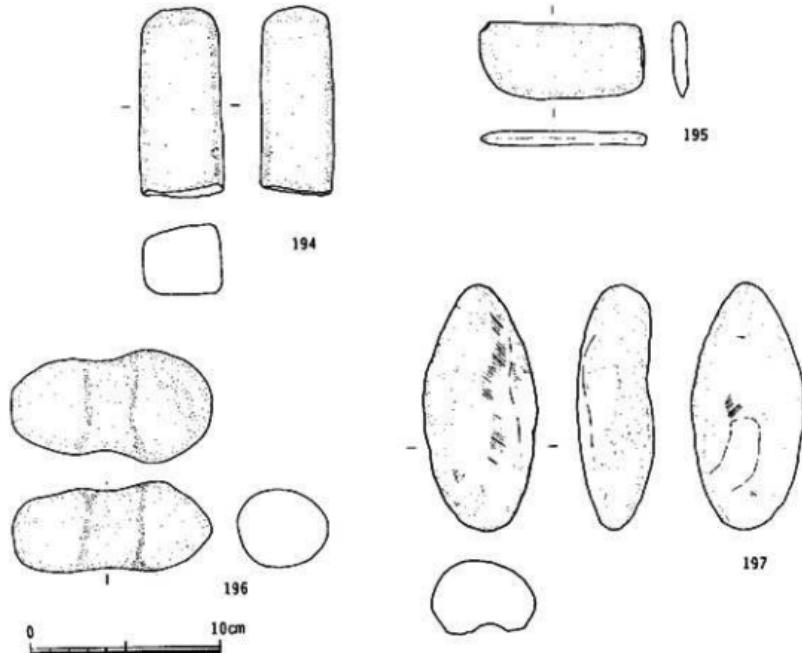
第106図 包含層出土の石器(16)

磨製石器（第107図197、図版71下左）

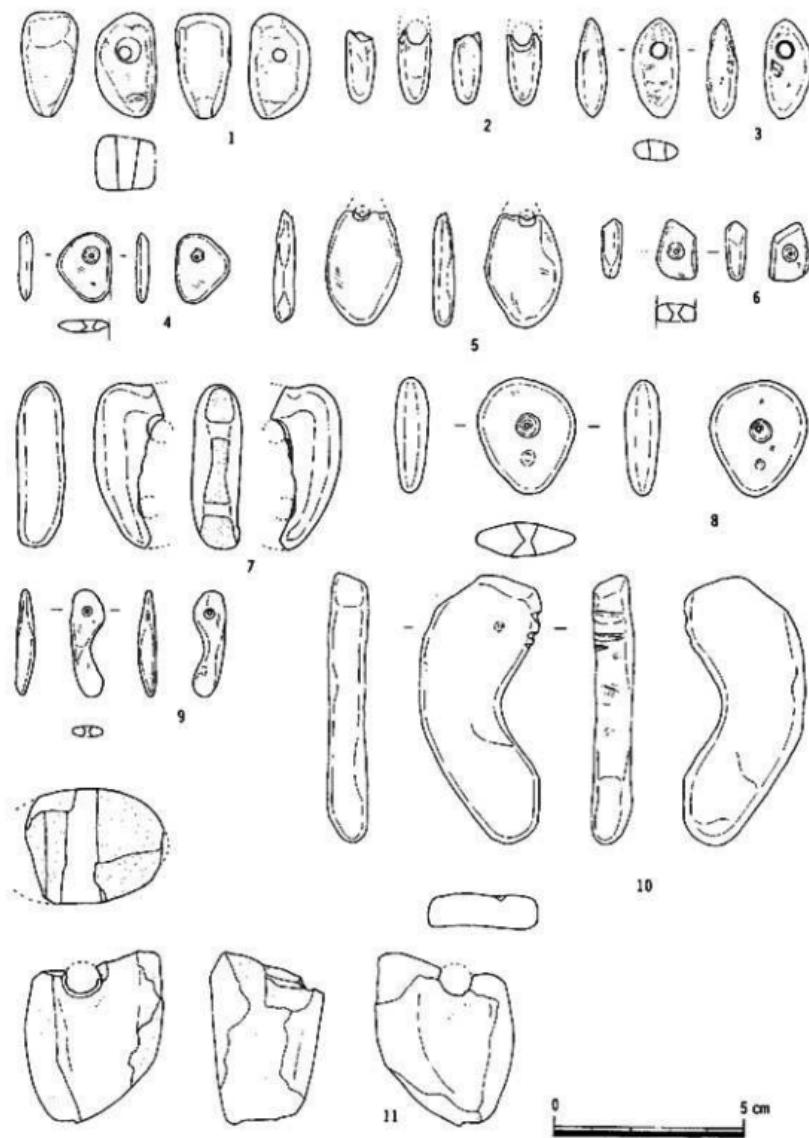
偏平な蛇紋岩の両面を磨き、磨製石斧の木製品のごとき様相を呈するが、窪みがあり、性格不明の石器である。

石製装身具（第108図、図版71上）

穿孔したいわゆる華飾類が11点出土している。棒状の石の上方に穿孔したもの（2・3）や偏平な板状の石に穿孔したもの（4・5・8～10）など、様々な形態がある。1は、糸魚川産のヒスイ製である。产地同定に関する分析は後述する。他の石材は、凝灰岩・砂岩・滑石などである。7は大きく欠損しているが、穿孔痕が2か所観察できる。10は板状の石で、勾玉の形状をしており、穿孔途中のものである。内側の側面に切り込みが2か所ある。11は、白雲母大理石製で、比較的大きなものである。やはり穿孔痕がある。



第107図 包含層出土の石器(17)

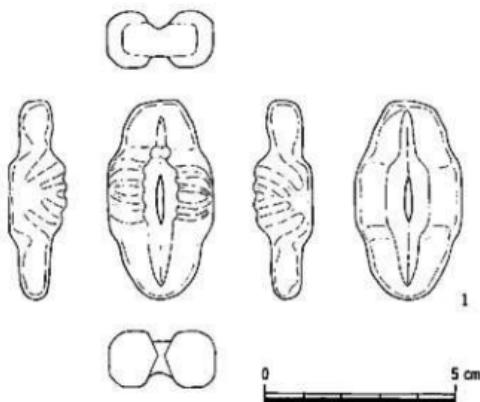


第108図 石製装身具

ほと石（第109図、図版71右下）

長さ5.3cm、幅2.8cm、厚さ1.5cmの中央部がふくらむ橢円形をしている。両面から縦長の切り込みがあり、表面に円形の小さな窪みが2つ並んでつけられている。表面から側面にかけての中央部左右に数本の横線が施されている。裏面は平滑である。石材は、流紋岩である。

孔の形から見て垂飾品の可能性は薄く、装身具とは思われない。女性性器を模したものとの判断から「ほと石（陰石）」と呼称する。



第109図 ほと石

〔注〕

- 1) 高山市教育委員会(1982)『猿塚遺跡発掘調査報告書』・同(1983)『向畠遺跡の遺物』・同(1988)『寺東遺跡、西保木(対岸)遺跡発掘調査報告書』等による。
- 2) 石器の分類については、岐阜県教育委員会(1991)『小の原遺跡・戸入障子暮遺跡』を主に参照した。
- 3) 石鏟の分類等については、渡辺 誠(1973)『縄文時代の漁業』を参照した。
- 4) 独钻石の分類は、鈴木道之助(1981)『図録石器の基礎知識III』による。

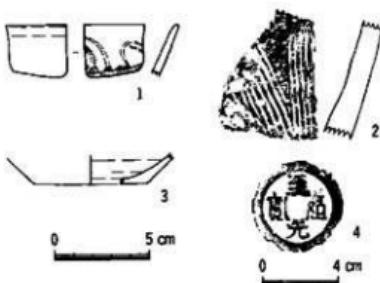
第5節 中近世の遺物(第110図)

陶磁器類は15点出土した。いずれも擾乱層からの出土であり、遺構に伴うものはない。図示したのは3点であるが、いずれも破片である¹⁾。

1は、龍泉窯系青磁碗の破片である。内面に片切彫花文が施されている12世紀末から13世紀初頭のものと思われる。2は、珠洲系陶器の片口鉢である。卸し目は太く幅の広い原体による直線で、条数は不明である。IV期の後半、14世紀後半のものであろう²⁾。3は、瀬戸・美濃系の近世陶器で、土瓶の底部かと思われる。

他に図示できなかったものとして、9世紀から10世紀にかけてと思われる須恵器碗1点、珠洲系陶器の片口鉢で、I期末からII期初め、12世紀末から13世紀初頭のものが1点、常滑製の壺の破片5点、瀬戸・美濃系の陶器片5点が出土している。

陶磁器以外には、銅錢が1点のみC-8区より出土した。中国製の「至道元宝」である。錢径は2.4cm、孔径は6mmである。



第110図 中近世の遺物

(7)

1) 陶磁器類については、富山大学人文学部の宇野隆夫教授にご教示を得た。

2) 珠洲系陶器の編年については、吉岡康暢『珠洲の名陶』(1989)を参考にした。

第6節 植物遺体(図版72)

渡辺 誠

(1) 出土状態

岐阜県文化財保護センター飛騨出張所より調査の機会を与えられた植物遺体は、同県吉城郡国府町荒城神社遺跡より1993年に発掘された2件である。

それらの地区・層位・時期は、次のとおりである。

資料1：C-17P1・上層出土、後期中葉。

資料2：C-17区・Ⅲ層出土、中期後葉。

(2) 植物遺体の種類

出土した植物遺体は、ぶな科クリ (*Castanea crenata Siebold Zucc.*) の1種のみである。クリは東北日本の落葉広葉樹林帯の代表的な樹木であり、それらの実は縄文時代の大手な食料資源であった。クリは甘みがありすぐ食べることができ、縄文早期より食されている。

完形品はみられないが、種皮のついた子葉破片が目立つことから、本来種皮のついた完形品だけであった可能性が高い。それらの数量は、次のとおりである。

資料1：種皮のついた子葉破片、10.31g (図版72-1)。

子葉破片、	20.04g (同2)。
合計	30.35g

資料2：種皮のついた子葉破片、2.16g (同3)。

子葉破片、	8.34g (同4)。
合計	10.50g

それらの総量は40.85gで、1個体の平均重量をたとえば青森県黒石市地蔵沢遺跡の場合 (渡辺1993) の1.56gで除すれば、27個体分となる。決して多い量ではないが、本来種皮のついた状態でピット内などに貯蔵されていた可能性がある点に特徴がみられる。

(3) 穴貯蔵の意義

農村などの日本の伝統的な社会では、植物質食料の貯蔵に当たっては、おおまかにみて

生貯蔵-短期貯蔵-穴貯蔵

乾燥貯蔵-長期貯蔵-屋根裏貯蔵

の2方法が行われてきている。現代でも冬期の生鮮な野菜は穴を掘って行われていて、特別なことではない。これは縄文時代でも同じことであり、後者の場合遺構として残りにくいだけにすぎない。

その上、穴貯蔵には興味深い利用法がある。それは生のクリを冬期の短期間だけ穴に貯蔵し貯蔵というより甘みを増やすための加工法とみられるものである。

クリの穴の穴貯蔵の話は、青森県・岩手県・新潟県・山梨県・京都府、および韓国の場合などについて承知していたし、福島県田村郡大越町において観察の機会を得たこともある (渡辺1990)。

クリは皮付きのまま砂とともに穴に埋め、砂と一緒に入れなければ芽が出てしまうということはよく言われ、新潟県では砂グリとよばれている。これは貯蔵穴の上層の観察の仕方に、反

省を迫ることになるであろう。また今のうちに、飛騨における民俗事例を探訪しておきたいと思う。

(引用文献)

渡辺 誠 1990 「植物遺体」「船引・堂平遺跡」福島県船引町教育委員会

渡辺 誠 1993 「植物遺体」「地蔵沢遺跡Ⅱ」黒石市教育委員会

(謝辞)

最後に、調査の機会を与えられ種々ご教示下さった岐阜県文化財保護センター飛騨出張所の野村宗作先生に対し、末尾ながら銘記して深謝の意を表する次第である。

第7節 骨

A - 7 • B - 4 • B - 19 • C - 18区のII層より骨が細片で見つかった。一部の資料ではあるが、京都大学靈長類研究所の毛利俊雄氏のコメントを頂いた。

骨は绳文時代中期から後期の遺物包含層から出土した2件4点の焼骨の破片である。被熱による変形は強くなく、割れ口ははいっていない。検討の結果をラベルの順番にしたがって記すと、次のとおりである。

A J A - 7 II 1点

長さ53mmの四肢長骨片。長さの半分にわたって、骨の長軸を横切る円周の1分の3程度を残している。色は外面は薄いクリーム色を呈し、内面は薄い灰色である。部位は左桡骨の骨体下半部の外側部である可能性が高い。

A J B - 4 II 3点

3点とも部位不明の四肢長骨の破片である。色は薄いクリーム色を呈し、茶色または濃い青灰色の斑点をもっている。長さ2cm強の2点は上腕骨、脛骨、大腿骨程度の太さの骨の破片であり、他の長さ7mmの1点はより細い骨の破片である。獸骨の可能性も否定できない。

第5章 自然科学的分析

第1節 住居床面の赤色粘土について

柳パレオ・ラボ東海文店 藤根 久

荒城神社遺跡縄文時代住居址（SB3）において、その床面から赤色部を伴った砂質粘土が広い範囲にわたって検出されている。この砂質粘土は2.0mm程度以下の砂を比較的多く含み、表面から15~20mm前後の深さにわたって赤化（5YR6/6~10R6/8）が認められる。この赤化は表面に向かってその赤化的度合を増す傾向が認められる。蛍光X線分析による元素分析（定性）では、Si（ケイ素）・Fe（鉄）・Al（アルミニウム）・K（カリウム）・Ca（カルシウム）・Ti（チタン）・Mn（マンガン）・P（リン）などが検出され、Siなどが多いことから周辺域に普通に産する粘土であると考える。

この表面に向かっての赤化構造は、比較的低温による焼成などで見られることから、熱による赤化である可能性を考えられる。この受熱の証拠を確認する方法として、キューリー温度の測定などがあるが、ここでは熱残留磁化測定による磁化方向の確認を行う。試料は取り上げ試料であるが、ブロック取り上げされ、ほぼ水平面が確保された状態であることから、当時の地磁気伏角の測定が可能である。測定の結果、その残留磁化強度は強く（10⁻²~10⁻³emu、この値は窯跡の焼土程度に強い）、その伏角は57.1度（150エルステッド 消磁後）であることが分かった。この伏角とは、磁化の水平面からの角度で（磁針の北は下に向くが、この時の角度）、例えば高山市における現在の伏角は約49.6度である。（理科年表、1993；図1）。一方、この伏角は、時代とともに変化しており、縄文時代中期後葉における伏角は50~60度の範囲であることが分かっている（Hyodo et al., 1993；図2）。このことから、荒城神社遺跡の住居址粘土の残留磁化測定による伏角は、ほぼこの当時の伏角を示していると思われ、焼成により当時の地磁気伏角を獲得した可能性が高い。ただし、測定試料は1点であり、統計的意味は低い。

このように、状況証拠として、この粘土の赤化は受熱による赤化と判断される。

引用文献

- Hyodo, M., C. Itota and K. Yaskawa(1993):Geomagnetic Secular Variation Reconstructed from Magnetizations of Wide-Diameter Cores of Holocene Sediments in Japan, J. Geomag. Geoelectr., 45, p669~696.
 理科年表、1993; 国立天文台編、丸善、p952.

第2節 荒城神社遺跡出土の垂玉、未加工玉材の産地分析

薦科哲男、東村武信（京都大学原子炉実験所）

はじめに

遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というものは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたかということを調査するのではなくて、何ヶ所かあるヒスイの原産地のうち、どこが原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法¹⁾および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法^{2), 3)}が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析を系統的に行った研究では蛍光X線分析法と電子スピントン共鳴法を併用し産地分析をより正確に行なった例⁴⁾が報告されている。石器などの石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圈と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしも必要なものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を表しているかもしれない。お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行なった玉、玉材は岐阜県吉城郡国府町の荒城神社遺跡の縄文時代後期の層から出土した1個の垂玉と未加工原石3個で、これら合計4個の分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地

分析が行える方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している¹³⁾非破壊で分析を行う蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。

ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では(1)新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頸城郡青海町から産出する糸魚川産、(2)軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産¹⁴⁾、(3)鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、(4)岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、(5)長崎県長崎市三重町の長崎産であり、さらに(6)函館市ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐町の引佐産の原石、(7)兵庫県養父郡大屋町からの原石、(8)北海道旭川市神居町の神居コタン産、(9)岐阜県大野郡川牛川村の飛騨原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原料になったのではないかと考えられる(10)長崎県西彼杵郡人瀬戸町雪浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これでほぼつくされていると思われる。これら原石の原産地を第111図に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

ヒスイ試料の蛍光X線分析

ヒスイの主成分元素はナトリウム(Na)、アルミニウム(Al)、珪素(Si)などの軽元素¹⁵⁾で、次いで比較的含有量の多いカルシウム(Ca)、鉄(Fe)、ストロンチウム(Sr)である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム(K)、チタニウム(Ti)、クロム(Cr)、マンガン(Mn)、ルビジウム(Rb)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)、ニオビウム(Nb)、バリウム(Ba)、ランタニウム(La)、セリウム(Ce)の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のX線が試料によって散乱されたピークを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピークを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリウム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい、しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出できる方法が確立されるまでは、蛍光X線分析でNa元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他ないのでなかろうか。各原産地の

- 1：糸魚川産地（糸魚川市、新潟県西頃城郡青海町）
- 2：日高産地（北海道沙流郡日高町千栄）
- 3：若桜産地（鳥取県八頭郡若桜町角谷）
- 4：大佐産地（岡山県阿智郡大佐町）
- 5：長崎産地（長崎市二重町）
- 6：引佐産地（静岡県引佐郡引佐町）
- 7：大屋産地（兵庫県養父郡大屋町ヒシリ谷）
- 8：神居ゴタン産地（北海道鹿川市神居町古瀬）
- 9：飛騨産地（岐阜県大野郡丹生川村折敷地）
- 10：ヒスイ類似岩産地（長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪浦）



第111図 ヒスイとヒスイ類似岩の原産地

原石のなかで、確実に Na 元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大屋、若桜、大佐、神居ゴタン、長崎の各原産地の原石でこれらは硬玉に属すると思われる。Na 元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛騨の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を產出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高、飛騨、引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石は Sr のピークが Fe のピークに比べて相当大きく、また、Zr の隣に非常に小さな Nb のピークが見られ、Ba のピークも大きく、糸魚川産では見られない La、Ce のピークが観測されている。この Ce のピークは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これら Ce を含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するときに有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Ti の含有量が多く、Y のピークが見られるのが特徴的である。日高産、引佐産、飛騨産ヒスイ原石は、Ca ピークに比べて Ti とか K、また Fe ピークに比べて Sr などのピークが小さいのが特徴で糸魚川産のものと区別するときの判断基準になる。

春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr、Zr のピークが全く見られないため、糸魚川産などの Sr、Zr を含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可

能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また、砒素(As)のピークが見られる個体が多いのも特徴である。

これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2～3.4の範囲のものと、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑かかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち人佐産、大屋産の原石では比重が3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は3個しか分析できなかったが良質である。このうち1個は濃い緑色で、他の2個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。マンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行うときの判断基準を原石の分析データーから引き出すが、分析個数が少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。第8表に各原産地ごとの原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石の中での最小値と最大値の範囲を示し、判定基準(1)とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重が3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準(1)により大佐産のヒスイでないと見える。日高産、引佐産の両ヒスイではSr/Feの比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判定基準(1)になる。第9表の判定基準(2)にはCr、Mn、Rb、Y、Nb、Ba、La、Ceの各元素の蛍光X線ピークが観測できた個体数を%で示した表である。例えば遺物を分析してBaのピークが観測されなかったとき、その遺物は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。

第112図はヒスイ原石のSr/Feの比の値とYr/Srの比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。●は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠

内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□はマンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とマンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、マンマーと糸魚川が区別される部分がSr/Feの値（横軸）2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればマンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。▲は大佐産の、△は若桜産の、▽は大屋産のヒスイの分布を示している。糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にBaの蛍光X線スペクトルのピークが見られなかった場合、第9表の判定基準②に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。■は長崎産ヒスイの分布で、独立した分布の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。★印の日高産および*印の引佐産ヒスイの分布の一部分が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca/Si比とSr/Fe比を指標とすることにより（第113図）、糸魚川産ヒスイは、口高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na/Si比とMg/Si比を各原産地の原石について分布を示すことにより（第114図）、遺物がどの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

ヒスイ製勾玉の分析結果と考察

分析した垂玉比重は3.325（アルキメデス法）で、蛍光X線分析で主成分組成のNa元素が観測されたヒスイ製丸玉は、比重も硬玉の範囲に入り硬玉製垂玉と考察した。他の3個の木加工原石は肉眼観察では硬玉と色調などが一致する。しかし、比重は3.038以下を示し、Na元素が検出限界以下であることから軟玉原石と推定した。これら原石の蛍光X線スペクトルおよび比重を第118～121図および第10表に示した。これら垂玉と木加工原石の原石产地を明らかにするために、K/Ca、Ti/Ca、Sr/Fe、Zr/Sr、Ca/Si、Na/Si、Mg/Siなどの各比値を求め第11表に示し、また各原産地の原石の元素比重の分布範囲と比較し第115、116、117図に示した。第115図では分析した34731の垂玉が糸魚川産、日高産の重なる範囲に入り、未加工原石の34728、34730番は口高、飛騨産の重なる範囲に、34729番は引佐産にも重なる3重の範囲に入る。第116図では、垂玉は糸魚川産は34731で、未加工原石の3個は口高、飛騨産の重なる範囲に入る。第117図では、垂玉は糸魚川、若桜、大佐、神居コタン産の重なる範囲に、未加工原石の3個は日高、飛騨産の重なる範囲にそれぞれ入る。この他に比重と判定基準②の合有元素の有無などの判定を総合して、硬玉、軟玉製の勾玉の原材产地を推測した。その結果を第11表に示した。前述の判定では、木加工原石の軟玉が日高産および飛騨産か区別できないため、新たにニッケル(Ni)元素を両軟玉原石弁別の指標として用いた。Niは相対的に日高産に少なく、

第8表 ヒスイ製造物の原石産地の判定基準(1)

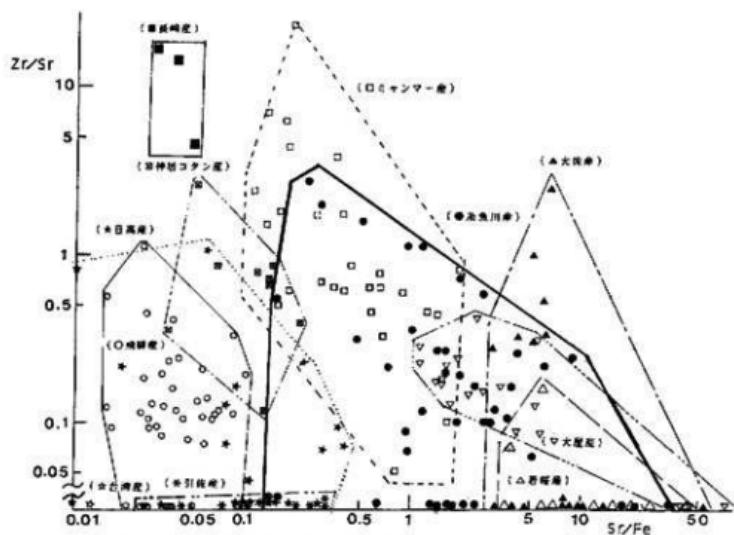
原産地名	分析 個数	蛍光X線法による元素比の範囲				
		比重	K/Ca	Ti/Ca	Sr/Fe	Zr/Sr
糸魚川産	41	3.00~3.35	0.01~0.17	0.01~0.56	0.15~30.0	0.00~2.94
若桜産	12	3.12~3.29	0.01~0.91	0.03~0.59	3.45~47.0	0.00~0.25
大佐産	20	2.85~3.17	0.01~0.07	0.00~1.01	3.18~61.0	0.00~12.4
長崎産	3	3.16~3.23	0.01~0.14	0.17~0.33	0.02~0.06	4.30~16.0
日高産	22	2.98~3.29	0.00~0.01	0.00~0.02	0.00~0.37	0.00~0.063
引佐産	8	3.15~3.36	0.04~0.04	0.00~0.03	0.03~0.33	0.00~0.018
人屋産	18	2.96~3.19	0.03~0.08	0.04~0.16	1.08~79.0	0.02~0.48
神居コタン産	9	2.95~3.19	0.02~0.49	0.09~0.17	0.04~0.22	0.12~0.85
飛驒産	40	2.85~3.15	0.01~0.04	0.00~0.00	0.02~0.10	0.00~1.24
ミヤンマ産	26	3.15~3.36	0.02~0.14	0.01~0.26	0.09~2.5	0.01~23.0
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND	ND

ND: 検出限界以下の濃度

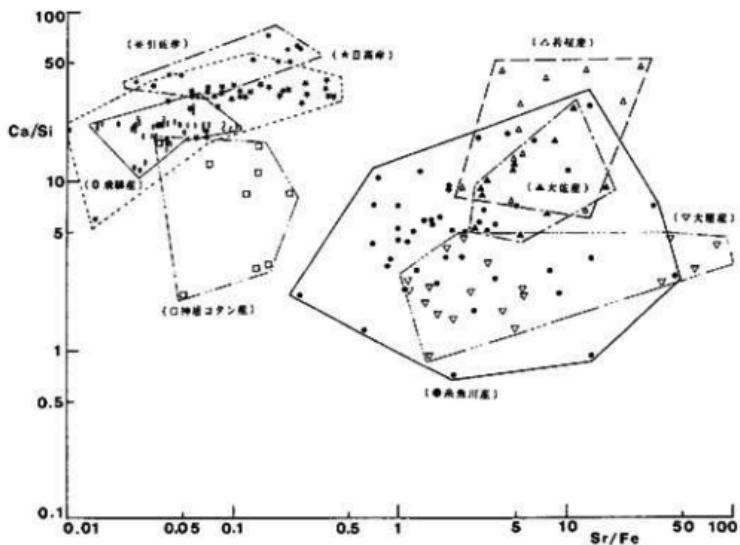
第9表 ヒスイ製造物の原石産地の判定基準(2)

原産地名	蛍光X線法による分析元素 (各元素が確認できた個体数の百分率)							
	Cr	Mn	Rb	Y	Nb	Ba	La	Ce
糸魚川産	26%	6%	20%	ND	13%	33%	ND	ND
若桜産	ND	ND	16%	ND	100%	100%	67%	67%
大佐産	ND	ND	44%	ND	33%	100%	67%	67%
長崎産	ND	ND	ND	100%	100%	100%	100%	100%
日高産	tr	tr	ND	ND	ND	tr	ND	ND
引佐産	88%	75%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
人屋産	tr	ND	31%	ND	6%	90%	100%	100%
神居コタン産	ND	100%	22%	100%	ND	55%	ND	ND
飛驒産	100%	100%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ミャンマ産	13%	4%	ND	ND	ND	35%	ND	ND
台湾産	tr	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND

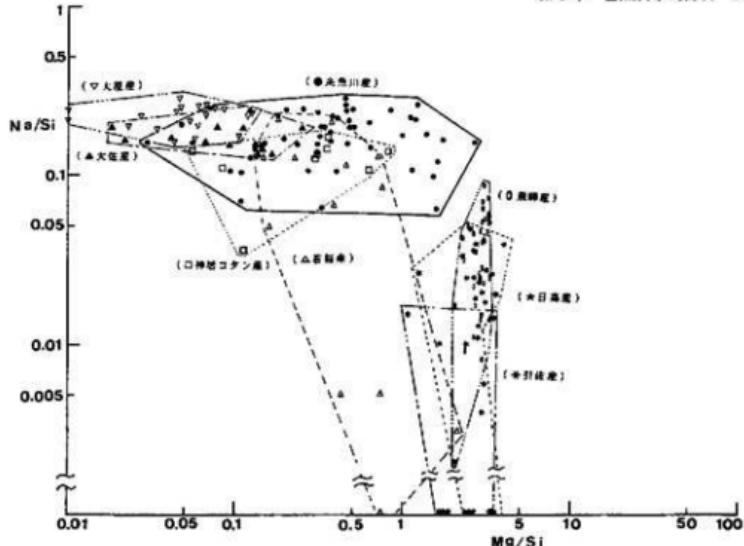
ND: 検出限界以下 tr: 検出確認



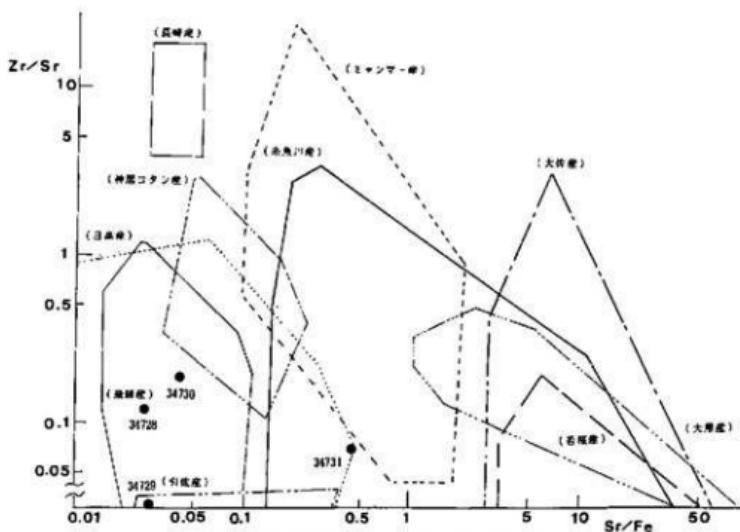
第112図 ヒssi原石の元素比値 Zr/Sr 対 Sr/Fe の分布および分布範囲



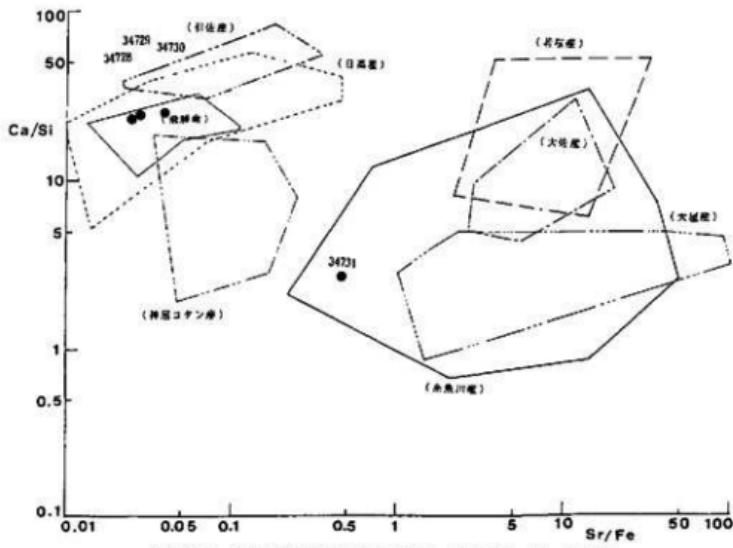
第113図 ヒssi原石の元素比値 Ca/Si 対 Sr/Fe の分布および分布範囲

第114図 ヒスイ原石の元素比値 Na/Si 対 Mg/Si の分布および分布範囲

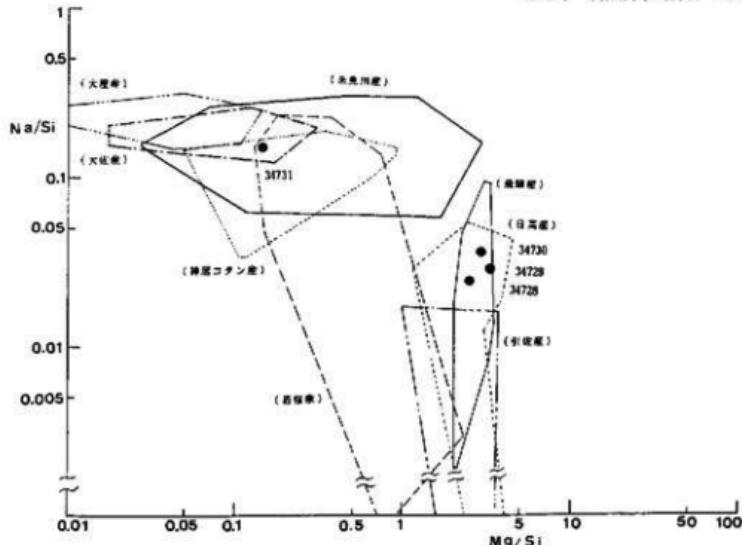
飛騨産原石に多く含有されている。34729番は $\text{Ni}/\text{Fe} = 0.124$ の値で、この値を示す原石は日高産原石22個の中には見られなかった。従って、この軟玉の原材が日高産原石である可能性は非常に低いと思われる。また、34728番では0.84で、日高産原石の中には Ni/Fe 比の値が0.084以上の原石が23%の割合で見られ、34730番の0.064では45%で見られた。34728番の軟玉は日高産の可能性より飛騨産の可能性が高いと言える。しかし、34730番は日高産原石でないと言えない。飛騨産原石地は地元の軟玉产地で本遺跡では容易に入手できることを考慮すると、3個の未加工軟玉原石の产地を飛騨原石地であると推測した。硬玉製垂玉には糸魚川産硬玉原石が使用され、地元産飛騨軟玉は未加工であることから、糸魚川産の垂玉は製品が本遺跡に伝播してきた可能性が考えられる。また、飛騨産軟玉が未加工であった理由として、本遺跡では加工の技術がなかった可能性が推測できる。この時代、加工に重要な意味を持たないと仮定し、緑の石を所有することで精神的安定が得られ、幸せを招くと信じられたとすると、特に身に付けなければ、穴開け加工とか、痛くないように面取り（角を丸める）加工は必要ないと推測される。しかし、加工すると容易に多量の玉類を体に付けて飾ることができ魔除、権威の象徴としての玉の効果はより大きくなると推考できる。糸魚川産硬玉玉類の代わりに、飛騨産の未加工軟玉に玉の効果を求めたのかもしれない。



第115図 荒城神社遺跡出土の丸玉のZr/Sr対Sr/Feの分布

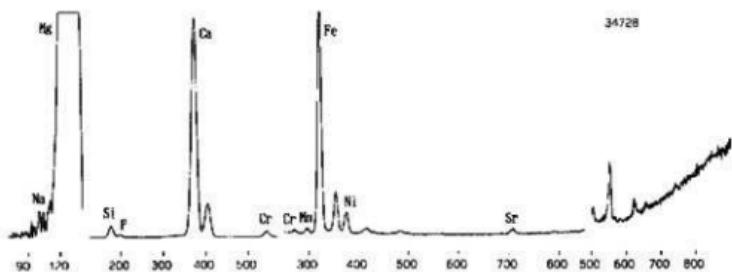


第116図 荒城神社遺跡出土の丸玉のCa/Si対Sr/Feの分布

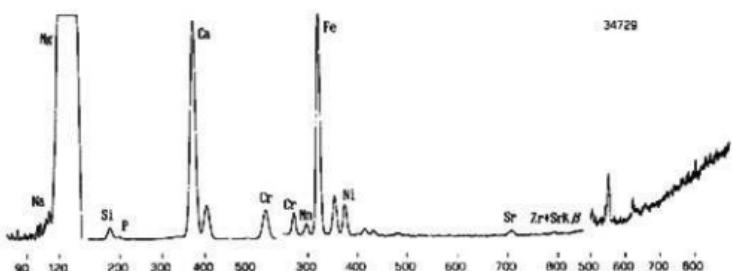
第117図 荒城神社遺跡出土の丸玉の Na/Si 対 Mg/Si の分布

参考文献

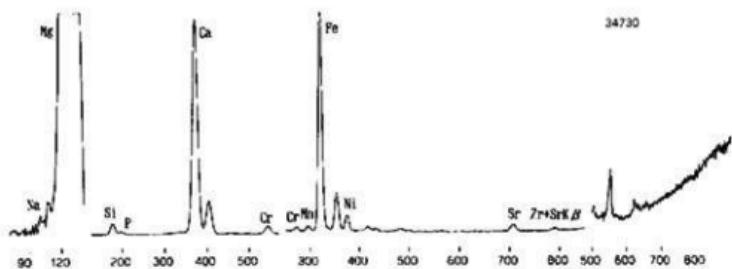
- 1) 茅原一也(1964)「長者が原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）」『長者ヶ原』
- 2) 萩科哲男・東村武信(1987)「ヒスイの産地分析」『富山市考古資料館紀要』 6
- 3) 萩科哲男・東村武信(1990)「奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の产地分析」『考古学論叢』
- 4) Tetsuo Warashina(1992)「Allocation of Jasper Archaeological Implements By Means of ESR and XRF」『Journal of Archaeological Science』 19
- 5) 萩科哲男・東村武信(1983)「石器原材料の产地分析」『考古学と自然科学』 16
- 6) 番場猛夫(1967)「北海道日高産軟玉ヒスイ」『調査研究報告会講演要旨録』 No.18
- 7) 河野義礼(1939)「本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質」
『岩石礦物鉱床学雑誌』 22
- 8) 東村武信(1976)「产地推定における統計的手法」『考古学と自然科学』 9



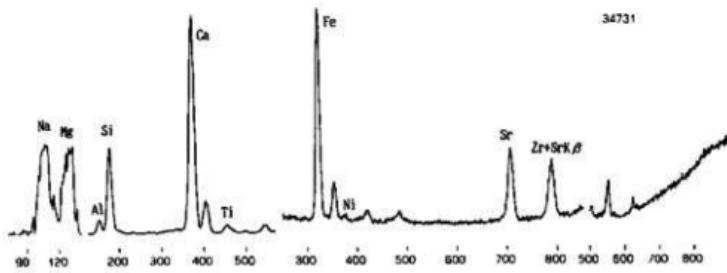
第118図 未加工軟玉原石（34728）の蛍光X線スペクトル



第119図 未加工軟玉原石（34729）の蛍光X線スペクトル



第120図 未加工軟玉原石（34730）の蛍光X線スペクトル



第121図 未加工軟玉原石(34731)の蛍光X線スペクトル

第10表 荒城神社遺跡出土の丸玉、未加工原石の元素分析値の比量と比重

分析番号	遺物番号	元素分析値の比量								分析元素の有無 ○有、△候補、×無	試料	試料 比重	
		K/Ca	Ti/Ca	Sr/Fe	Zr/Sr	Ca/Si	Ni/Si	Mg/Si	Ni/Ba				
34729	5. 原石様	0.014	0.001	0.028	0.000	22.389	0.031	3.350	×	×	×	3.038	2.096
34730	6. "	0.012	0.004	0.042	0.197	23.514	0.040	2.955	×	×	×	3.017	13.508
34728	7. "	0.011	0.001	0.026	0.123	22.951	0.026	2.536	×	×	×	2.988	30.508
34731	8. 重玉	0.014	0.037	0.460	0.707	2.768	0.164	0.146	×	×	×	3.325	11.194
JG-1 a)		1.325	0.280	0.341	0.752	2.696	0.006	0.068					
													加圧固化形試料

a) : 標準試料、Ando,A., Kurasawa,H., Ohmori,T., & Takeda,E.(1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192.

第11表 荒城神社遺跡出土の丸玉、未加工原石の原材産地分析結果

分析番号	各分類基準による判定				Ni/Fe判定 a)	総合判定
	図5判定	図6判定	図7判定	比重&基準(2)		
34729	HD, HK, IN	HD, HK	HD, HK	IT, HK, OY, KM, HD	0.124	飛騨産
34730	HD, HK	III, HK	III, HK	IT, HK, OY, KM, HD	0.064	"
34728	HD, HK	HD, HK	HD, HK	HK, OY, KM, HD	0.084	"
34731	IT, HD	IT	IT, WK, OS, KM	IT	0.009	糸魚川産

IT: 糸魚川 WK: 若桜 OS: 大佐 NG: 長崎 HK: 日高 IN: 引佐 OY: 大原

KM: 神居コタン HD: 飛騨、**: 判定より少しずれる。

a) : (飛騨産原石、42個の平均値±標準偏差) $Ni/Fe = 0.091 \pm 0.030$

(糸魚川産原石、22個の平均値±標準偏差) $Ni/Fe = 0.062 \pm 0.026$

第6章 結語

今回の発掘調査は、県単道路改良工事（鼠臥古川線）によるものであり、調査範囲はかなり限定されていた。また、当遺跡を荒城神社遺跡と称しているが、本来荒城神社遺跡とは神社境内を指すのであり、発掘した場所は宮垣内とよばれる境内外にある。しかし、遺跡は分断されているわけではなく、荒城神社を中心とした周辺一帯が一つの遺跡で、相当広い範囲に及ぶことが今回の発掘で明らかになったと言えよう。ただし、今回はそのほんの一端を調査したに過ぎず、遺跡の時代を知る手がかりになった程度である。

調査は、道路拡幅部分（一次）と本道部分（二次）に分けて行ったが、狭い面積の割にはたくさんの遺物が出土した。しかし、住居址においては擾乱が激しく、特に第3号・第4号住居址においては、縄文後期の遺構（土坑・ピット群）がこれらの遺構を擾乱していた。従って、層位的に遺物を把握できなかったことは残念であった。出土した土器は、縄文中期後葉から縄文後期が中心であったが、晚期の土器も出土した。その中で、中期末の土器においては、信州や北陸の文化の影響を受けながら、飛騨独自の文化（土器）を生み出したことが見られた。飛騨は東西文化の接点であるといわれる特色を、この時期でもよく表しているといえよう。

遺構では、上坑（土壤）・ピット群と住居址を検出すことができた。栗の炭化物が出土し、貯蔵穴であることが判明したピットもあったが、他の多くのピットは、その性格を解明することができなかった。B-3 SK1やB-7 SK12の土坑（土壤）からは、垂れ飾りと思われる装飾用の糸が出土した。しかも、B-3 SK1の上部には全面加工の石棒が立ててあり、土壤と判断した。その他、玉の出土した土壤は3基あった。玉類は、包含層を含めると10個出土している。いずれも土壤との関連が強いと思われ、当遺跡は祭祀的性格をもった遺跡と言うことができる。なお、その中には勾玉に類する木製品もあり、勾玉製作過程を知る手がかりとなる。

住居址は4基検出されたが、中でも第3号住居址は床面が赤色化し、しかも非常に堅い貼床であること、それに伴う石畳がも二重に漆喰されていたことなど、非常に珍しい例であると言えよう。どのようにしてあれ程堅い貼床としたのか、また赤色化させたのか科学的に追求することの必要性を感じ、株式会社パレオ・ラボに依頼して検証していただいた結果、受熱による赤色化と判断されると解答をいただいた（第5章P171）。また、岩山修氏（下呂小学校教頭・地質学）の観察から、次のような指摘を受けた。「この土は、人兩見山層（宮谷川に分布する）のものであり、他から持ち込まれた土ではない。赤色化しているが、凝灰岩片・長石・火山ガラスの鉄分酸化によるものが大きい。塩酸液で煮沸して脱鉄処理を行ったが、火山ガラス・長石・凝灰岩片などの赤色部分は頑固で脱色できなかった。この塩酸処理でも脱色できにくいのがこの土の特徴であろう。炉などによる加熱処理の証拠、変化の様子などは明らかにできなかっ

た。」とのことである。つまり、床面の赤色化は受熱の可能性はあるが、それほどの高温ではないのである。実際の床面は10cm近くも赤色化し、かつ硬化していたのであるが、今回の分析では、このような床面形成の過程を明確にはできなかつたのであり、今後の課題としたい。なお、長野県の一津遺跡、群馬県の茅野遺跡に一基ずつ同様の出土例があると、長野県大町市教育委員会の島田哲男氏からお聞きした。

最初は何であるか不明であったB-3出土の異形石製品（第109図、図版71）であるが、「陰石」と命名した。これは、青森県立郷土館の市川金丸氏、指導調査員の渡辺誠氏の助言によるところが大きい。「陰石」と書いて「ほといし」と読む。すなわち、女性の性器を模したものである。

縄文晩期の土器（第75図28）は、黒鉛入りの土器である。1片のみ確認した。黒鉛入りの縄文土器は早期押型文の沢式土器に代表され、飛騨地方では多くの遺跡から出土している。しかし、早期以外では、白川村木谷遺跡で縄文晩期土器20片に黒鉛入りが確認されている（木谷式）にすぎない。早期以外での黒鉛入り土器の出土は、飛騨では当遺跡が2例目といえる。また、純粹の黒鉛の塊が3個出土している。国府町内では黒鉛は産出せず、搬入品と考えられる。土器に混入するための搬入であるとすれば、たいへん貴重な発見である。なお、早期の黒鉛入り押型文土器が出土した清見村「はつや遺跡」でも、あざき大の黒鉛の粒が出土している。今後、黒鉛入り土器の出土する遺跡を発掘する場合、早期に限らず後晩期の遺跡においても、黒鉛塊が出土する可能性を充分考慮して掘削する必要があると思う。

報告書の作成にあたり、指導調査員の渡辺誠先生を始め、たくさんの先生方に細かにご指導をいただくことができた。そのお陰でこの報告書ができるわけであり、深く感謝申し上げたい。しかし、私たちの力量不足により、ご指導いただいた事柄を充分に反映させられなかったことを誠に申し訳なく思う。引き続いて検討していかなければならない課題は多く、報告書完成を一つのステップとして、更に研究を進めていきたいと思う。今後もご指導をよろしくお願いしたい。

（追記）

荒城神社境内出土とされている土器や石器が神社に保存されており、今回この報告書を作成するにあたって、神社のご好意で拝見を許され、主な遺物を図版73～76で紹介させていただいた。また、神社近くの菅沼賢氏も神社境内東の耕作地より出土した遺物を所蔵されておられるが、これもご好意により図版77・78で紹介させていただいた。参考にしていただければ幸いである。

（野村 宗作）

主要参考文献

- ・石川県立埋蔵文化財センター (1989)『金沢市米泉遺跡』
- ・泉 拓良 (1989)「縄帶文土器様式」『縄文土器大観』第4巻
- ・大江 命 (1965)『飛驒の考古学 I 益田川流域の縄文遺跡』
- ・大沢野町教育委員会 (1977)『大沢野町布尻遺跡』
- ・岡谷市教育委員会 (1986)『梨久保遺跡』
- ・小笠原紹彦 (1983)「編物・布」『縄文文化の研究』7
- ・押水町教育委員会 (1983)『上田うまばち遺跡』
- ・金沢市教育委員会他 (1986)『金沢市新保本町チカモリ遺跡—第4次発掘調査兼土器編一』
- ・狩野 薫 (1988)『半田新・大杉谷式土器様式』『縄文土器大観』第3巻
- ・河合村教育委員会 (1971)『下小鳥ダム関係埋蔵文化財調査報告書』
- ・河合村教育委員会 (1987)『下山遺跡』
- ・岐阜県 (1972)『岐阜県史 通史編 原始』
- ・岐阜県教育委員会 (1991)『小の原遺跡・戸人障子墓遺跡』
- ・岐阜県教育委員会・小坂町教育委員会 (1978)『水口遺跡 ソラ遺跡』
- ・(財)岐阜県文化財保護センター (1992)『藤原遺跡』
- ・清見村教育委員会 (1983)『門端縄文遺跡発掘調査報告書』
- ・清見村教育委員会 (1989)『はつや遺跡』
- ・紅村弘・増子康眞他 (1978)『東海先史文化の諸段階 資料編II』
- ・国府町教育委員会 (1989)『飛驒の国府 歴史編』
- ・国府町教育委員会 (1993)『岐阜県国府町遺跡地図』
- ・小島俊彰 (1988)『上山田・天神山式土器様式』『縄文土器大観』第3巻
- ・(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 (1993)『上敷免遺跡』
- ・白川村教育委員会 (1987)『木谷遺跡』
- ・市立市川考古博物館 (1992)『堀之内貝塚資料図譜』
- ・木木 健 (1988)『台利式土器様式』『縄文土器大観』第3巻
- ・鈴木道之助 (1981)『岡縄石器の基礎知識III』
- ・高山市教育委員会 (1982)『雄塚遺跡』
- ・高山市教育委員会 (1983)『向畠遺跡の遺物』
- ・高山市教育委員会 (1988)『寺東遺跡、西保木(対岸)遺跡』
- ・高山市教育委員会 (1991)『垣内遺跡』
- ・戸山哲也 (1993)「飛驒を中心とした縄文後期前半土器の様相」『先史考古学研究』第4号

- ・富山県教育委員会（1991）『北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編 6 境A遺跡上器編』
- ・中津川市教育委員会（1979）『中村遺跡』
- ・長野県（1988）『長野県史 考古資料編』
- ・滑川市（1979）『滑川市史 考古資料編』
- ・西田泰民（1989）『堀之内・加曾利B式土器様式』『縄文土器大観』第4巻
- ・能都町教育委員会（1986）『貞駒遺跡』
- ・野々市町教育委員会（1983）『野々市町御経塚遺跡』
- ・荻原町教育委員会（1974）『飛驒 桜洞・沖田』
- ・富士見町教育委員会（1978）『曾利』
- ・藤沼邦彦（1989）『亀ヶ岡式土器様式』『縄文土器大観』第4巻
- ・福野町教育委員会（1990）『安居五百歩遺跡 I（縄文時代編）』
- ・古川町教育委員会（1993）『中野山越遺跡』
- ・平安博物館（1975）『桑飼下遺跡』
- ・増子康眞（1992）『宮田式土器細別（試論）』『どっこいし』第40号
- ・三上徹也（1988）『唐草文系土器様式』『縄文土器大観』第3巻
- ・南 久和（1989）『北陸晚期土器様式』『縄文土器大観』第4巻
- ・山下 异他（1988）『日本の地質 中部地方II』
- ・吉岡康暢（1989）『珠洲の名陶』
- ・米沢義光（1989）『気屋式土器様式』『縄文土器大観』第4巻
- ・渡辺 誠（1973）『縄文時代の漁業』

第12表 遺構別石器類

	石	石	石	剣	ビエラ ・エスキーナ 形右器	打	磨	磨石・ 石斧	右	切	有	縫	延	石	玉	U	R	右	ブ	フレーク	下	チ	玉	黒	その			
	鑿	錐	鉋	器		製	製	石	石	刃	清	石	縫	石	棒	類	F	F	核	ラン	石	チヤー	ト	黒	他			
B3・4 SB1	14	2	2			2	4	9		2									1									
C7・8 SB2	2	1																			5	6	2					
C18・19 SB3						2	2	4													1	1	4					
B3 SK1																	1	1	1		9		12					
B4 SK2	1			2															1	5		4	1					
B4 SK3																			1	2		6						
B4 SK5	1																			4		4						
B5 SK7																				3		2						
B5 SK8																				1		1						
B6 SK9																				9		7						
B6 SK10			1																	6		8						
B6 SK11																				2		1						
B7 SK12																	1				1		12	1				
B7 SK13	1																		1		3	1	2					
B8 SK14																	1		2	2	1	2						
B8 SK15																				1			1					
B8 SK16										2																		
B9 SK17	3								1										2	6	5	2	2					
B9 SK18	4	2	1						1									2	1	1	3	9	8	1				
B14 SK19						2	1	1	2	4			1							29	1	36	1					
B14 SK20						1														1	5	3	11	1				
B16 SK21																				5	1							
C7 SK1									1											1								
C7 SK2	1																		1	5	3	3						
C7 SK3									1											5	3	3						
C8 SK1									1	2	1	2								3	1	5	1					
C10 SK1	1																		1	3	3	2						
C15 SK1	7	1		1		1	1	2										1		32	17							
C15 SK2								1	1											3		9						
C15 SK3	5			1				2	3										1	29	1	53	2					
C15 SK4																				13	1	3						
C17 SK1								3		1										2	2	1						
C17 SK2									1	1										6		3						
C18 SK1	3	1							1	1									1	7		3						

		石器	石器	削 ビエス エスキュー	打 ラ 形 石 器	磨 製 石 器	磨 石・ 凹 石	石 皿	切 口 石 石	有 縫 縫	縫 縫	砥 石 石	玉	U	R	石 核	ブ ラン ク	フレー ク	下 チ ヤ ー ト	玉 黒 曜 石 他	
C 18	S K 2	3																1	6	5	
C 18	S K 3	2																	5	5	
C 18	S K 4																		4	10	
C 18	S K 6		1																3	1	1
C 19	S K 1	1		1			2	1									2	24	2	8	2
C 19	S K 2									1				1	1			3		9	
C 19	S K 3																	2		2	
D 18	S K 1								1												
D 22	S K 1								1	1								2			
B 7	P 10																		4	1	
B 7	P 11																		1	2	1
B 8	P 12																		3		
B 10	P 14																		1	2	
B 10	P 15																	5		7	
B 12	P 22																	1	1	1	
B 12	P 23																		1		
B 12	P 24																	5	2	1	
B 12	P 25							2													
B 14	P 26																	1	1	2	
B 15	P 31	1																1		2	
B 16	P 32																		1		
B 16	P 34																	1	1	1	1
B 16	P 36	1																4	2		
B 16	P 37																		1		
B 16	P 38	2	1		1	1									1		30	9	2		
B 16	P 40	2																			
B 17	P 45																	4			
B 18	P 46	3																21	3	11	
C 7	P 2																	1	2		
C 8	P 6	1																5	5	6	
C 16	P 29	1																2	1	4	
C 16	P 30																	2	1		
C 16	P 32							1											1		
C 16	P 33																	1	1	1	

		石 錐	石 錐	削 器	ヒ ス・ エ ス キ ュ	ヘ ラ 形 石 器	打 製	磨 石	磨 石	切 石	有 目	鍬 石	鍬 石	玉	U	R	石	ブ ラ ン ク	フレー ク	
		雜	雜	匙	器			斧	斧	斧	目	石	鍬	石	F	F	核	下 ラ ン ク 石	チ エ リ ト 石	黒 呂 ト 蘭 他
C 16	P 34																	1		
C 16	P 35			1														2		
C 16	P 36																	1		
C 16	P 53																		1	
C 16	P 54	1																3		
C 16	P 56																	2		
C 16	P 57																	1		
C 17	P 2																	2	1	
C 17	P 3																	1	1	
C 17	P 4																		1	
C 17	P 6																		1	
C 17	P 7									1									2	
C 17	P 9	1																	1	
C 17	P 11																		1	
C 17	P 12																	1		
C 17	P 14																		1	
C 17	P 20	1																	2	
C 17	P 22																	2	3	
C 17	P 23																	1		
C 17	P 24																	1		
C 17	P 25																		2	
C 17	P 26																		1	
C 17	P 27																		1	
C 17	P 37							1										1	1	
C 17	P 61	1							1											
C 18	P 9																	1	1	
C 18	P 13																		1	
C 18	P 14																		1	
C 18	P 15																		1	
C 18	P 16	1																		
C 18	P 18																	1		
C 18	P 41																		1	
C 18	P 44	1																		
C 19	P 50																	1	1	1

第13表 石器一覧表

石 墓

(単位はcm・g)

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石 材	揮因番号	備考
1	A 19	II	474	2.2	1.7	0.4	2.0	I d	玉 銚		
2	A 19	II	731	(3.2)	(1.9)	0.4	(2.3)	I a	下呂石		
3	B3・4	SB1	502	(1.2)	(1.2)	0.3	(0.4)	I d	チャート		
4	B3・4	SB1	504	(2.2)	(1.2)	0.3	(0.5)	I c	下呂石		
5	B3・4	SB1	556	(1.5)	(1.0)	0.2	(0.1)	I c	下呂石		
6	B3・4	SB1	562	(2.6)	(1.4)	0.4	(0.8)	I a	下呂石		
7	B3・4	SB1	592	2.1	1.2	0.4	0.4	I c	下呂石	84-4	
8	B3・4	SB1	611	(2.1)	(1.4)	0.3	(0.6)	I c	下呂石	84-5	
9	B3・4	SB1	617	(2.3)	(1.3)	0.4	(0.7)	III	下呂石	84-8	
10	B3・4	SB1	644	(2.8)	(1.7)	0.4	(1.3)	I c	下呂石		
11	B3・4	SB1	651	(2.1)	(1.0)	0.3	(0.5)	I a	チャート		
12	B3・4	SB1	655	2.0	1.3	0.3	0.4	I b	下呂石	84-2	
13	B3・4	SB1	656	(2.0)	(1.0)	0.3	(0.4)	I a	下呂石	84-3	
14	B3・4	SB1	658	1.6	1.3	0.3	(0.4)	I d	下呂石	84-6	
15	B3・4	SB1	659	(1.5)	(1.2)	0.2	(0.1)	I a	下呂石	84-1	
16	B3・4	SB1	662	1.9	1.2	0.2	(0.3)	I c	下呂石	84-7	
17	B 4	II	48	1.4	0.9	0.3	0.2	I a	下呂石		
18	B 4	SK2	45	(3.1)	(1.3)	(0.3)	(1.2)	I c	下呂石	86-28	
19	B 4	SK5	92	(2.3)	(1.5)	0.5	(0.9)	I d	下呂石	86-31	
20	B 5	II	413	(2.0)	(1.4)	0.3	(0.6)	I b	玉 銚		
21	B 5	II	414	(1.4)	(0.8)	0.2	(0.1)	I c	下呂石		
22	B 5	II	529	(2.0)	(1.2)	0.5	(0.8)	?	黒曜石		
23	B 5	II	538	(2.2)	(1.7)	0.4	(0.9)	I b	下呂石		
24	B 6	II	132	(1.6)	(1.4)	0.4	(0.6)	I c	下呂石		
25	B 7	II	654	(1.6)	(1.0)	0.4	(0.7)	?	チャート		
26	B 7	II	700	(3.8)	1.6	0.5	(2.3)	IV	下呂石		
27	B 7	II	701	(1.2)	(1.2)	0.2	(0.3)	I c	黒曜石		
28	B 7	II	702	2.3	1.7	0.4	1.1	I c	下呂石		
29	B 7	II	703	1.6	1.2	0.3	0.5	I d	下呂石		
30	B 7	II	704	2.0	1.4	0.4	1.0	I a	チャート		
31	B 7	II	705	(2.0)	1.4	0.3	(0.6)	I c	下呂石		
32	B 7	II	715	(3.0)	1.1	0.6	(1.7)	IV	下呂石		
33	B 7	II	716	(3.7)	1.2	0.6	(2.4)	IV	下呂石		
34	B 7	II	717	(2.0)	1.1	0.5	(1.0)	IV	チャート		
35	B 7	II	718	(2.1)	(1.5)	0.6	(1.0)	I d	下呂石		
36	B 7	II	719	(1.4)	0.9	0.2	(0.1)	I a	下呂石		
37	B 7	II	720	1.8	1.1	0.2	0.1	I a	玉 銚		
38	B 7	II	721	(1.9)	1.0	0.3	(0.4)	I a	下呂石		
39	B 7	II	722	(2.2)	1.1	0.5	(1.0)	?	下呂石		
40	B 7	SK13	55	(2.8)	(1.7)	0.3	(1.3)	I c	チャート	86-33	
41	B 8	II	9	1.6	1.3	0.2	0.4	I b	黒曜石	91-15	
42	B 8	II	56	(2.3)	1.5	0.4	(1.0)	IV	下呂石		
43	B 8	II	504	(2.3)	(1.6)	0.4	(1.1)	I d	下呂石		
44	B 8	II	645	(1.8)	1.7	0.4	0.9	I d	下呂石		
45	B 8	II	646	(3.4)	(1.1)	(0.3)	(1.2)	I c	下呂石		
46	B 8	II	647	(2.0)	1.3	0.4	(0.9)	IV	下呂石		
47	B 8	II	648	2.5	1.7	0.3	1.4	I a	下呂石		
48	B 8	II	649	(2.0)	(0.7)	(0.2)	(0.3)	I c	下呂石		
49	B 8	II	650	(2.4)	(1.3)	0.3	(1.0)	I d	下呂石		
50	B 8	II	657	(2.3)	(1.5)	0.5	(1.0)	I c	下呂石		

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	種図番号	備考
51	B 8	II	658	(2.8)	(1.9)	0.4	(1.5)	I c	下呂石	91 17	
52	B 8	II	660	(1.6)	(1.0)	0.3	(0.3)	I c	下呂石		
53	B 8	II	661	(1.7)	(0.8)	0.3	(0.2)	I a	下呂石		
54	B 8	II	663	(1.9)	1.0	0.4	(0.8)	IV	下呂石		
55	B 8	II	665	2.8	(1.3)	0.3	(1.3)	IV	下呂石		
56	B 9	II	94	(2.6)	1.6	0.4	(1.1)	IV	下呂石		
57	B 9	II	95	(1.7)	1.5	0.4	(1.0)	II	下呂石		
58	B 9	II	96	(1.6)	(1.0)	(0.2)	(0.3)	?	下呂石		
59	B 9	II	209	2.4	1.5	0.3	1.2	I c	下呂石	91 18	
60	B 9	II	300	(1.9)	(1.2)	0.4	(0.6)	?	下呂石		
61	B 9	SK17	42	(2.0)	(1.3)	0.5	(0.9)	I c	下呂石	86 39	
62	B 9	SK17	63	3.1	1.7	0.3	1.1	I c	下呂石	86-38	
63	B 9	SK17	64	(1.4)	1.6	0.3	(0.3)	I b	下呂石		
64	B 9	SK18	78	(2.4)	1.3	0.3	(0.9)	IV	下呂石		
65	B 9	SK18	78	(1.7)	(0.9)	0.2	(0.2)	I a	下呂石	86-41	
66	B 9	SK18	80	(2.6)	(1.6)	0.4	(0.9)	I c	下呂石		
67	B 9	SK18	81	(1.9)	(1.7)	0.4	(0.1)	I c	チャート	86-40	
68	B 10	II	43	(2.5)	1.1	0.3	(1.2)	IV	チャート		
69	B 10	II	44	1.9	1.5	0.3	0.8	I d	チャート		
70	B 10	II	45	(1.8)	(0.9)	(0.3)	(0.4)	I b	黒曜石		
71	B 10	II	88	3.3	1.2	0.5	1.8	IV	ト呂石		
72	B 10	II	110	(1.4)	(1.2)	0.2	(0.3)	I a	下呂石		
73	B 10	II	111	(2.0)	(1.3)	0.4	(0.6)	I a	ト呂石		
74	B 10	II	112	1.5	1.3	0.3	0.4	I d	黒曜石	92-28	
75	B 11	II	70	(2.4)	(1.0)	0.4	(0.8)	I c	下呂石		
76	B 11	II	71	2.1	1.3	0.4	1.0	I c	ト呂石		
77	B 11	II	72	2.9	1.3	0.5	1.1	IV	下呂石		
78	B 11	II	73	(2.3)	(1.2)	0.4	(0.8)	I a	下呂石		
79	B 11	II	996	1.5	1.0	0.2	0.3	III	下呂石		
80	B 11	II	997	(1.3)	(1.0)	0.2	(0.2)	I d	下呂石		
81	B 11	II	998	(1.7)	(1.5)	0.3	(0.8)	I a	チャート		
82	B 11	II	1001	(1.8)	(0.9)	0.5	(1.0)	IV	黒曜石		
83	B 11	II	1002	(1.8)	(1.0)	0.3	(0.6)	?	下呂石		
84	B 11	II	1003	(1.4)	(0.9)	0.2	(0.1)	I c	下呂石		
85	B 12	II	9	(2.3)	(1.6)	0.4	(1.2)	I c	下呂石		
86	B 12	II	68	(2.4)	(1.4)	0.3	(0.9)	?	玉髓		
87	B 12	II	197	(2.1)	1.4	0.4	(1.0)	II	下呂石		
88	B 12	II	818	(2.0)	1.4	0.4	(1.0)	I d	下呂石		
89	B 12	II	827	(2.0)	1.2	0.5	(1.1)	IV	頁岩		
90	B 13	II	19	(2.6)	(1.2)	0.2	(0.6)	?	黒曜石		
91	B 15	IV	54	(1.7)	(1.3)	0.3	(0.7)	I c	ト呂石		
92	B 15	P31	1	(1.5)	(1.4)	0.3	(0.5)	I c	黒曜石	90-95	
93	B 16	III	137	(2.4)	(1.5)	0.6	(1.7)	I c	下呂石		
94	B 16	III	337	(2.3)	(1.0)	0.5	(2.0)	II	下呂石		
95	B 16	III	419	2.0	(1.5)	0.3	(1.0)	III	下呂石	92-39	
96	B 16	P36	27	(1.9)	(1.4)	0.4	(0.7)	IV	下呂石	90-96	
97	B 16	P38	31	(2.2)	(1.2)	0.3	(0.4)	I a	ト呂石	90-98	
98	B 16	P38	32	(1.8)	(1.3)	0.3	(0.4)	I a	チャート		
99	B 16	P40	8	(1.9)	(1.3)	0.3	(0.3)	I a	下呂石	90-100	
100	B 16	P40	9	(2.4)	(1.5)	0.5	(1.2)	?	下呂石	90-99	

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	地図番号	備考
101	B 17	II	61	(1.3)	(0.8)	0.3	(0.3)	?	下呂石		
102	B 17	II	266	(1.2)	(1.6)	0.2	(0.4)	I c	黒曜石		
103	B 17	II	514	(1.7)	(0.7)	0.3	(0.3)	?	下呂石		
104	B 17	II	868	(1.6)	(1.0)	0.2	(0.3)	I d	下呂石		
105	B 17	III	1461	(1.8)	(1.4)	0.3	(0.6)	I c	下呂石		
106	B 17	III	1462	(1.2)	(0.9)	(0.2)	(0.2)	I a	下呂石		
107	B 17	III	1707	2.0	1.2	0.3	0.4	I d	下呂石		
108	B 17	III	1708	(1.6)	(1.0)	0.2	(0.3)	I d	下呂石		
109	B 18	II	1	(2.4)	(1.5)	0.4	(1.3)	I c	下呂石		
110	B 18	III	666	1.4	1.1	0.2	0.3	I b	下呂石	91-13	
111	B 18	P46	1	1.5	1.3	0.2	(0.3)	I d	下呂石	90-103	
112	B 18	P46	2	(1.9)	(0.9)	0.3	(0.3)	I c	下呂石	90-102	
113	B 18	P46	3	(2.6)	(1.6)	0.4	(0.9)	I a	下呂石	90-101	
114	B 18	II	679	(1.9)	(1.2)	0.2	(0.6)	I a	下呂石		
115	C 4	II	22	(2.2)	(1.7)	0.6	(1.6)	I a	下呂石		
116	C 4	II	73	(1.1)	(1.2)	0.1	(0.1)	I e	玉髓	92-32	
117	C 4	II	74	1.6	1.2	0.1	0.4	I c	下呂石	91-16	
118	C 4	II	75	(1.4)	(1.5)	0.1	(0.5)	I a	下呂石		
119	C 4	II	76	1.5	1.6	0.1	0.3	I e	下呂石	92-31	
120	C 4	II	77	(1.0)	(1.4)	0.1	(0.4)	I a	下呂石		
121	C 4	III	123	1.6	1.4	0.2	0.7	I a	下呂石		
122	C 4	III	327	(2.7)	(1.6)	0.3	(1.3)	I a	下呂石		
123	C 4	III	568	(2.0)	(1.4)	0.2	(0.8)	I a	下呂石		
124	C 5	II	59	(2.4)	(1.7)	0.6	(2.3)	I a	下呂石		
125	C 5	II	61	(1.4)	(0.8)	0.2	(0.1)	?	下呂石		
126	C 5	II	62	(1.7)	(1.3)	0.1	(0.6)	I a	チャート		
127	C 6	III	19	1.9	1.4	0.3	1.0	IV	下呂石		
128	C 7	II	56	(1.8)	(1.4)	0.4	(1.2)	I a	チャート		
129	C 7	II	201	(1.8)	(1.5)	0.2	(0.9)	I a	チャート	91-9	
130	C 7	II	516	(1.4)	(1.0)	0.1	(0.1)	I a	下呂石		
131	C 7	SB 2	24	1.5	1.7	0.2	0.7	I c	チャート	85-21	
132	C 7	SK 2	88	2.4	1.7	0.6	2.7	II	下呂石	87-54	
133	C 8	II	5	1.7	(1.5)	0.3	(1.0)	II	下呂石		
134	C 8	II	26	(2.1)	(0.8)	0.2	(0.4)	I a	下呂石		
135	C 8	II	27	3.0	1.9	0.4	1.7	IV	下呂石	92-40	
136	C 8	II	28	(1.9)	(1.6)	0.3	(1.0)	I a	下呂石	91-1	
137	C 8	II	120	(1.7)	(1.4)	0.2	(0.6)	I a	チャート		
138	C 8	II	121	(1.7)	1.2	0.1	(0.5)	I a	下呂石		
139	C 8	II	122	(1.4)	(0.9)	0.1	(0.2)	I a	下呂石		
140	C 8	II	123	2.1	1.0	0.2	0.6	IV	下呂石		
141	C 8	II	124	2.0	1.5	0.4	1.0	III	チャート	92-38	
142	C 8	II	125	2.5	1.7	0.4	1.8	I c	玉髓		
143	C 8	II	126	(2.8)	1.4	0.2	(1.0)	IV	チャート		
144	C 8	II	127	(1.2)	(1.1)	0.1	(0.3)	I a	黒曜石		
145	C 8	II	128	1.8	0.9	0.4	0.7	IV	チャート		
146	C 8	II	322	(2.0)	(1.0)	0.3	(0.6)	I a	玉髓		
147	C 8	II	323	3.6	1.7	0.3	1.7	I c	下呂石		
148	C 8	II	324	(1.4)	(1.0)	0.1	(0.4)	I c	下呂石		
149	C 8	II	325	(1.9)	(0.7)	(0.2)	(0.2)	?	玉髓		
150	C 8	II	326	2.8	2.4	0.4	2.4	IV	チャート	92-41	

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	鉢器番号	備考
151	C 8	II	327	(3.0)	(1.0)	0.2	(1.1)	I a	下呂石		
152	C 8	II	448	(2.7)	(1.6)	0.3	(1.6)	I a	下呂石		
153	C 8	III	35	(2.7)	1.6	0.4	(1.8)	IV	チャート		
154	C 8	S B 2	31	3.2	1.7	0.4	2.4	I c	チャート	85-19	
155	C 9	II	28	(1.9)	(1.2)	0.1	(0.4)	I a	下呂石		
156	C 9	II	29	2.2	1.4	0.3	1.0	II	下呂石		
157	C 9	II	30	(2.9)	(1.5)	0.2	(1.2)	I a	下呂石	91-7	
158	C 9	II	31	2.9	1.4	0.3	1.5	I c	チャート		
159	C 9	II	126	(1.8)	(1.6)	0.3	(0.6)	IV	黒曜石	92-42	
160	C 9	II	127	(2.5)	1.0	0.3	(1.1)	IV	下呂石		
161	C 9	II	217	(2.9)	1.9	0.6	(3.1)	IV	下呂石		
162	C 9	II	218	2.5	1.1	0.2	0.7	I c	下呂石		
163	C 9	II	300	2.1	1.2	0.3	1.6	I a	下呂石		
164	C 10	II	67	(1.0)	(1.8)	0.2	(0.5)	I a	下呂石		
165	C 10	II	180	(1.0)	(0.8)	0.1	(0.1)	I a	黒曜石		
166	C 10	II	181	1.5	1.1	0.1	0.3	I a	黒曜石		
167	C 10	II	182	1.8	1.5	0.2	0.6	I c	黒曜石	91-23	
168	C 10	II	341	3.1	1.3	0.3	1.5	IV	チャート		
169	C 10	II	357	2.3	1.7	0.6	2.5	II	下呂石	92-34	
170	C 10	II	358	(2.1)	(1.5)	0.2	(0.5)	I a	玉髓		
171	C 10	II	359	1.5	1.3	0.1	0.4	I a	下呂石	91-2	
172	C 10	S K 1	18	2.3	2.0	0.6	2.0	I c	チャート	88-62	
173	C 11	II	18	(1.4)	(1.2)	0.1	(0.3)	I a	下呂石		
174	C 11	II	72	(1.5)	(1.1)	0.2	(0.3)	I a	黒曜石		
175	C 11	II	130	3.5	(2.8)	0.8	7.7	I d	チャート	92-27	
176	C 11	II	244	2.8	1.6	0.5	2.2	II	下呂石		
177	C 11	II	245	(1.4)	(1.8)	0.2	(0.7)	I e	チャート		
178	C 11	II	995	(2.6)	(1.5)	0.3	(1.2)	I c	下呂石		
179	C 12	II	28	(3.0)	(1.1)	0.3	(1.6)	IV	黒曜石		
180	C 12	II	50	2.0	1.7	0.2	0.8	I c	チャート	91-21	
181	C 12	II	51	2.1	1.6	0.2	0.8	IV	下呂石		
182	C 12	II	52	(1.6)	(1.6)	0.3	(0.9)	I a	下呂石		
183	C 12	II	122	(2.7)	(1.9)	0.4	(2.1)	I a	下呂石		
184	C 12	II	123	(1.9)	(1.8)	0.4	(1.0)	I a	下呂石		
185	C 12	II	124	1.5	1.4	0.1	0.4	I c	下呂石	91-19	
186	C 12	II	125	2.0	1.5	0.3	1.1	I c	下呂石		
187	C 12	II	126	(1.3)	(1.2)	0.1	(0.3)	I a	黒曜石		
188	C 13	II	9	(2.7)	(0.6)	0.4	1.7	I c	下呂石		
189	C 13	II	10	(2.2)	(1.4)	0.3	(1.3)	I d	玉髓		
190	C 13	II	31	(1.8)	(1.3)	0.3	(0.7)	I a	下呂石		
191	C 13	II	32	1.7	1.3	0.1	0.3	I a	下呂石	91-3	
192	C 13	II	97	(1.5)	(1.0)	0.1	(0.4)	I a	玉髓		
193	C 13	II	99	(1.8)	(1.3)	0.2	(0.6)	I a	下呂石		
194	C 13	II	101	(2.7)	(1.3)	0.4	(1.0)	?	下呂石		
195	C 14	II	9	1.7	1.1	0.3	0.7	I c	下呂石		
196	C 14	II	10	(2.3)	(1.3)	0.4	1.3	IV	チャート		
197	C 14	II	31	(2.8)	1.2	0.5	(1.7)	IV	下呂石		
198	C 14	II	49	(3.2)	(1.3)	0.4	(2.0)	I a	下呂石		
199	C 14	II	50	3.5	2.7	0.8	6.3	II	下呂石	92-35	
200	C 14	II	51	(2.2)	(1.4)	0.2	0.7	I a	下呂石		

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	種別番号	備考
201	C 14	II	52	(1.2)	(1.0)	0.1	(0.3)	I a	下呂石		
202	C 14	II	54	(3.0)	1.0	0.5	(1.3)	IV	チャート		
203	C 15	II	2	2.2	1.2	0.4	1.1	IV	チャート		
204	C 15	II	8	(1.5)	(1.1)	0.2	(0.4)	I a	下呂石		
205	C 15	II	9	(1.1)	(1.1)	0.1	(0.1)	I a	下呂石		
206	C 15	II	94	(2.1)	(1.2)	0.2	(0.7)	I a	下呂石		
207	C 15	II	95	(1.9)	(1.7)	0.4	(1.2)	I d	下呂石	92-25	
208	C 15	II	96	(1.8)	(1.4)	0.2	(0.5)	I a	下呂石		
209	C 15	II	155	(1.7)	(1.0)	0.1	(0.3)	I a	下呂石		
210	C 15	II	156	(2.3)	(1.6)	0.3	1.2	II	下呂石		
211	C 15	II	182	(1.7)	(1.3)	0.2	(0.7)	I c	チャート		
212	C 15	SK 1	23	(1.5)	(0.8)	0.2	(0.3)	?	下呂石		
213	C 15	SK 1	24	1.4	1.0	0.2	0.3	I a	下呂石		
214	C 15	SK 1	88	1.6	0.7	0.2	0.2	I c	下呂石		
215	C 15	SK 1	89	(1.1)	(1.0)	0.1	(0.2)	?	下呂石		
216	C 15	SK 1	140	1.6	1.0	0.2	0.3	I a	旗曜石	88-59	
217	C 15	SK 1	141	(2.2)	1.2	0.3	(0.5)	I b	下呂石	88-61	
218	C 15	SK 1	142	(2.0)	1.2	0.2	(0.5)	I a	下呂石	88-60	
219	C 15	SK 3	34	(1.1)	(1.0)	0.1	(0.1)	I a	下呂石		
220	C 15	SK 3	35	(1.8)	(1.6)	0.2	(1.7)	IV	下呂石		
221	C 15	SK 3	91	(2.2)	1.3	0.3	(0.6)	I a	玉	88-68	
222	C 15	SK 3	193	(1.4)	(0.9)	0.1	(0.3)	?	玉	88-67	
223	C 15	SK 3	194	(1.9)	1.3	0.3	(0.6)	I a	下呂石	88-67	
224	C 16	II	16	2.1	1.5	0.5	1.8	II	チャート	92-36	
225	C 16	II	44	(1.6)	(1.1)	0.1	(0.3)	I a	玉		
226	C 16	II	45	(1.8)	(1.1)	0.2	(0.4)	I a	チャート		
227	C 16	II	72	(2.5)	(1.4)	0.4	(1.5)	I a	下呂石		
228	C 16	II	128	(1.9)	(1.2)	0.2	(0.5)	I a	下呂石	91-4	
229	C 16	II	129	(1.5)	(1.1)	0.3	(0.6)	I a	下呂石		
230	C 16	III	36	2.4	1.6	0.3	1.2	I a	下呂石		
231	C 16	P29	16	1.6	1.1	0.2	0.4	I a	下呂石	90-105	
232	C 16	P54	9	(1.3)	(0.9)	0.2	0.3	I a	下呂石	90-107	
233	C 17	II	419	(3.2)	(1.4)	0.3	(1.5)	I a	下呂石		
234	C 17	P9	11	(2.1)	(1.4)	0.4	(0.8)	I a	下呂石	90-108	
235	C 17	P20	7	(0.9)	(0.7)	(0.2)	(0.1)	?	下呂石		
236	C 17	P61	7	1.6	0.9	0.2	0.3	I c	下呂石	90-110	
237	C 18	II	213	(1.8)	1.5	0.2	0.6	I a	下呂石		
238	C 18	II	214	(2.3)	(1.1)	0.2	(0.7)	I a	下呂石		
239	C 18	II	215	(2.7)	1.6	0.4	(1.2)	I a	下呂石		
240	C 18	II	434	(2.2)	(1.2)	0.1	(0.4)	I a	下呂石		
241	C 18	II	435	1.7	1.3	0.1	0.5	I a	玉	88-67	
242	C 18	II	436	(1.9)	(1.3)	0.2	(0.4)	I a	下呂石		
243	C 18	II	663	(1.7)	1.0	0.1	(0.3)	I a	玉	91-12	
244	C 18	II	664	1.8	1.2	0.2	0.5	I a	下呂石	91-6	
245	C 18	II	665	2.5	1.1	0.2	0.8	I a	チャート	91-10	
246	C 18	II	666	(2.0)	1.7	0.2	(1.1)	I a	下呂石		
247	C 18	III	109	1.7	1.2	0.2	0.4	I b	下呂石	91-14	
248	C 18	III	553	(2.3)	(1.0)	0.1	(0.3)	I a	下呂石		
249	C 18	III	553	(2.3)	(1.0)	0.1	(0.3)	I a	下呂石		
250	C 18	SK 1	67	(2.1)	(1.7)	(0.4)	(1.5)	?	下呂石		

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	頭固番号	備考
251	C	18	SK 1	68	(2.2)	(1.3)	0.3	(0.5)	I b	黒曜石	89- 80
252	C	18	SK 1	182	1.9	1.4	0.4	0.7	I c	下呂石	
253	C	18	SK 2	38	(1.9)	1.3	0.3	0.8	I c	下呂石	89- 84
254	C	18	SK 2	39	2.4	(1.2)	0.4	(0.9)	I d	下呂石	89- 85
255	C	18	SK 2	40	(2.1)	1.4	0.4	(0.8)	I a	下呂石	89- 83
256	C	18	SK 3	65	(1.2)	(1.1)	(0.3)	(0.3)	?	下呂石	
257	C	18	SK 3	66	(1.8)	(0.9)	0.2	(0.3)	I c	下呂石	89- 86
258	C	18	P 16	5	1.8	1.4	0.4	0.6	I c	下呂石	90-111
259	C	18	P 44	5	1.9	1.4	0.3	0.6	I b	下呂石	90-112
260	C	19	II	98	(2.2)	(1.2)	0.2	(0.7)	I a	下呂石	91- 5
261	C	19	II	99	(2.1)	(1.4)	0.3	(1.0)	I a	チャート	
262	C	19	II	531	(1.5)	(1.1)	0.1	(0.1)	I a	チャート	
263	C	19	II	54	1.9	1.0	0.3	0.6	I a	下呂石	
264	C	19	III	398	1.9	1.3	0.4	1.0	I d	下呂石	92-24
265	C	19	SK 1	228	(1.3)	(0.9)	0.2	(0.3)	I d	下呂石	89- 88
266	C	20	III	187	2.8	2.3	0.7	4.1	I d	下呂石	92-26
267	C	21	II	127	2.9	2.3	0.6	5.3	II	チャート	92-37
268	C	21	II	128	(1.2)	(1.3)	0.2	(0.4)	I a	下呂石	
269	C	23	II	1	(2.0)	(1.5)	0.4	(1.0)	I e	下呂石	
270	C	23	II	3	(1.6)	(1.3)	0.4	(0.8)	I c	下呂石	
271	C	23	II	4	(1.8)	1.3	0.4	(0.7)	I c	下呂石	
272	C	23	III	1	(2.1)	(1.1)	0.3	(0.5)	I d	下呂石	
273	C	23	III	783	(1.7)	(1.5)	(0.2)	(0.5)	I a	下呂石	
274	C	23	IV	86	(2.3)	(1.3)	(0.3)	(0.8)	I a	下呂石	
275	C	23	IV	194	(1.5)	(1.0)	(0.2)	(0.3)	I a	下呂石	
276	C	24	III	121	(1.4)	(1.5)	0.2	(0.4)	I a	下呂石	
277	D	25	II	1	1.5	1.3	0.3	0.5	I d	下呂石	
278	D	27	II	1	1.6	1.3	0.3	0.5	I c	下呂石	91-11
279	E	27	II	27	1.6	1.0	0.1	0.1	I a	玉髓	
280	E	28	II	9	(1.7)	(1.3)	0.2	(0.4)	I c	下呂石	
281	E	28	II	10	2.4	1.5	0.2	1.1	III	玉髓	
282	E	29	II	53	1.6	1.3	0.1	0.3	I a	黒曜石	
283	E	29	II	54	(1.4)	(0.6)	0.1	(0.2)	I a	下呂石	
284	E	29	III	3	2.1	1.3	0.3	1.0	I a	下呂石	91- 8
285	E	29	III	4	1.3	1.5	0.1	0.3	I e	黒曜石	92-33
286	E	29	III	7	(1.8)	(1.4)	0.1	(0.5)	?	下呂石	
287	E	29	III	65	(1.5)	(1.4)	0.3	(0.7)	?	黒曜石	
288	B	18	II	1	(1.6)	(1.3)	0.3	(0.6)	I a	下呂石	
289	B	18	II	3	(2.2)	(1.2)	0.5	(0.8)	I a	下呂石	
290	B	17	II	7	(1.5)	(1.0)	0.3	(0.4)	I c	下呂石	
291	B	17	II	10	1.4	1.3	0.2	0.3	I b	下呂石	
292	B	18	II	11	(1.2)	(1.3)	0.3	(0.5)	I c	下呂石	
293	B	16	II	12	(2.0)	(1.5)	0.4	(1.1)	II	下呂石	
294	B	18	II	15	(1.4)	1.6	0.3	(0.8)	I c	下呂石	
295	B	17	II	16	(2.0)	(1.0)	0.3	(0.3)	I a	下呂石	
296	B	17	II	17	(2.8)	1.5	0.4	(1.7)	IV	チャート	
297	B	16	II	19	(2.0)	1.2	0.5	(1.1)	IV	下呂石	
298	B	17	II	26	(1.6)	(1.2)	0.3	(0.5)	I c	下呂石	
299	B	17	II	28	(2.0)	1.0	0.4	(0.8)	?	黒曜石	
300	B	16	II	30	(2.2)	(1.4)	0.5	(1.5)	I d	下呂石	

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	標記番号	備考
301	B	16	II	33	(1.6)	(1.0)	0.4	(0.6)	I d	下呂石	
302	B	17	II	35	1.6	1.3	0.3	0.4	I c	玉髓	91-22
303	B	16	II	37	(1.4)	(0.9)	0.3	(0.3)	I a	下呂石	
304	B	15	II	41	(1.4)	0.8	0.2	(0.3)	I a	下呂石	
305	B	16	II	43	(1.4)	(1.0)	0.3	(0.3)	I a	下呂石	
306	B	17	II	47	(2.4)	(1.2)	0.4	(1.1)	I c	チャート	91-20
307	B	16	II	48	(2.0)	1.2	0.4	(1.1)	I d	下呂石	
308	B	16	II	51	(2.2)	(1.3)	0.4	(0.8)	I a	下呂石	
309	B	16	II	56	1.4	1.1	0.4	0.5	I a	チャート	
310	B	17	II	59	(2.3)	(0.9)	0.4	(0.6)	I a	下呂石	
311	B	17	II	60	(2.1)	(1.1)	0.2	(0.3)	I d	黒曜石	92-30
312	B	17	II	61	1.7	1.0	0.3	0.3	I a	下呂石	
313	B	17	II	63	(1.8)	(1.3)	0.2	(0.4)	I a	下呂石	
314	B	18	II	66	(1.2)	(0.9)	0.2	(0.2)	I c	チャート	
315	B	15	II	69	(1.4)	(1.4)	0.2	(0.3)	I b	下呂石	
316	B	14	II	75	(1.4)	(0.9)	0.3	(0.3)	?	下呂石	
317	B	18	II	76	(1.5)	(0.9)	0.4	(0.4)	I d	下呂石	
318	B	17	III	79	(2.0)	(1.2)	0.4	(0.8)	I c	下呂石	
319	B	17	III	82	(1.6)	(0.8)	0.2	(0.3)	I c	下呂石	
320	B	17	III	84	(1.9)	1.6	0.4	(1.2)	I c	下呂石	
321	B	14	II	85	(2.3)	(1.0)	0.4	(0.5)	I a	下呂石	
322	B	17	II	90	(3.3)	2.1	0.6	(4.0)	III	玉髓	
323	B	14	II	96	(3.5)	2.1	0.8	(5.7)	IV	チャート	
324	B	14	II	98	1.9	0.9	0.3	0.3	I a	下呂石	
325	B	16	III	100	(2.2)	1.4	0.4	(0.9)	I a	チャート	
326	B	15	III	117	1.6	1.3	0.4	0.6	I a	下呂石	
327	B	15	II	131	2.2	1.4	0.4	0.9	I a	下呂石	
328	B	15	II	152	(1.6)	1.7	0.3	(0.8)	I a	下呂石	
329	B	18	III	153	(3.8)	1.3	0.5	(2.1)	IV	下呂石	
330	B	17	III	155	(2.9)	1.0	0.6	(1.6)	IV	下呂石	
331	B	16	III	159	(1.6)	(1.1)	0.3	(0.4)	I a	下呂石	
332	B	17	III	166	1.4	1.9	0.3	0.2	I a	下呂石	
333	B	16	III	179	(1.3)	(0.9)	0.2	(0.1)	I b	下呂石	
334	B	18	III	182	(2.1)	(1.2)	0.3	(0.4)	I c	下呂石	
335	B	18	III	185	(1.1)	1.0	0.2	(0.1)	I a	下呂石	
336	B	16	III	187	(2.6)	1.7	0.5	(1.8)	I d	凝灰岩	92-29
337	B	17	III	197	1.8	0.6	0.2	0.3	IV	下呂石	
338	B	17	III	198	(1.6)	(1.2)	0.3	(0.4)	I a	下呂石	
339	B	12	II	209	(3.2)	1.5	0.5	(1.9)	IV	下呂石	
340	B	10	II	211	(1.8)	1.1	0.3	(0.6)	IV	黒曜石	
341	B	12	II	214	(2.5)	(1.3)	0.4	(1.1)	I c	チャート	
342	B	12	II	215	(2.2)	1.5	0.4	(0.9)	I c	下呂石	
343	B	12	II	219	(3.2)	1.4	0.4	(1.5)	IV	チャート	
344	B	11	II	223	1.2	0.9	0.2	0.1	I c	下呂石	
345	B	10	II	302	2.8	1.4	0.7	2.3	IV	チャート	
346	B	11	II	315	2.0	1.4	0.4	0.7	I c	下呂石	
347	B	11	II	320	4.1	2.5	1.2	8.3	III	下呂石	
348	B	12	II	321	1.3	0.9	0.3	0.3	III	下呂石	
349	B	17	II	801	1.8	1.2	0.2	0.3	I a	下呂石	
350	B	18	II	816	(1.7)	(1.0)	0.2	(0.3)	I a	下呂石	

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	挿図番号	備考
351	B 18	II	822	(1.7)	(1.2)	0.3	(0.5)	?	下呂石		
352	B 18	II	823	(2.6)	1.6	0.6	1.8	I c	下呂石		
353	B 17	II	830	(1.4)	(0.8)	0.3	0.3	?	下呂石		
354	B 18	II	836	(2.0)	(1.1)	0.3	(0.5)	I a	下呂石		
355	B 17	II	852	(1.6)	(1.2)	0.3	(0.4)	I a	下呂石		
356	B 17	II	854	(2.4)	(1.4)	0.3	(0.9)	I a	下呂石		
357	B 17	II	855	(1.4)	(0.9)	0.3	(0.2)	I a	下呂石		
358	B 17	II	864	1.4	0.8	0.2	0.1	I c	下呂石		
359	B 17	II	865	(1.3)	(0.9)	0.2	(0.1)	I a	下呂石		
360	B 17	II	868	1.7	0.8	0.4	0.3	I d	下呂石		
361	B 17	II	869	(1.2)	(0.6)	(0.2)	(0.2)	?	下呂石		
362	B 17	II	892	1.3	1.1	0.2	0.2	I a	下呂石		
363	B 17	II	898	(1.2)	(0.8)	0.2	(0.1)	?	下呂石		
364	B 18	II	906	(1.9)	(0.6)	0.3	(0.3)	I a	下呂石		
365	B 17	II	923	(2.0)	1.1	0.4	0.6	I b	下呂石		
366	B 17	II	926	(1.6)	(0.9)	0.4	(0.4)	I a	下呂石		
367	B 18	II	936	(1.6)	1.0	0.2	(0.3)	I a	下呂石		
368	B 17	II	949	(3.0)	(1.2)	0.5	(1.2)	I a	下呂石		
369	B 17	II	950	(1.5)	(0.8)	0.3	(0.3)	I a	下呂石		
370	表採		1	(2.5)	(1.6)	0.3	(1.4)	I a	下呂石		
371	表採		2	(1.0)	1.4	0.2	(0.3)	I c	黒曜石		

石錐

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	挿図番号	備考
1	B 3・4	S B I	610	2.7	0.9	0.3	0.8	II b	玉髓	84-9	
2	B 3・4	S B I	668	(5.3)	(1.1)	0.8	(5.6)	?	チャート	84-10	
3	B 5	II	18	(1.9)	(1.5)	(0.6)	(1.6)	I	チャート		
4	B 7	II	6	4.4	1.3	0.9	6.3	II b	下呂石		
5	B 7	II	706	(3.7)	0.9	0.5	(1.6)	II a	下呂石		
6	B 8	II	55	(2.1)	1.1	0.4	(0.9)	II b	下呂石		
7	B 8	II	662	(3.6)	1.3	0.8	(3.3)	II b	下呂石		
8	B 8	II	664	(2.7)	(1.1)	0.5	(1.8)	II b	チャート		
9	B 9	II	97	(3.6)	(1.7)	0.7	(3.1)	I	下呂石		
10	B 9	II	185	(2.4)	(0.8)	0.4	(1.0)	II b	チャート		
11	B 9	II	186	(3.7)	(1.1)	0.7	(4.0)	?	チャート		
12	B 9	II	187	(3.0)	(0.8)	0.4	(1.4)	II b	チャート		
13	B 9	II	301	(2.0)	(1.0)	0.5	(1.3)	II b	チャート		
14	B 9	S K 18	10	2.8	3.4	0.8	4.3	I	チャート	86-42	
15	B 9	S K 18	19	3.0	1.3	0.5	2.0	II b	チャート	86-43	
16	B 12	II	819	(3.2)	(1.3)	0.8	(3.3)	I	チャート		
17	B 12	II	821	(4.6)	(1.1)	0.7	(4.5)	?	下呂石		
18	B 12	II	822	(3.5)	(1.1)	0.6	(2.0)	II b	下呂石	93-50	
19	B 14	II	24	2.6	1.0	0.7	(1.9)	II b	玉髓	93-49	
20	B 14	IV	97	(3.6)	1.0	0.6	(2.6)	II a	チャート		
21	B 16	III	432	(1.8)	(0.9)	0.5	(1.1)	II b	黒曜石		
22	B 16	P 38	33	(1.6)	(0.4)	0.3	(0.1)	II b	玉髓		
23	B 17	II	807	(2.0)	(0.7)	(0.5)	(0.6)	?	下呂石		
24	B 17	II	865	(2.4)	1.6	0.6	(2.1)	II b	下呂石		
25	B 17	III	656	(3.2)	(0.9)	0.5	(1.7)	?	下呂石		

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	捕獲番号	備考
26	B 17	Ⅲ	1460	2.4	1.6	0.6	1.8	II b	下呂石		
27	B 17	IV	56	(3.4)	(1.0)	(0.7)	(2.6)	II a	下呂石		
28	B 18	III	1	(3.0)	(0.6)	0.5	(1.8)	II b	下呂石		
29	B 18	III	294	2.9	(0.4)	0.4	(1.2)	II a	下呂石		
30	B 19	II	539	(3.5)	(1.1)	0.3	(1.4)	II b	チャート		
31	B 19	II	680	(2.8)	(0.9)	0.5	(1.5)	II b	瓦 磚	93-55	
32	C 5	II	60	(2.3)	1.1	0.3	(1.3)	II b	チャート	93-52	
33	C 6	II	4	(3.1)	(1.1)	(0.9)	(3.1)	?	チャート		
34	C 6	II	87	5.1	1.1	0.7	3.1	II a	下呂石	93-47	
35	C 8	II	130	(2.4)	(1.9)	1.1	(4.2)	I	チャート		
36	C 8	II	131	2.1	0.8	0.3	0.9	II b	チャート		
37	C 8	II	328	(3.2)	1.1	(0.4)	(2.3)	II b	瓦 岩		
38	C 8	II	449	(3.0)	(1.2)	(0.7)	(2.3)	?	チャート		
39	C 8	SB 2	30	(2.4)	1.2	0.4	(1.2)	II b	チャート	85-20	
40	C 8	P 6	39	(3.8)	1.0	0.6	(2.7)	?	チャート	90-104	
41	C 9	II	128	(2.5)	2.6	0.6	(3.0)	I	チャート	93-44	
42	C 9	II	129	(3.8)	1.5	0.9	(5.9)	II b	チャート		
43	C 9	II	219	(2.0)	0.6	0.3	0.4	II b	玉 磚		
44	C 10	II	183	3.6	1.0	0.7	0.9	II a	下呂石		
45	C 10	II	360	(2.1)	(1.1)	0.2	(0.8)	III	下呂石	93-51	
46	C 10	II	361	2.7	(1.5)	0.6	(2.6)	III	玉 磚	93-57	
47	C 11	II	1	2.6	0.9	0.4	1.3	II b	チャート	93-53	
48	C 11	II	131	(3.3)	1.8	0.6	(4.5)	II b	チャート		
49	C 11	II	132	2.8	0.9	0.5	1.9	II b	下呂石		
50	C 12	II	127	(2.9)	1.2	0.8	(3.7)	II b	チャート		
51	C 12	II	128	(2.4)	0.9	0.3	(1.0)	?	チャート		
52	C 12	II	129	(2.0)	0.7	0.3	(0.8)	II b	下呂石		
53	C 13	II	49	2.1	1.0	0.2	0.6	II b	玉 磚	93-54	
54	C 14	II	11	4.1	0.5	0.6	2.8	II b	玉 磚		
55	C 14	II	14	(2.6)	(0.8)	(0.4)	(1.0)	II b	下呂石		
56	C 14	II	53	(3.3)	1.1	0.5	(2.6)	II b	チャート		
57	C 15	II	3	(2.1)	0.8	0.3	(0.6)	II b	チャート		
58	C 15	II	7	(2.2)	1.6	0.5	1.6	I	チャート		
59	C 15	SK 1	87	(3.1)	1.9	0.5	(2.8)	III	玉 磚	88-63	
60	C 16	II	17	(2.2)	1.1	0.4	(1.3)	II b	チャート		
61	C 16	P 35	16	(2.1)	(0.7)	0.2	(0.3)	II b	下呂石	90-106	
62	C 18	II	433	(2.0)	(0.4)	0.2	0.1	II b	玉 磚		
63	C 18	II	437	2.5	1.1	0.1	0.6	III	玉 磚	93-56	
64	C 18	III	225	(2.6)	1.4	0.7	(1.7)	II b	下呂石		
65	C 18	SK 1	67	2.7	0.9	0.2	1.1	II a	下呂石	89-81	
66	C 20	II	83	4.7	1.4	0.5	3.8	II a	下呂石		
67	C 23	II	2	(3.3)	(1.3)	0.8	(3.6)	II b	チャート		
68	C 23	III	2	(3.1)	(3.0)	0.8	(4.9)	I	チャート		
69	B 17	II	2	(3.0)	(0.9)	0.5	(1.2)	II b	下呂石		
70	B 18	II	6	1.9	0.7	0.2	0.4	II b	玉 磚		
71	B 17	II	8	(1.5)	(0.7)	0.4	(0.4)	?	下呂石		
72	B 18	II	13	(3.6)	(1.2)	(0.7)	(2.6)	II b	玉 磚	93-45	
73	B 16	II	14	(3.2)	(1.4)	(0.5)	(2.1)	I	チャート		
74	B 16	II	22	(3.0)	(0.8)	0.6	(1.4)	?	下呂石		
75	B 16	II	24	(1.8)	(0.7)	(0.4)	(0.6)	II b	下呂石		

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	辨認番号	備考
76	B 16	II	32	(3.1)	(1.3)	0.6	(2.6)	II b	下呂石		
77	B 16	II	36	(2.5)	(0.5)	(0.3)	(0.5)	II b	下呂石		
78	B 15	II	41	(2.3)	1.0	(0.3)	(0.7)	II b	下呂石		
79	B 16	II	54	(2.4)	(1.5)	0.5	(2.3)	II b	チャート		
80	B 15	II	80	(3.2)	(1.2)	(0.9)	(2.6)	II b	下呂石		
81	B 17	III	83	(3.6)	1.3	0.3	(0.8)	I	下呂石	93-43	
82	B 16	III	111	(1.8)	(0.6)	(0.2)	(0.3)	?	チャート		
83	B 17	III	161	3.4	0.7	0.6	1.2	II a	下呂石		
84	B 16	III	176	(3.4)	(1.2)	(0.8)	(3.3)	II b	下呂石		
85	B 17	III	195	(3.0)	(0.9)	(0.7)	(1.8)	II b	F呂石		
86	B 17	III	199	4.6	1.0	0.6	3.2	II a	下呂石		
87	A 13	II	207	3.7	0.9	0.6	1.5	II a	下呂石	93-46	
88	A 12	II	210	3.3	0.7	0.5	1.1	II a	下呂石		
89	B 12	II	218	(5.2)	1.5	0.9	(5.5)	II a	下呂石		
90	B 12	II	220	(2.7)	(0.8)	0.5	(1.1)	?	チャート		
91	B 10	II	306	(3.7)	(1.7)	1.0	(6.1)	II b	チャート		
92	B 7	II	402	3.0	0.9	0.6	1.4	II a	チャート	93-48	
93	B 18	II	843	(4.2)	1.2	0.7	(3.2)	II a	下呂石		
94	B 17	II	920	2.3	0.8	0.4	0.6	II a	下呂石		
95	B 17	II	922	(3.8)	1.1	0.6	(2.0)	II b	下呂石		
96	表採		8	(2.7)	1.8	0.6	(3.0)	I	チャート		

石匙

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	辨認番号	備考
1	A 19	II	729	(3.2)	(3.4)	0.8	(8.8)	チャート	93-58	
2	B 3・4	SB 1	624	(4.0)	(4.6)	(0.7)	(12.5)	F呂石	84-11	
3	B 3・4	SB 1	642	(4.7)	(5.0)	(0.8)	(14.6)	珪質頁岩		
4	C 21	C21	699	(2.5)	(5.6)	0.7	(8.1)	下呂石	93-59	

ピエス・エスキュー

番号	山七区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	辨認番号	備考
1	B 4	II	51	1.9	1.8	0.8	2.2	玉髓		
2	B 4	SK 2	13	1.6	1.5	0.6	1.6	下呂石		
3	B 4	SK 2	43	2.4	2.1	1.0	5.7	玉髓	86-29	
4	B 5	II	39	3.5	1.3	1.1	5.4	下呂石	94-64	
5	B 5	II	376	2.0	1.1	0.9	1.8	下呂石	94-72	
6	B 6	SK 10	60	2.6	3.2	0.7	5.7	下呂石	86-32	
7	B 7	II	11	2.8	1.5	1.0	4.8	下呂石		
8	B 8	II	560	2.2	2.0	1.2	6.6	玉髓		
9	B 8	II	709	2.3	2.1	0.5	3.1	下呂石		
10	B 9	II	24	2.4	2.1	1.1	5.5	玉髓		
11	B 9	II	143	2.4	2.5	0.5	3.7	下呂石		
12	B 11	II	270	3.0	2.2	0.8	6.8	下呂石	94-62	
13	B 11	II	857	3.4	2.4	1.1	8.7	玉髓		
14	B 11	II	859	2.7	1.8	0.6	3.3	玉髓		
15	B 12	II	2	3.7	2.5	1.0	11.2	下呂石	94-67	

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	種図番号	備考
16	B 12	II	126	2.5	2.4	0.5	3.9	チャート	94-70	
17	B 12	II	402	4.1	1.4	0.7	4.6	下呂石		
18	B 12	II	678	2.5	0.9	0.6	1.4	下呂石		
19	B 12	II	681	3.1	2.2	0.6	5.3	チャート	94-68	
20	B 14	IV	24	3.5	2.4	1.4	11.2	玉髓		
21	B 14	SK19	27	1.8	1.5	0.6	1.9	チャート	87-47	
22	B 14	SK19	33	2.2	2.2	0.7	3.3	玉髓	87-46	
23	B 14	SK20	33	3.0	2.6	1.0	8.6	玉髓	87-53	
24	B 15	II	4	3.4	1.7	0.9	4.4	下呂石		
25	B 15	II	13	1.8	1.7	0.6	2.0	下呂石		
26	B 15	II	19	2.3	1.3	0.5	2.0	下呂石		
27	B 15	II	33	2.6	1.9	1.1	5.8	玉髓		
28	B 15	II	222	2.6	2.6	1.2	7.9	下呂石		
29	B 16	III	156	1.9	1.7	0.5	1.8	下呂石		
30	B 16	III	163	1.8	1.9	0.5	2.1	下呂石		
31	B 16	P38	25	2.9	3.5	1.1	12.6	下呂石		
32	B 17	II	66	3.1	2.2	1.0	7.7	下呂石		
33	B 17	II	73	3.0	2.5	1.0	7.3	下呂石	94-66	
34	B 17	II	509	2.0	1.5	0.5	1.4	チャート		
35	B 17	III	317	1.9	1.5	0.4	1.6	玉髓		
36	B 17	III	427	1.7	1.2	0.4	0.8	黒曜石	94-76	
37	B 17	III	1190	3.0	1.7	1.0	5.0	下呂石	94-63	
38	B 18	III	296	3.2	2.3	1.2	8.1	下呂石	94-65	
39	B 18	IV	40	2.7	1.8	0.7	3.4	下呂石	94-60	
40	B 19	II	1893	3.8	2.0	0.9	9.5	玉髓		
41	C 4	III	378	1.8	1.7	0.9	2.3	玉髓		
42	C 5	III	19	1.9	1.7	0.5	2.1	下呂石		
43	C 5	III	23	1.8	1.1	0.5	1.0	玉髓		
44	C 6	III	18	2.0	2.2	0.8	3.8	玉髓	94-75	
45	C 8	II	41	2.6	2.2	1.3	7.8	下呂石		
46	C 8	II	105	1.8	1.7	0.7	3.6	下呂石		
47	C 8	II	128	2.0	2.6	0.5	2.7	玉髓		
48	C 9	II	246	2.1	1.2	0.9	2.4	下呂石		
49	C 10	II	63	2.1	2.5	0.7	3.7	玉髓	94-74	
50	C 11	II	11	1.9	2.0	0.2	1.5	玉髓		
51	C 12	II	60	4.6	2.2	0.8	8.2	チャート		
52	C 12	II	152	2.9	1.2	1.0	3.5	チャート	94-69	
53	C 15	II	26	2.7	1.3	0.5	2.6	チャート		
54	C 15	III	5	2.7	2.2	0.6	3.3	玉髓		
55	C 15	SK1	19	2.2	2.0	0.6	3.1	チャート	88-64	
56	C 15	SK3	84	2.6	1.5	0.8	3.5	玉髓	88-69	
57	C 18	II	33	3.0	1.4	0.8	3.5	下呂石		
58	C 18	II	39	2.8	1.8	0.8	3.8	下呂石		
59	C 18	SK6	29	5.6	2.6	1.5	18.2	チャート	89-87	
60	C 19	II	739	2.1	2.0	0.6	2.7	玉髓	94-73	
61	C 19	SK1	226	2.7	2.1	1.0	5.4	玉髓		
62	C 20	II	8	2.9	3.3	0.5	6.6	チャート		
63	C 20	III	7	2.5	2.2	0.5	3.3	下呂石		
64	C 22	II	39	3.4	1.2	1.1	4.6	下呂石	94-61	
65	D 4	II	71	2.0	1.9	0.5	2.3	チャート		

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	測定番号	備考
66	D	21	II	12	3.3	2.3	0.7	5.7	玉髓	
67	D	24	III	7	2.4	1.7	0.6	2.9	チャート	
68	D	24	III	13	2.1	1.7	0.6	2.4	下呂石	
69	D	24	III	194	3.0	2.4	0.7	5.4	トロ石	
70	D	27	II	18	2.8	1.8	1.0	6.5	玉髓	94-71
71	E	27	II	1	2.1	1.1	0.5	1.2	下呂石	

ヘラ形石器

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	測定番号	備考
1	B	3	II	1364	2.2	1.7	0.7	2.8	玉髓	
2	B	4	II	378	4.3	1.9	0.7	7.2	下呂石	
3	B	8	II	277	3.9	2.3	0.9	8.3	下呂石	95-80
4	B	8	II	713	2.9	2.5	0.8	5.2	下呂石	
5	B	14	SK19	4	2.4	2.0	1.0	5.3	下呂石	87-48
6	B	15	IV	1	2.8	2.2	0.9	5.6	下呂石	95-77
7	B	16	III	737	2.8	1.3	0.9	3.2	下呂石	95-81
8	B	17	II	198	1.9	1.6	0.5	1.4	チャート	
9	C	10	II	445	2.5	2.0	1.1	4.9	下呂石	
10	C	12	II	55	2.0	1.8	0.7	2.9	下呂石	95-78
11	C	19	II	738	3.5	2.2	0.9	5.4	玉髓	95-82
12	E	29	II	28	2.2	1.8	1.0	3.0	玉髓	95-79

削器

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	測定番号	備考
1	B	7	II	164	3.5	1.3	0.3	2.0	下呂石	
2	B	7	II	749	(6.6)	(4.0)	(1.0)	(26.8)	下呂石	
3	B	8	II	15	(1.9)	(1.8)	(0.4)	(1.8)	下呂石	
4	B	9	SK18	14	4.2	2.2	0.9	10.4	チャート	86-14
5	B	12	II	23	(1.5)	0.8	0.2	(0.4)	下呂石	
6	B	12	II	29	(3.4)	2.3	0.8	(5.5)	チャート	
7	B	12	II	395	4.9	4.0	0.8	14.5	下呂石	95-85
8	B	12	II	427	(2.9)	2.2	0.8	(4.1)	チャート	
9	B	17	IV	55	(2.2)	(2.8)	(0.6)	(3.0)	チャート	
10	C	7	II	57	(2.2)	(1.8)	(0.6)	(2.3)	チャート	
11	C	10	II	340	2.7	2.3	0.8	5.6	下呂石	
12	C	10	II	356	(3.1)	(1.8)	(0.4)	(3.7)	チャート	
13	C	12	II	58	(3.8)	(4.1)	(1.2)	(22.9)	チャート	
14	C	20	II	182	3.1	3.2	0.6	6.9	チャート	95-84
15	C	24	II	15	3.2	2.3	0.8	5.6	下呂石	
16	D	21	II	282	3.4	4.2	0.9	13.6	チャート	95-83
17	D	22	II	45	(3.1)	(3.3)	(1.0)	(11.1)	チャート	
18	B	17	II	23	(3.7)	(3.8)	(0.9)	(14.5)	チャート	

機器

番号	出土区	所位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	辨図番号	備考
1	B 7	II	78	4.9	2.2	0.7	9.6	下呂石	95-86	
2	C 6	II	20	4.2	2.4	1.0	10.3	下呂石		
3	C 19	III	400	5.8	6.9	1.7	60.5	下呂石		
4	C 23	II	46	4.1	1.8	0.8	4.4	下呂石		
5	D 21	II	60	3.5	2.9	0.6	5.2	下呂石		
6	H 17	II	9	4.0	2.4	0.8	7.0	チャート	95-87	

打製石斧

番号	出土区	所位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	辨図番号	備考
1	A 19	II	313	(7.2)	(3.7)	(0.8)	(36.7)	A	緑色片岩		
2	A 19	II	314	(9.7)	(3.8)	(1.5)	(75.1)	A	緑色片岩		
3	A 19	II	720	(10.5)	6.3	2.1	209.9	A	凝灰石		
4	A 19	II	721	17.2	6.3	3.3	400.4	A	凝灰石	99-125	
5	A 19	II	934	(9.2)	(4.2)	(1.4)	(67.7)	A	凝灰石		
6	A 19	II	1239	(9.0)	6.0	1.8	99.2	B	凝灰石		
7	A 19	II	1240	(11.0)	6.2	2.6	(182.8)	A	凝灰石		
8	B 3+4	SBI	665	(11.8)	5.4	2.4	(107.7)	A	凝灰石		
9	B 3+4	SBI	666	10.3	5.4	2.4	159.7	A	凝灰石	84 14	
10	B 5	II	16	(6.4)	(5.2)	(3.3)	(160.4)	A	凝灰石		
11	B 5	II	250	(8.6)	(4.7)	(0.9)	(47.3)	A	緑色片岩		
12	B 6	II	275	(12.5)	(5.9)	(2.4)	(189.1)	A	凝灰石		
13	B 7	II	107	(9.5)	(4.1)	(1.6)	(91.4)	A	凝灰石	98-107	
14	B 7	II	458	(12.2)	(6.0)	(2.9)	(218.7)	A	凝灰石		
15	B 7	II	541	(9.5)	(5.3)	(2.4)	(153.9)	A	凝灰石		
16	B 7	II	644	(6.0)	(5.8)	(2.5)	(115.5)	A	凝灰石		
17	B 7	II	711	12.7	6.3	3.0	269.8	A	凝灰石		
18	B 8	II	53	(7.0)	(5.7)	(1.3)	(74.7)	A	凝灰石		
19	B 8	II	206	(15.6)	(6.7)	(3.4)	(294.4)	B	凝灰石		
20	B 8	II	207	(11.3)	(5.3)	(1.9)	(155.0)	A	砂岩	98-117	
21	B 8	II	273	(12.5)	(7.4)	(3.1)	(279.6)	A	凝灰石		
22	B 8	II	274	(13.2)	(8.0)	(3.3)	(351.9)	A	凝灰石		
23	B 8	II	354	(10.3)	(5.4)	(1.7)	(106.4)	B	凝灰石		
24	B 8	II	505	(11.3)	(5.3)	(2.3)	(171.8)	B	凝灰石		
25	B 8	II	652	(11.5)	5.6	1.6	143.5	A	凝灰石	98-113	
26	B 8	II	653	(9.1)	(5.2)	(1.4)	(89.9)	A	凝灰石	98 105	
27	B 8	II	654	(11.0)	(5.7)	(1.9)	(143.8)	A	凝灰石	98-111	
28	B 9	II	78	11.8	5.3	2.7	190.7	A	凝灰石	99-120	
29	B 9	II	79	(11.3)	(5.3)	(1.3)	(98.9)	A	凝灰石		
30	B 9	II	297	(8.6)	(4.4)	(1.1)	(53.8)	A	砂岩		
31	B 9	SK17	53	9.9	5.7	1.3	96.0	A	凝灰石	86 37	
32	B 10	II	42	(5.7)	(6.0)	(1.6)	(69.9)	A	凝灰石		
33	B 11	II	262	(7.6)	(6.3)	(1.2)	(58.6)	A	凝灰石		
34	B 11	II	398	(10.7)	(6.6)	(3.5)	(405.6)	A	凝灰石		
35	B 11	II	399	(14.8)	(7.4)	(3.0)	(411.1)	A	凝灰石		
36	B 11	II	652	(11.0)	(5.5)	(2.4)	(163.0)	A	凝灰石		
37	B 11	II	804	(7.5)	(5.7)	(2.9)	(98.2)	A	緑色片岩		
38	B 11	II	851	(11.4)	(5.4)	(1.9)	(150.9)	A	凝灰石		
39	B 11	II	1005	(6.3)	(6.6)	(2.3)	(121.6)	A	凝灰石		
40	B 11	II	1006	(10.0)	(6.5)	(2.9)	(204.4)	A	凝灰石		

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	標因番号	備考
41	B	12	II	394	(7.1)	3.4	6.9	(29.7)	A	凝灰石	
42	B	13	II	46	(10.6)	(4.7)	(1.4)	(94.0)	A	凝灰石	
43	B	13	II	202	(9.6)	(5.5)	(1.9)	(131.9)	A	凝灰石	
44	B	14	IV	95	(8.3)	(5.4)	(2.8)	(147.1)	A	凝灰石	87-49
45	B	14	SK19	49	(9.1)	(5.6)	(2.2)	(145.9)	A	緑色片岩	
46	B	16	P38	57	(8.0)	(5.2)	(2.2)	(109.0)	A	凝灰石	
47	B	18	III	607	(15.1)	(8.6)	(3.7)	(597.5)	A	凝灰石	
48	B	18	III	608	(9.5)	(4.8)	(2.1)	(128.3)	A	凝灰石	98-106
49	B	19	II	79	(9.1)	(5.3)	(2.8)	(166.9)	A	凝灰石	
50	B	19	II	214	(11.1)	(6.6)	(2.8)	(258.7)	A	凝灰石	
51	B	19	II	215	(10.8)	(6.8)	(3.4)	(270.2)	A	凝灰石	
52	B	19	II	216	(9.8)	(5.3)	(1.9)	(110.2)	A	凝灰石	
53	B	19	II	217	(7.4)	(5.2)	(2.6)	(143.2)	A	凝灰石	
54	B	19	II	218	(9.0)	(4.2)	(1.7)	(75.4)	A	凝灰石	
55	B	19	II	536	9.3	4.7	1.8	86.9	A	凝灰石	
56	B	19	II	537	12.4	5.7	2.3	210.6	A	凝灰石	99-122
57	B	19	II	538	(6.0)	(4.1)	(2.9)	(97.5)	A	凝灰石	
58	B	19	II	671	(8.2)	(5.3)	(1.4)	(93.6)	A	緑色片岩	
59	B	19	II	672	(11.0)	(5.3)	(2.6)	(178.1)	A	凝灰石	98-112
60	B	19	II	1827	(11.1)	(5.1)	(1.9)	(119.5)	A	凝灰石	
61	B	19	II	1828	(13.0)	(6.9)	(3.3)	(331.3)	B	凝灰石	
62	B	19	II	1829	(9.8)	(5.8)	(3.1)	(228.8)	A	凝灰石	
63	C	5	III	69	8.5	5.3	2.0	115.0	A	緑色片岩	
64	C	6	II	10	(7.7)	(5.3)	(2.4)	(117.8)	A	凝灰石	
65	C	7	II	19	(10.3)	(5.1)	(2.5)	(155.6)	A	凝灰石	
66	C	7	II	20	17.3	9.6	3.7	535.1	B	凝灰石	99-126
67	C	7	II	54	(9.5)	(5.6)	(1.2)	(88.1)	A	凝灰石	
68	C	7	II	199	(10.7)	(5.3)	(1.8)	(104.0)	A	凝灰石	
69	C	7	II	425	4.8	5.4	1.1	38.7	A	凝灰石	
70	C	7	II	426	11.2	6.0	1.4	134.8	A	凝灰石	
71	C	8	II	21	14.2	8.2	3.2	360.5	B	凝灰石	
72	C	8	II	319	(9.5)	(4.2)	(1.3)	(58.7)	A	緑色片岩	
73	C	8	II	320	10.4	5.1	1.6	103.9	A	凝灰石	98-109
74	C	8	II	321	8.3	4.6	1.2	48.4	A	凝灰石	
75	C	8	SK1	21	6.2	3.8	0.7	25.6	A	緑色片岩	87-57
76	C	9	II	124	(9.1)	(4.5)	(2.6)	(104.9)	A	凝灰石	
77	C	10	II	353	(5.3)	(4.2)	(1.1)	(33.9)	A	緑色片岩	
78	C	10	II	354	(8.7)	(4.0)	(1.3)	(52.9)	A	凝灰石	
79	C	11	II	42	(14.1)	(8.5)	(3.1)	(455.7)	A	凝灰石	
80	C	11	II	69	(11.1)	(5.0)	(2.2)	(143.7)	A	凝灰石	
81	C	12	II	47	(13.5)	(7.0)	(2.7)	(220.0)	B	凝灰石	
82	C	13	II	58	(7.9)	(4.6)	(2.1)	(100.1)	B	凝灰石	
83	C	13	II	98	8.6	5.9	1.6	110.8	A	凝灰石	98-104
84	C	14	II	24	(10.1)	(5.8)	(1.4)	(95.0)	B	緑色片岩	98-110
85	C	14	II	48	8.5	4.7	1.0	61.9	A	凝灰石	
86	C	15	II	37	12.3	6.2	3.7	335.6	A	凝灰石	99-123
87	C	15	SK1	134	9.5	5.9	2.2	158.0	A	凝灰石	88-65
88	C	15	SK2	21	(5.6)	4.1	(1.3)	(36.9)	A	凝灰石	
89	C	16	II	42	11.8	6.4	1.7	134.0	C	凝灰石	99-121
90	C	16	II	131	12.1	6.7	1.9	160.4	C	凝灰石	

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	種別番号	備考
91	C 16	II	132	(11.9)	(7.4)	(2.6)	(277.9)	A	凝灰石		
92	C 17	II	8	6.7	4.6	1.5	53.3	A	凝灰石		
93	C 17	II	107	13.5	6.7	2.6	260.1	A	凝灰石		
94	C 17	II	108	(3.4)	(5.6)	(1.4)	(31.1)	A	綠色片岩		
95	C 17	III	134	(10.0)	(5.4)	(2.1)	(148.9)	A	凝灰石		
96	C 17	SK 1	43	10.4	5.5	2.3	164.6	A	凝灰石	88-76	
97	C 17	SK 1	55	(7.1)	(4.9)	(2.0)	(87.7)	A	凝灰石	88-74	
98	C 17	SK 1	56	9.5	4.1	1.6	73.2	A	凝灰石	88-73	
99	C 17	P37	15	12.5	4.9	2.5	177.6	A	凝灰石		
100	C 17	P61	8	(13.6)	(4.8)	(2.4)	(132.1)	A	凝灰石		
101	C 18	II	4	(9.6)	(4.6)	(2.5)	(118.8)	A	凝灰石		
102	C 18	II	209	(7.6)	(4.1)	(1.2)	(41.0)	A	泥岩		
103	C 18	II	839	(10.9)	(5.2)	(2.2)	(125.4)	A	凝灰石	98-114	
104	C 18	III	392	(9.3)	(5.6)	(1.8)	(126.4)	A	凝灰石		
105	C 18	III	551	(8.7)	(4.7)	(1.2)	(83.0)	A	凝灰石		
106	C 18	III	626	(5.0)	6.5	3.0	118.5	A	凝灰石		
107	C 18	SB 3	25	10.8	5.0	2.2	143.7	A	凝灰石	85-22	
108	C 18	SB 3	26	10.6	4.8	2.4	146.9	A	凝灰石	85-23	
109	C 19	II	532	13.0	6.3	3.7	302.9	B	凝灰石		
110	C 19	II	533	(11.6)	(5.0)	(1.7)	(119.3)	A	凝灰石	98-118	
111	C 19	II	534	10.0	5.0	2.1	152.1	A	凝灰石	98-115	
112	C 19	II	535	9.7	4.5	2.2	96.3	A	凝灰石		
113	C 19	II	536	11.6	5.3	2.0	167.5	A	凝灰石	99-119	
114	C 19	II	537	(12.2)	(6.4)	(3.5)	(326.7)	A	砂岩		
115	C 19	II	968	(5.8)	(4.2)	(2.2)	(117.8)	A	凝灰石		
116	C 19	III	212	(11.3)	(4.0)	(1.8)	(131.7)	A	砂岩		
117	C 19	III	328	9.3	4.4	2.2	86.6	A	凝灰石		
118	C 19	III	754	(12.7)	(5.2)	(2.1)	(172.7)	A	凝灰石		
119	C 20	II	10	11.5	7.5	2.9	316.5	A	凝灰石		
120	C 20	II	11	10.9	5.1	2.0	147.6	A	凝灰石		
121	C 20	II	12	(7.7)	(5.8)	(2.2)	(142.5)	A	凝灰石		
122	C 20	II	18	(8.0)	(5.3)	(1.8)	(112.5)	A	凝灰石		
123	C 20	II	178	10.9	4.6	2.2	122.9	A	凝灰石	98-108	
124	C 20	II	179	(8.3)	(5.8)	(3.1)	(212.1)	A	凝灰石		
125	C 20	III	1	(9.2)	(4.3)	(1.6)	(98.4)	A	凝灰石		
126	C 20	III	78	(10.3)	5.4	3.1	241.5	A	凝灰石		
127	C 21	II	129	(9.2)	(5.4)	(1.6)	(96.5)	A	綠色片岩		
128	C 21	II	130	(10.5)	(4.6)	(2.3)	(127.1)	A	凝灰石	98-116	
129	C 21	II	552	(10.2)	(4.8)	(2.0)	(108.9)	A	凝灰石		
130	C 21	II	700	(9.5)	(5.5)	(1.5)	(79.4)	A	凝灰石		
131	C 23	III	149	(9.6)	(5.2)	(2.0)	(168.4)	A	綠色片岩		
132	C 23	III	400	(8.3)	(6.8)	(1.6)	(131.1)	A	凝灰石		
133	C 23	III	401	(7.2)	(5.5)	(2.2)	(116.8)	A	凝灰石		
134	C 23	III	402	(5.8)	(4.3)	(1.8)	(50.3)	A	凝灰石		
135	C 23	III	403	(7.1)	(3.5)	(1.3)	(35.5)	A	凝灰石		
136	C 23	III	404	(10.6)	(4.8)	(2.3)	(126.6)	A	凝灰石		
137	C 23	III	405	(11.2)	(4.7)	(2.3)	(129.5)	A	凝灰石		
138	C 23	III	780	(12.8)	(5.2)	(1.9)	(160.8)	A	凝灰石		
139	C 23	IV	87	(6.7)	(5.0)	(1.3)	(64.3)	A	凝灰石		
140	C 23	IV	88	(8.7)	(4.5)	(1.9)	(88.9)	A	凝灰石		

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	採伐番号	備考
141	C	27	III	89	(9.7)	(5.0)	(1.1)	(82.1)	A	緑色片岩	
142	D	21	II	64	(9.2)	(8.5)	(2.2)	(239.8)	A	緑色片岩	
143	D	21	II	65	13.6	5.9	1.6	168.9	B	凝灰石	
144	D	21	III	1	11.3	4.6	0.8	52.5	A	緑色片岩	
145	D	22	II	7	6.3	4.6	1.7	84.4	A	緑色片岩	
146	D	24	II	24	(12.3)	(9.3)	(3.2)	(423.7)	B	凝灰石	
147	D	26	II	23	(8.2)	(5.5)	(1.5)	(72.3)	A	凝灰石	
148	E	29	II	52	(9.4)	(4.7)	(2.2)	(111.1)	B	凝灰石	
149	E	29	III	6	(6.7)	(5.5)	(2.2)	(100.3)	A	凝灰石	
150	B	18	II	4	(7.0)	4.7	2.3	(97.1)	A	凝灰石	
151	B	15	II	42	(5.9)	6.2	2.0	(98.2)	A	凝灰石	
152	B	16	II	62	(10.0)	5.0	2.2	(122.6)	A	凝灰石	
153	B	18	II	65	(9.0)	(6.4)	2.4	(155.7)	A	凝灰石	
154	B	18	II	71	10.0	5.1	2.3	135.4	A	凝灰石	
155	B	18	II	74	10.5	5.1	1.6	97.2	A	凝灰石	
156	B	15	III	123	(8.3)	8.1	2.2	(193.9)	A	凝灰石	
157	B	14	II	124	11.9	5.5	2.7	245.9	A	凝灰石	
158	B	17	III	127	(10.7)	6.8	3.4	(327.7)	A	凝灰石	
159	B	15	II	132	9.0	4.8	1.5	91.0	A	凝灰石	
160	B	15	II	133	12.1	5.8	1.7	140.7	A	凝灰石	
161	B	17	III	136	15.9	6.7	3.7	474.9	A	凝灰石	
162	B	17	III	140	(14.0)	7.0	4.1	(436.4)	A	凝灰石	99-124
163	B	17	III	142	12.8	6.0	2.6	260.3	A	凝灰石	
164	B	18	III	146	(9.3)	5.5	2.5	(180.0)	A	凝灰石	
165	B	14	II	156	14.0	7.6	2.7	332.1	A	凝灰石	
166	B	16	III	157	(10.8)	5.3	1.2	(88.9)	B	凝灰石	
167	B	17	III	158	(13.0)	6.2	2.1	(255.3)	A	凝灰石	
168	B	15	IV	165	9.3	6.3	2.6	188.6	A	凝灰石	
169	B	15	IV	169	(9.2)	6.0	1.6	(100.3)	A	緑色片岩	
170	B	18	III	174	(14.4)	7.8	4.1	(544.7)	A	凝灰石	
171	B	14	IV	180	22.2	8.7	2.9	761.2	A	凝灰石	99-127
172	B	17	III	184	(6.6)	4.5	1.7	(65.4)	A	凝灰石	
173	B	17	III	196	12.1	4.9	2.4	162.2	A	凝灰石	
174	B	12	II	221	(13.5)	6.0	2.1	(218.1)	A	凝灰石	
175	B	12	II	222	10.6	4.2	2.4	130.9	A	凝灰石	
176	B	17	II	805	(12.4)	5.6	1.3	(133.7)	A	凝灰石	
177	B	17	II	943	(10.5)	4.9	1.2	(64.3)	A	凝灰石	

磨製石斧

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	焼因番号	備考
1	A 19	II	722	(12.7)	5.6	3.3	(345.1)	I a	凝灰岩	100-129	
2	A 19	II	723	(7.1)	2.6	1.0	(28.7)	I a	凝灰岩		
3	B 3	II	237	(5.2)	(3.4)	(1.2)	(33.5)	I b?	蛇紋岩		
4	B 3+4	SB 1	579	(5.5)	(4.1)	(2.0)	(73.3)	I a	凝灰岩		
5	B 3+4	SH 1	631	(8.2)	(5.0)	(2.1)	(127.7)	I a	凝灰岩	84-13	
6	B 3+4	SB 1	639	(6.0)	(3.2)	1.2	(34.2)	I a	凝灰岩		
7	B 3+4	SB 1	660	(9.4)	(5.1)	(2.7)	(199.9)	I a	凝灰岩		
8	B 6	II	191	(3.6)	(2.7)	(1.1)	(17.3)	I b?	凝灰岩		
9	B 7	II	645	(3.7)	(3.7)	(2.0)	(44.0)	I a?	蛇紋岩		
10	B 7	II	699	(4.5)	(1.8)	0.7	(9.8)	I b	蛇紋岩		
11	B 7	II	712	(7.2)	(3.7)	(2.3)	(83.8)	I a	蛇紋岩		
12	B 7	II	713	(2.8)	(1.9)	(0.9)	(6.7)	I b	蛇紋岩		
13	B 7	II	714	(4.1)	1.8	0.6	(7.1)	I b	蛇紋岩		
14	B 8	II	6	(4.4)	(2.0)	(0.9)	(13.5)	I a	蛇紋岩		
15	B 8	II	7	(9.6)	(3.2)	(3.1)	(116.3)	I a	凝灰岩		
16	B 8	II	208	(4.6)	(3.0)	(1.3)	(21.3)	I a?	蛇紋岩		
17	B 8	II	209	(8.3)	(4.8)	(2.1)	(141.9)	I a	凝灰岩		
18	B 8	II	210	(5.8)	(4.8)	(2.1)	(81.8)	I a	凝灰岩		
19	B 8	II	355	(7.8)	(2.9)	(1.3)	(43.4)	I a	凝灰岩		
20	B 9	II	80	(8.4)	(4.2)	(1.8)	(97.0)	I a	蛇紋岩	100-135	
21	B 9	II	81	(8.3)	(4.7)	(1.8)	(118.0)	I a	蛇紋岩		
22	B 9	II	298	(4.7)	(2.7)	(0.8)	(16.7)	I b	蛇紋岩		
23	B 9	II	299	(6.0)	5.7	(2.3)	(116.8)	I a	蛇紋岩		
24	B 10	II	31	(3.7)	(1.2)	(0.7)	(3.5)	I b?	蛇紋岩		
25	B 11	II	69	(6.4)	(4.2)	(2.4)	(128.5)	I a	蛇紋岩		
26	B 14	SK 19	50	(10.6)	(6.7)	(3.0)	(384.0)	I a	ヒン岩	87-51	
27	B 14	SK 19	51	(5.9)	(3.9)	(2.7)	(67.8)	I a	凝灰岩		
28	B 18	III	410	(6.5)	(2.9)	0.9	(28.7)	I a	蛇紋岩		
29	B 19	II	8	5.0	2.5	1.0	20.2	I b	凝灰岩	101-138	
30	B 19	II	219	5.7	5.0	2.2	85.8	I a	蛇紋岩		
31	B 19	II	673	(6.7)	(5.5)	(3.1)	(157.7)	I a	凝灰岩		
32	B 19	II	674	(4.2)	(4.8)	(2.3)	(69.1)	I a	凝灰岩		
33	B 19	II	675	(1.9)	(2.6)	0.9	(7.3)	I b?	蛇紋岩		
34	B 19	II	1830	(6.8)	3.6	1.3	(58.5)	I a	蛇紋岩	100-130	
35	C 6	III	20	(4.7)	4.8	2.0	90.4	I a?	珪岩		
36	C 7	II	18	(5.3)	2.9	1.0	(24.6)	I b?	蛇紋岩	101-142	
37	C 7	II	55	10.3	5.0	2.4	217.4	I a	蛇紋岩	100-136	
38	C 7	II	200	(4.3)	3.0	0.8	(14.5)	I b	蛇紋岩	101-137	
39	C 8	II	9	9.7	4.6	1.9	141.2	I a	蛇紋岩		
40	C 8	II	132	10.3	5.3	3.0	240.9	I a	凝灰岩		
41	C 9	II	125	(5.0)	3.5	1.2	(35.1)	I b?	蛇紋岩		
42	C 10	II	66	(4.2)	3.3	1.0	(20.2)	I b?	蛇紋岩	101-140	
43	C 10	II	177	(4.4)	(4.3)	(1.7)	(56.5)	I a?	蛇紋岩		
44	C 10	II	178	(6.0)	(4.0)	(2.0)	(71.8)	I a	蛇紋岩		
45	C 10	II	179	3.9	0.9	0.4	3.4	I c	蛇紋岩	101-145	
46	C 10	II	362	(7.4)	(3.0)	(2.0)	(80.6)	I a	蛇紋岩		
47	C 11	II	19	(8.3)	(4.3)	(1.4)	(89.0)	I a	蛇紋岩		
48	C 11	II	233	(6.2)	3.2	(1.4)	(46.7)	I a	蛇紋岩		
49	C 11	II	243	(4.3)	2.8	1.2	(22.6)	I b?	蛇紋岩		
50	C 12	II	48	(8.4)	(5.7)	(2.8)	(215.5)	I a	蛇紋岩		

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	押送番号	備考
51	C	13	II	8	(4.3)	3.1	(0.9)	(25.8)	I b?	蛇紋岩	101-141
52	C	13	II	20	(10.0)	(4.5)	(2.4)	(173.6)	I a	凝灰岩	
53	C	13	II	100	(5.2)	3.7	1.4	(46.5)	I b?	蛇紋岩	101-143
54	C	14	II	25	9.4	4.5	2.1	162.6	I a	蛇紋岩	
55	C	14	II	26	5.2	(3.6)	1.2	(33.4)	I b	蛇紋岩	101-139
56	C	15	II	34	7.0	3.9	2.0	69.8	I a	蛇紋岩	
57	C	15	II	36	6.4	4.5	1.9	92.0	I a	蛇紋岩	
58	C	15	II	93	1.5	3.8	1.0	7.5	I b?	蛇紋岩	
59	C	15	II	181	6.4	5.3	2.1	77.0	I a	蛇紋岩	
60	C	15	III	30	10.2	5.3	2.3	236.4	I a	蛇紋岩	
61	C	15	SK 2	22	3.1	1.6	0.6	5.3	I b	蛇紋岩	88-72
62	C	15	SK 3	87	(3.0)	(2.2)	(0.7)	(3.8)	I a?	蛇紋岩	
63	C	15	SK 3	88	(6.7)	3.9	1.5	(43.6)	I a	凝灰岩	
64	C	16	P32	9	(4.1)	(1.7)	(0.7)	(7.2)	I b	蛇紋岩	
65	C	17	III	82	6.3	3.2	1.1	45.9	I a	蛇紋岩	100-128
66	C	17	SK 2	14	(9.0)	4.5	2.1	(140.0)	I a	蛇紋岩	89-77
67	C	18	II	1	11.2	5.3	3.4	318.7	II a	凝灰岩	101-146
68	C	18	II	210	7.6	3.8	1.5	65.7	I a	蛇紋岩	100-134
69	C	18	II	431	10.3	5.4	2.2	209.1	I a	蛇紋岩	
70	C	18	III	382	(14.0)	(6.4)	(2.4)	(442.6)	I a	蛇紋岩	
71	C	18	III	552	(3.2)	(5.3)	(1.5)	(32.5)	I b	蛇紋岩	
72	C	18	S B 3	144	(5.5)	3.9	1.7	(69.6)	I a	蛇紋岩	85-24
73	C	19	II	1	6.7	3.7	2.1	84.2	I a	凝灰岩	100-132
74	C	19	II	10	8.4	4.5	2.4	142.7	I a	蛇紋岩	
75	C	19	II	163	5.4	4.2	2.7	79.8	II a?	蛇紋岩	
76	C	19	II	164	9.6	5.1	2.1	149.8	I a	凝灰岩	
77	C	19	II	165	8.4	5.4	2.8	216.4	I a	凝灰岩	
78	C	19	II	538	9.0	6.1	2.9	309.1	I a	蛇紋岩	
79	C	19	S B 3	18	(8.3)	5.7	(2.2)	(109.9)	I a	凝灰岩	
80	C	20	II	9	7.2	5.6	3.1	172.3	I a	凝灰岩	
81	C	20	II	44	(4.5)	3.1	1.2	28.9	I b?	蛇紋岩	101-144
82	C	20	II	45	7.2	3.8	1.8	74.3	I a	凝灰岩	100-131
83	C	20	II	79	(5.4)	(3.8)	(1.9)	(68.3)	I a	蛇紋岩	
84	C	20	II	80	(8.3)	(5.0)	(2.2)	(170.7)	I a	蛇紋岩	
85	C	20	II	81	(4.0)	3.1	1.1	(23.5)	I b?	蛇紋岩	
86	C	20	II	82	(9.1)	(5.9)	(2.4)	(184.1)	I a	蛇紋岩	
87	C	20	II	180	(7.9)	(3.5)	(1.3)	(64.3)	I a	蛇紋岩	100-133
88	C	20	II	181	(11.2)	(6.8)	(2.7)	(320.3)	I a	蛇紋岩	
89	C	20	III	2	(9.7)	(4.3)	(3.0)	(143.5)	I a	凝灰岩	
90	C	20	III	186	(8.7)	(5.0)	(2.9)	(215.4)	I a	蛇紋岩	
91	C	21	II	16	9.2	4.2	3.0	194.2	I a	凝灰岩	
92	C	21	II	701	(6.7)	(6.0)	(2.1)	(147.3)	I a	凝灰岩	
93	C	23	III	399	(6.0)	(5.3)	(2.4)	(114.2)	I a	蛇紋岩	
94	C	23	III	781	(4.6)	(3.7)	(1.2)	(31.8)	I b?	蛇紋岩	
95	C	23	IV	85	(7.0)	(4.2)	(2.0)	(109.7)	I a	蛇紋岩	
96	D	21	II	16	6.3	4.4	1.9	74.3	I a	蛇紋岩	
97	D	21	II	238	6.6	3.1	1.4	36.6	I a	凝灰岩	
98	B	17	III	95	(5.6)	(3.1)	(1.1)	(29.3)	I a?	蛇紋岩	
99	B	16	III	99	(5.3)	(2.8)	(0.9)	(23.3)	I b?	蛇紋岩	
100	B	14	II	135	(6.7)	(3.8)	(2.3)	(99.1)	I a	蛇紋岩	

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	標図番号	備考
101	B 15	II	149	(3.2)	(2.1)	0.5	(4.8)	1b?	凝灰岩		
102	B 15	IV	163	(6.9)	(4.1)	1.4	(65.3)	1a	蛇紋岩		
103	B 11	II	216	16.1	3.9	2.2	229.8	1a	蛇紋岩	101	147
104	B 11	II	217	9.7	4.0	2.0	93.4	1a	凝灰岩		
105	B 11	II	303	(10.5)	(6.2)	(2.9)	(267.7)	1a	凝灰岩		
106	B 11	II	307	(5.0)	(6.0)	(1.6)	(45.0)	1a	蛇紋岩		
107	B 8	II	401	(4.9)	3.1	(1.1)	(23.5)	1b?	蛇紋岩		
108	B 17	II	859	(7.8)	(3.5)	(1.1)	(41.3)	1a	蛇紋岩		
109	B 17	II	917	(3.7)	3.1	(1.0)	(17.5)	1b?	蛇紋岩		

切目石錠

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	標図番号	備考
1	B 19	II	9	3.7	2.3	0.8	9.1	砂岩		
2	C 8	SK1	121	4.4	(2.3)	1.1	(13.0)	粘板岩		
3	C 8	SK1	122	5.1	2.4	1.0	20.3	凝灰岩		
4	C 12	II	49	4.9	(2.2)	1.1	(16.9)	粘板岩		
5	C 16	III	58	4.3	1.8	1.2	13.6	粘板岩	102-148	
6	C 18	II	432	5.5	2.5	1.8	39.1	凝灰岩	102	152
7	C 18	III	224	(4.6)	2.4	1.1	15.9	凝灰岩		
8	C 19	SK1	44	(1.6)	(2.5)	(0.7)	(2.8)	凝灰岩		
9	C 23	III	150	4.7	3.4	1.6	31.8	凝灰岩	102	151
10	C 24	II	48	5.4	2.0	1.5	24.8	凝灰岩	102-150	
11	C 24	IV	68	(4.7)	(2.8)	(1.2)	(19.0)	凝灰岩	102-149	
12	B 18	II	78	(5.6)	3.5	1.5	(40.3)	凝灰岩		
13	B 14	II	125	4.2	2.2	0.6	7.5	凝灰岩		
14	B 16	III	183	4.4	2.5	1.3	19.9	凝灰岩		

有溝石錠

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	標図番号	備考
1	B 3	II	1405	(3.6)	(2.9)	(0.9)	(12.8)	凝灰岩	102-156	
2	B 3・4	SB1	513	4.5	3.3	(1.1)	(16.4)	凝灰岩		
3	B 3・4	SB1	604	4.0	2.9	(1.4)	(16.5)	凝灰岩	84-12	
4	B 17	II	428	(4.2)	(2.1)	(1.2)	(11.8)	粘板岩	102-153	
5	C 18	II	211	2.8	1.8	0.5	3.8	凝灰岩	102-157	
6	C 23	II	782	(3.6)	(3.3)	(1.1)	(15.6)	凝灰岩	102	155
7	D 22	II	145	4.4	3.0	0.7	11.1	粘板岩	102-154	

礫石錠（長さ1、長さ2、打欠きのa・bは、渡辺誠 1985「疊石錠計測部位説明図」『阿曾田遺跡発掘調査報告書』を参照した）

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ1	長さ2	幅	厚さ	a	b	重さ	石材	標図番号	備考
1	B 14	SK19	3	10.2	9.8	7.4	3.2	1.3	1.2	357.7	凝灰岩	87-52	
2	C 4	III	96	7.6	6.9	5.7	2.4	1.8	1.9	144.9	凝灰岩	102-160	
3	C 6	II	7	8.1	7.7	4.8	2.5	0.8	1.0	146.3	砂岩	102	159
4	C 19	SK2	224	3.8	3.6	2.9	1.3	0.3	0.7	21.2	凝灰岩	89-90	
5	E 29	III	5	3.7	3.6	2.7	1.9	0.7	0.7	26.3	凝灰岩	102-158	
6	B 17	II	138	6.1	5.9	3.8	2.7	0.7	0.7	97.3	凝灰岩		

麻石・四石類

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類		石材	鉢図番号	備考
								形態	目みの数と形状			
1	A19	II	111	9.8	9.0	5.9	686.8	I b	2+1+2	I II	凝灰岩	
2	A19	II	665	9.0	8.6	5.5	485.8	I b	1+1+0	II	凝灰岩	
3	A19	II	725	(11.4)	5.3	2.6	(264.8)	III d	2+1+0	I	凝灰岩	
4	A19	II	726	11.7	6.6	3.7	413.2	II b	1+0+0	I	凝灰岩	
5	A19	II	727	11.3	(6.1)	3.1	(272.9)	III c	1+3+0	I II	凝灰岩	104-173
6	A19	II	728	(9.3)	6.0	3.9	255.1	II b	0+0+0		蛇紋岩	
7	A19	II	930	11.4	8.7	5.8	791.0	II b	0+0+0		凝灰岩	
8	A19	II	931	11.6	8.0	4.6	632.9	II b	3+1+0	I II	凝灰岩	103-165
9	A19	II	932	6.2	5.0	3.3	139.3	II b	1+1+0	I II	凝灰岩	
10	A19	II	933	15.7	6.0	2.6	391.8	III d	1+1+0	I	凝灰岩	
11	B3+4 SB1		523	11.4	7.7	4.8	679.4	IV	1+1+0	I	凝灰岩	
12	B3+4 SB1		524	(7.3)	(4.4)	(2.9)	(105.1)	II b	1+0+0	II	凝灰岩	
13	B3+4 SB1		543	10.9	9.5	7.0	972.5	II b	2+3+2	I II	凝灰岩	84-16
14	B3+4 SB1		545	9.5	8.3	4.7	427.1	I b	1+2+1	I	凝灰岩	
15	B3+4 SB1		554	(8.8)	5.8	3.0	(223.7)	III c	0+0+0		凝灰岩	
16	B3+4 SB1		560	(14.7)	(4.8)	(4.5)	(409.3)	III d	4+2+0	I II	凝灰岩	
17	B3+4 SB1		623	14.4	6.8	3.8	397.3	III c	3+3+1	I	凝灰岩	
18	B3+4 SB1		629	10.7	8.8	6.0	574.5	IV	2+1+0	I	凝灰岩	84-15
19	B3+4 SB1		15	(10.4)	(7.8)	(5.3)	(566.5)	III c	1+1+1	I	凝灰岩	84-17
20	B7	II	287	12.6	8.5	4.0	678.8	II b	0+0+0		砂礫岩	103-167
21	B7	II	416	13.1	8.1	4.5	804.8	II b	0+1+0	I	砂礫岩	103-168
22	B7	II	417	10.0	9.4	6.5	786.6	I b	0+0+0		凝灰岩	
23	B7	II	703	(11.1)	(8.9)	(4.5)	(520.1)	II b	2+3+0	III	石灰岩	
24	B7	II	710	(10.5)	(6.6)	(4.8)	(486.9)	II b	0+0+0		凝灰岩	
25	B7	II	894	9.7	7.6	2.8	237.6	II c	1+1+0	I	凝灰岩	
26	B8	II	8	8.9	6.3	3.1	215.9	II b	0+0+0		凝灰岩	
27	B8	II	211	10.5	8.1	5.8	661.8	II b	0+0+0		凝灰岩	
28	B8	II	501	(10.7)	(8.1)	(4.2)	(491.2)	II b	2+0+1	I II	凝灰岩	
29	B8	II	502	(10.7)	(9.9)	(3.7)	(577.3)	I a	1+0+0	III	砂岩	
30	B8	SK16	33	13.9	5.2	3.7	358.5	IV	1+1+0	I	凝灰岩	86-34
31	B8	SK16	34	(13.1)	(6.1)	3.7	(394.6)	II b	1+0+0	I	凝灰岩	86-35
32	B9	II	296	(11.6)	(6.7)	(2.6)	(232.8)	II b	3+2+0	II	凝灰岩	
33	B9	II	709	13.0	12.1	3.4	835.9	I b	0+1+0	II	砂岩	
34	B9	SK18	8	(7.8)	(3.3)	(3.0)	(122.4)	III d	0+0+0		凝灰岩	
35	B11	II	338	(8.4)	(5.2)	(4.6)	(287.6)	III d	1+0+0	I	凝灰岩	
36	B11	II	347	(14.0)	(6.0)	(4.0)	(436.2)	IV	1+2+1	I II	凝灰岩	104-181
37	B11	II	348	9.0	8.6	2.9	293.8	I b	1+1+0	I	凝灰岩	
38	B11	II	400	15.0	9.3	4.6	1220.0	II b	1+1+0	II	玄武岩	
39	B11	II	805	16.3	6.8	3.9	570.2	IV	2+0+2	I	凝灰岩	
40	B11	II	850	7.3	5.8	5.5	309.9	II b	0+1+1	I	凝灰岩	
41	B11	II	994	6.5	6.0	4.0	179.6	I b	1+0+0	II	凝灰岩	
42	B11	II	1004	8.0	4.7	3.9	194.1	II b	2+1+1	II	砂礫岩	
43	B12	II	114	12.3	7.4	5.9	733.9	II b	1+0+0	II	凝灰岩	
44	B12	II	115	(10.0)	(5.6)	(4.7)	(379.7)	III c	1+0+1	I	凝灰岩	
45	B12	P25	1	10.6	9.7	7.6	953.3	I b	0+0+0		凝灰岩	
46	B12	P25	2	9.2	7.5	5.1	458.4	II b	0+0+0		石英岩	
47	B13	II	49	(8.4)	(6.0)	(3.9)	(387.2)	III c	1+1+0	I	凝灰岩	
48	B14	II	10	6.5	6.4	4.0	251.7	I b	0+0+0		凝灰岩	
49	B14	IV	96	11.2	7.5	5.8	634.4	II b	1+0+0	II	凝灰岩	

番号	出上区	層位	遺物 番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類		石材	標図番号	備考
								形態	凹みの数と形状			
50	B14	SK19	1	8.2	7.0	7.0	489.8	I a	0·0·0	凝灰岩	87-50	
51	B14	SK19	32	(16.4)	8.0	5.8	(911.2)	II b	1·1·0	II	凝灰岩	
52	B14	SK19	47	(9.1)	(5.0)	(4.0)	(290.4)	III d	1·2·1	I	凝灰岩	
53	B14	SK19	48	12.1	9.0	5.9	850.5	II b	2·2·1	II	石英安山岩	
54	B15	II	231	10.7	8.8	7.0	872.3	II a	0·0·1	II	石英安山岩	
55	B16	II	213	10.0	4.8	4.2	291.0	III b	1·0·0	I	凝灰岩	
56	B16	III	136	(10.4)	(7.4)	(2.5)	(208.2)	IV	1·1·0	I II	凝灰岩	
57	B17	II	862	9.7	7.5	4.8	512.2	II b	2·0·0	II	石英安山岩	
58	B17	III	88	(8.7)	(6.1)	(3.5)	(314.9)	III d	1·1·0	I	凝灰岩	
59	B17	III	89	(8.4)	(7.9)	(4.7)	(456.7)	II b	0·0·0		花崗閃雲岩	
60	B17	III	657	9.6	8.0	4.0	422.8	IV	3·0·0	I	凝灰岩	104-179
61	B17	III	1189	9.1	8.3	7.1	730.7	I a	1·0·0	I	凝灰岩	
62	B18	II	192	15.7	5.4	3.8	360.2	III c	2·2·2	II	凝灰岩	
63	B18	II	609	(10.2)	(7.0)	(3.9)	(409.3)	II b	0·0·0		凝灰岩	
64	B18	III	610	(8.5)	(10.8)	(5.4)	(717.8)	II b	0·0·0		凝灰岩	
65	B19	II	6	15.1	5.9	4.5	376.3	III d	2·0·2	I II	凝灰岩	
66	B19	II	7	11.0	7.9	4.5	627.6	II b	1·1·0	I II	凝灰岩	
67	B19	II	78	11.7	9.0	6.2	944.2	II b	1·0·0	I	凝灰岩	
68	B19	II	540	5.9	5.8	4.5	206.6	I b	0·0·0		凝灰岩	
69	B19	II	676	10.7	10.3	6.3	969.8	I b	0·1·0	II	凝灰岩	
70	B19	II	677	8.5	7.8	5.2	436.7	I b	1·1·0	I II	凝灰岩	103-161
71	B19	II	678	10.6	8.9	7.1	1026.2	II b	1·0·0	I	石英安山岩	
72	B19	II	1059	11.1	8.1	4.7	671.2	II b	0·0·0		石英安山岩	
73	B19	II	1421	12.1	9.9	4.4	841.0	II b	0·0·0		凝灰岩	
74	B19	II	1422	(16.7)	(6.2)	(3.5)	(607.1)	III d	1·1·0	I II	凝灰岩	
75	B19	II	1825	11.4	10.8	5.1	899.9	II a	0·0·0		凝灰岩	
76	B19	II	1826	(10.5)	(10.3)	(5.5)	(733.8)	II b	4·0·0	I	流紋岩	
77	C 4	III	94	(10.9)	(6.5)	(3.3)	(235.8)	IV	2·2·0	II	凝灰岩	
78	C 4	III	95	9.3	6.2	2.5	208.5	IV	1·1·0	I II	凝灰岩	104-178
79	C 7	II	26	(8.8)	(8.6)	(4.3)	(563.3)	II b	1·1·0	I	凝灰岩	
80	C 7	II	27	(10.0)	(9.4)	(7.1)	(1077.7)	IV	1·0·2	I	凝灰岩	
81	C 7	II	427	11.0	5.5	5.0	475.9	III d	2·1·0	II	凝灰岩	
82	C 7	III	8	12.5	9.1	6.4	1123.1	II b	0·0·0		凝灰岩	
83	C 7	SK 1	10	11.8	7.3	3.9	371.3	II c	1·1·0	I II	凝灰岩	87-55
84	C 7	SK 3	105	(12.4)	5.4	(3.5)	(274.1)	IV	1·1·0	I	凝灰岩	87-56
85	C 8	II	318	12.8	11.1	7.2	1450.0	II b	1·0·0	II	石英安山岩	
86	C 8	SK 1	20	(17.5)	8.5	3.9	(842.2)	III d	1·0·0	I	凝灰岩	
87	C 8	SK 1	124	(5.7)	4.8	3.9	(174.7)	III d	1·0·1	I	凝灰岩	
88	C 10	II	175	12.5	8.1	4.1	604.8	III d	2·2·0	II	凝灰岩	104-177
89	C 10	II	176	13.2	7.7	4.1	614.6	II b	2·1·0	I II	凝灰岩	
90	C 11	II	251	(11.4)	(9.7)	(4.9)	(673.8)	II b	2·1·0	II III	凝灰岩	
91	C 13	II	59	10.6	8.7	4.3	685.2	II b	1·1·0	I	花崗閃雲岩	
92	C 14	II	91	8.4	7.0	3.0	256.8	II b	0·0·0		凝灰岩	
93	C 15	II	39	(13.3)	(8.2)	(3.6)	(463.5)	II b	2·3·0	I II	凝灰岩	
94	C 15	III	1	(8.0)	(7.5)	(5.5)	(420.4)	I b	1·0·0	I	凝灰岩	
95	C 15	SK 1	25	(13.0)	6.2	5.7	(672.3)	IV	2·1·1	I III	凝灰岩	88-66
96	C 15	SK 1	26	(15.8)	8.4	6.8	(1164.8)	III d	1·1·0	I	凝灰岩	
97	C 15	SK 3	89	(9.5)	4.9	3.5	(243.2)	II c	1·2·1	I	凝灰岩	88-70
98	C 15	SK 3	90	12.1	4.0	3.2	292.6	III d	1·0·0	I	凝灰岩	

磨石・凹石類

番号	出上区	層位	道物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類		石材	種別番号	備考
								形態	門の数と形状			
99	C15	SK 3	192	10.0	(5.9)	(2.1)	(158.4)	IV	1・0・0	I	凝灰岩	88-71
100	C16	II	43	9.6	8.0	4.2	540.5	II d	2・4・1	II	凝灰岩	104-175
101	C16	III	166	(11.5)	(7.7)	(3.4)	(468.0)	II d	2・1・0	I	凝灰岩	104-176
102	C16	III	200	16.7	6.8	4.5	694.8	II c	1・1・1	II	凝灰岩	104-170
103	C17	II	7	7.2	6.3	4.2	265.4	II b	1・1・0	I II	石英斑岩	
104	C17	II	106	(10.4)	(9.5)	(6.7)	(942.0)	II d	1・0・0	I	凝灰岩	
105	C17	III	81	13.0	7.0	5.9	768.5	II b	1・3・0	I II	石英岩	
106	C17	SK 1	57	10.4	8.4	5.7	708.0	II b	1・1・2	I	凝灰岩	88-75
107	C17	SK 2	39	8.7	7.5	3.5	297.0	II b	1・1・0	I II	凝灰岩	
108	C17	P 7	13	10.9	6.5	4.4	384.0	II c	1・0・0	I	凝灰岩	
109	C18	II	2	(12.7)	(7.8)	(3.1)	(469.9)	II b	1・0・0	I	凝灰岩	
110	C18	II	3	11.0	10.3	5.9	928.7	II b	1・1・0	I II	凝灰岩	103-163
111	C18	II	659	(10.7)	(9.3)	(5.9)	(827.1)	II b	2・2・1	I II	凝灰岩	
112	C18	II	660	8.4	7.0	5.9	489.1	II b	2・1・0	I	凝灰岩	
113	C18	III	395	11.3	8.7	5.4	796.2	II b	2・2・0	I	凝灰岩	
114	C18	III	620	9.0	7.8	5.0	511.2	II b	1・1・0	I	凝灰岩	
115	C18	III	621	9.5	7.2	3.8	383.3	II b	1・1・0	I	凝灰岩	
116	C18	III	622	9.4	7.2	3.4	378.5	II b	1・1・0	I	凝灰岩	
117	C18	III	623	11.1	(6.0)	2.6	(263.6)	II b	1・0・0	I	凝灰岩	
118	C18	III	624	10.4	8.3	4.4	563.5	II b	2・3・1	I II	凝灰岩	
119	C18	III	629	9.1	7.4	6.2	664.3	II b	0・0・0	I	凝灰岩	
120	C18	SB 3	27	(6.3)	9.0	5.0	(425.6)	II d	1・0・0	I	凝灰岩	
121	C18	SB 3	28	10.9	8.3	4.9	596.3	II b	2・1・0	I II	凝灰岩	85-26
122	C18	SB 3	29	9.5	8.3	5.6	661.6	II b	0・0・0	I	凝灰岩	85-27
123	C19	SB 3	19	11.2	7.8	5.5	780.9	II d	2・2・0	I II	凝灰岩	85-25
124	C18	SK 1	106	16.7	5.7	3.1	507.6	II d	0・1・1	I	凝灰岩	89-82
125	C19	II	11	(12.8)	(5.7)	(3.5)	(481.7)	IV	2・1・0	I II	玄武岩	104-180
126	C19	II	12	11.3	6.9	4.7	611.0	II d	1・1・0	I	凝灰岩	
127	C19	II	13	(8.1)	(7.1)	(4.2)	(340.6)	IV	1・0・0	I	凝灰岩	
128	C19	II	14	6.7	4.7	3.0	142.7	II b	1・0・0	IV	凝灰岩	
129	C19	II	166	7.5	4.8	3.7	153.5	IV	1・2・0	I II	凝灰岩	
130	C19	II	167	10.7	8.7	4.7	588.8	II b	1・2・0	I II	石英斑岩	103-164
131	C19	II	533	13.8	11.2	6.1	1410.0	II b	1・0・0	I	凝灰岩	
132	C19	II	1063	9.0	7.1	3.7	338.1	II b	1・0・0	I	凝灰岩	
133	C19	III	211	10.0	7.6	6.7	690.2	II b	1・2・0	I III	凝灰岩	
134	C19	SK 1	108	15.5	7.8	3.3	518.8	IV	1・1・0	I	凝灰岩	89-89
135	C19	SK 1	229	11.1	10.6	6.4	1018.4	II b	0・0・0	I	凝灰岩	
136	C20	II	13	8.6	7.4	4.9	462.5	II b	1・1・0	I II	凝灰岩	
137	C20	III	185	8.2	7.9	4.5	384.1	I b	1・0・0	I	石英斑岩	
138	C21	II	14	(8.3)	(6.0)	(4.9)	(448.0)	III c	2・2・0	III	玄武岩	104-174
139	C21	II	553	(9.9)	(8.0)	(4.2)	(416.3)	II c	1・1・0	I II	凝灰岩	
140	C21	II	554	(9.4)	(5.7)	(4.7)	(247.1)	II c	1・1・0	I II	凝灰岩	
141	C21	II	555	12.2	7.1	5.7	513.8	IV	3・3・0	I II	凝灰岩	
142	C22	III	87	11.5	5.3	2.6	235.9	IV	1・0・0	I	凝灰岩	
143	C22	III	88	(11.4)	(7.9)	(7.9)	(665.5)	I b	2・0・0	I II	安山岩	
144	C23	III	148	10.0	7.7	4.0	476.2	II b	1・1・0	I	凝灰岩	103-166
145	C23	III	396	7.3	6.8	4.7	323.5	II b	0・0・0	I	凝灰岩	
146	C23	III	397	8.8	8.0	4.4	405.3	II b	0・0・0	I	凝灰岩	
147	C23	III	398	(11.2)	(6.5)	(2.0)	(204.1)	IV	1・0・0	IV	凝灰岩	

番号	出上区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類		石材	標図番号	備考
								形態	凹みの数と形状			
148	C 23	III	641	(10.9)	(6.7)	(3.4)	(369.5)	III d	2・1・0	I II	凝灰岩	
149	C 23	III	642	11.2	8.2	4.7	553.0	IV	1・2・0	I	凝灰岩	
150	C 23	III	643	8.5	7.6	4.8	419.7	I a	0・0・0		石灰岩	
151	D 18	SK 1	8	11.1	7.2	4.6	623.3	III d	1・2・0	I II	凝灰岩	90-92
152	D 21	II	17	10.2	9.0	4.6	668.2	II b	1・0・0	I	凝灰岩	
153	D 21	II	66	9.0	7.8	6.7	575.8	I b	1・0・1	II III	凝灰岩	
154	D 21	SK 1	48	6.0	3.5	3.7	109.5	II c	0・0・0		凝灰岩	
155	D 22	II	47	12.0	5.2	3.7	339.6	III b	2・2・0	I II	凝灰岩	103-172
156	D 23	II	13	8.1	6.1	3.0	208.7	II b	1・0・0	I	凝灰岩	
157	D 23	III	14	7.1	6.1	4.1	180.5	II b	0・0・0		凝灰岩	
158	D 24	II	13	5.0	4.8	3.5	113.7	I b	0・0・0		凝灰岩	
159	D 26	III	79	7.3	6.4	4.0	266.1	II b	1・0・0	I	凝灰岩	
160	F 31	III	5	11.5	5.8	2.6	268.3	II d	1・0・0	I	凝灰岩	104-171
161	B 16	II	58	9.2	7.0	3.6	346.7	III c	1・1・0	I	凝灰岩	
162	B 17	II	64	(7.1)	4.2	(3.2)	(115.7)	III b	1・1・0	II III	凝灰岩	
163	B 14	II	81	(10.0)	(4.1)	(3.8)	(317.1)	III d	1・0・0	I	凝灰岩	
164	B 17	III	116	9.3	7.6	4.8	483.9	III c	1・1・0	II III	凝灰岩	
165	B 17	III	128	(7.8)	5.8	2.3	(131.5)	III b	2・0・0	II	凝灰岩	
166	B 18	III	147	(11.1)	6.3	3.9	(405.7)	III d	2・2・0	I II	凝灰岩	
167	B 16	III	186	(9.8)	(7.7)	(4.5)	(280.6)	II c	0・0・0		凝灰岩	
168	B 18	III	189	9.8	8.2	6.0	620.9	II b	1・1・0	II	凝灰岩	
169	B 14	IV	193	11.2	9.5	4.4	515.9	IV	1・1・0	I II	凝灰岩	
170	B 16	II	202	14.9	8.9	6.0	1086.5	II b	0・0・0		凝灰岩	103-169
171	B 11	II	319	(9.5)	9.9	4.3	(644.0)	I b	1・0・0	I	凝灰岩	103-162
172	B 18	II	913	12.8	9.6	7.7	1131.0	II b	1・1・1	II III	凝灰岩	
173	B 17	II	921	10.2	7.8	5.5	613.5	II b	1・0・1	II	石灰岩	
174	表採		4	(10.9)	8.9	3.1	(733.7)	II b	0・0・0		凝灰岩	

石皿

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	標図番号	備考
1	B 4	II	377	(10.5)	(9.8)	(5.8)	(919.2)	凝灰岩		
2	B 16		1	(20.8)	(13.4)	(5.4)	(1660.0)	安山岩		
3	C 8	SK 1	123	(7.8)	(13.0)	(4.8)	(649.0)	凝灰岩	87- 58	
4	C 11	III	234	9.2	7.2	1.9	140.8	凝灰岩		
5	C 15	II	206	(7.0)	(4.1)	(4.5)	(176.7)	凝灰岩	105- 184	
6	C 18	III	176	(36.8)	27.6	10.1	(14690.0)	凝灰岩	106- 186	
7	C 18	SK 1	81	(42.1)	(24.5)	(8.6)	(13690.0)	凝灰岩	89- 79	
8	C 19	III	53	35.5	22.1	7.8	10910.0	凝灰岩	105- 187	
9	D 22	SK 1	398	31.6	25.5	8.9	8610.0	凝灰岩	90- 94	
10	B 9	II	206	(16.3)	(10.5)	(5.7)	(1380.0)	凝灰岩		
11	B 17	II	862	(24.5)	(12.3)	(12.0)	(4750.0)	砂岩	105- 186	

砾 石

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	測定番号	備考
1	A 19	II	312	10.3	3.0	2.0	92.9	凝灰岩		
2	A 19	II	110	(7.4)	(3.1)	(1.5)	(63.7)	凝灰岩		
3	B 5	II	232	(6.8)	(1.7)	(2.0)	(39.9)	粘板岩		
4	B 8	SK14	41	(6.4)	6.7	(0.9)	(74.2)	凝灰岩	86-36	
5	B 9	II	149	(7.9)	(7.2)	(1.4)	(113.1)	凝灰岩		
6	B 9	II	188	(5.1)	(6.5)	(1.1)	(58.3)	凝灰岩		
7	B 12	II	1	(17.2)	(8.2)	4.5	(813.0)	凝灰岩		
8	C 15	II	38	(16.3)	(9.8)	(3.6)	(827.4)	凝灰岩		
9	C 17	SK1	200	(32.9)	(11.8)	(12.5)	(6130.0)	凝灰岩	89-78	
10	C 18	II	629	9.1	7.6	6.2	664.9	凝灰岩		
11	C 21	II	131	(7.3)	(3.6)	(1.7)	(77.7)	凝灰岩		
12	D 26	III	1	15.1	10.7	3.3	745.2	凝灰岩		
13	B 14	II	81	(10.1)	(4.2)	(3.7)	(317.0)	凝灰岩	107-194	
14	B 17	II	64	(7.1)	(4.2)	(3.1)	(115.7)	凝灰岩		
15	B 15	II	130	(12.7)	(4.0)	(3.9)	(263.5)	凝灰岩		
16	B 16	II	200	21.2	8.5	5.2	1198.8	凝灰岩		
17	B 16	II	201	23.6	16.5	10.9	4690.0	砂岩	105-182	有溝
18	B 17	II	317	(13.6)	16.8	7.3	(2150.0)	凝灰岩		
19	B 17	II	889	(15.3)	(16.7)	6.5	(2370.0)	凝灰岩	105-183	
20	B 18	II	934	(6.7)	(3.0)	(0.8)	(20.7)	凝灰岩		

石 鋸

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	測定番号	備考
1	C 10	II	184	(8.5)	4.1	1.8	(43.6)	凝灰岩	107-195	

石 棒

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	測定番号	備考
1	B 3	SK1	615	(26.0)	9.1	7.6	(2790.0)	凝灰岩	84-18	
2	B 12	II	22	(5.1)	(2.3)	(1.7)	(32.8)	不明		
3	C 6	II	1	(5.9)	(2.6)	(2.1)	(46.8)	粘板岩	106-190	
4	C 10	II	352	(5.0)	(3.8)	(3.3)	(102.2)	粘板岩		
5	C 19	II	2	(7.0)	(4.8)	(4.3)	(132.4)	粘板岩		
6	C 19	III	327	(7.5)	(2.2)	(2.0)	(53.9)	粘板岩	106-189	
7	B 15	IV	170	(5.3)	(2.3)	(1.3)	(22.9)	凝灰岩		
8	B 17	II	204	(8.9)	(1.6)	(1.2)	(20.8)	粘板岩	106-191	

石 刀

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	測定番号	備考
1	B 8	II	644	(5.5)	(2.3)	(1.2)	(23.3)	粘板岩		
2	B 7	II	1	(10.9)	(2.3)	(1.1)	(34.3)	粘板岩	106-188	
3	C 8	II	3	13.1	3.2	2.5	119.2	粘板岩	106-192	
4	B 16	II	72	(6.3)	(2.9)	(1.7)	(55.1)	閃綠岩		
5	B 16	III	188	(8.9)	(4.0)	(3.0)	(134.5)	凝灰岩	106-193	

石剣

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	検証番号	備考
1	C 6	III	21	(5.5)	1.8	(0.4)	(7.7)	粘板岩		
2	C 21	II	15	(4.8)	1.8	1.0	(11.6)	凝灰岩		

独鉛石

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	検証番号	備考
1	C 7	II	2	10.6	5.9	4.9	516.0	蛇紋岩	107-196	

磨製石器

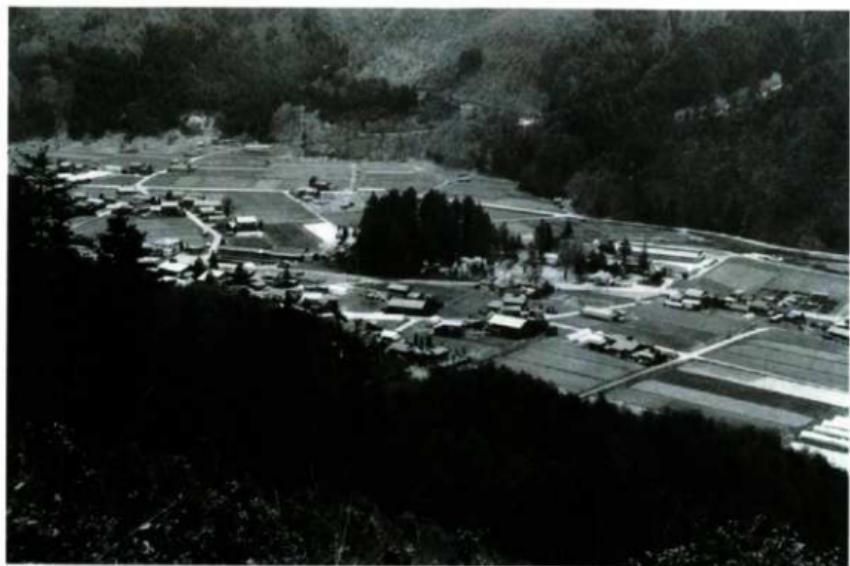
番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	検証番号	備考
1	B 17	III	88	13.2	5.9	3.9	468.0	蛇紋岩	107-197	

石製装身具

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	検証番号	備考
1	B 3	SK 1	1	(1.9)	(0.9)	(0.8)	(1.9)	滑石	108-2	
2	B 7	SK 12	1	2.6	1.2	0.7	3.2	不明	108-3	
3	B 11	II	1	2.8	0.9	0.5	(3.8)	砂岩	108-9	
4	B 14	II	1	(4.3)	(1.7)	(1.2)	(10.5)	凝灰岩	108-7	
5	C 7	SK 2	1	1.9	1.4	0.3	0.9	凝灰岩	108-4	
6	C 19	II	1	(4.6)	(3.7)	(2.8)	(65.0)	白雲大理石	108-11	
7	B 16	II	29	1.6	1.1	0.5	1.2	不明	108-6	
8	B 17	II	31	3.0	2.5	0.8	8.5	凝灰岩	108-8	
9	B 14	IV	192	(3.0)	2.0	0.6	(3.8)	砂岩	108-5	
10	B 13	II	208	7.1	3.2	0.9	30.8	千枚岩	108-10	
11	B 14	II	547	2.7	1.6	1.4	11.2	ひすい	108-1	

ほと石(陰石)

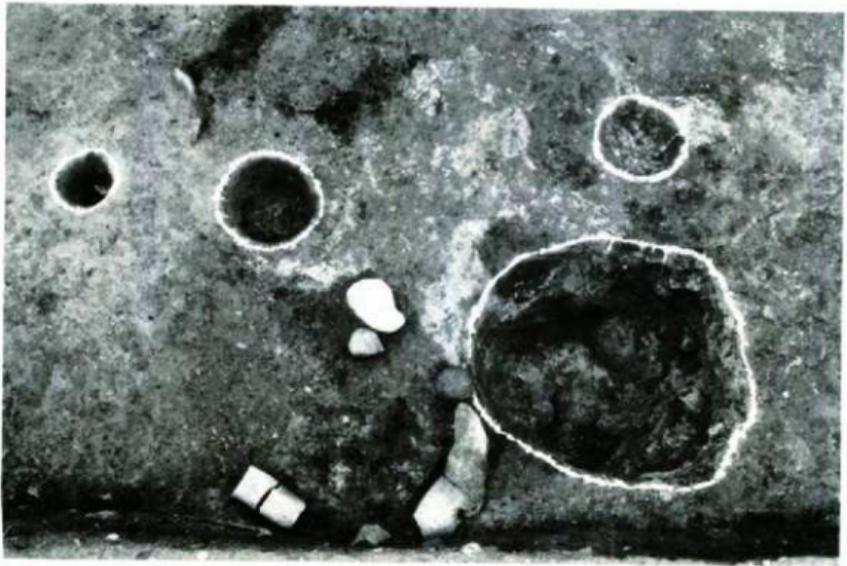
番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	検証番号	備考
1	B 4	II	500	5.3	2.8	1.4	28.1	流紋岩	109-1	



上 遺跡遠景 下 遺跡近景

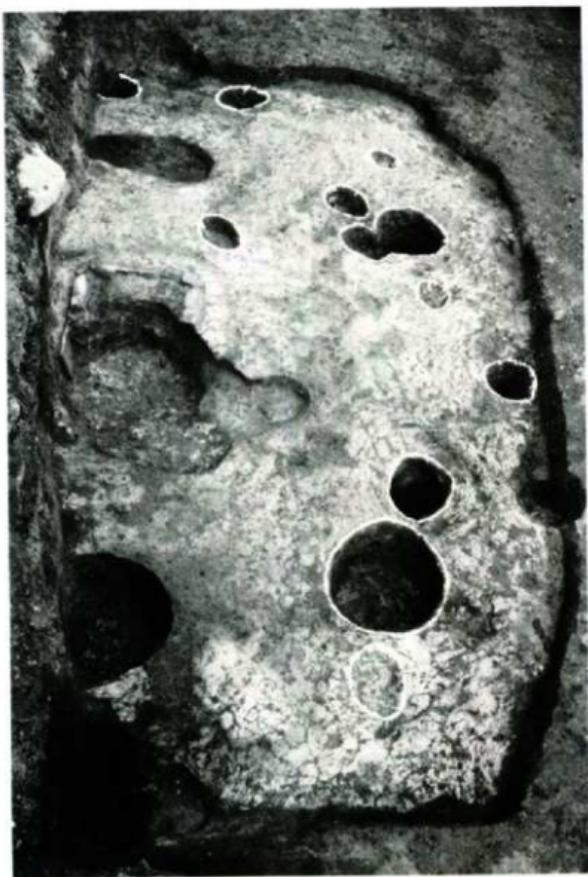


上 発掘風景 下 第1号住居址



上 第2号住居址

下 第4号住居址



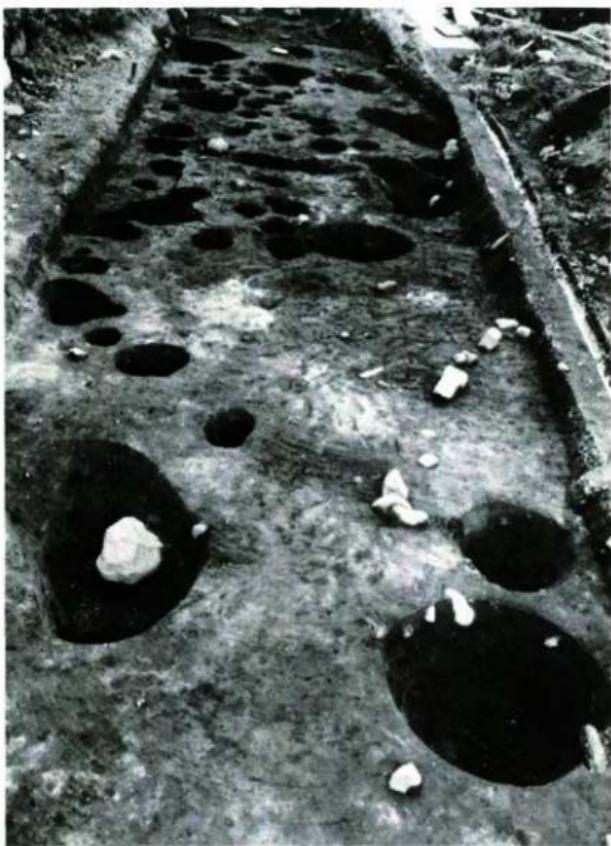
第3号住居址



第3号住居址



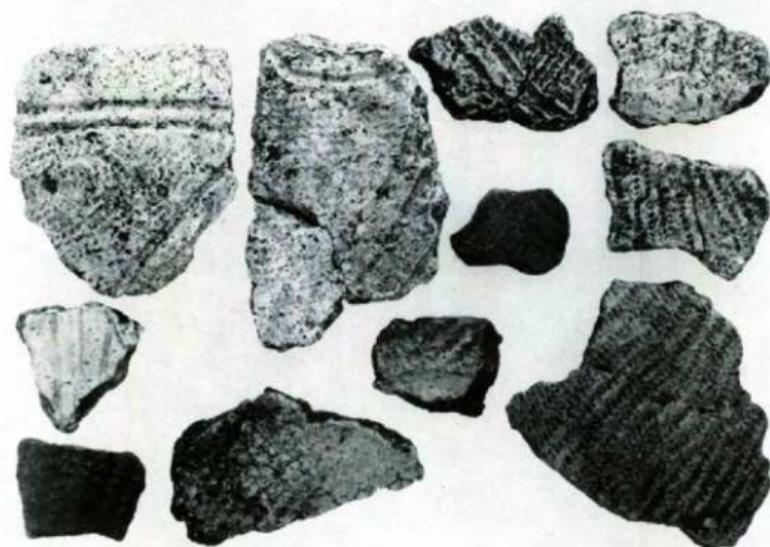
上左 第3号住居址埋甕 上右 第4号住居址埋甕 下 石画配石遺構（下中央が石画）



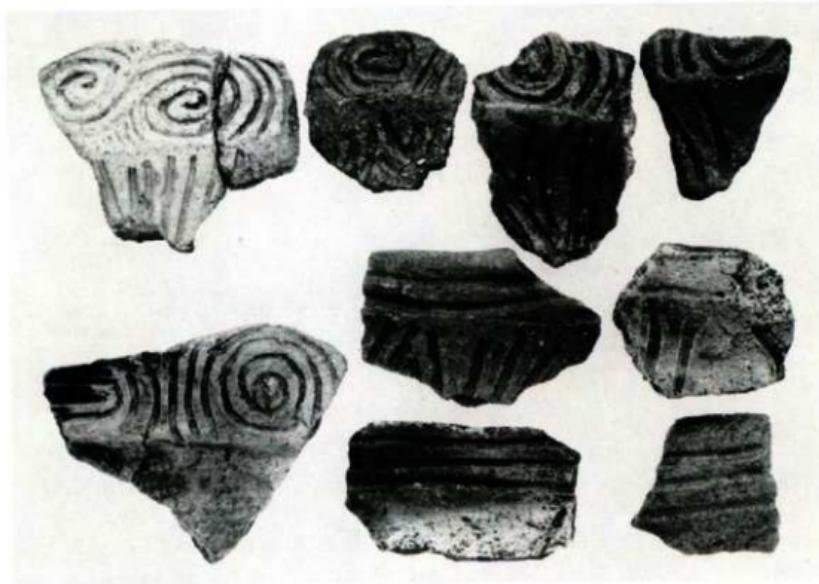
土坑(土壤)・ビット群



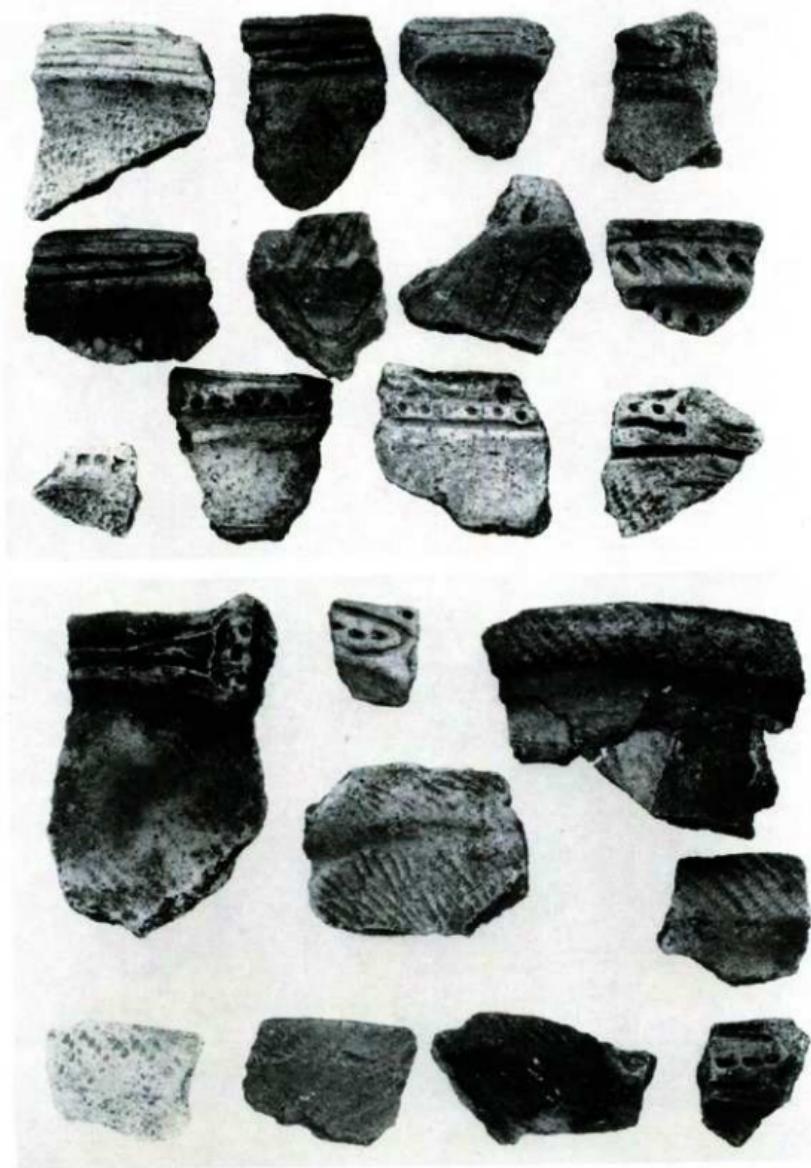
遺物出土狀況



上·下 第1号住居址炉址内出土土器



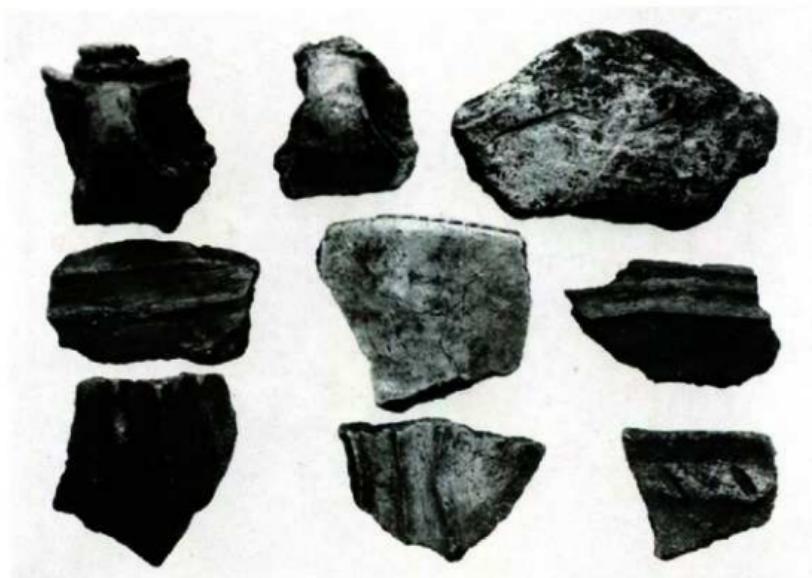
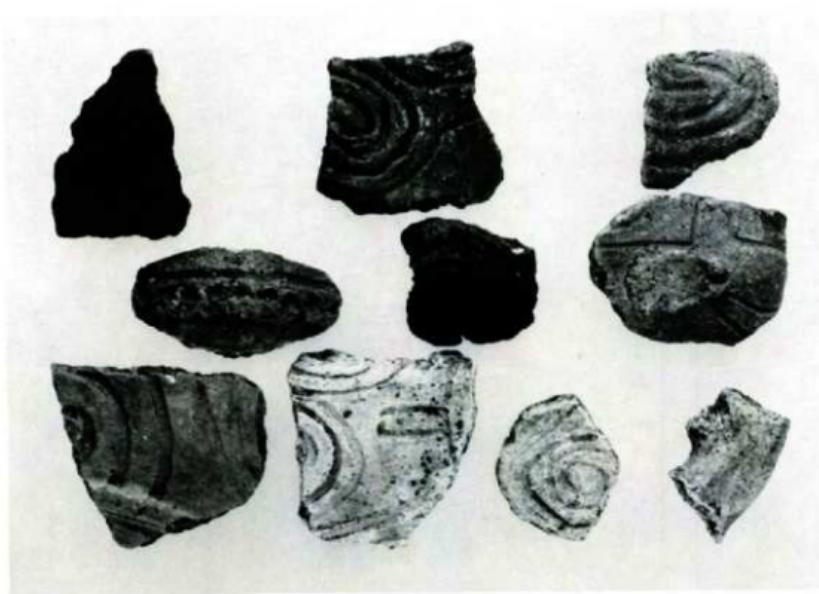
上・下 第1号住居址の推定範囲内出土土器



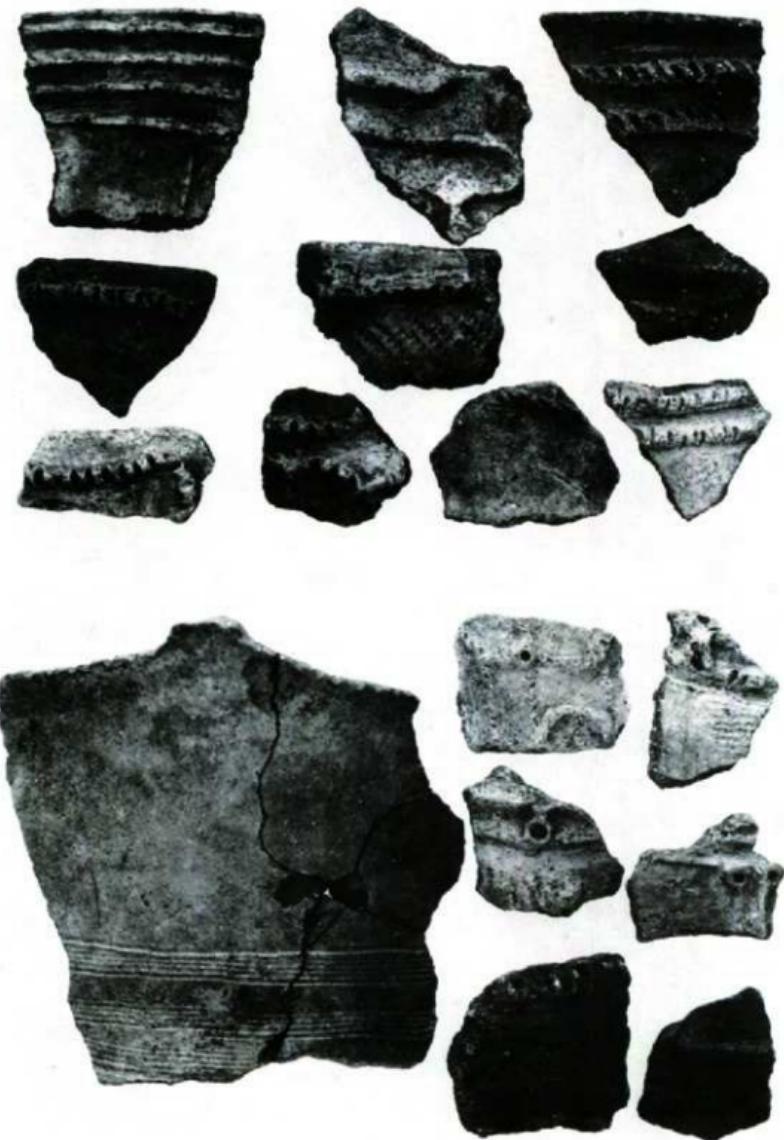
上・下 第1号住居址の推定範囲内出土土器



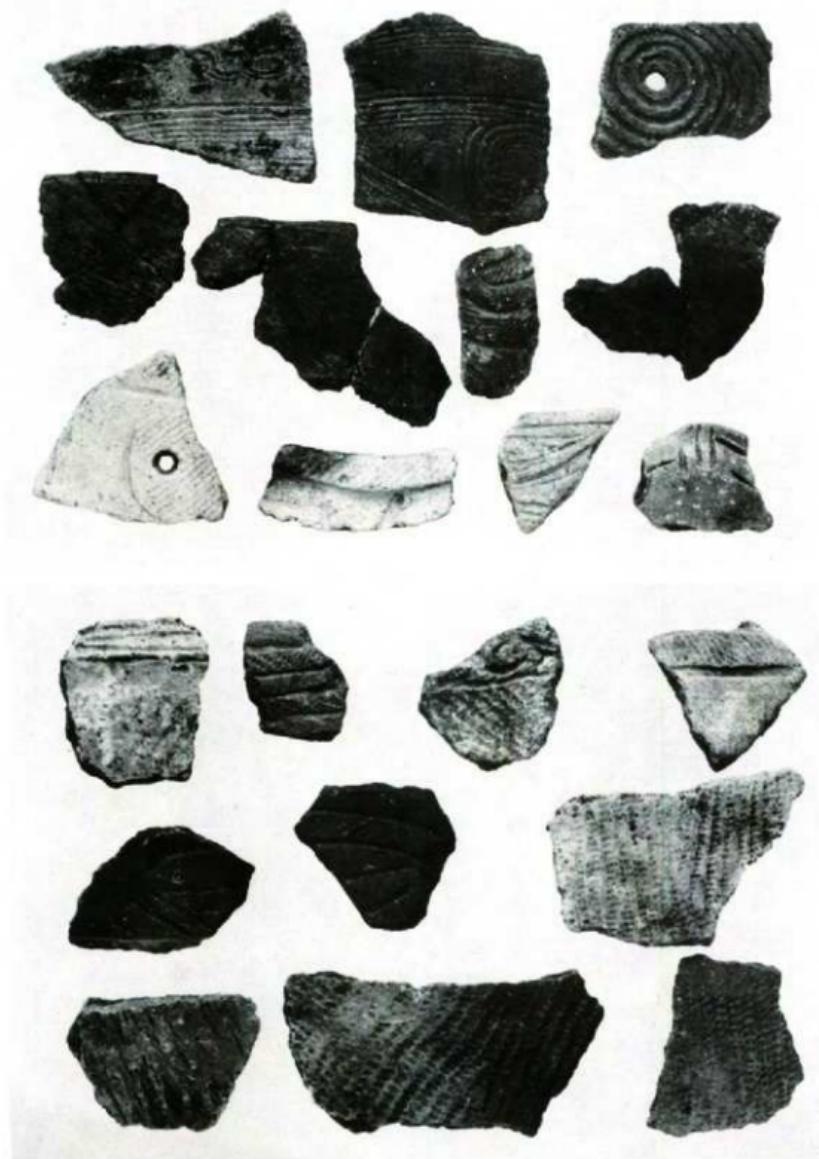
上・下 第1号住居址の推定範囲内出土土器



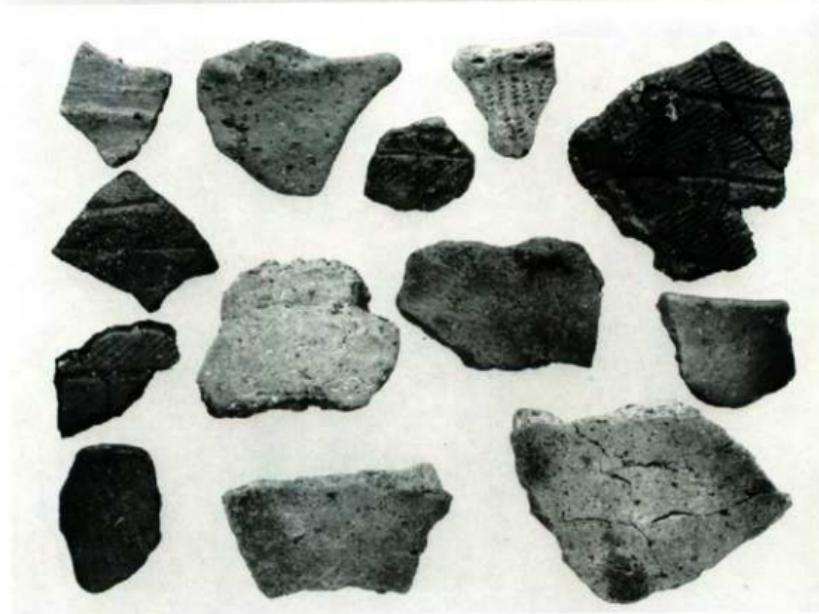
上・下 第1号住居址の推定範囲内出土土器



上・下 第1号住居址の推定範囲内出土土器



上・下 第1号住居址の推定範囲内出土土器



上 第1号住居址の推定範囲内出土土器

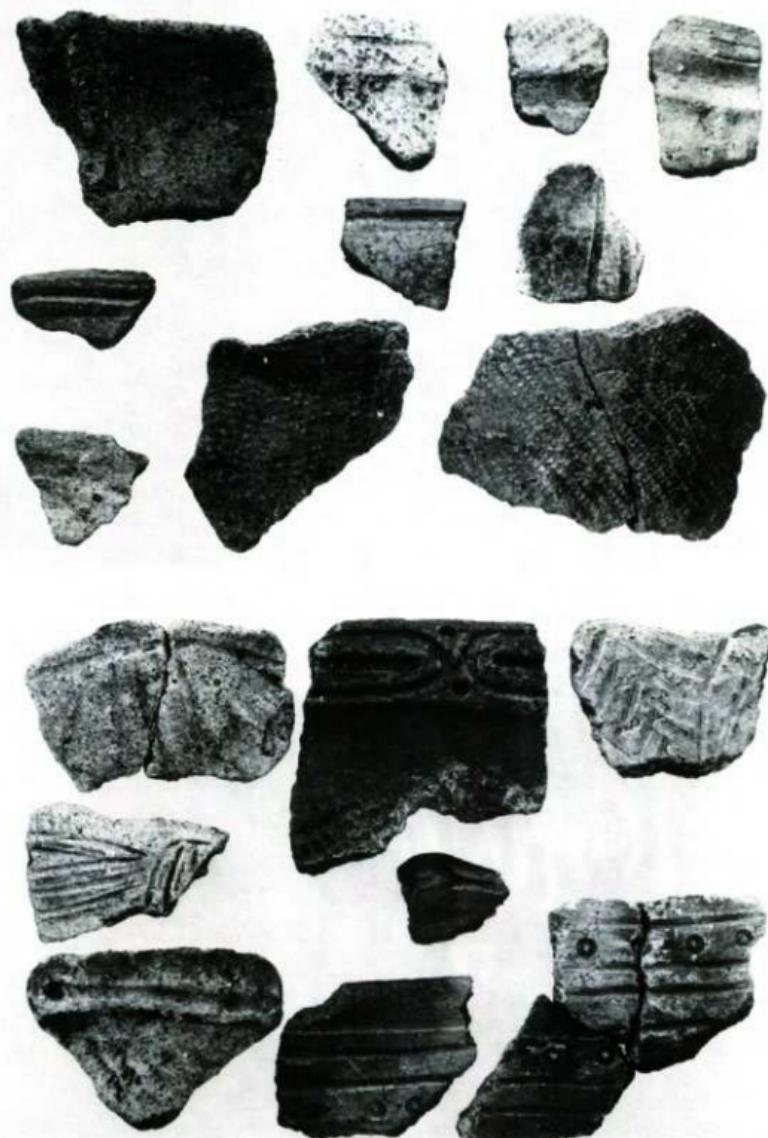
下 第2号住居址出土土器



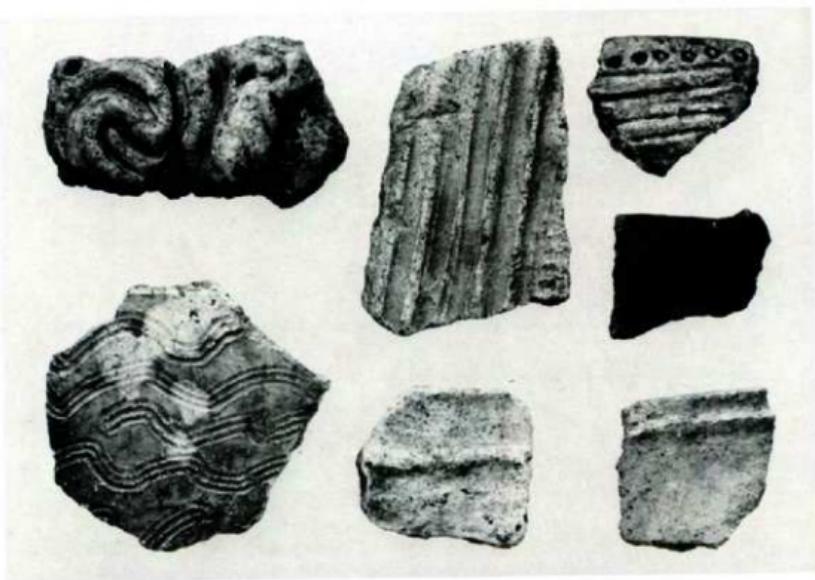
上·下 第3号住居址出土土器



上·下 第4号住居址出土土器

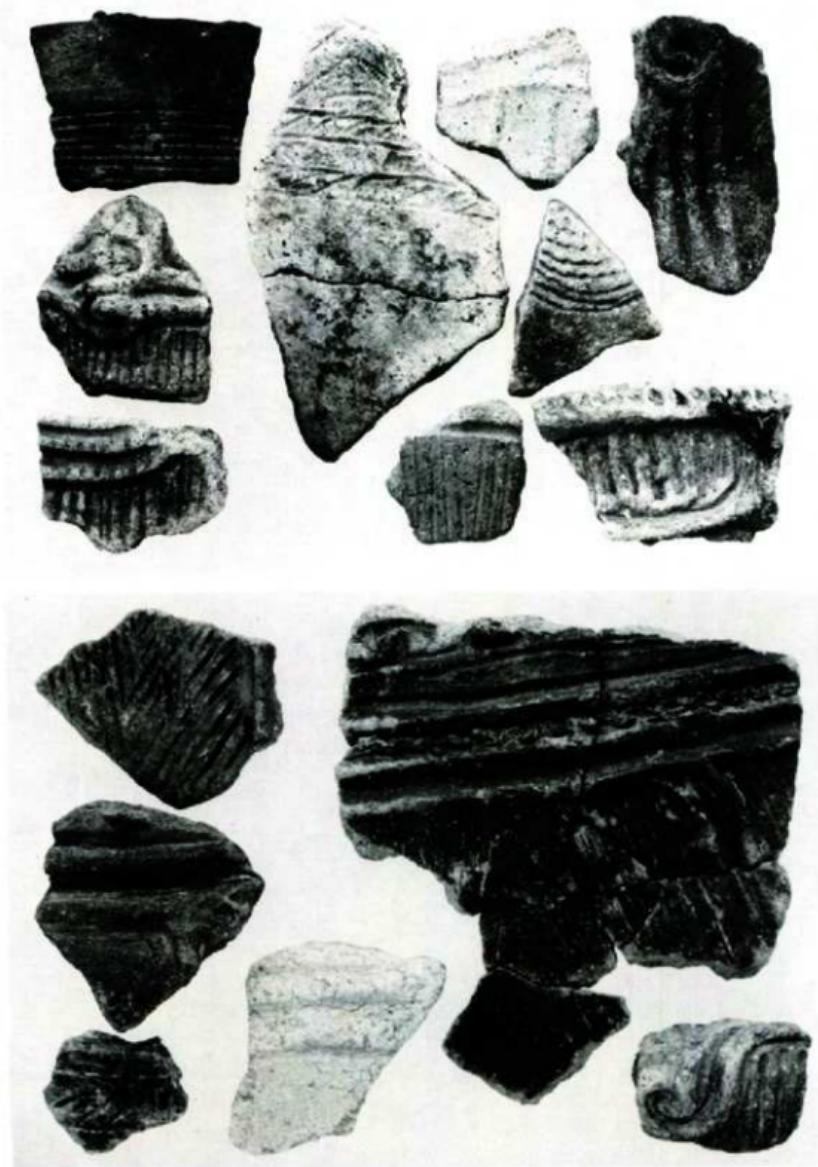


上・下 土坑(土壤)・ビット内出土土器

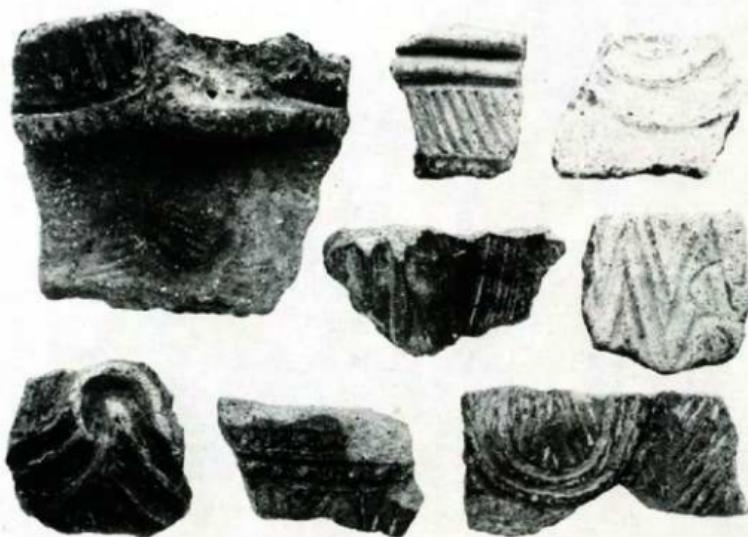


上 包含層の埋甕

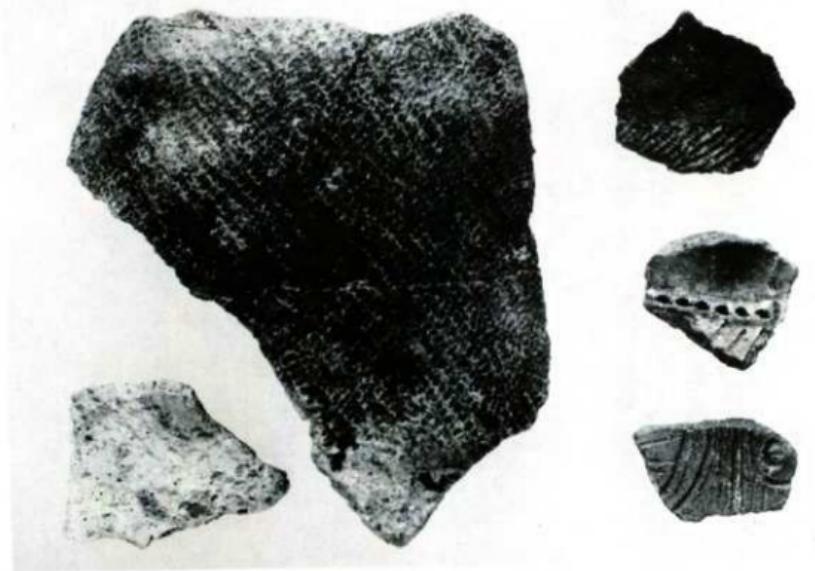
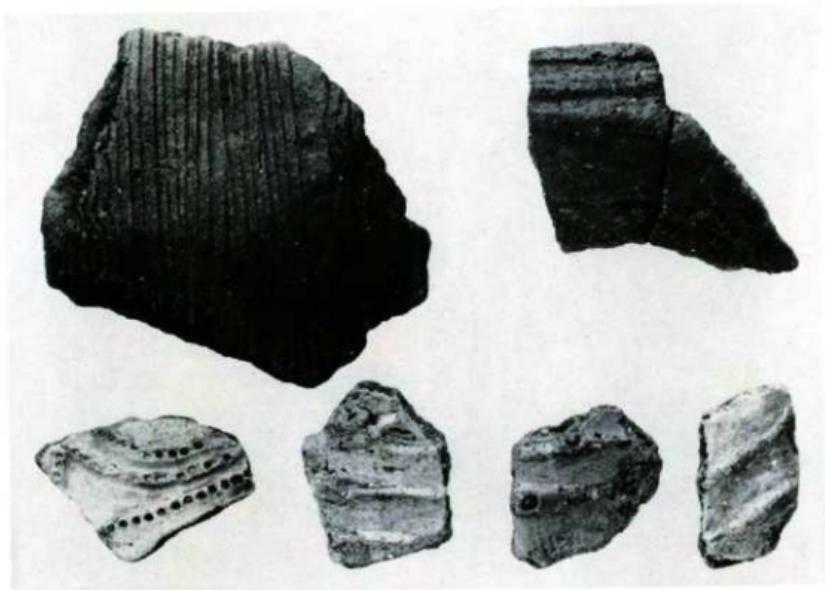
下 土坑(土壤)・ビット内出土土器



上・下 土坑(土塚)・ピット内出土土器



上・下 土坑(土壤)・ピット内出土土器



上・下 土坑(土壤)・ピット内出土土器



上・下 土坑(土壤)・ピット内出土土器



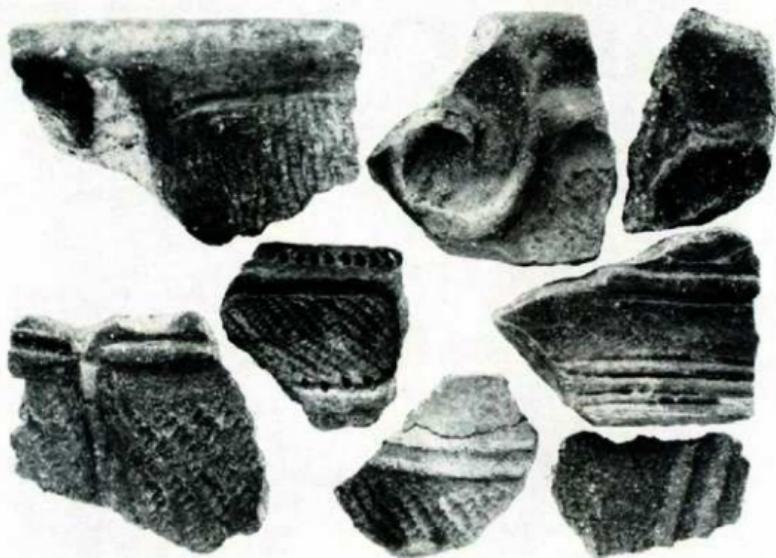
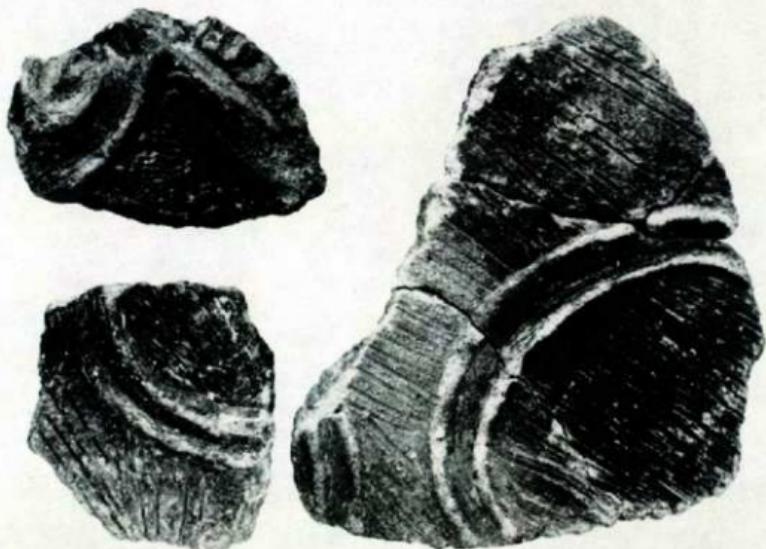
上・下 包含層出土土器(1群)



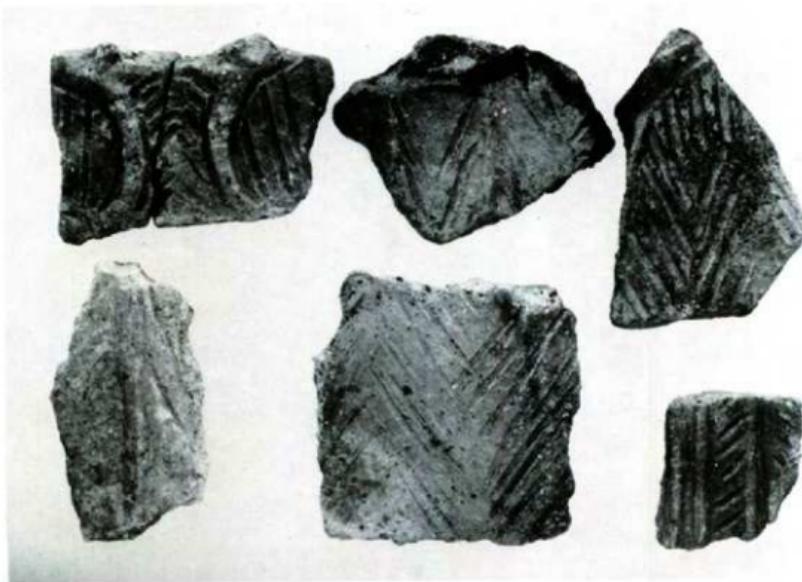
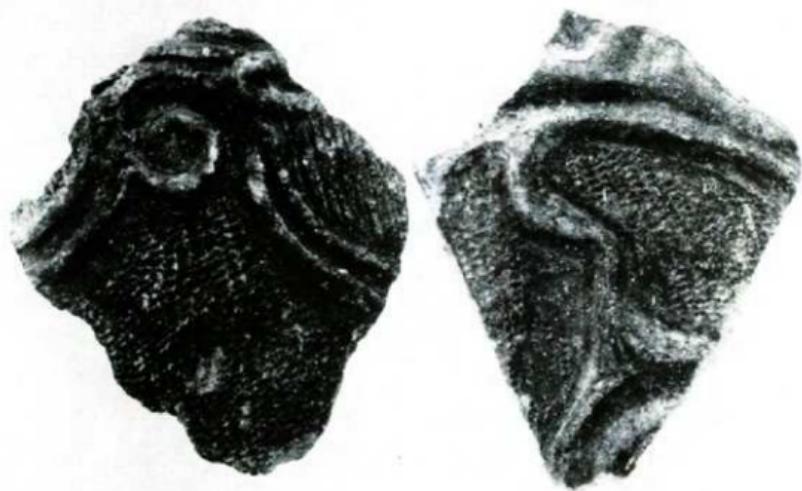
上、下 包含層出土土器(1群)



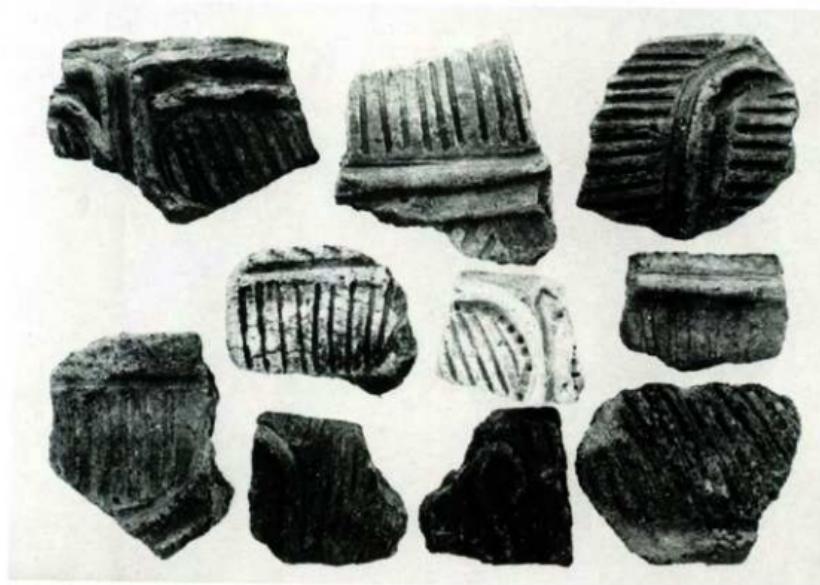
上・下 包含層出土土器(1群)



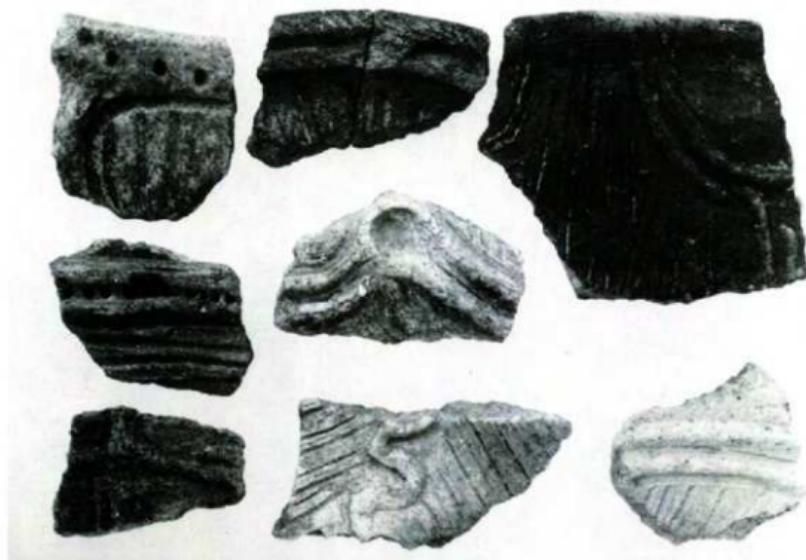
上・下 包含層出土土器(1群)



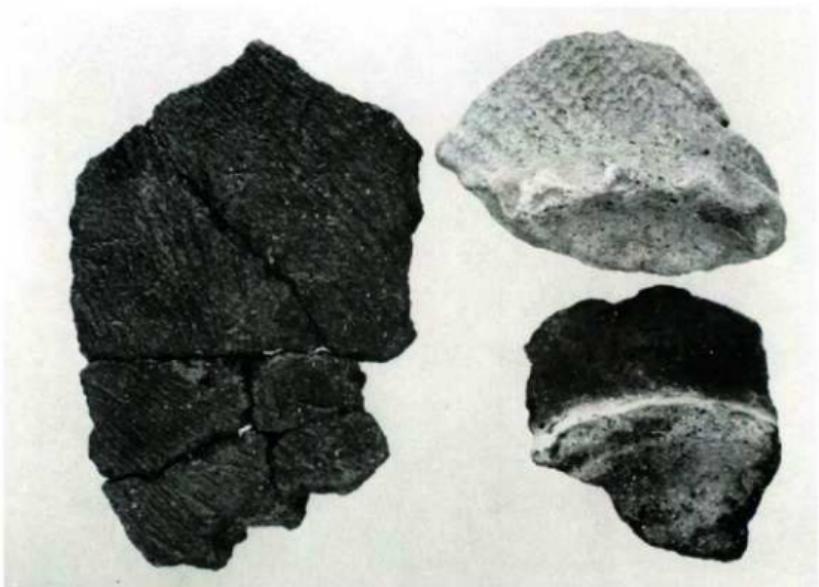
上・下 包含層出土土器(1群)



上·下 包含層出土土器(1群)



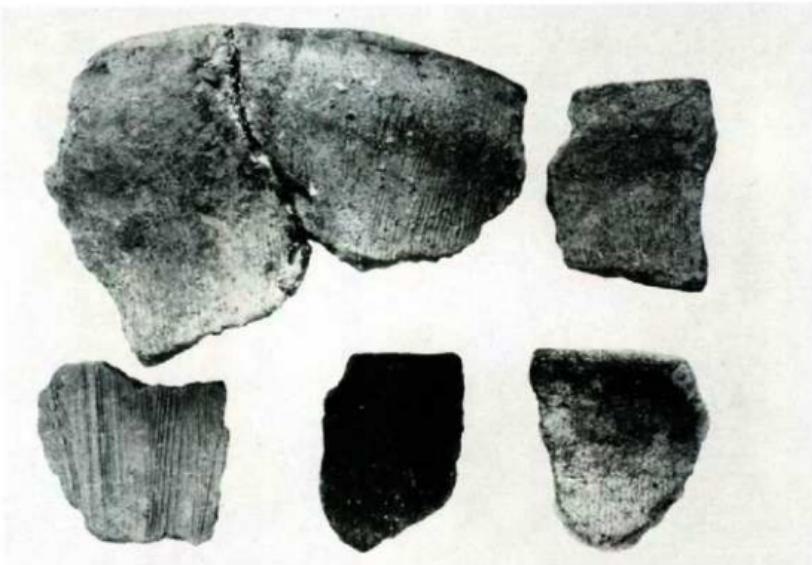
上・下 包含層出土土器(1群)



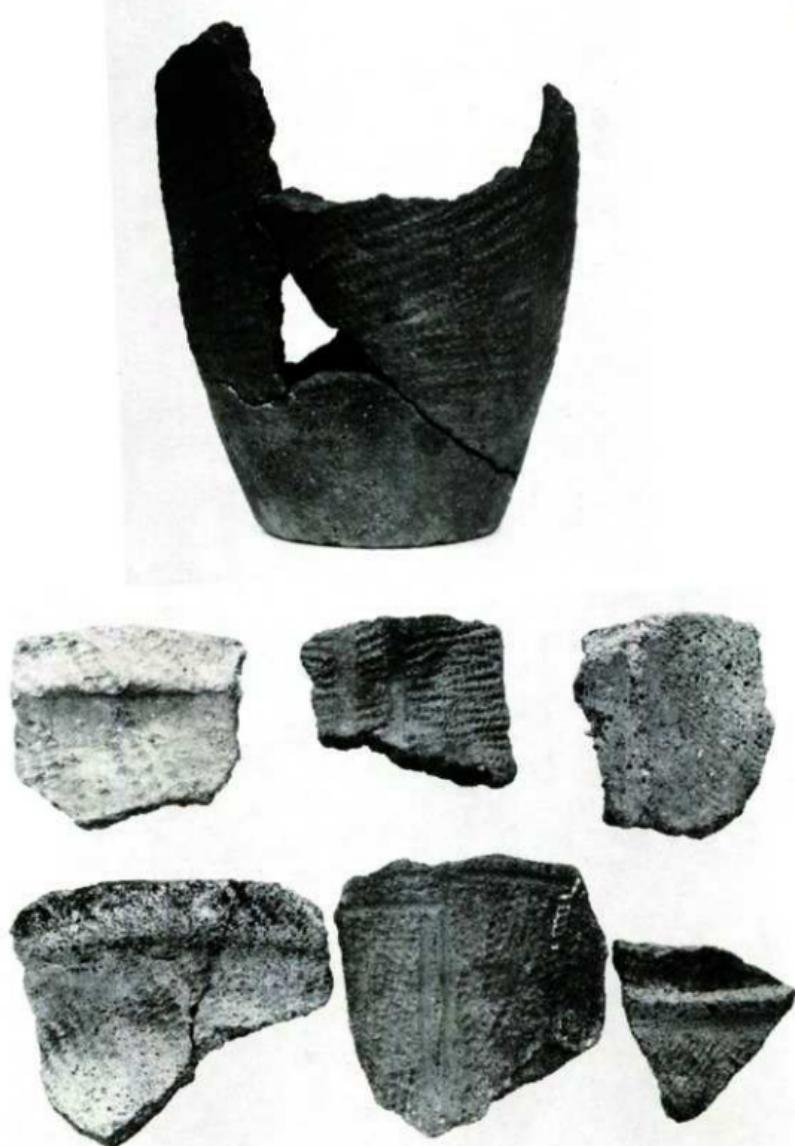
上·下 包含層出土土器(1群)



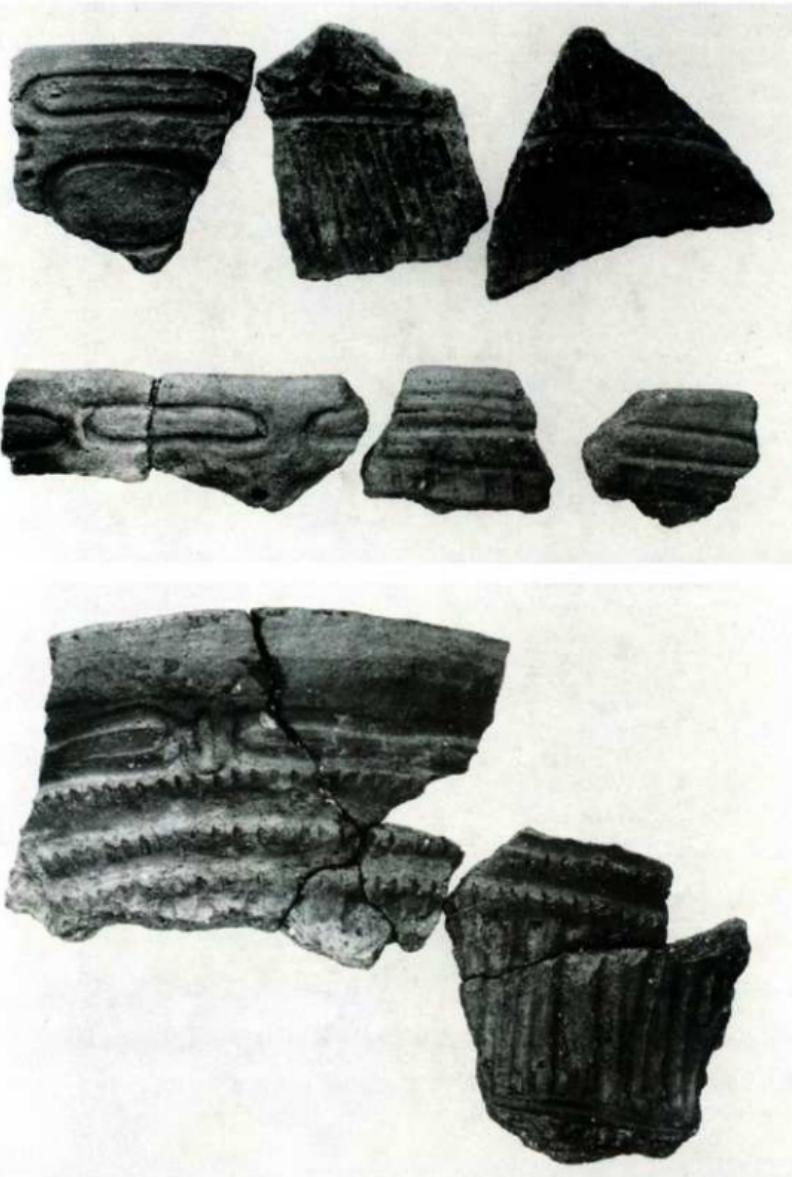
上·下 包含屬出土土器(1群)



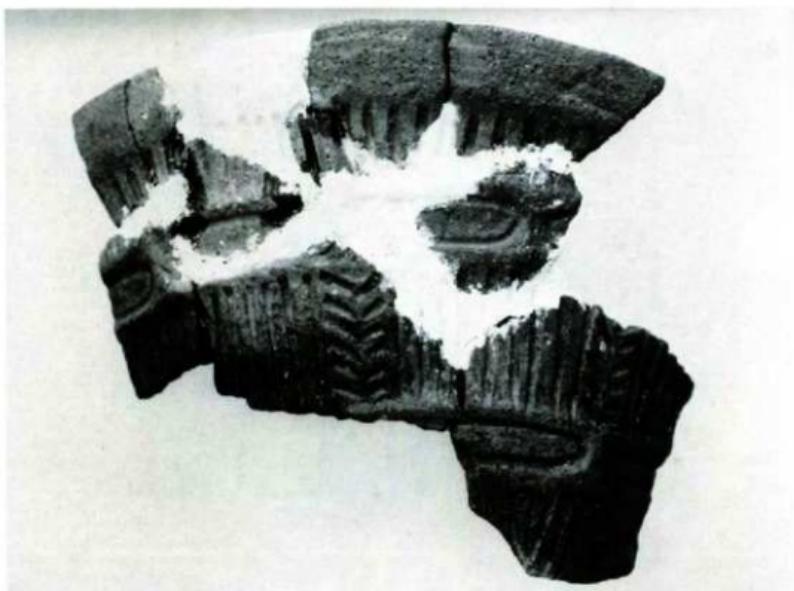
上・下 包含層出土土器(1群)



上·下 包含層出土土器(1群)



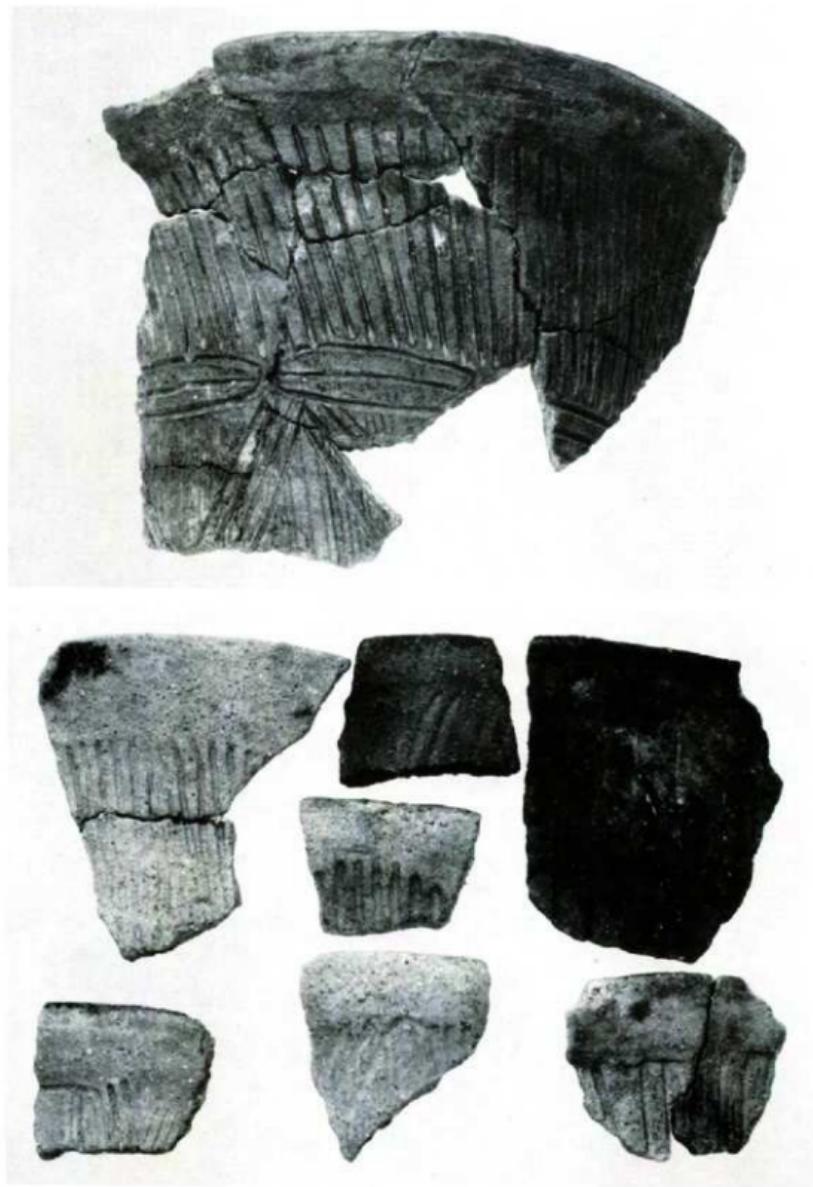
上·下 包含層出土土器(2群)



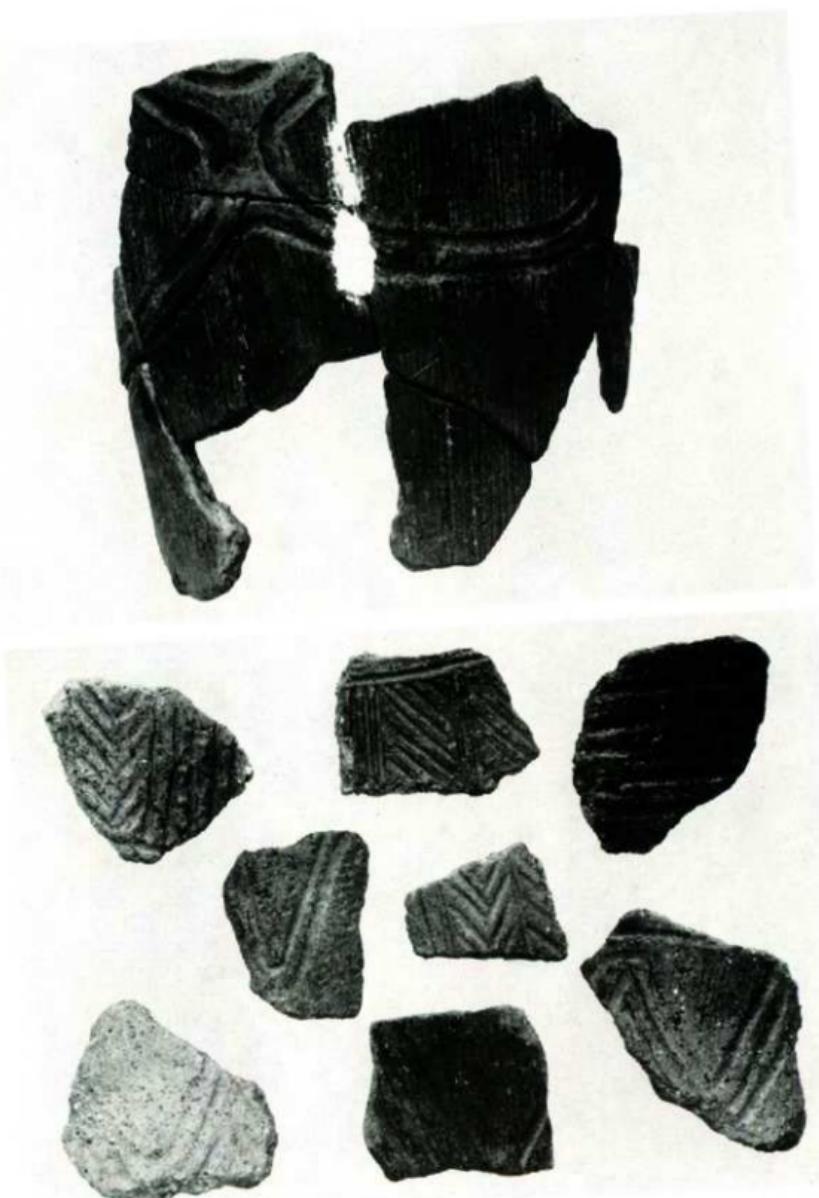
上・下 包含層出土土器(2群)



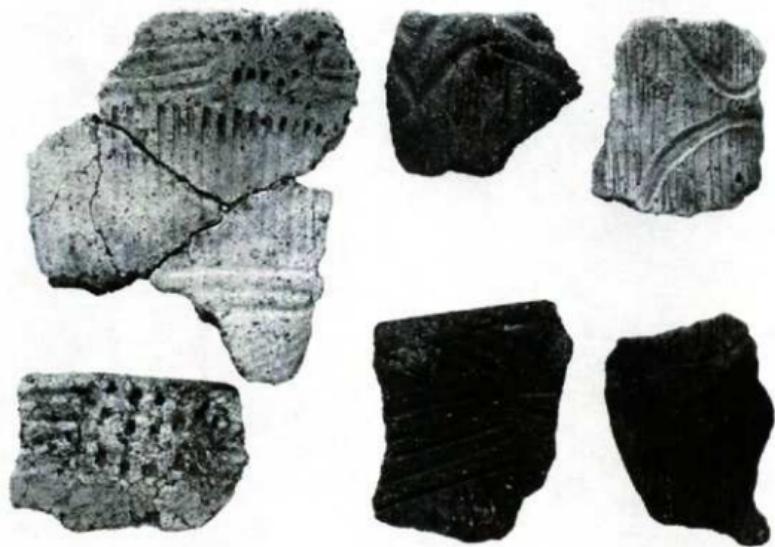
上·下 包含層出土土器(2群)



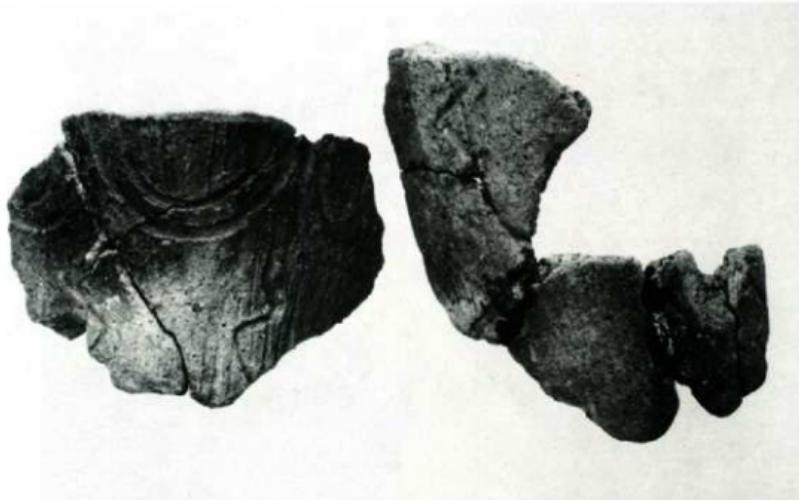
上·下 包含層出土土器(2群)



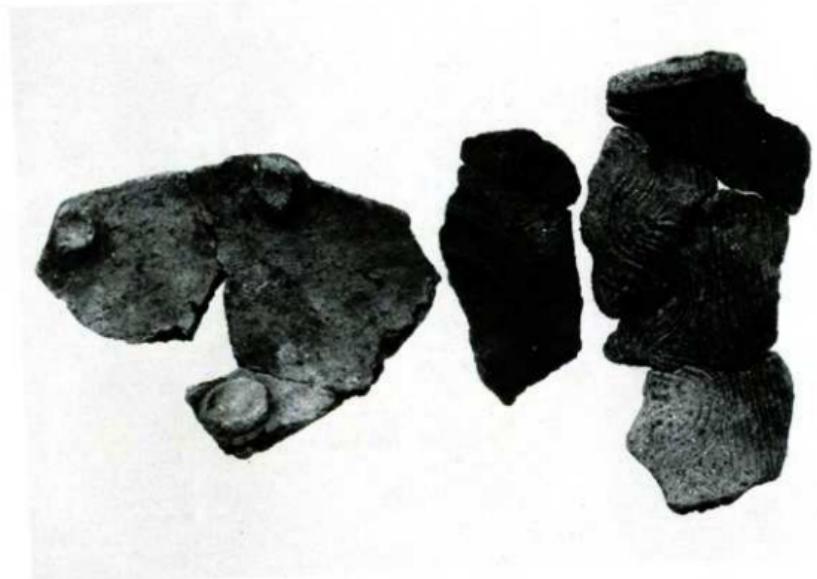
上·下 包含槽出土土器(2群)



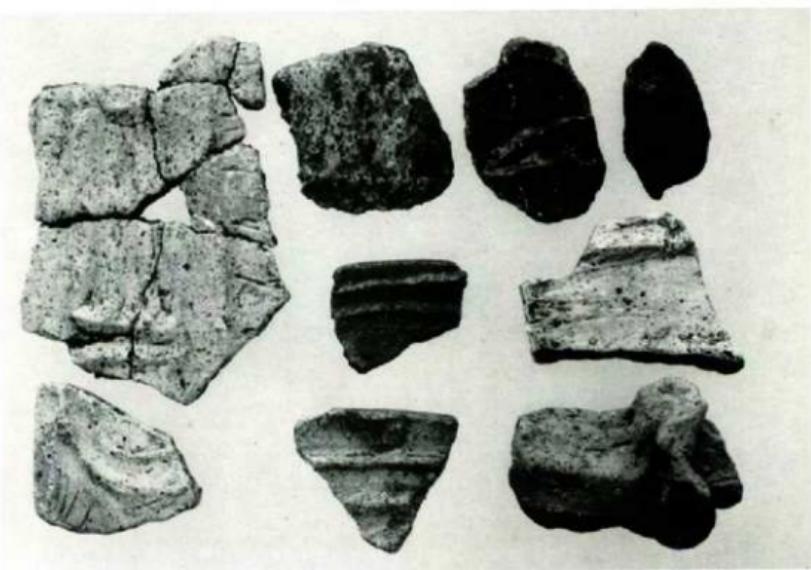
上・下 包含桶出土土器(2群)



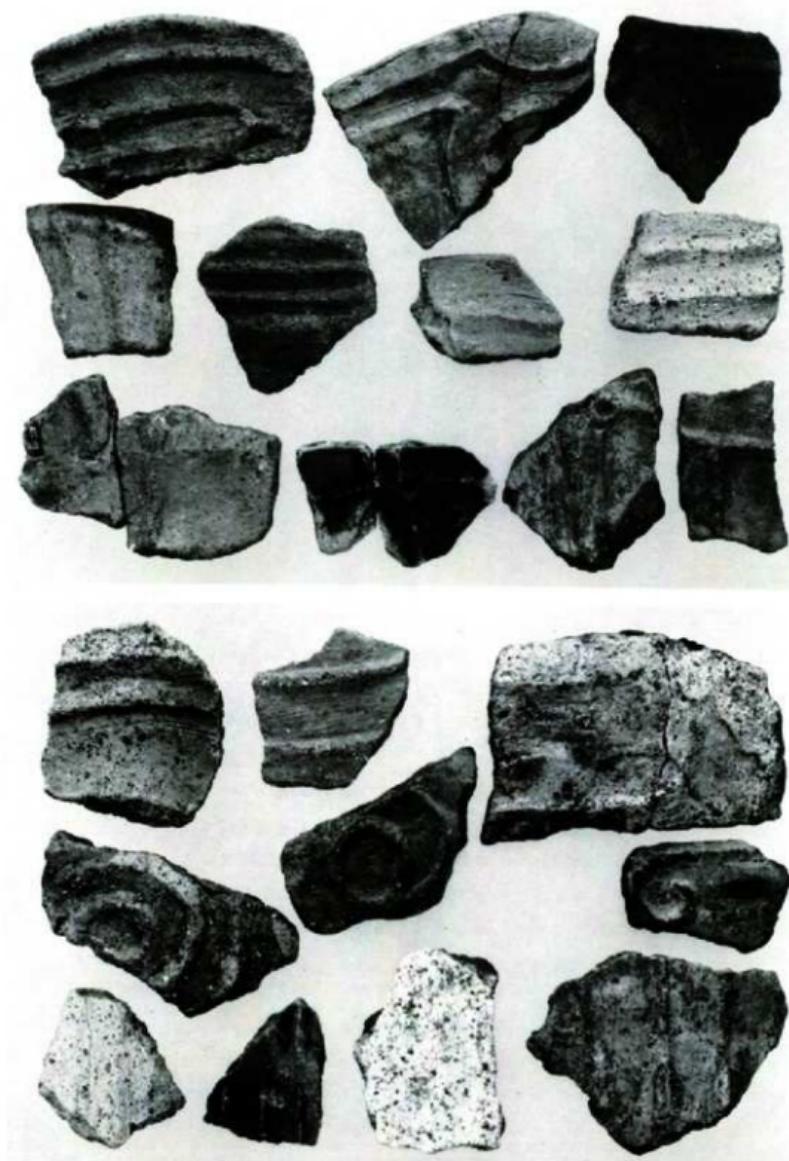
上·下 包含層出土土器(2群)



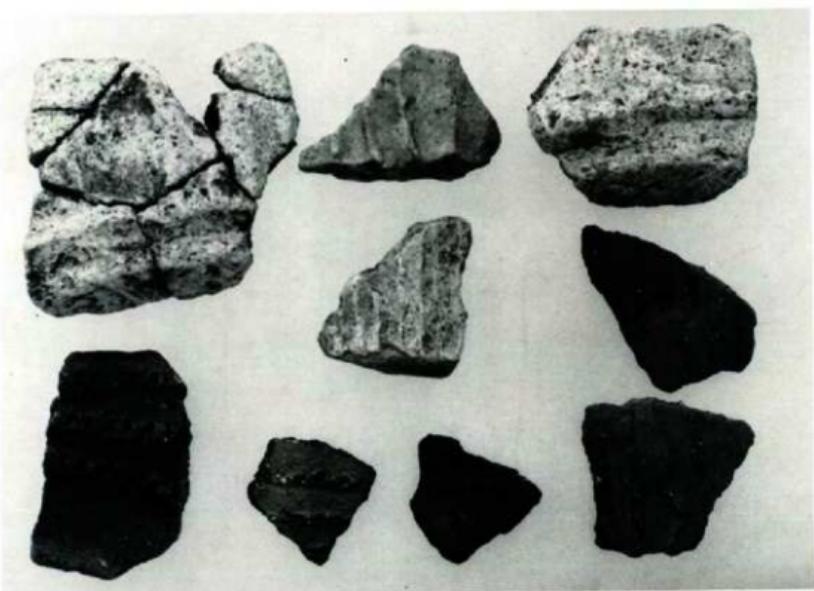
上·下 包含層出土土器(2群)



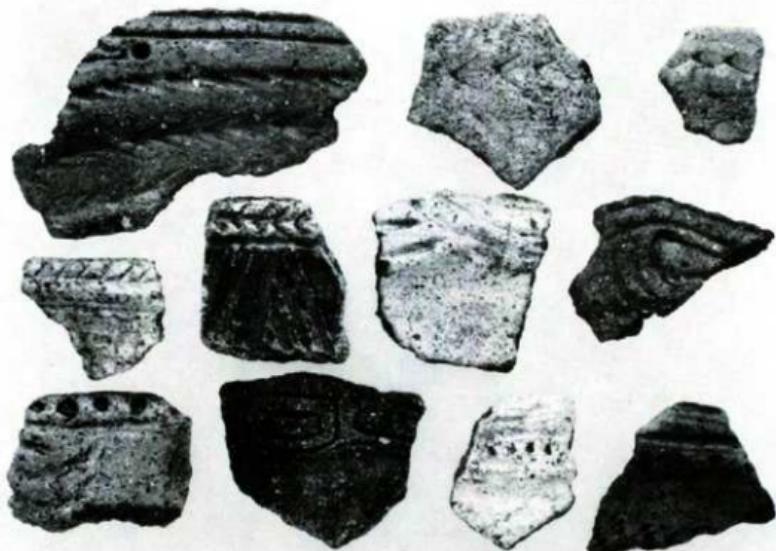
上・下 包含層出土土器(3群)



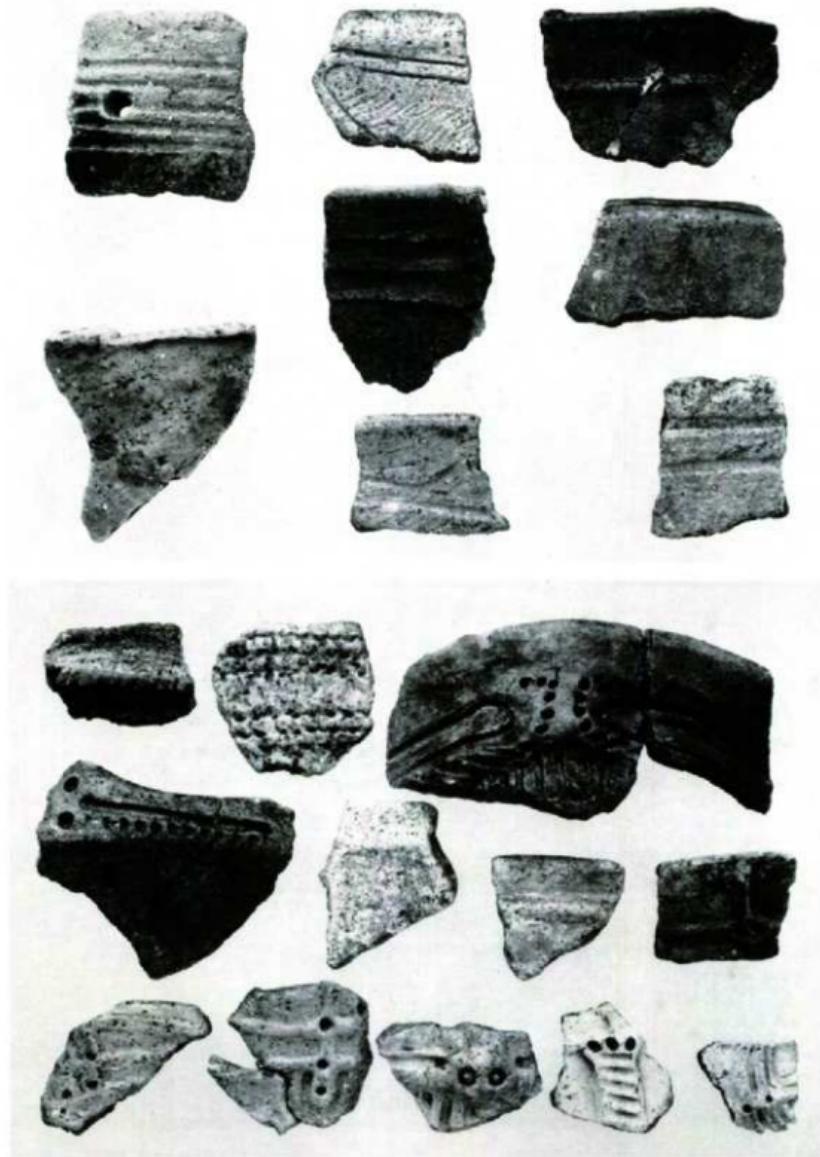
上・下 包含層出土土器(3群)



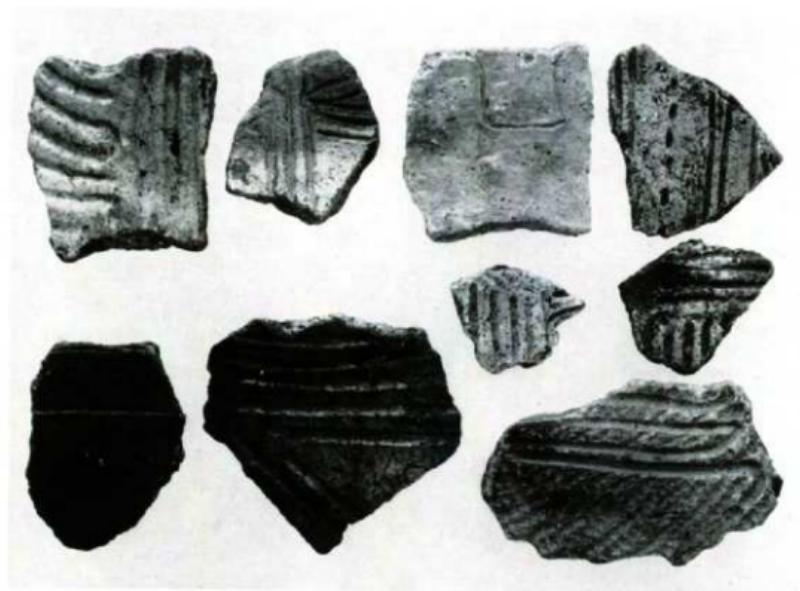
上・下 包含層出土土器(3群)



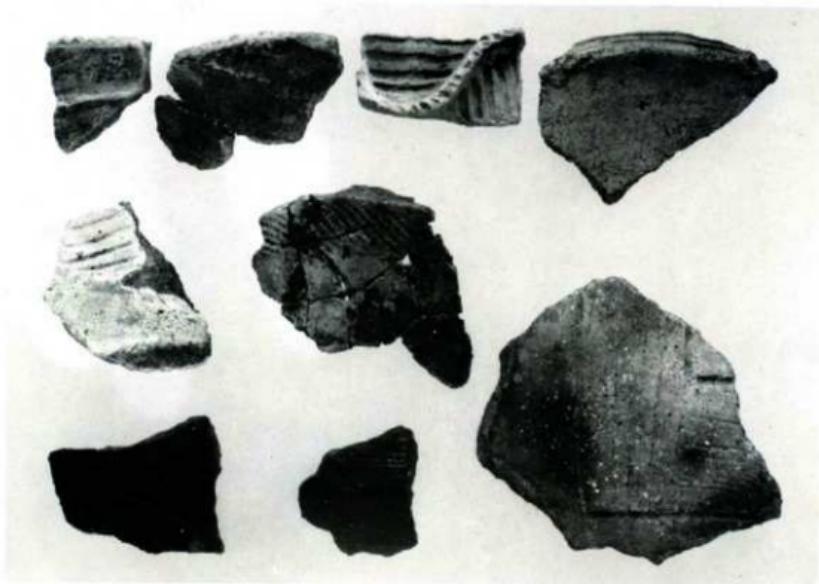
上、下 包含層出土土器(3群)



上・下 包含縫出土土器(3群)



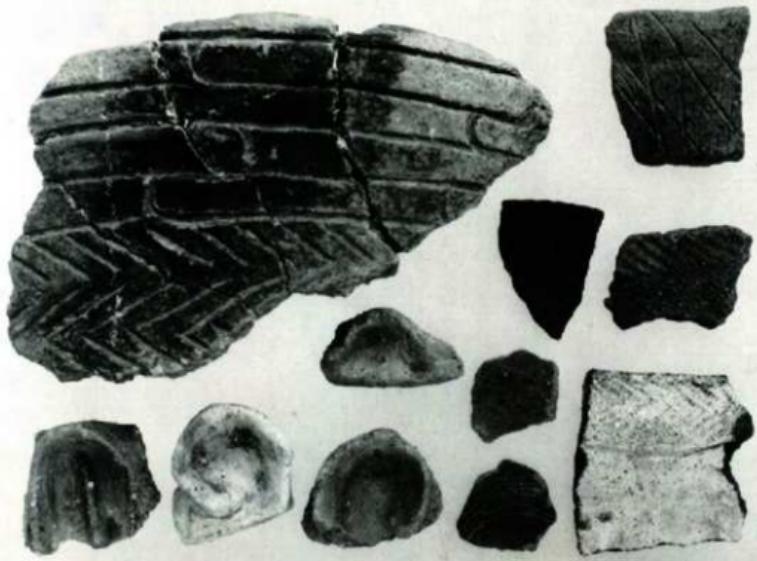
上・下 包含層出土土器(3群)



包含層出土土器（上 3群・4群）（下 4群）



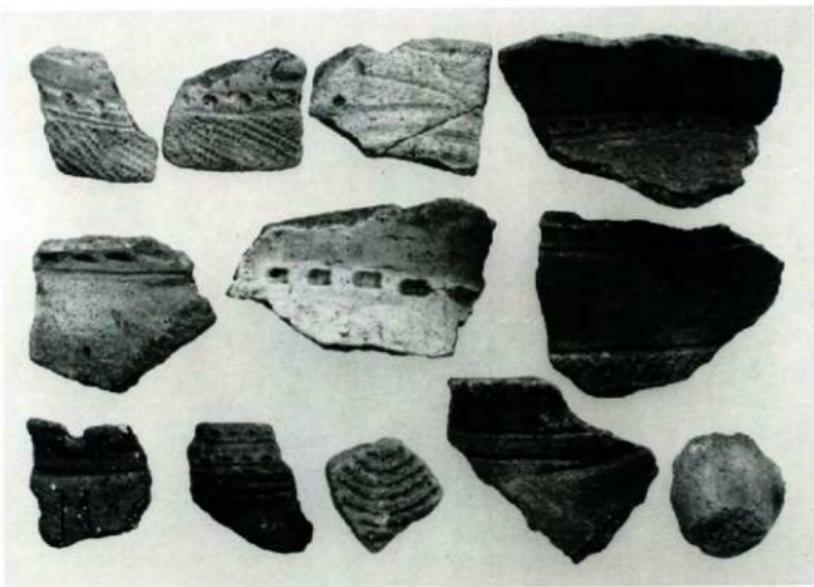
上・下 包含層出土土器(4群)



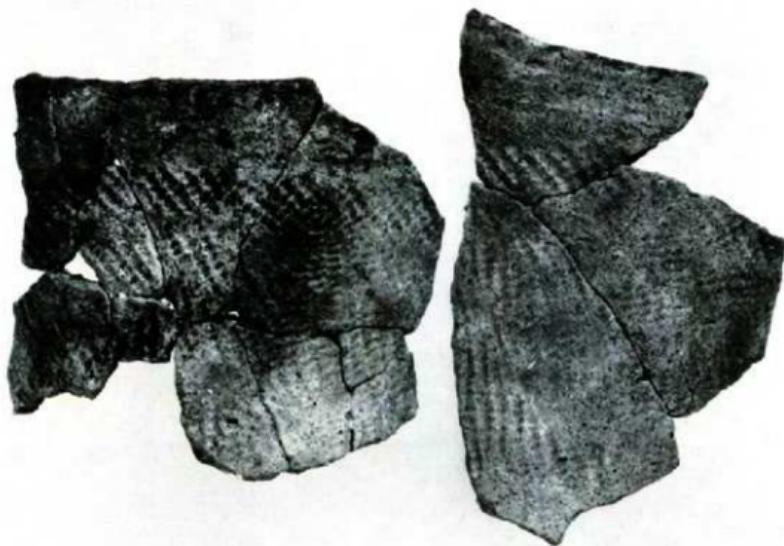
上·下 包含層出土土器(4群)



包含層出土土器（上 4群～6群）（下 7群）



包含層出土土器（上 7群～9群）（下 7群・8群）



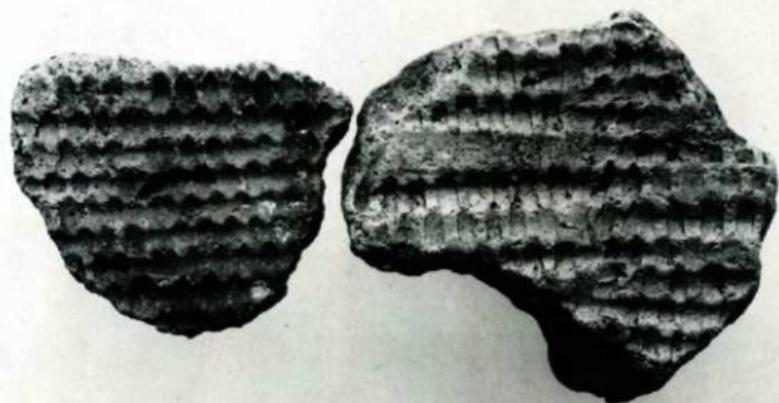
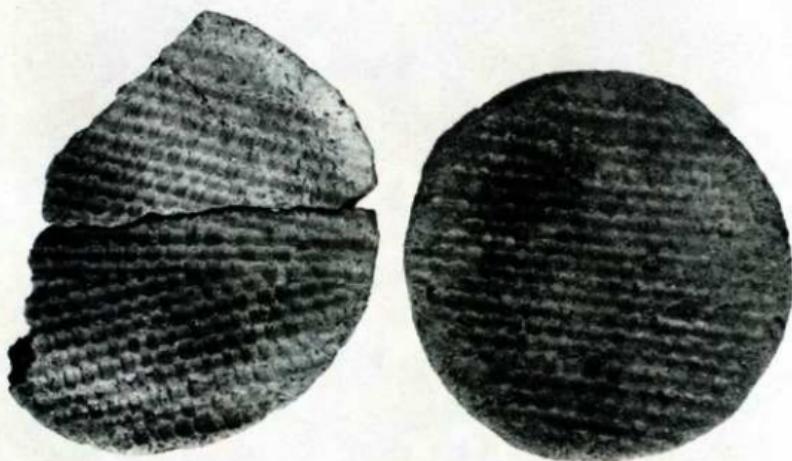
上・下 包含層出土土器(10群)



包含層出土土器（上 11群・12群）（下 11群）



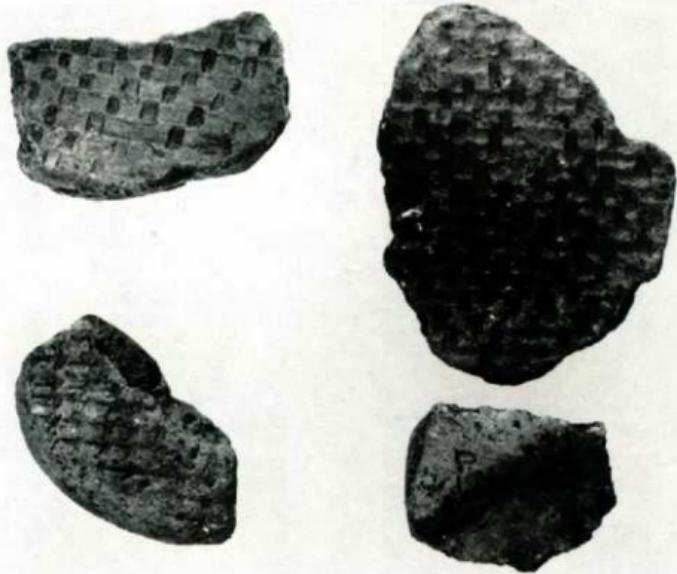
上 土偶 下 土製品



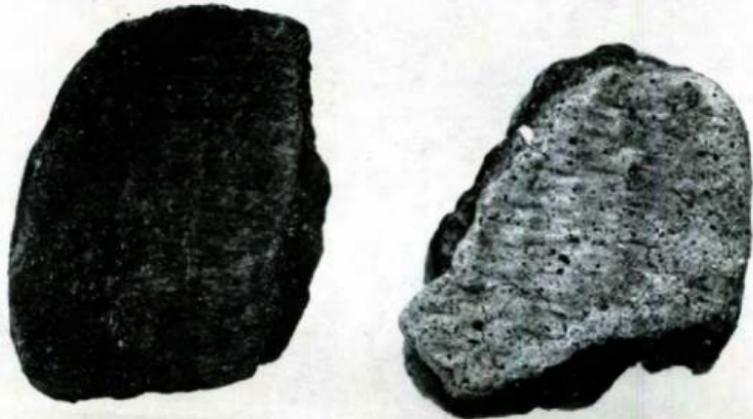
上・下 土器底部



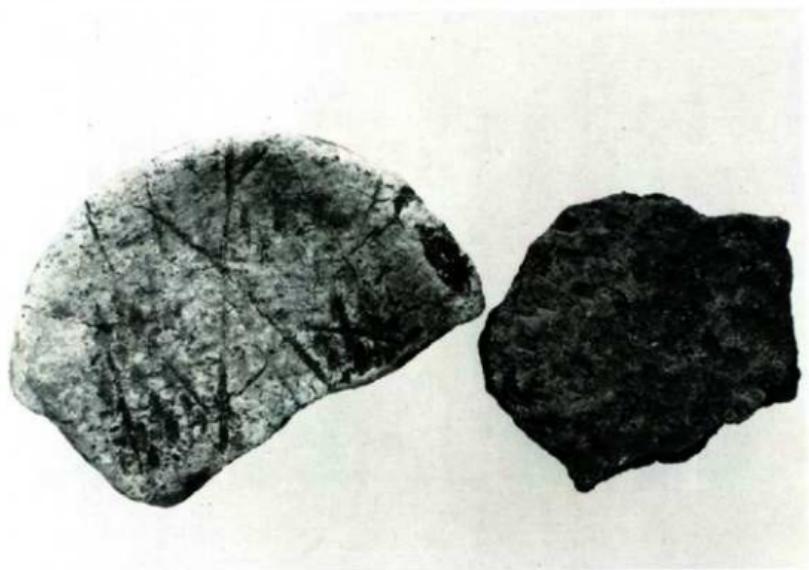
上、下 土器底部



上・下 土器底部



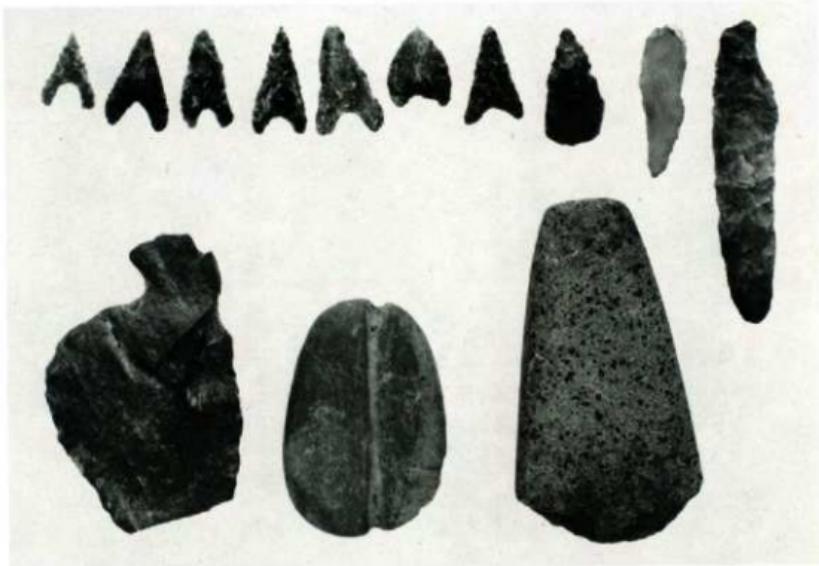
上·下 土器底部



上·下 土器底部



土器底部

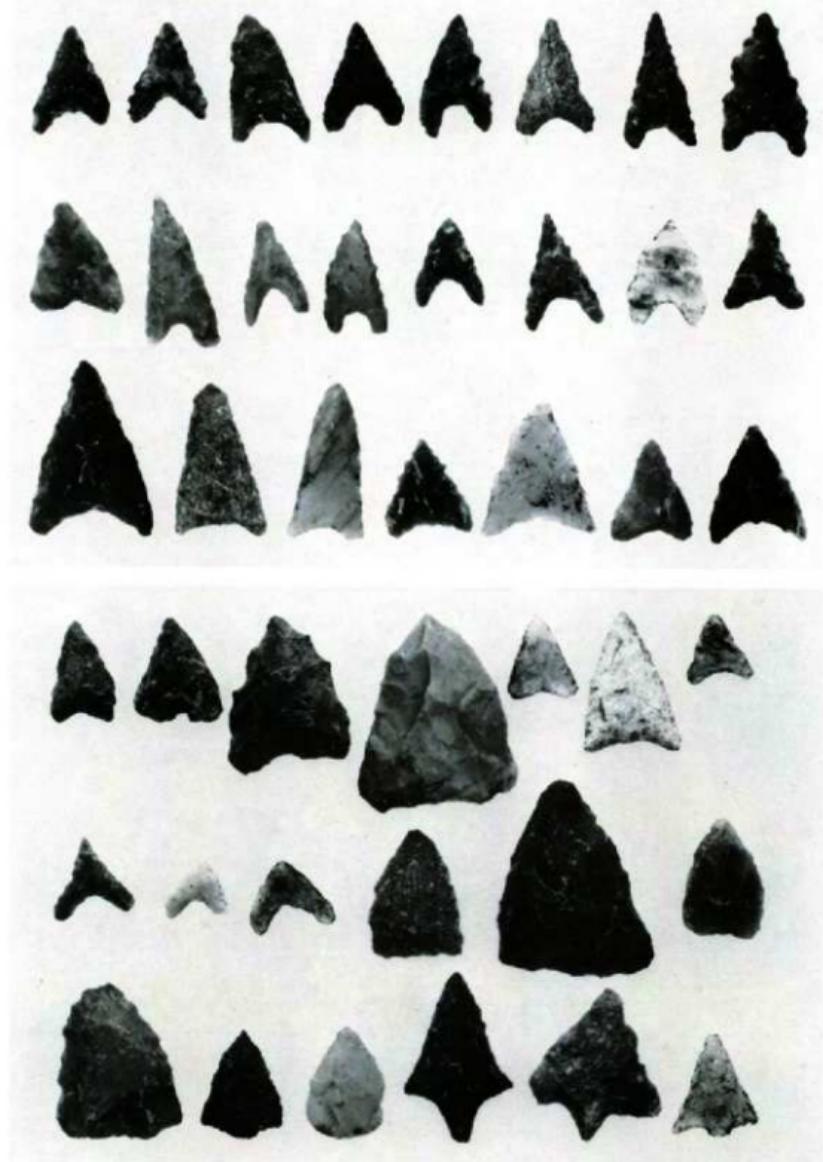


上 第1号住居址の石器

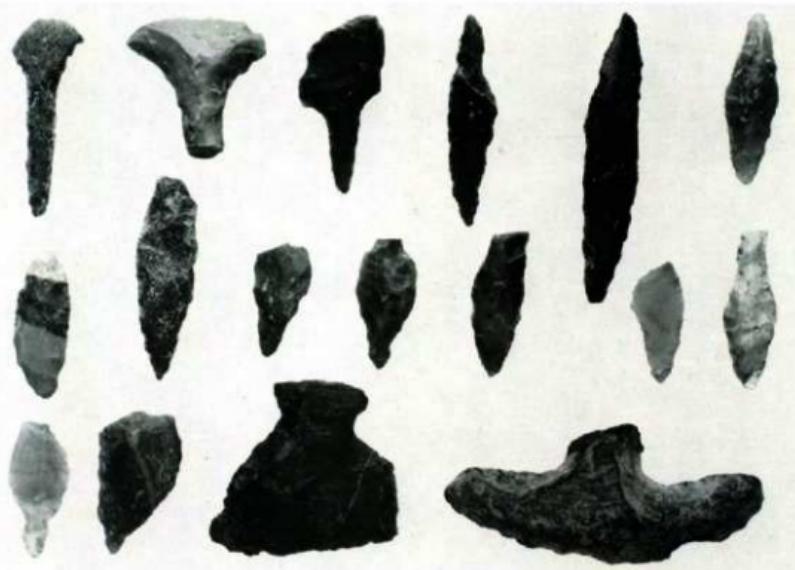
下左 B-3 SK I上部の石棒

下右 D-22 SK I上部の石皿

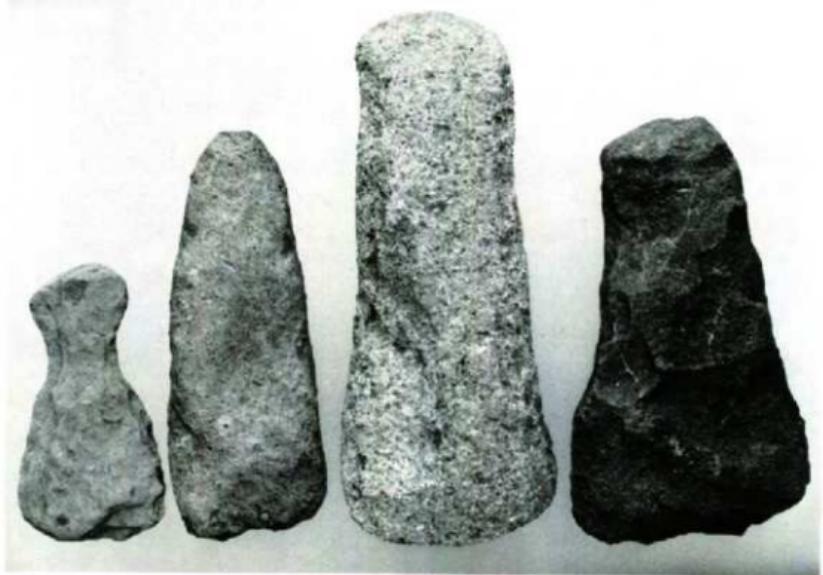
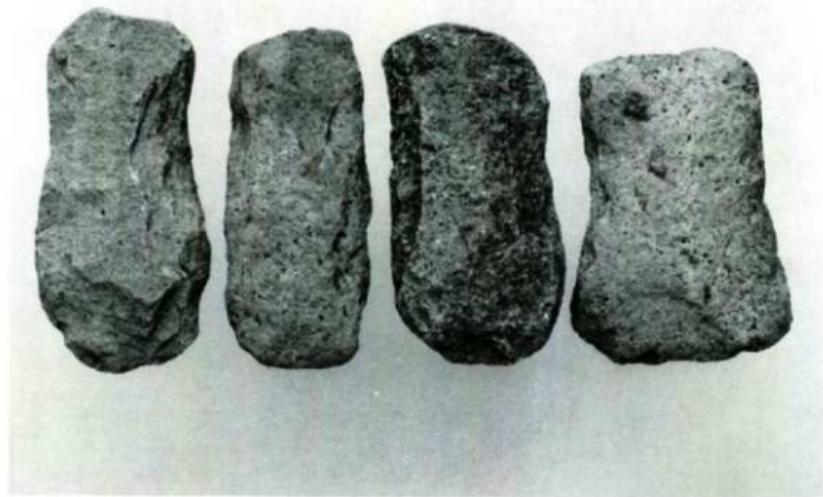
(石皿配石遺構)



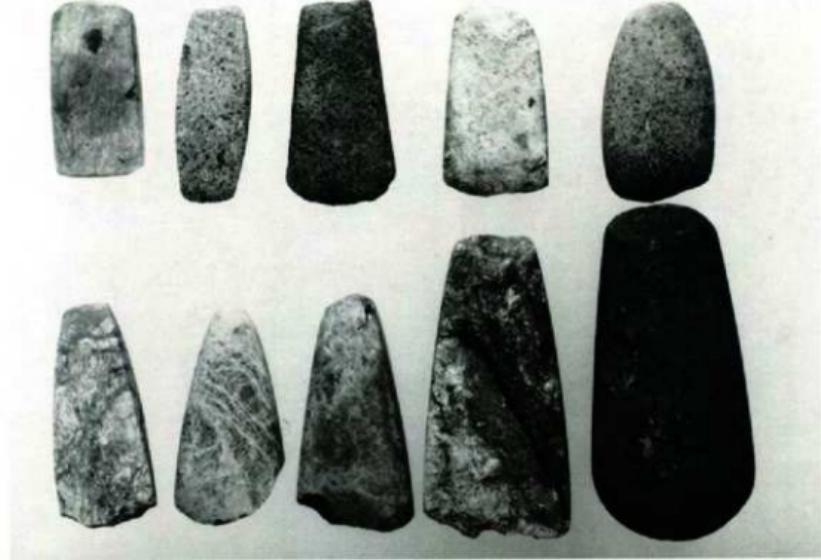
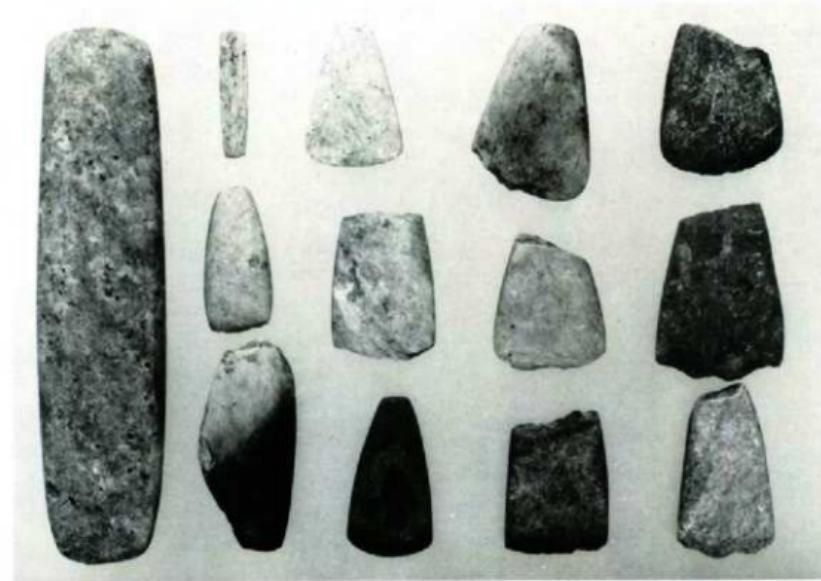
上・下 石鏃



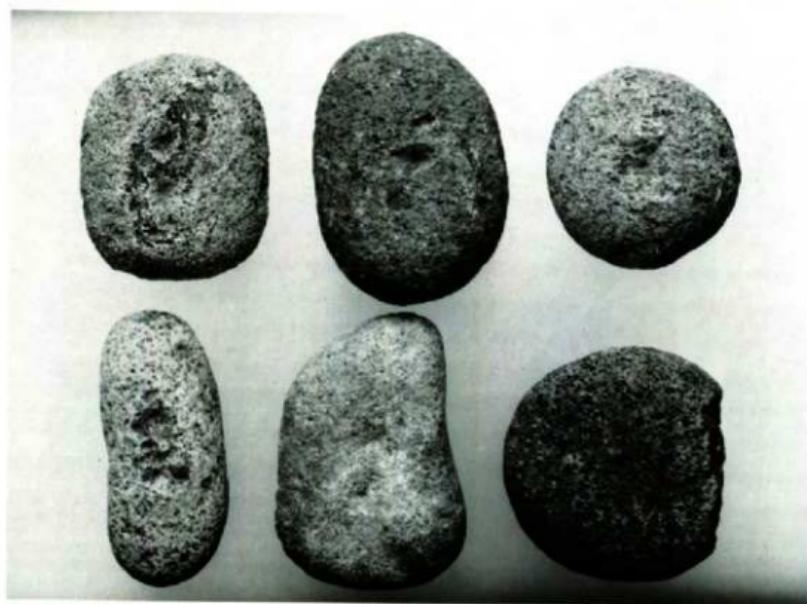
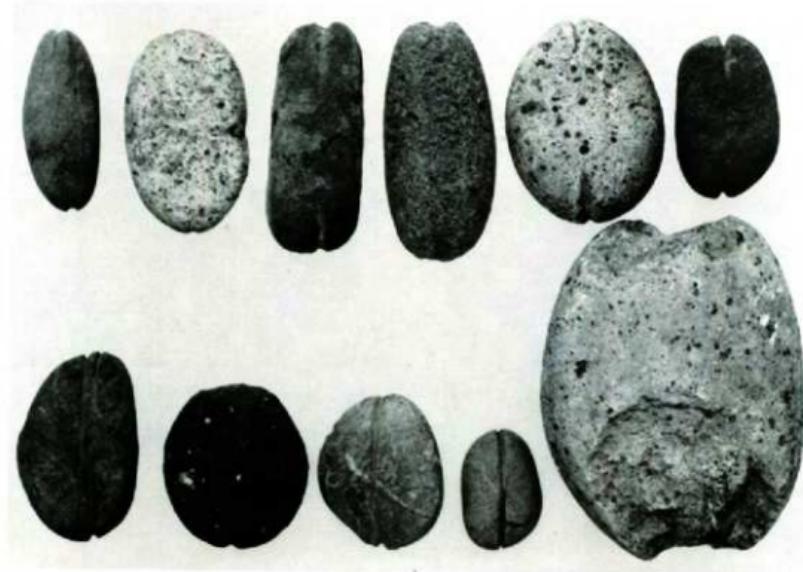
上 石錐・石匙 下 ピエス・エスキュー・ヘラ形石器・削器・撃器・抉りのある石器



上・下 打製石斧



上·下 磨製石斧



上 石錘

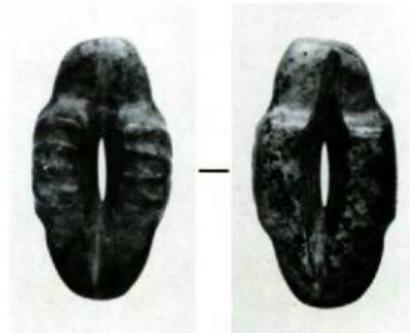
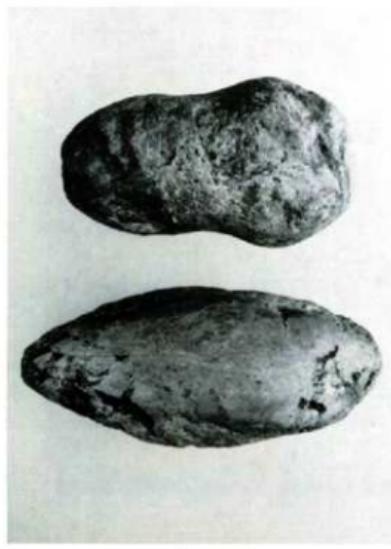
下 磨石・凹石類



上左 研石

上右 研盤

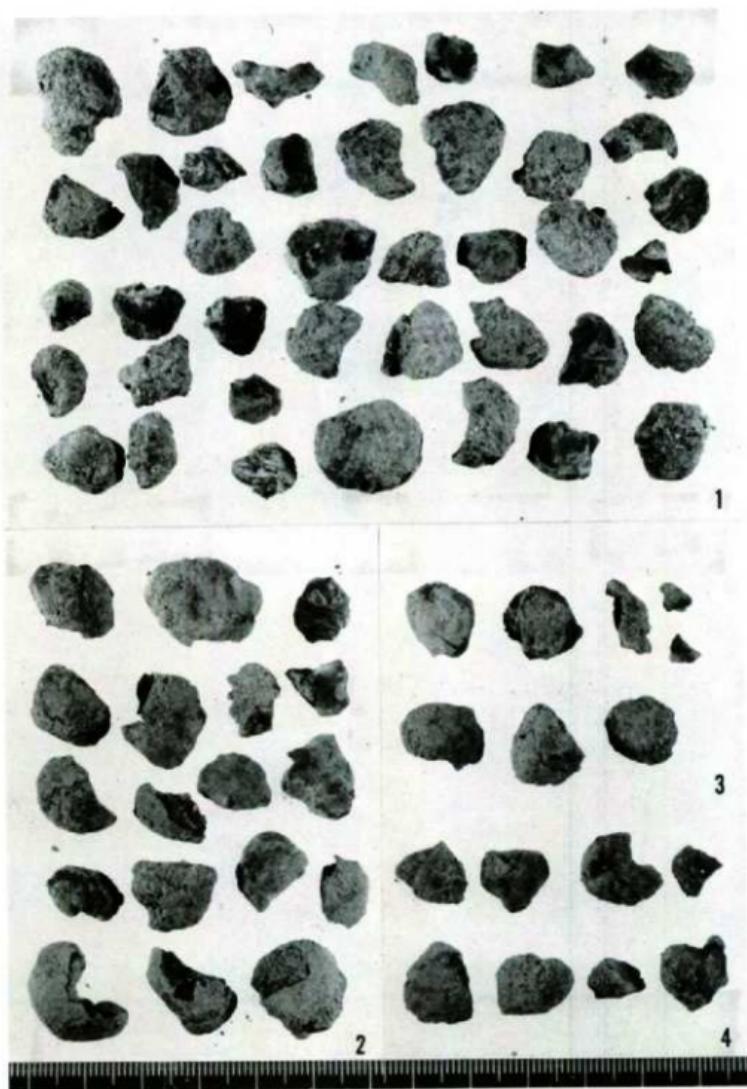
下 石棒・石刀・石劍



上 石製裝身貝

下左 独钻石・磨製石器

下右 ほと石

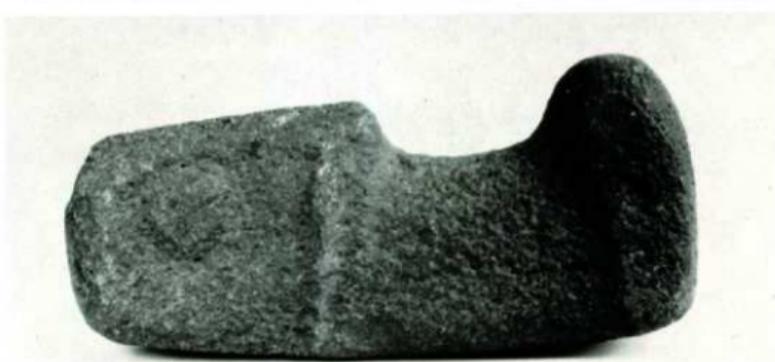
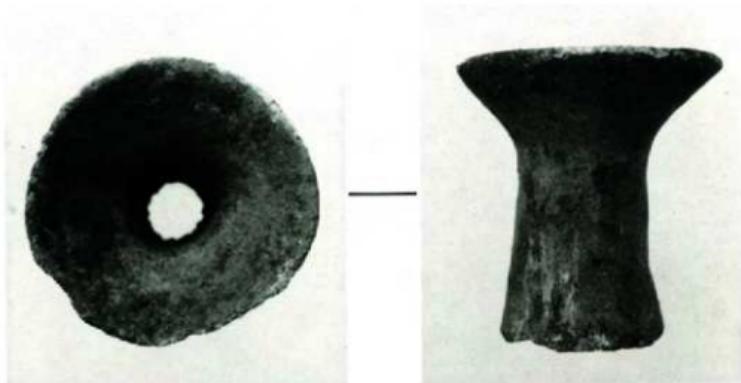


植物遺体（実大）

1：資料1の種皮付きのクリ子葉 2：同クリ子葉 3：資料2の種皮付きのクリ子葉 4：同クリ子葉



上・下 荒城神社出土柳文土器(荒城神社蔵)



上 荒城神社出土土製耳飾(荒城神社藏)

中・下 荒城神社出土御物石器(荒城神社藏)

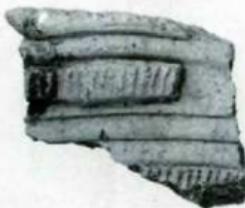


上左 荒城神社出土石劍・石棒(荒城神社藏)
上右 荒城神社出土有孔磨製石製品(荒城神社藏)
下 荒城神社出土石冠(荒城神社藏)



上 荒城神社出土磨製石斧(荒城神社藏)

下 荒城神社出土打製石斧(荒城神社藏)



上左 荒城神社出土石皿(荒城神社藏) 上右 荒城神社付近出土勾玉(皆沼賢氏藏)

下 荒城神社付近出土绳文土器(皆沼賢氏藏)



上 荒城神社付近出土石鐵・石鎌(菅沼賢氏藏)

下 荒城神社付近出土磨製石斧(菅沼賢氏藏)

文献データシート

書名	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第16集 荒城神社遺跡
執筆者	渡辺 誠 野村宗作 本永義博 岩田 修 上嶋善治 谷口和人 他
発行所	財團法人 岐阜県文化財保護センター
発行年月	1994年3月
遺跡名	荒城神社遺跡
読み	あらきじんじゃいせき
所在地	岐阜県吉城郡国府町宮地字宮垣内
調査原因	県単道路改良工事（鼠餅古川線）
種別	集落跡（堅穴住居址・土壙）
時代	縄文（中・後・晩）

岐阜県文化財保護センター 第16集

荒城神社遺跡

1994年3月25日 印刷

1994年3月31日 刊行

編集・発行 岐阜県本巣郡穗積町牛牧宮下395
財團法人 岐阜県文化財保護センター

印 刷 高 山 市 大 進 社